

第3章 発掘調査の成果

1. 古墳の現状と調査区の配置

(1) 古墳の現状

墳丘周辺の状況 茅原大墓古墳は茅原集落の北端部に位置している。墳丘の南側には「丸池」と呼ばれるため池が近接し、南東側は墳丘の一部が削平されて宅地となっている。また墳丘の西側には後円部に沿って弧を描く「小池」と呼ばれるため池が存在する。この小池は、その形態や後述する発掘調査成果から、茅原大墓古墳の周濠跡を踏襲したものであると考えられる。

前方部の北側に接する箇所は近年まで水田であったが、この水田のレベルは北側に隣接する畑作地よりも0.7mほど低くなっている。また墳丘の東側にもかつて水田であった平坦地が存在し、市道を挟んで東側に隣接する水田よりも約1.7m低くなる状況が観察される。このように墳丘の周辺には周囲よりも低くなる地形が存在しており、その規模は前方部の北側では幅約16m、墳丘東側では20m前後を図る。これらについても、上記の「小池」と同様に、周濠形態を反映するものと考えられた。

墳丘の現況 墳丘部分は現状で南北長約72mの高まりとして残存しており、現況からも前方部を北北東に向ける帆立貝形の前方後円墳であることがわかる。このうち後円部は径約60mの円丘として残存し、その北側に前方部にあたる東西約30m、南北約15mの方形の高まりが接続するように存在する。

現況の後円部頂の標高は91m前後で、周囲の耕作地からの高さは東側で8m余、西側では10m弱を図る。対して前方部は上面の標高が84m前後で、周囲の耕作地との比高差は1～2mと低平であることがわかる。

墳丘部分は昭和57年の史跡指定以前は主に耕作地として使用されていたようであり、後円部には5段にわたって石垣が生まれ、斜面部に平坦地が確保されている。なおこうした石垣の存在は、昭和11年頃には既に存在していたことが明らかであるが、明治20年代の記録には石垣の存在が触れられていないことから、明治後期～昭和初期の間に組み上げられたと考えられる。なお後円部頂には径18m～20mの円形の平坦面が存在する。上記の明治期の記録では盗掘があったかのような記述が見られるが、現状ではそうした痕跡は見られない。

前方部は、公有地化された平成21年以前は畑作地として使用されていた。このため前方部の上面は、築造当時よりも若干削平されていると推定される。高まりの周囲の斜面についても、後世に削平を受けていると考えられ、北側と西側で急傾斜をなしている。特にその西側部分では、後円部の形態や「小池」北東端の畦畔の形状を考慮すると、もう少し西側に前方部西側面の位置を推定することができる。この部分には本来東側から続く高まりが存在したと考えられ、北側の水田面にそろえるように高まりが削り落とされたと推定される。

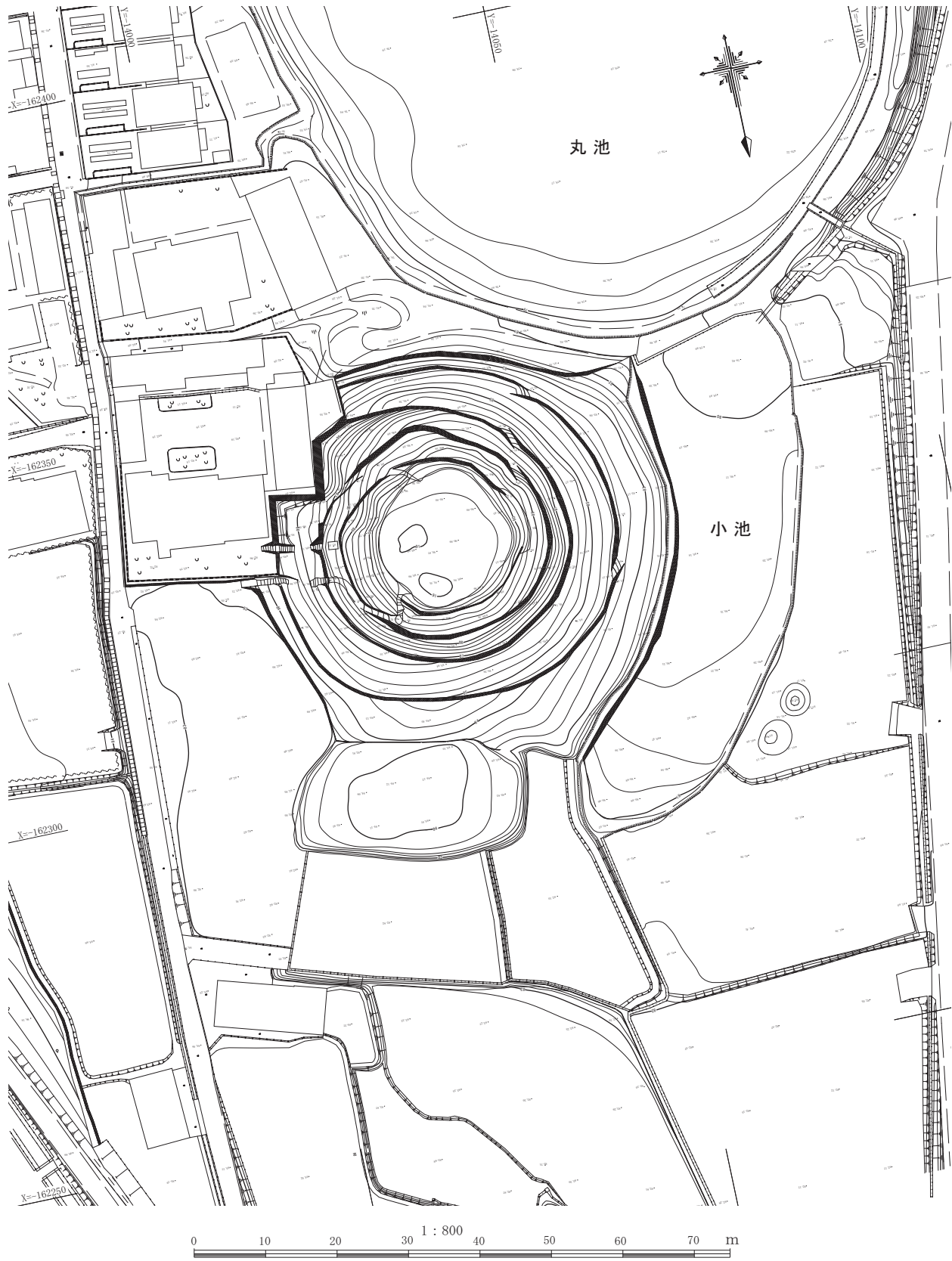


图13 茅原大墓古墳墳丘測量図 (S=1/800)

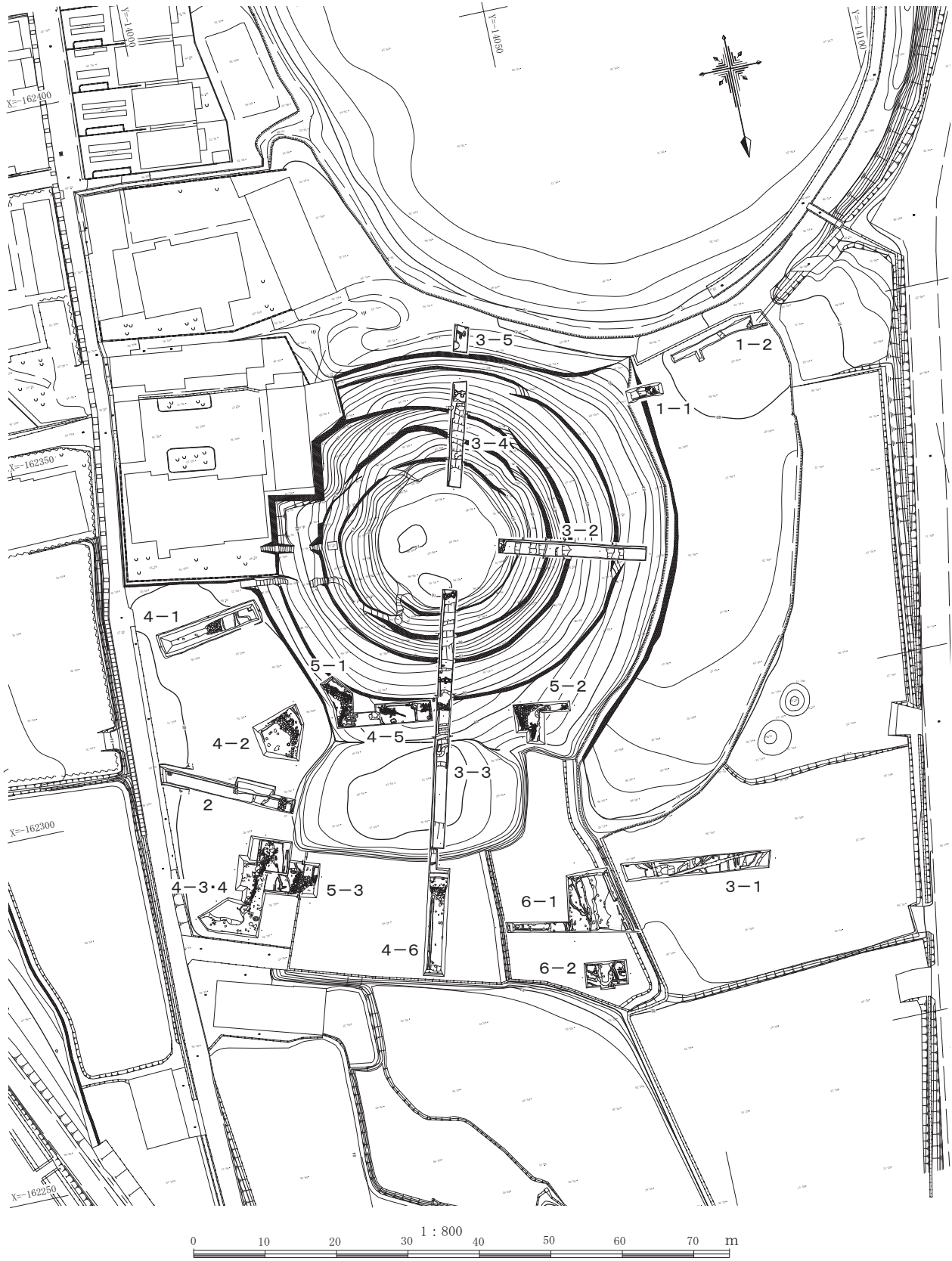


図14 茅原大墓古墳トレンチ位置図 (S=1/800)

(2) 調査区の配置

平成7年度のため池改修に先立つ第1次調査から、平成24年度の第6次調査まで、計18箇所にてトレンチを設定して発掘調査が実施された(表1)。調査延べ面積は709㎡であるが、一部重複して調査を行っている箇所が存在するため、調査実施範囲は688㎡である。なおこのうち約30㎡は史跡指定地外に調査区が及んでいることから、史跡指定地内(7,565.86㎡)のうちでの調査実施面積は658㎡ということになる。これは史跡指定範囲全体(7,565.86㎡)の約8.7%に相当する。

調査位置を決定した事由については、第1次調査と第2次～第6次調査では若干異なっている。前者はため池の堤の改修に先立つ調査であったことから、必然的にその部分に調査区が設定されることとなった。後者については史跡整備に先立つ調査であるという性質から、古墳の形態と保存状況を的確に把握することができ、且つ可能な限り史跡を現状のまま保存することができるような、より効果的な調査が望まれた。したがって第2次～第6次調査の調査区を設定するに際しては、それ以前の調査の成果や現況の地形状況に基づき、想定される遺構の位置を、できる限り考慮することとした。

高まりとして墳丘が残存する部分での調査は、段築や葺石・埴輪列の状況を確認することを主な目的として実施している。測量図から墳丘主軸の位置を推定し、おおよそその推定ライン上(第3次調査第3トレンチ、同第4トレンチ)と、これに直交する方向(第3次調査第2トレンチ)に調査区を設定した。後円部頂の平坦面では中心埋葬施設が良好に保存されていると考えられたため、その中央付近は調査範囲から外すこととした。調査区の規模については、墳丘に関する情報を確認し、且つ保存範囲を極力残すことができるよう、2m幅のトレンチとしている。ただしくびれ部など、幅の狭いトレンチでの確認が困難と判断された箇所については、必要に応じて拡張することとした(第4次調査第5トレンチ、第5次調査第1トレンチ、同第2トレンチ)。

高まりの周辺部分での調査は、墳丘端の位置と、その周囲を巡ると推定される周濠の形態の確認を主な目的として実施している。墳丘上と同様の理由で、2～3m幅のトレンチを設定した箇所(第2次調査、第3次調査第1トレンチ、同第5トレンチ、第4次調査第1トレンチ、同第6トレンチ)のほか、くびれ部や前方部隅付近などにおいては、必要に応じて面的にトレンチを拡張している(第4次調査第2トレンチ、同第3・4トレンチ、第5次調査第3トレンチ、第6次調査第1トレンチ、同第2トレンチ)。

なお各トレンチの呼称については、既述のように調査回数ごとに第1トレンチ、第2トレンチというように番号を順に付している。以下本書の文中及び挿図中の表記では、煩雑となることを避けるため、第1次調査第2トレンチは「1-2トレンチ」、第2次調査トレンチは「2トレンチ」と表記することとした。各トレンチの名称と表記の対照は、表1を参照する。

2. 墳丘上の発掘調査

(1) 3-2 トレンチ

トレンチの概要 後円部西側の斜面部分において、墳丘主軸におおよそ直交する方向に、東西長21m、南北幅2m、面積42㎡のトレンチを設定して調査を行っている。後円部頂に存在する平坦面の西縁をトレンチの東端、小池の東岸にあたる平坦面の中ほどをトレンチの西端として、後円部の段築構造や埴輪列、葺石の状況を確認することを目的として調査を実施した。掘削前の地表面の標高は、トレンチ東端が最も高く90.6mであり、最も低い西端が83.0mである。なおトレンチの掘削及び埋め戻しは、全て人力により行った。

土層の状況 トレンチ範囲内には、明治後期以降に耕作面を確保するために築かれたと推定される石垣が4段存在しており、その高さは最上段のものが50cm程度と低く、その他は1.4m前後を測り、拳大から人頭大程度の石材で組み上げられていた。この石垣の構築に際しては墳丘が大きく改変されていると考えられ、耕作土である表土層や石垣の裏込め土からは埴輪片が出土しており、特に後者では比較的大きな破片が多く含まれていた(図75)。

またトレンチの西端にあたる平坦部では、墳丘盛土とは明らかに質の異なる土層が確認されている(図15-13~16層)。須恵器小片などを含んでおり、上記の石垣よりも先行するものと考えられるが、その形成時期は不明である。すぐ西側に小池が存在することから、池の浚渫や修復などに伴って形成されたものと推定される。

このほか墳丘残存部の上面では、層序関係から石垣よりも先行するものと判断される土層が存在する(4~11層)。埴輪片が集積するように検出される箇所もあり(図版10)、明治期以前の耕作などにより形成されたものと考えられる。

このように3-2トレンチの範囲では後世の改変を受けていたものの、トレンチ東端部分では旧状がよく保たれており、後円部頂の平坦面を巡る埴輪列が原位置で確認されている。

墳丘と葺石 トレンチの全体において墳丘盛土を検出し、南壁に沿う位置で若干の断ち割り調査を行っている。

盛土(18~54層)は黄褐色~明褐色土で主に構成され、墳丘周辺の調査で確認されている地山のブロックを多く含んでいた。断ち割り調査を行った範囲では地山層は確認されておらず、標高82.3mより高い墳丘部分は全て盛土で構築されていると考えられる。なお盛土中からは土師器高坏(図101-289)が出土している。盛土の構築方法を見ると、墳丘最上段に相当すると考えられるトレンチ東半部分では概ね水平に積み上げられており、西半部分では水平ないし墳丘外側に向かって傾斜するように積み上げられている箇所も存在する。盛土の単位は厚さ10cm前後から50cm以上のものが存在するが、厚いものについてもさらに細分される可能性がある。

段構成について見ると、現状では石垣の構築により5段の平坦面が存在する。最上段は埴輪列が検出されていることから、後円部頂の平坦面にあたることは疑いないが、その下の2段については幅が狭く、本来の墳丘の平坦面を反映しているものとは考えられない。さらにその下には幅約5mと比較

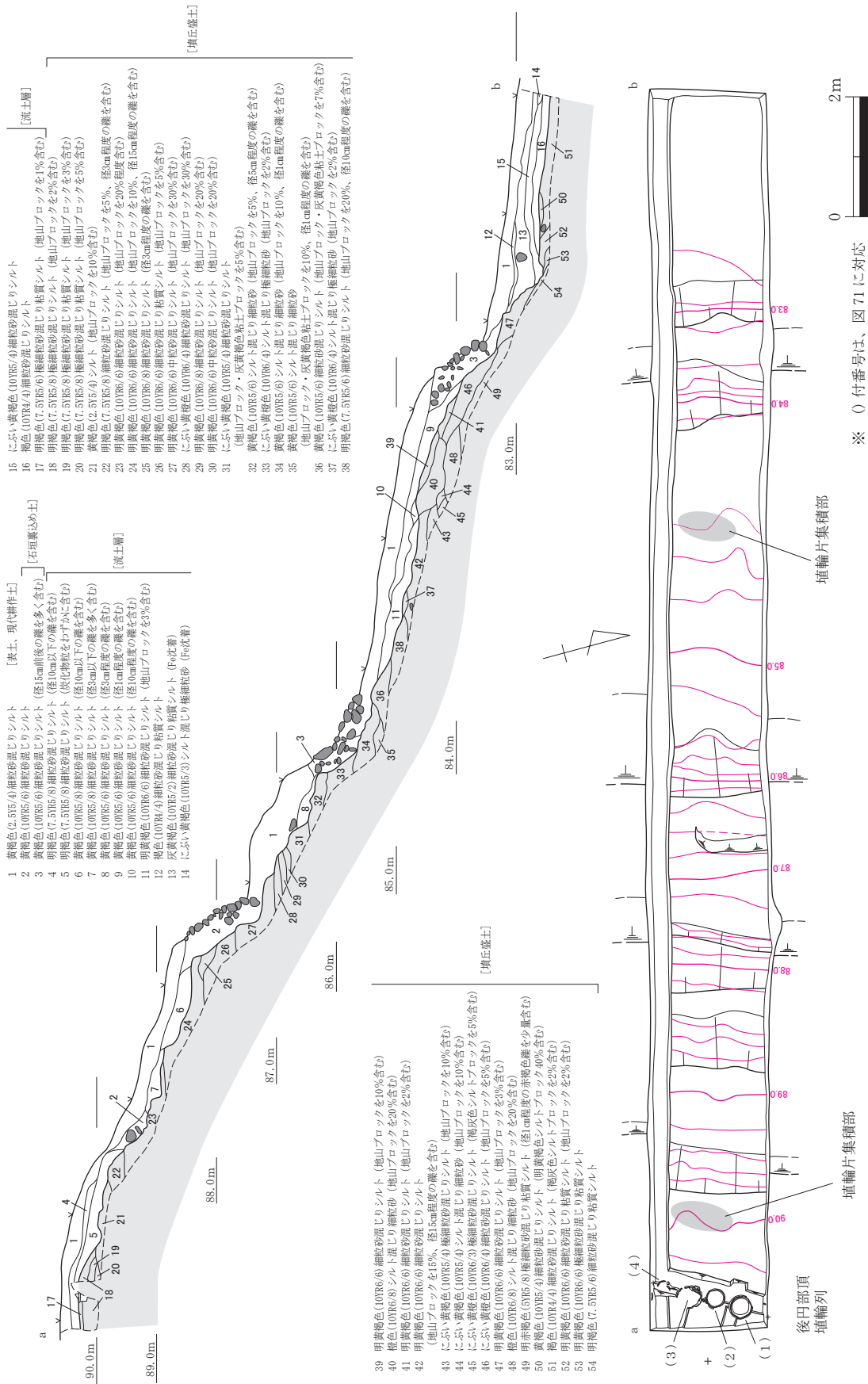


図15 3-2トレンチ平面・断面図 (S=1/100)

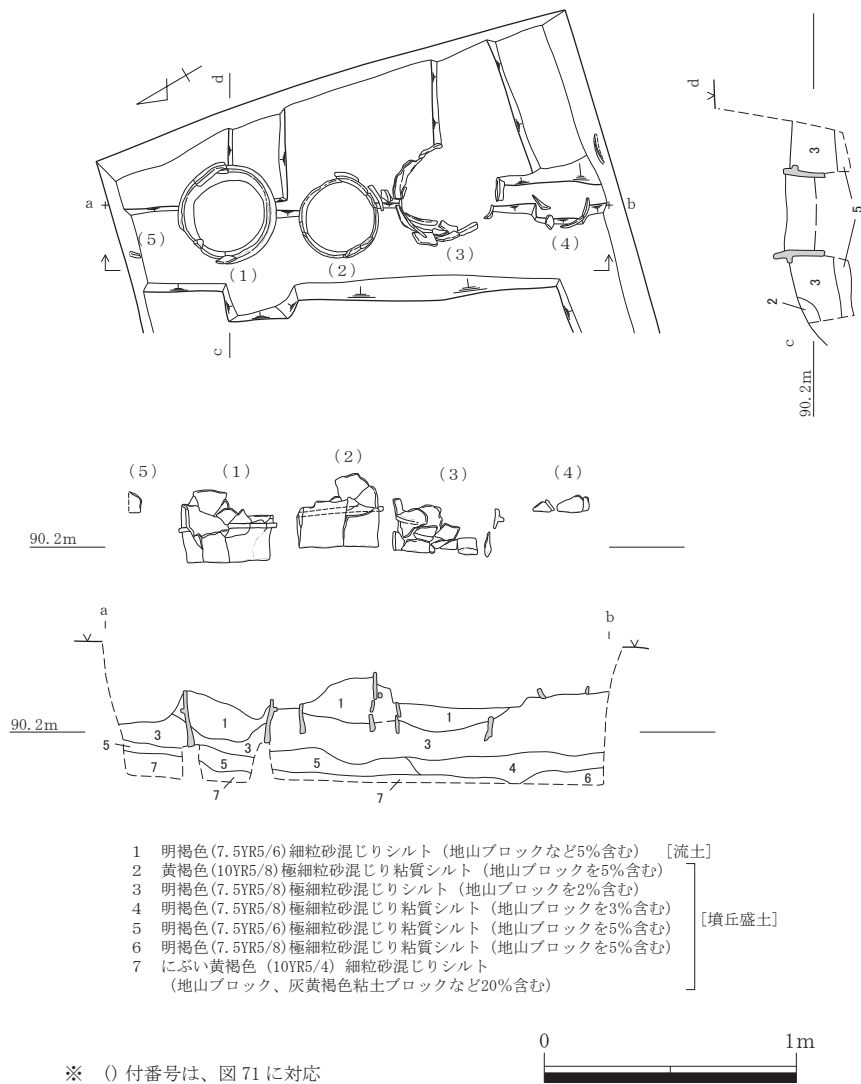


図 16 後円部頂西側の埴輪列 (S=1/30、3-2 トレンチ)

的広い平坦面が存在し、他のトレンチの調査成果から考え合わせると、およそ後円部 2 段目の平坦面を反映しているものといえる。最下段の平坦面についても、後円部 1 段目の平坦面に由来するものである可能性が考えられる。

墳丘斜面部は後世の改変の影響が大きく、築造当時の状況を残す箇所は存在しなかった。したがって斜面を覆っていたであろう葺石についても、原位置を保つものは確認されていない。ただし明治後期以降に築かれた石垣には多量の石が使用されており、墳丘斜面の葺石を利用したものであると推定される。

後円部頂の埴輪列 (図16) トレンチの東端部分において、後円部頂の平坦面の外縁を巡る埴輪列が検出されている。2 m 幅のトレンチ内では南北に並ぶ 4 個体の埴輪の底部のほか、トレンチの北壁と南壁においてそれぞれ 1 個体ずつが壁面に埋まるかたちで確認されている。ほぼ原位置を保った状態で検出されており、上部が失われているが、いずれも円筒埴輪であると考えられる。各個体間の間

隔は、底部付近で5～10cm程度であり、口縁部に向かって若干開く器形を推定すると、各個体がほぼ接するほど密に並べられているといえることができる。

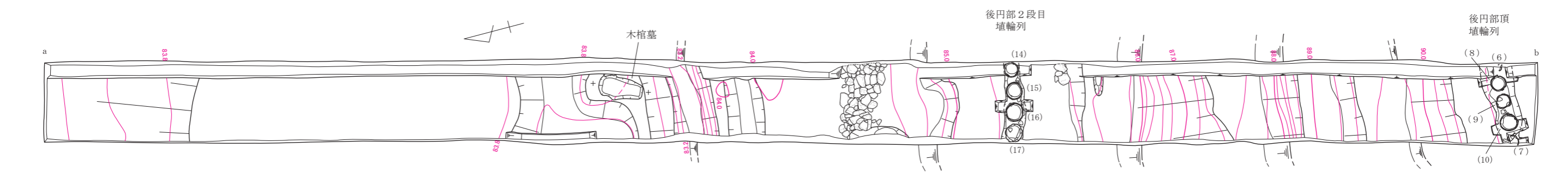
埴輪の残存状況は個体によって差があり、図71の(1)、(2)は部分的に2条目の突帯付近まで、(3)は2段目の中ほどまでが残存していたのに対し、(4)は底部から高さ6cm程度が、約1/2周残存していたに過ぎなかった。これは(4)が他の3個体よりも20cmほど高い位置に据えられていたことに起因するものである。このトレンチで確認された6個体の埴輪は、周辺の精査や断ち割り調査の結果、掘方を有するものではなく、盛土を積み上げる過程で据え付けられたものと判断された。その際(4)は北側に並ぶ3個体よりも高い位置に据えられたと考えられる。なおトレンチ北壁にもぐり込むかたちで検出された個体(5)についても、(4)と同様に他よりも高い位置に据えられている可能性がある。こうした据え付け方法は、後述する他のトレンチの状況と必ずしも共通するものではなく、配列する箇所によって異なる手法が採用されていると考えられる。

後円部2段目平坦面 他のトレンチの調査成果から標高85.4m付近に推定することができる。3-2トレンチでは84.3m～85.0mで幅4m程度の比較的平坦な部分が検出されているが、ここでは埴輪列は検出されなかった。わずか50cm程度の差ではあるが、後円部の南北で確認された平坦面よりも低くなっていることから、後世の改変により埴輪列が失われたものと推定される。なお埴輪列の存在が推定された付近では、墳丘残存面よりも10cm余り高い位置で埴輪片が集積した状態で検出されている(図版10中段)。耕作などの影響で埴輪列が壊された際に、その破片が集積されたものと推定される。同様の埴輪の集積は、後円部頂の埴輪列のすぐ西側においても確認されている(図版10下段)。

(2) 3-3トレンチ

トレンチの概要 後円部の北側斜面から前方部上面にかけて、推定される墳丘主軸ライン上に南北長36m、東西幅2m、面積72㎡のトレンチを設定して調査を行った。トレンチの範囲は後円部頂の平坦面の北縁付近を南端とし、北側は前方部が高まりとして残存する部分の上面の北端にまで及ぶものとした。トレンチ範囲の地表面の標高は、南端が91.0mで最も高く、前方部上面では84.2m前後でほぼ平坦となり、北端で83.8mと最も低くなっている。このトレンチの調査は、後円部の段築構造や葺石、埴輪列の状況に加え、前方部と後円部の接続状況や、前方部上面の埋葬施設や区画施設の有無など、茅原大墓古墳に関わる様々な要素の確認を目的として実施された。なお掘削及び埋め戻しはすべて人力により行われている。

土層の状況 3-3トレンチの範囲では、後円部では3-2トレンチと同様に4段の石垣が存在しているほか、前方部と後円部の接続部分にも高さ30cm程度の低い石垣があり、計5段の石垣が存在する。上から3段分については3-2トレンチとおおよそ類似するが、4段目については高さが60cm程度であり、3-2トレンチよりも低くなっている。これはトレンチ中央付近の地表面が後円部西側の平坦面より1mほど高くなっているためであり、これは後述する墳丘形態に起因するものといえる。この後円部北側斜面においては、墳丘残存面の直上に耕作土である表土層が存在する部



- 22 黄褐色(10YR5/6) 細粒砂混じりシルト (地山ブロックを20%含む) [Pit埋土]
- 23 黄褐色(10YR5/6) 細粒砂混じりシルト (地山ブロックを5%含む)
- 24 黄褐色(10YR5/6) 極細粒砂混じりシルト [埴輪掘方埋土]
- 25 黄褐色(10YR5/6) 極細粒砂混じり粘質シルト
- 26 明黄褐色(10YR6/8) 細粒砂混じりシルト (地山ブロックを10%含む)
- 27 明黄褐色(10YR6/6) 細粒砂混じりシルト
- 28 黄褐色(10YR5/8) 中粒砂混じりシルト (地山ブロックを5%含む)
- 29 明黄褐色(10YR6/8) 細粒砂混じりシルト (地山ブロックを10%含む)
- 30 明黄褐色(10YR6/8) 極細粒砂混じりシルト (地山ブロックを5%含む)
- 31 明黄褐色(10YR6/8) 細粒砂混じりシルト (地山ブロックを7%含む)
- 32 黄褐色(10YR5/6) 極細粒砂混じりシルト (地山ブロックを5%含む)
- 33 明黄褐色(10YR6/6) 極細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを20%含む)
- 34 明黄褐色(10YR6/6) 極細粒砂混じりシルト (地山ブロックを40%含む)
- 35 明黄褐色(10YR6/8) 中粒砂混じりシルト (地山ブロックを20%含む)
- 36 黄褐色(10YR5/6) 細粒砂混じりシルト
- 37 明黄褐色(10YR6/8) 中粒砂混じりシルト (地山ブロックを15%含む)
- 38 黄褐色(10YR5/8) 細粒砂混じりシルト (径5mm程度の礫を含む)
- 39 黄褐色(10YR5/8) 中粒砂混じりシルト (地山ブロックを10%含む)
- 40 明黄褐色(10YR6/8) シルト混じり細粒砂 (地山ブロックを40%含む)
- 41 明黄褐色(10YR6/6) 中粒砂混じりシルト (地山ブロックを20%含む)
- 42 黄褐色(10YR7/8) シルト混じり細粒砂 (地山ブロックを5%含む)
- 43 黄褐色(10YR7/8) シルト混じり細粒砂 (地山ブロックを10%含む)
- 44 黄褐色(10YR5/8) シルト混じり極細粒砂 (地山ブロックを30%含む)
- 45 黄褐色(10YR5/6) 極細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを3%含む)
- 46 黄褐色(10YR5/8) 細粒砂混じりシルト (地山ブロックを2%含む)
- 47 黄褐色(10YR5/6) 極細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを1%含む)
- 48 黄褐色(10YR5/8) 細粒砂混じりシルト (地山ブロックを10%含む)
- 49 明黄褐色(10YR6/6) 極細粒砂混じりシルト (地山ブロックを5%含む)
- 50 明褐色(7.5YR5/6) 細粒砂混じりシルト (地山ブロックを10%含む)
- 51 黄褐色(10YR5/6) 極細粒砂混じりシルト

[墳丘盛土]

- 52 黄褐色(10YR5/6) 極細粒砂混じりシルト (地山ブロックを2%含む)
- 53 明黄褐色(10YR6/8) 細粒砂混じりシルト (地山ブロックを2%含む)
- 54 黄褐色(10YR5/8) 細粒砂混じりシルト (地山ブロックを3%含む)
- 55 明黄褐色(10YR6/6) 極細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを5%含む)
- 56 明黄褐色(10YR6/6) 極細粒砂混じりシルト (地山ブロックを10%含む)
- 57 黄褐色(10YR5/6) 細粒砂混じりシルト (地山ブロックを3%含む)
- 58 黄褐色(10YR5/6) 細粒砂混じりシルト (地山ブロックを5%含む)
- 59 明黄褐色(10YR6/6) 細粒砂混じりシルト (地山ブロックを5%含む)
- 60 にぶい黄褐色(10YR6/4) 中粒砂混じりシルト (地山ブロックを20%含む)
- 61 明黄褐色(10YR7/6) 中粒砂混じりシルト (地山ブロックを20%含む)
- 62 明黄褐色(10YR6/6) 極細粒砂混じりシルト
- 63 明黄褐色(10YR6/6) 極細粒砂混じりシルト (地山ブロックを2%含む)
- 64 黄褐色(10YR5/6) 極細粒砂混じりシルト (地山ブロックを1%含む)
- 65 にぶい黄褐色(10YR5/4) 極細粒砂混じり粘質シルト (径3cm程度の礫を少量含む)
- 66 にぶい黄褐色(10YR5/4) 細粒砂混じりシルト (地山ブロックを2%含む)
- 67 にぶい黄褐色(10YR6/4) 極細粒砂混じり粘質シルト
- 68 明黄褐色(10YR6/6) シルト混じり極細粒砂 (地山ブロックを20%含む)
- 69 にぶい黄褐色(10YR5/4) 細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを5%含む)
- 70 にぶい黄褐色(10YR5/4) 細粒砂混じり粘質シルト
- 71 明黄褐色(10YR6/8) 細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを5%含む)
- 72 明黄褐色(10YR6/8) 極細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを10%含む)
- 73 黄褐色(10YR5/6) 細粒砂混じりシルト (地山ブロックを1%含む)
- 74 黄褐色(10YR7/8) 細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを30%含む)
- 75 明黄褐色(10YR6/6) 粘質シルト
- 76 黄褐色(10YR7/8) 細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを20%含む)
- 77 明黄褐色(10YR6/6) 極細粒砂混じり粘質シルト (径5mm程度の礫、地山ブロックを2%含む)
- 78 明黄褐色(10YR6/6) 極細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを20%含む)
- 79 黄褐色(10YR5/6) シルト混じり極細粒砂 (径5mm程度の礫を多く含む)
- 80 にぶい黄色(2.5Y6/4) シルト (径5mm程度の礫を多く含む)
- 81 黄褐色(10YR5/6) シルト混じり極細粒砂 (径5mm程度の礫を含む)

[墳丘盛土]

- 82 褐色(10YR4/6) 極細粒砂混じりシルト (径5mm程度の礫を少量含む)
- 83 褐色(10YR4/6) 極細粒砂混じりシルト (径5mm程度の礫を含む)
- 84 にぶい黄褐色(10YR5/4) シルト混じり細粒砂 (径5mm程度の礫を多量に含む)
- 85 黄褐色(10YR5/6) 細粒砂混じり粘質シルト
- 86 明黄褐色(10YR6/6) 細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを20%含む)
- 87 黄褐色(10YR5/6) 細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを20%含む)
- 88 にぶい黄褐色(10YR5/4) 細粒砂混じりシルト (地山ブロックを10%含む)
- 89 にぶい黄褐色(10YR5/4) 細粒砂混じりシルト (地山ブロックを2%含む)
- 90 黄褐色(10YR5/6) 細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを20%含む)
- 91 黄褐色(10YR5/8) 細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを20%含む)
- 92 黄褐色(10YR5/8) 細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを10%含む)
- 93 黄褐色(10YR5/6) 極細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを1%、炭化物粒を含む)
- 94 黄褐色(10YR5/8) 細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを10%含む)
- 95 にぶい黄褐色(10YR5/4) 極細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを1%含む)
- 96 黄褐色(10YR5/8) 細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを20%含む)
- 97 褐色(10YR4/4) 極細粒砂混じり粘質シルト (炭化物粒を含む)
- 98 にぶい黄褐色(10YR5/4) 極細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを1%、炭化物粒を含む)
- 99 にぶい黄褐色(10YR5/4) 極細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを5%含む)
- 100 にぶい黄褐色(10YR5/4) 極細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを1%含む)
- 101 にぶい黄褐色(10YR5/4) 細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを40%含む)
- 102 明黄褐色(10YR6/8) 中粒砂混じりシルト (地山ブロックを40%含む)
- 103 黄褐色(10YR5/6) 極細粒砂混じり粘質シルト (径5cmの礫を含む)
- 104 明黄褐色(10YR6/8) 細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを40%含む)
- 105 黄褐色(10YR5/6) 極細粒砂混じり粘質シルト
- 106 明褐色(7.5YR5/8) 極細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを10%含む)
- 107 黄褐色(10YR5/6) 細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを30%含む)
- 108 黄褐色(10YR5/6) 中粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを10%含む)
- 109 にぶい黄褐色(10YR6/4) 粘質シルト (地山ブロックを40%含む)
- 110 黄褐色(10YR5/6) 粘質シルト (地山ブロックを2%含む)

[墳丘盛土]

※ () 付番号は、図71・72に対応

図17 3-3 トレンチ平面・断面図 (S=1/100)

分が多いが、石垣の構築に先行して形成されたと考えられる土層が部分的に存在する（図17-7・8層）。

前方部と後円部が接続するトレンチの中央付近では、後述するように前方部上面と後円部2段目平坦面の間において葺石を施した斜面が検出されている。この部分では墳丘残存面の上に流土が厚さ50cmほど溜まっており（17～21層）、その流土や墳丘盛土を切り込むようにして中世～近世以降の東西溝が複数存在する（9層、15層、16層）。なおこれより北側は前方部上面に相当するが、墳丘残存面の直上に旧耕作土が存在しており、本来の前方部上面の大半は削平されているものと考えられる。

このように3-3トレンチでは耕作や石垣構築など後世の改変の影響を受けている箇所が多く見られたものの、後円部頂と2段目の平坦面を確認し、そこに巡らされた埴輪列を検出することができた。また前方部上面と後円部2段目の間では、葺石を伴う斜面が検出されている。

墳丘盛土 墳丘盛土はトレンチのほぼ全面において確認されている。盛土（26～110層）は黄褐色～明褐色土を主体とし、地山ブロックが多く含まれている。後円部の盛土は3-2トレンチとほぼ同様のものであるが、前方部の盛土はやや粘質の土層で構成されている。概ね水平に積み上げられているが、トレンチ北端部分では、前方部前面に向かって傾斜するように盛土が積まれる状況が観察できる。なお前方部上面には墳丘盛土を約1mの深さで掘り込む近世溝が存在するが、その底面においても地山は検出されておらず、結果的にこのトレンチ内では地山は検出されなかった。

後円部3段目 3-3トレンチでは2箇所で埴輪列が検出されており、両者が平坦面に巡らされたものであることは明らかである。このうちトレンチ南端の埴輪列は後円部頂平坦面を巡るものであり、付近の墳丘残存面の標高は90.7mである。その11.5m北側に位置する埴輪列付近の墳丘残存面が標高85.3mであることから、2つの平坦面の高低差は約5.4mということになる。このように高低差が大きいものの、両者の間に別の平坦面の存在を推定できる状況にないことから、後円部最上段は5m余りの高さを有していたと考えることができる。なお後円部最上段は、他のトレンチの調査成果を考えると、後円部の3段目にあたるものであることが明白となっている。

斜面部の葺石はほぼ全てが失われているが、北側の埴輪列の約1m南側に、後円部3段目斜面の基底石とおもわれる石がわずかに存在する。また斜面部は石垣構築により墳丘盛土が大きく掘り込まれるが、部分的に墳丘残存面がおよそ30°の傾斜をなしている箇所が存在する。この傾斜面には葺石が残存していないものの、上記の基底石を基点として30°の角度で3段目斜面を復元すると、ちょうどその復元ライン上に位置することがわかる。このことからこの傾斜面は、本来の墳丘斜面を反映している可能性があり、後円部3段目はおよそ30°の角度で立ち上がっていたと推定することができる。

後円部2段目 北側の埴輪列が検出された平坦面は、他のトレンチの調査成果から後円部2段目にあたるものと判断される。現状では墳丘盛土の直上に耕作土層が存在しており、墳丘残存面が北側に向かって若干低くなっていることから、古墳築造当時の平坦面が完全に残されているとは言い難い状況にある。しかし先に見たように、埴輪列の約1m南側には3段目斜面の葺石の基底石と思われる石が存在している。これを基準とすると標高85.4m付近に後円部2段目平坦面を復元することができる。

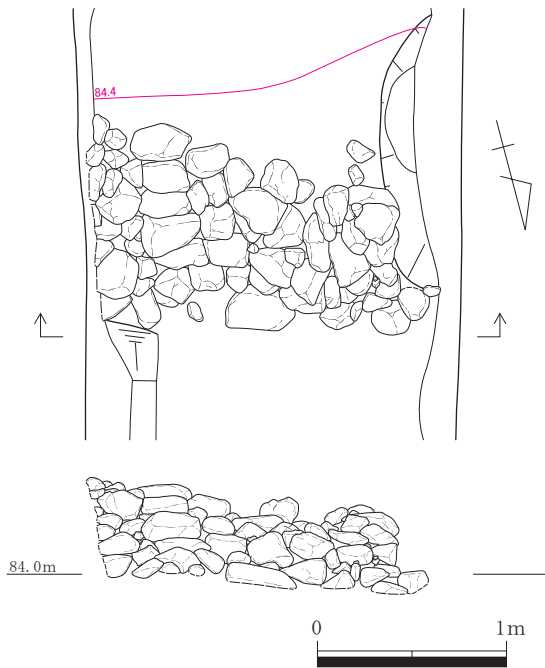


図18 後円部2段目北側の葺石
(S=1/40、3-3トレンチ)

なおこの平坦面の直下では、葺石が残存する斜面が確認されている。この斜面は前方部上面から立ち上がるもので、その傾斜は30°前後であり、先に推定した後円部3段目の傾斜角度とほぼ一致するものである。葺石は最大で高さ約50cm分が残存する(図18)。20~40cm程度の川原石が使用されており、石材の大きさは基底に使用されるものと斜面部分のもので大きな差は見られない。トレンチ東壁寄りの位置で横長の石材が並ぶ縦方向の目地が観察できる。葺石残存部の上下で断ち割り調査を行っており、裏込め土は存在しないものと判断された。

この葺石が残存する斜面の角度を勘案すると、後円部2段目平坦面の幅は2.5m前後に復元される。斜面の基底の標高が84.0mであることから、前

方部上面と後円部2段目平坦面の高低差は約1.4mということになる。

前方部上面 前方部上面の大半は、墳丘残存面の直上に耕作土層が存在し、後世の削平を受けていると考えられる。しかし後円部に接続する部分では先に見たように葺石が原位置を保っていたことから、この箇所については築造当時の墳丘面が残存しているものと考えられる。墳丘面が残存する範囲では、その上面は葺石の基底付近が最も低く、前方部前面側に向かってわずかではあるが高くなっているように観察される。このことから築造当時の前方部は前面側が高くなる形態であった可能性があるが、そのように判断する根拠は乏しい。前方部上面の標高は、ほぼ平坦なものと考えると84.0m前後に復元され、前面に向かって高くなる形態であったとしても、最も高いところで85.0m前後であったかと思われる。

なお前方部上面の墳丘盛土上面では、埴輪列や埋葬施設など古墳に伴う遺構は確認されなかった。その他の遺構としては、近世頃の溝のほか、後述する小規模な木棺墓が検出されている。

後円部頂の埴輪列(図19) トレンチ南端部分では、後円部頂の平坦面を巡る埴輪列が検出された。トレンチ東壁と西壁にもぐり込む個体を含めて計5個体の埴輪の底部が、ほぼ原位置を保った状態で確認されている。後円部頂平坦面の北縁にあたることから、埴輪は東西方向に並んで検出されており、各個体間の間隔は底部付近で10~15cmと密に配列される状況は、3-2トレンチの埴輪列と共通している。いずれの個体も上部を欠いているが、円筒埴輪であると考えられる。

残存状況について見ると、中央の3個体(8、9、10)は比較的良好に残っており、(8)と(10)は一部2条目突帯の上まで残存している。対してトレンチ壁沿いの2個体(6、7)は残存状態がわるく、底部においても一部分を欠く状態にあった。これは3-2トレンチで確認した状況と同様に、後

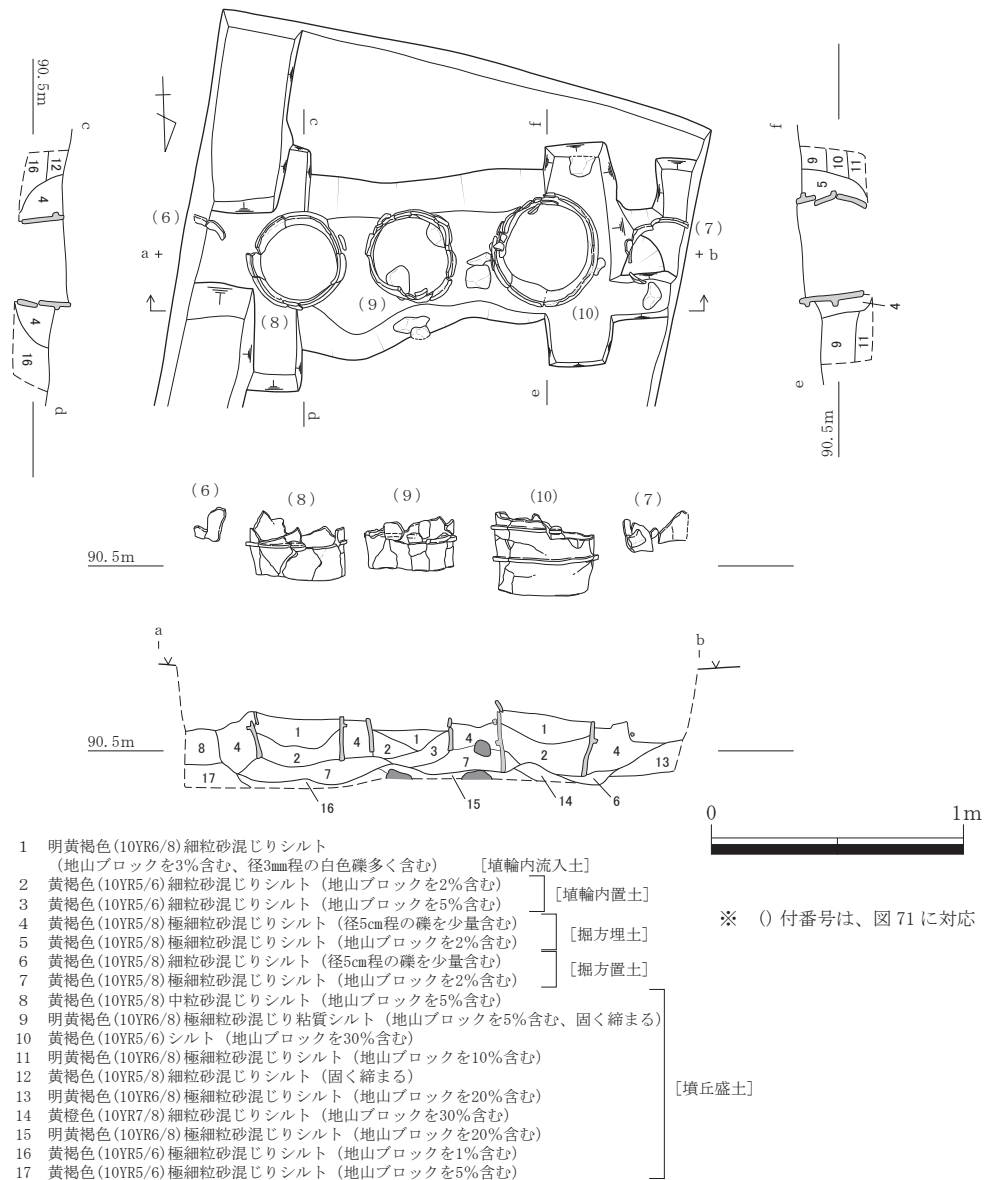


図19 後円部頂北側の埴輪列 (S=1/30、3-3トレンチ)

者が前者よりも10~20cmほど高い位置に据えられていたことによる。

このように3-3トレンチで確認された後円部頂の埴輪列は、3-2トレンチのそれと共通点が多く見られるが、埴輪の据え付け方法においては相違がみられる。3-2トレンチでは掘方が存在しなかったが、3-3トレンチでは幅60~70cmの布掘状の掘方が確認されている。また埴輪を据え付ける際に、その内部に10~15cm程度の置土が入れられたと考えられる。

後円部2段目の埴輪列 (図20) トレンチ南端より北側へ12.5mの地点において、後円部2段目平坦面に巡らされた埴輪列が検出されている。後円部2段目平坦面は先に見たように幅2.5m前後に復元されるが、埴輪列はその中央から若干後円部中心側に寄った位置にあると考えられる。

埴輪列は埴丘主軸に直交して東西に連なるもので、2m幅のトレンチ内で4個体がおさまるようにして検出されている。いずれも円筒埴輪と考えてよいであろう。このうち東側の3個体 (14、15、16)

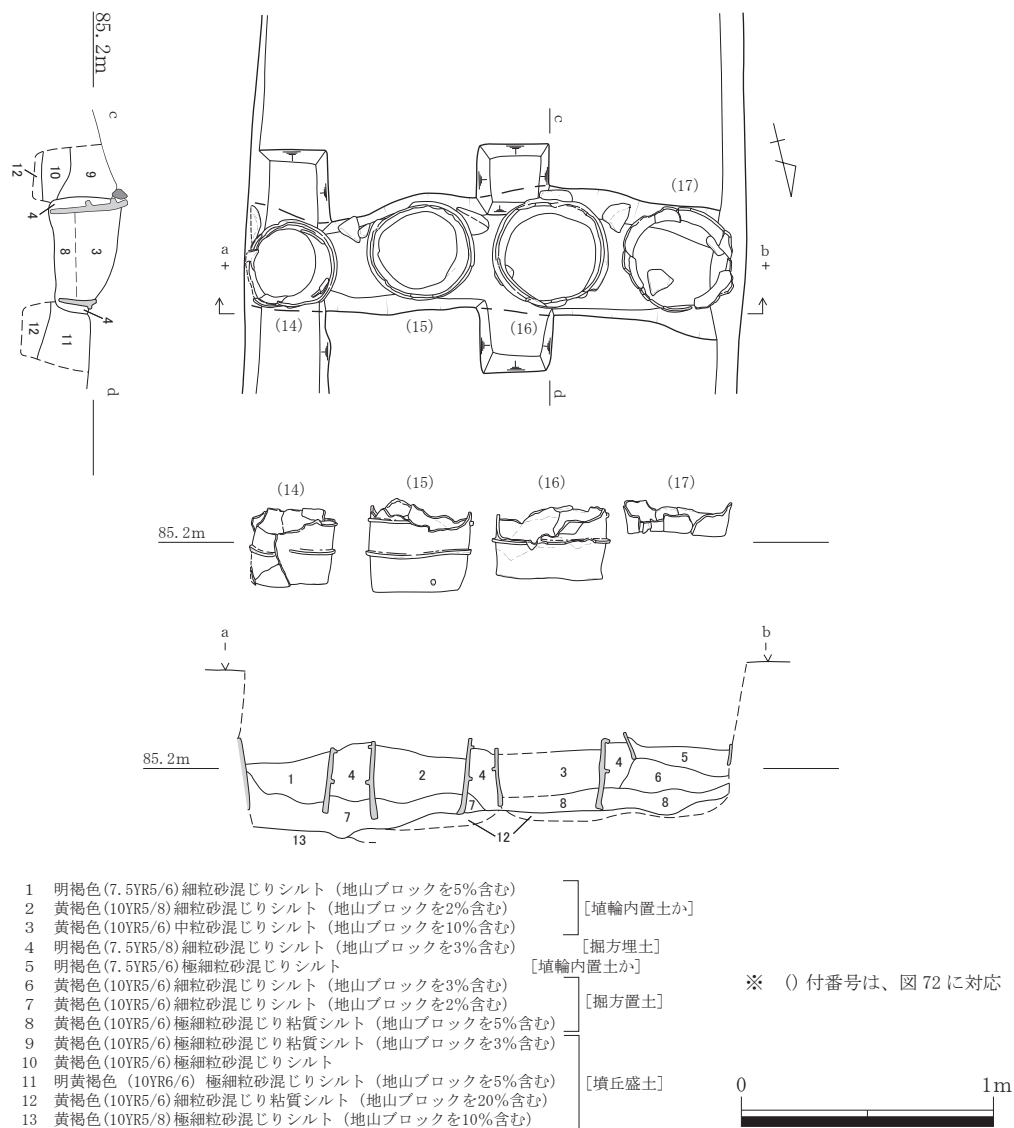


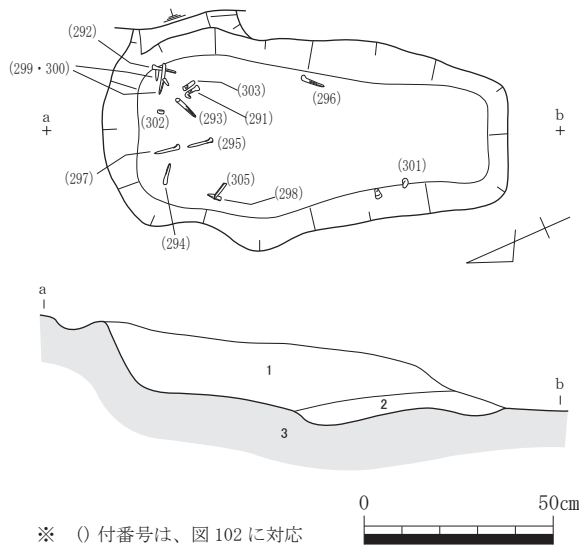
図20 後円部2段目北側の埴輪列(S=1/30、3-3トレンチ)

は概ね底部から2段目までがほぼ全周するほどに残存していたが、西端の個体(17)はそれらより20~25cmほど高い位置に据えられていたこともあり、1段目が残存している程度であった。埴輪は幅50cm前後の布掘状の掘方に据えられており、東側の3個体についてはおよそ2条目突帯付近まで、西端の個体は底部から6cm程度が掘方内に埋められた状態で検出されている。各個体間の間隔は6~12cmと狭く、口縁部付近が互いに接するように配列されていたと推定される。埴輪の内部には複数の埴輪片が流れ落ちていたが、掘方検出面付近より以下では出土しておらず、一定の厚さで埴輪内に置土が入れられていたと考えられる。

木棺墓(図21) 後円部2段目斜面の葺石が検出された地点より約5m北側の前方部上面において、長さ約1.1m、幅40~60cmの土坑が検出されている。深さ20cm程度が残存しており、土坑内から13個体以上の鉄釘(図102)が検出されたことから、この土坑は木棺墓の墓壙であると判断された。鉄釘

は墓壙内の北寄りの位置で多く出土しており、原位置に近い状態を保っていると思われるものもいくつか存在していた。鉄釘の出土位置から、木棺の幅は30cm余りと考えられる。

墓壙の南側部分は近世頃の溝による削平を被っており、本来の墓壙の規模は不明である。しかし推定される棺幅が狭いことを考慮すると、小規模な木棺墓であったと推定される。なお墓壙内では鉄釘以外の遺物は出土しておらず、その時期を判断することは難しいが、鉄釘の形態から古墳時代よりも大きく時期が下るものと推定される。



※ () 付番号は、図 102 に対応

- 1 黄褐色(10YR5/6)極細粒砂混じりシルト (地山ブロックを2%、径3mm~3cm程の礫を含む) [墓壙埋土]
- 2 黄褐色(10YR5/6)極細粒砂混じりシルト (地山ブロックを10%含む)
- 3 黄褐色(10YR5/6)シルト (地山ブロックを40%、径5cm以下の礫を多く含む) [墳丘盛土]

図21 3-3 トレンチ木棺墓 (S=1/20)

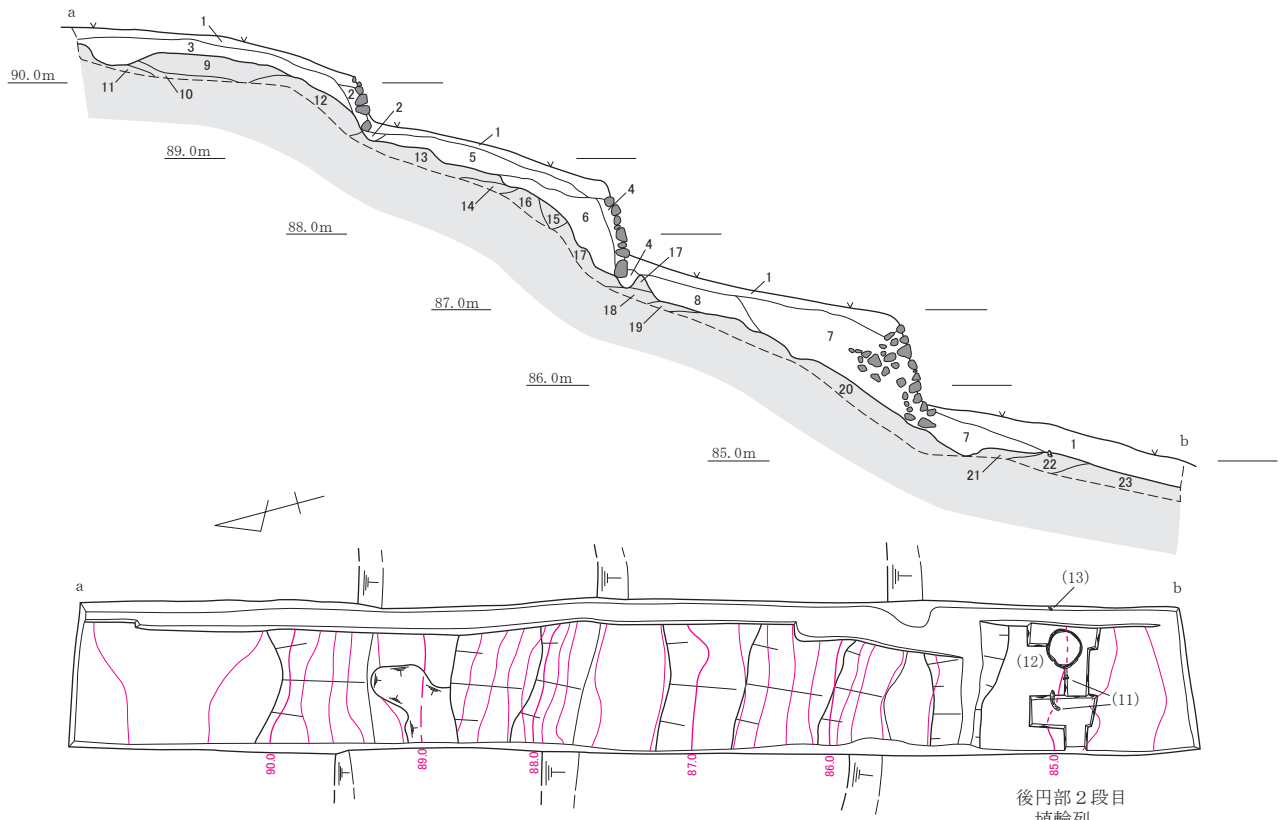
(3) 3-4 トレンチ

トレンチの概要 後円部南側斜面において、推定される墳丘主軸ライン上に南北長15m、東西幅2m、面積30㎡のトレンチを設定して調査を行った(図22)。トレンチの範囲は後円部頂の平坦面の南縁付近を北端とし、南端は現状の地形で石垣を3段分下がった位置の平坦面までとしている。トレンチ範囲の地表面の標高は、北端が90.7mと最も高く、南端が85.0mで最も低くなっている。このトレンチでは、後円部南側の墳丘形態や葺石、埴輪列の状況などの確認を主な目的として調査を実施している。なお掘削及び埋め戻しはすべて人力により行われた。

土層の状況 トレンチ範囲内では現状で3段の石垣が存在し、平坦面は4面存在する。土層の概要は後円部斜面の他のトレンチと共通しており、墳丘残存面上に耕作土が存在することから、旧来の墳丘面は既に失われていると考えられ、特に石垣の基底部分では墳丘盛土が掘り込まれている。このように墳丘面の残存状況は決して良好ではなかったが、トレンチ南端近くでは後円部2段目の埴輪列が確認されている。

墳丘 墳丘盛土はトレンチの全面において確認されている。盛土(図22-9~23層)は黄褐色~明褐色土を主体とし、地山ブロックが多く含まれている点は後円部の他の地点と共通しているが、3-2トレンチなどと比較すると、やや明るい色調の土層が多いように思われる。水平ないし若干後円部中心側に傾斜するように積み上げられており、一部断ち割り調査を行っているが、このトレンチ内では地山に相当する土層は確認されなかった。

トレンチ北端部分は後円部頂の平坦面の南縁にあたりと考えられるが、後世の改変の影響のためか埴輪列は確認されなかった。対してトレンチ南端付近では、緩やかな傾斜をなす墳丘残存面において、埴輪列の存在を確認している。この埴輪列は後円部2段目の平坦面を巡るものと考えられ、後円部中



- 1 黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂混じりシルト
- 2 黄褐色(10YR5/6)中粒砂混じりシルト
- 3 黄褐色(10YR5/6)細粒砂混じりシルト (径3cm以下の礫を含む)
- 4 黄褐色(10YR5/6)細粒砂混じりシルト (径3cm程度の礫を含む)
- 5 黄褐色(10YR5/6)細粒砂混じりシルト (径3cm以下の礫、地山ブロックを3%含む)
- 6 明褐色(7.5YR5/6)細粒砂混じりシルト (径10cm以下の礫、地山ブロックを3%含む)
- 7 にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂混じりシルト (径10cm以下の礫、地山ブロックを1%含む)
- 8 黄褐色(10YR5/8)細粒砂混じりシルト (径2mm程度の礫、地山ブロックを1%含む)
- 9 明黄褐色(10YR6/6)細粒砂混じりシルト (地山ブロックを30%含む)
- 10 黄褐色(10YR5/6)極細粒砂混じりシルト (地山ブロックを3%含む)
- 11 明黄褐色(10YR6/6)シルト混じり極細粒砂 (地山ブロックを40%含む)
- 12 明褐色(7.5YR5/8)中粒砂混じりシルト (地山ブロックを5%、径5cm以上の礫を含む)
- 13 明褐色(7.5YR5/8)中粒砂混じりシルト (地山ブロックを10%、径10cm以上の礫を含む)
- 14 明褐色(7.5YR5/6)細粒砂混じりシルト (地山ブロックを10%含む)
- 15 黄褐色(10YR5/6)細粒砂混じりシルト (地山ブロックを5%含む)
- 16 明褐色(7.5YR5/8)細粒砂混じりシルト (地山ブロックを3%含む)
- 17 明褐色(7.5YR5/8)シルト混じり極細粒砂 (地山ブロックを20%含む)
- 18 黄褐色(7.5YR5/6)極細粒砂混じりシルト (地山ブロックを3%含む)
- 19 橙色(7.5YR6/8)シルト混じり極細粒砂～細粒砂 (地山ブロックを20%含む)
- 20 明褐色(7.5YR5/8)細粒砂混じりシルト (地山ブロックを10%、径10cmほどの礫を含む)
- 21 橙色(7.5YR6/6)極細粒砂混じりシルト (地山ブロックを2%含む)
- 22 明褐色(7.5YR5/6)細粒砂混じりシルト (地山ブロックを2%含む)
- 23 橙色(7.5YR6/8)細粒砂混じりシルト (径2cm以下の礫、地山ブロックを15%含む)

[耕作土]
[造成土]
[墳丘盛土]



※ () 付番号は、図 72 に対応

図22 3-4 トレンチ平面・断面図 (S=1/100)

心を挟んで対称的な位置で検出された3-3 トレンチの後円部 2 段目埴輪列と、ほぼ同一の標高に位置している。ここでは築造当時の平坦面を復元する根拠を欠いているが、3-3 トレンチの状況を参考とするなら、標高85.4m付近に存在したものと推定することができる。

後円部 3 段目斜面には葺石が一切残存していなかったが、後円部北側斜面と同様に、墳丘残存面が傾斜面をなす箇所が存在している。その角度はやはり北側と同様に30° 前後であることから、この傾斜面が築造当時の後円部 3 段目斜面を反映しているものと推定される。

後円部 2 段目の埴輪列 (図23) トレンチ南端から北へ約1.5mの地点において、東西に並ぶ埴輪

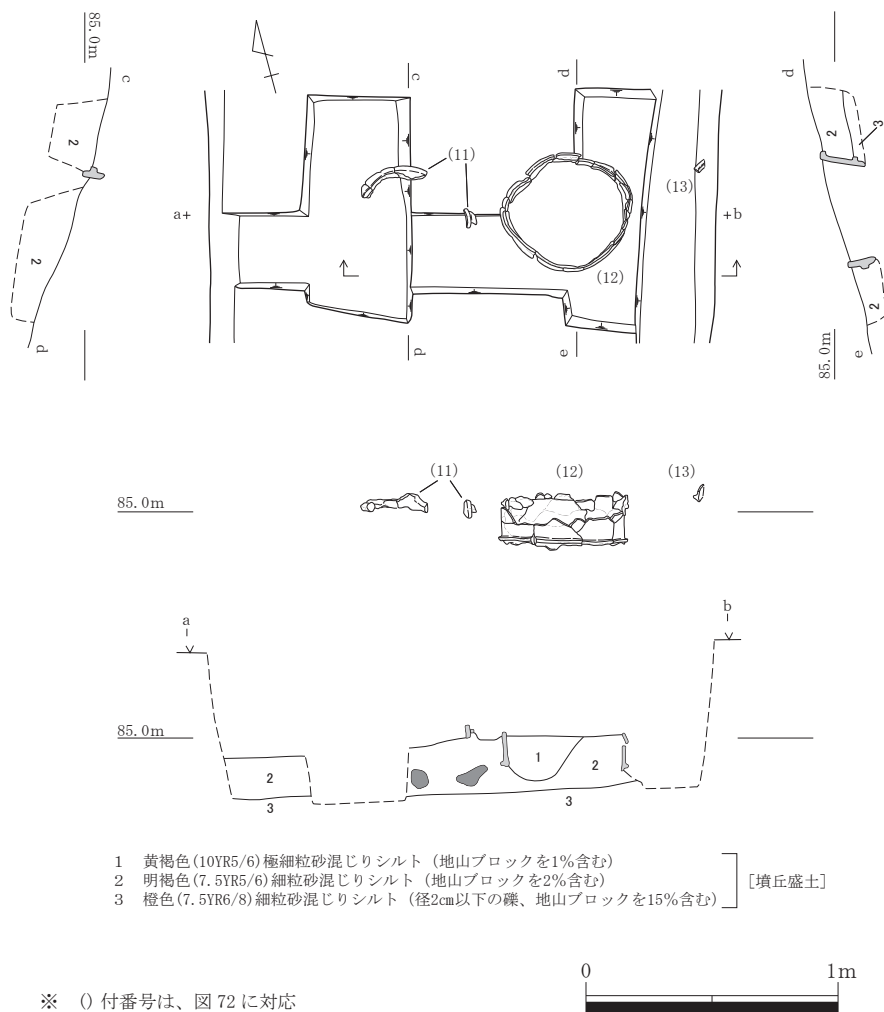


図 23 後尾部 2 段目南側の埴輪列 (S=1/30、3-4 トレンチ)

列を検出している。トレンチ東壁面に破片が残存していた個体も含めて 3 個体が検出されているが、3-2 トレンチや 3-3 トレンチで確認された埴輪列に比べると残存状況が悪く、トレンチ西壁寄りの位置に存在したであろう個体は残存していなかった。2 段目平坦面が南に傾斜するように削平されているため、各個体ともに南側の残存状況がより悪く、(11) やトレンチ東壁の (13) では、北側部分の破片のみが辛うじて残存しているに過ぎない。最も残存状況が良かった (12) においても、1 段分が概ね全周する程度であった。

検出された 3 個体はいずれも円筒埴輪であると考えられるが、3 個体ともに底部が打ち欠かれた状態で据えられているという点で、他のトレンチで確認された埴輪列の個体とは大きく異なっている。各個体ともに何条目かの突帯の直下で打ち欠かれており、掘方を有さず、盛土を積み上げる過程で据え付けられたと考えられる。個体間の間隔は、(11) と (12) の間が約 10cm であり、密に並べられている点は 3-2 トレンチや 3-3 トレンチの埴輪列と共通している。

(4) 4-5トレンチ、5-1トレンチ

トレンチの概要 4-5トレンチ、5-1トレンチは、前方部上面の後円部に近い位置から東側くびれ部付近にかけて設定されたトレンチである。4-5トレンチは、3-3トレンチで前方部上面と後円部斜面の接続状況が確認されたことを受けて、前方部側面の斜面と後円部斜面がどのような関係にあるのかを確認すべく設定している。当初は東西8m、南北3mの規模で設定しているが、トレンチ内で前方部東側斜面が確認されなかったため、まずは2m幅で東側へ拡張し、斜面が確認された部分のみを3m幅としている。したがって最終的なトレンチ形態は、東西13.5m、南北3mの「凹」字形を呈するものとなり、面積は38㎡となった。

5-1トレンチは、4-5トレンチで確認された前方部東側の2段目斜面の南側延長部を確認すべく設定している。トレンチの形態は南北長約5mの不等辺五角形で、面積は13.5㎡であり、4-5トレンチで明らかにできなかった前方部側面の斜面と後円部斜面の接続状況を確認することを目的とした。この5-1トレンチを設定する際には、4-5トレンチにわずかに重複させており、図24には双方のトレンチを接続した形で平面図を示している。両トレンチを合わせた総面積は、重複部分を除くと49.5㎡である。なおいずれのトレンチも、掘削から埋め戻しまで全て人力で行っている。

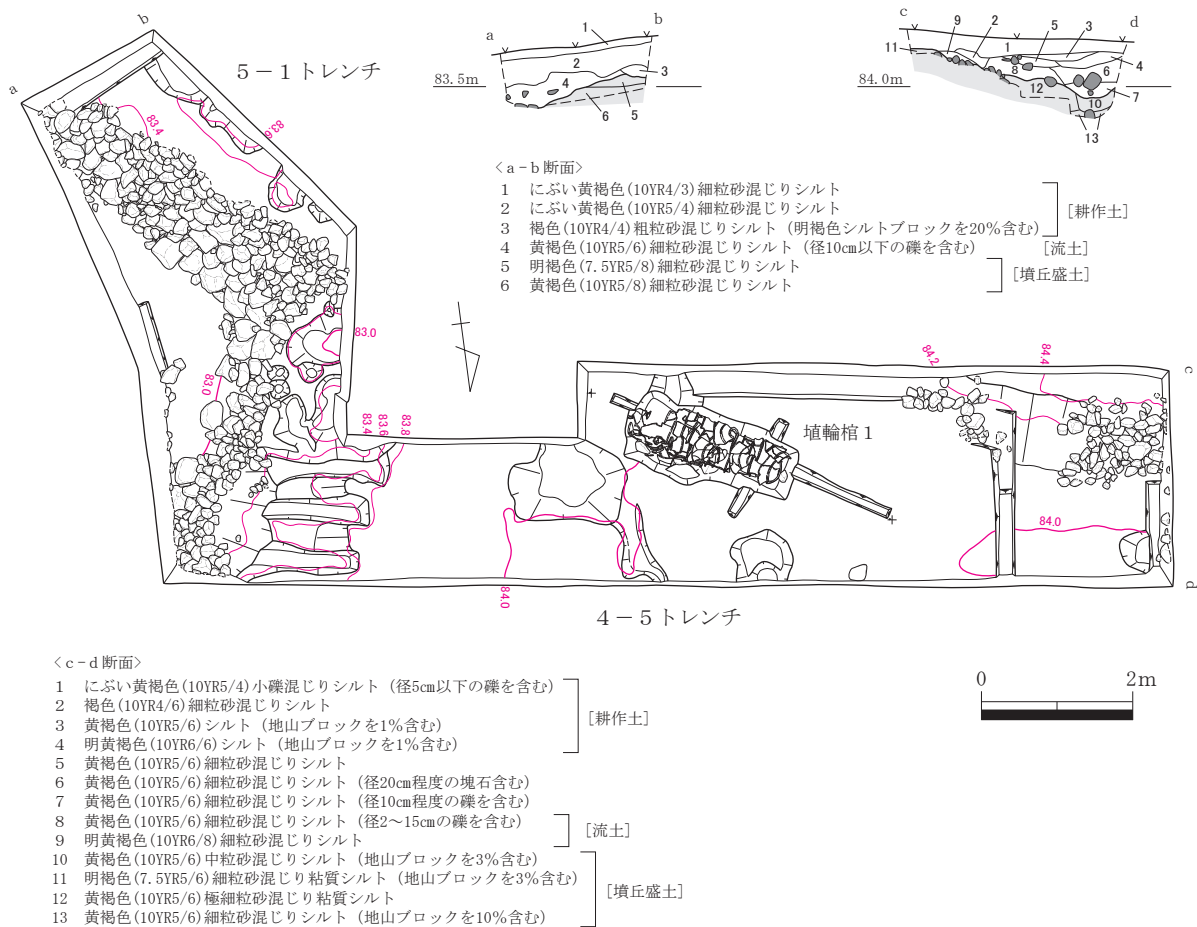


図24 4-5、5-1トレンチ平面・断面図 (S=1/100)

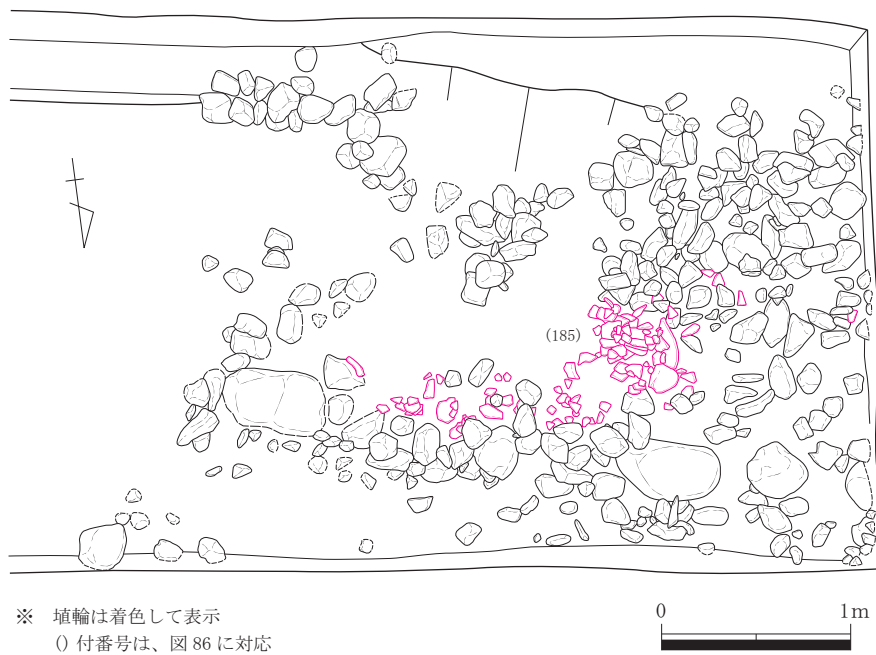


図 25 4-5 トレンチ西側転落石・埴輪出土状況 (S=1/40)

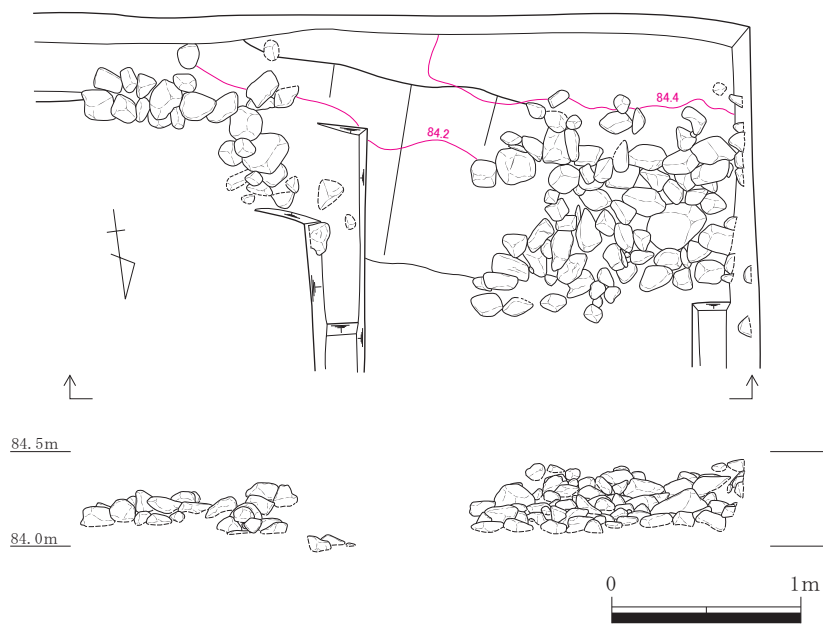


図 26 後円部 2 段目北側の葺石 (S=1/40、4-5 トレンチ)

後円部北側斜面付近 4-5 トレンチ部分の南西隅において、前方部上面から立ち上がる後円部斜面が検出されている。これはすぐ西側の 3-3 トレンチ内で確認している後円部 2 段目斜面の東側延長部分であり、同様に葺石を伴った状態で検出された。

この部分における葺石は高さ40cm程度が残存しており、4-5 トレンチでは東西長3.6mの範囲で確認されている (図26)。使用される石材は 3-3 トレンチに比べるとやや小ぶりであり、20cm前後のものが中心で、基底と斜面部の石材に大きな違いは見られなかった。葺石が流れ落ちた部分の斜面を観

察したところ、裏込め土の存在は確認されていない。なお斜面下には多くの石材が流れ落ちて、中には一部列状に石材が並ぶように見える箇所が存在した（図25）。こうした列状をなす石について、当初古墳と関連するものである可能性も考えたが、断ち割り調査を行ったところ、これらの石材の下には埴輪片を含んだ土層が存在しており、古墳よりも大きく時期が下るものと判断された。最終的にその性格は明らかにできなかったが、3-3トレンチでも確認されている中世以降の東西溝の延長部に位置することから、この溝に伴うものである可能性を考えている。

なお転落石の中からは壺形埴輪（185）の破片がまとまって出土している。この壺形埴輪は、斜面のすぐ上にあたる後円部2段目平坦面に配列されたものであると推定される。

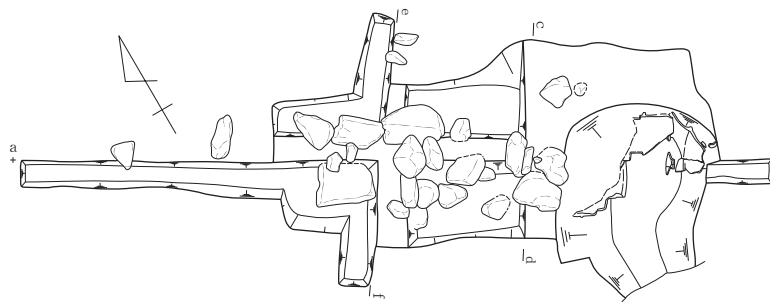
前方部上面 4-5トレンチの西端から約11m東までの範囲において、墳丘盛土上面が標高84.0m前後の平坦面として検出されている。その上面が流土層に覆われていたことから、後世に削平されたものではなく、古墳築造当時の前方部上面を反映しているものと考えられる。一部で後世の攪乱による凹みが見られたほか、4-5トレンチの中央付近で埴輪棺1基が検出されている。

埴輪棺1（図27） 後円部斜面に近い前方部上面に位置する。墓壙は検出面で長方形に近い平面形態を持ち、その長軸方向は前方部上面から立ち上がる後円部斜面の基底に平行させているものと考えられる。検出面での長さは約2.3mで、小口幅は北西側で約65cm、南東側が約1.0mと南東側がやや広くなっている。墓壙の南東小口付近が攪乱を受けていたほかは、良好な状態で残存していた。

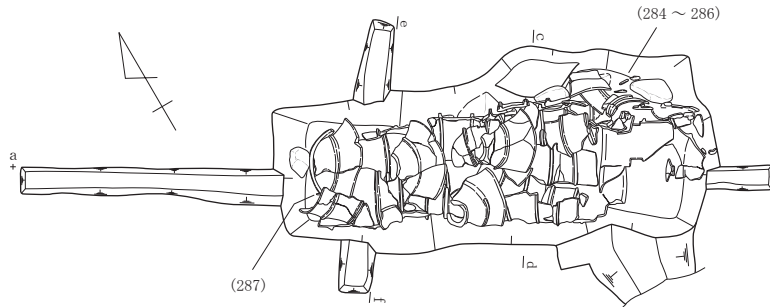
墓壙の深さは約50cmで、埋土上層には20cm前後の石が含まれていたが、これは棺上半が陥没した際に生じた凹みに、葺石の転落石が落ち込んだものと推定される。このほか墓壙埋土下層にもいくつか石が存在するが、墳丘盛土中にも同様の石が含まれており、特に意図的に入れられたものとは考えられない。

墓壙内に納められた棺は長さ2.1mを測り、陥没により正確な棺幅は不明であるが、墓壙と同様に南東小口側が広がっているようである。このことから頭位方向は南東側であったと考えられる。棺には4個体の壺形埴輪の口縁部（図88-220~223）と、10個体の円筒埴輪（224~233）が使用されており（図28・29）、いずれも元は墳丘上に配列されていたものと考えられる。

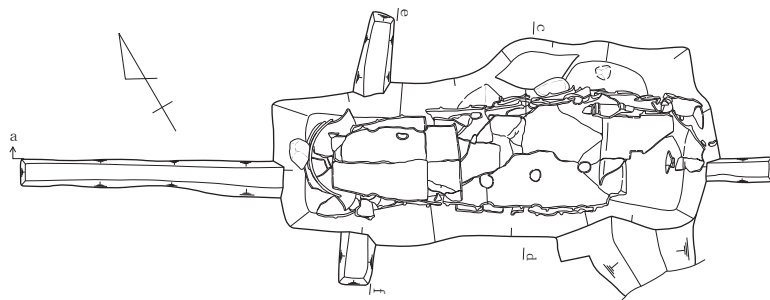
棺の構造を見ると、まず棺の中央部分には、最も大きな個体である円筒埴輪（233）が用いられており、口縁部が被葬者の頭位側に向けられている。なおこの個体は底部付近のみが欠失した状態にあったが、これは棺への転用の際に打ち欠かれたものではなく、3-4トレンチの埴輪列に見られるように、配列段階で既に失われていたものと推定される。完形の個体である円筒埴輪（228）は（233）よりも小型の個体であり、同様に口縁部を頭位側に向け、（233）の中に差し込んで棺の北東側部分を構成している。円筒埴輪（226）は攪乱の影響により残存状況が悪いが、本来は口縁部から3段分が全周する状態で使用されたと推定される。口縁部を足元側に向けて南東側から（233）の中に差し込み、棺の南東側部分を構成している。両小口部分は壺形埴輪の口縁部（220、223）を用いて外側から塞ぎ込み、北西小口部ではさらにその外側に、円筒埴輪（231）の大きな破片が口縁部を上に向けて立てられている。その他の個体については、棺の側面や上面の透孔や継目を塞ぐための破片として用いられている。



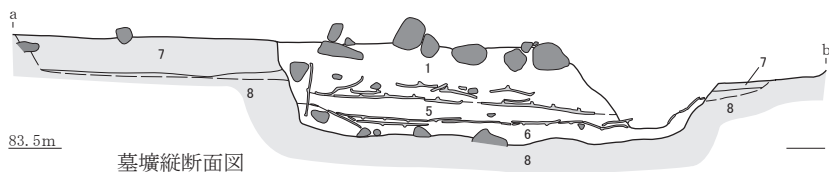
墓壙上面検出状況



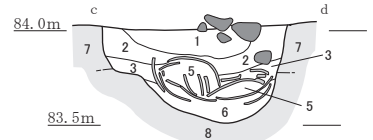
埴輪棺上面検出状況



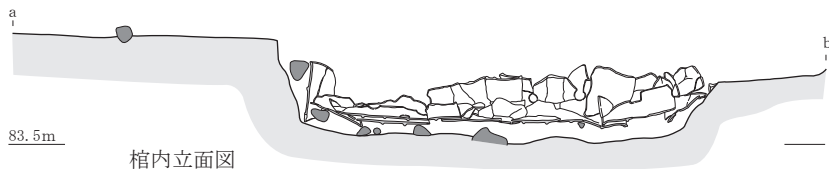
棺内検出状況



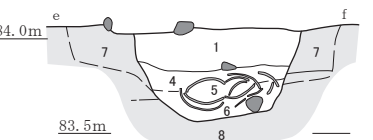
墓壙縦断面図



墓壙横断面図①



棺内立面図



墓壙横断面図②

- 1 黄褐色(10YR5/8)細粒砂混じりシルト (径20cm以下の葦石転落石、地山ブロックを3%含む) [流土]
 - 2 黄褐色(10YR5/6)細粒砂混じりシルト (地山ブロックを10%含む)
 - 3 黄褐色(10YR5/6)細粒砂混じりシルト (地山ブロックを2%含む)
 - 4 黄褐色(10YR5/6)極細粒砂混じりシルト (地山ブロックを5%含む)
 - 5 黄褐色(10YR5/6)極細粒砂混じりシルト (径5mm~2cmの礫を少量含む)
 - 6 明褐色(7.5YR5/6)細粒砂混じりシルト (地山ブロックを1%含む)
 - 7 黄褐色(10YR5/6)細粒砂混じりシルト (地山ブロックを3%、白色の小礫を多く含む)
 - 8 明褐色(7.5YR5/6)細粒砂混じりシルト (地山ブロックを20%含む)
- [墓壙内埋土]
- [墓壙底の置土]
- [墳丘盛土]

※ () 付番号は、図 100 に対応



図 27 埴輪棺 1 平面・断面・立面図 (S=1/40)

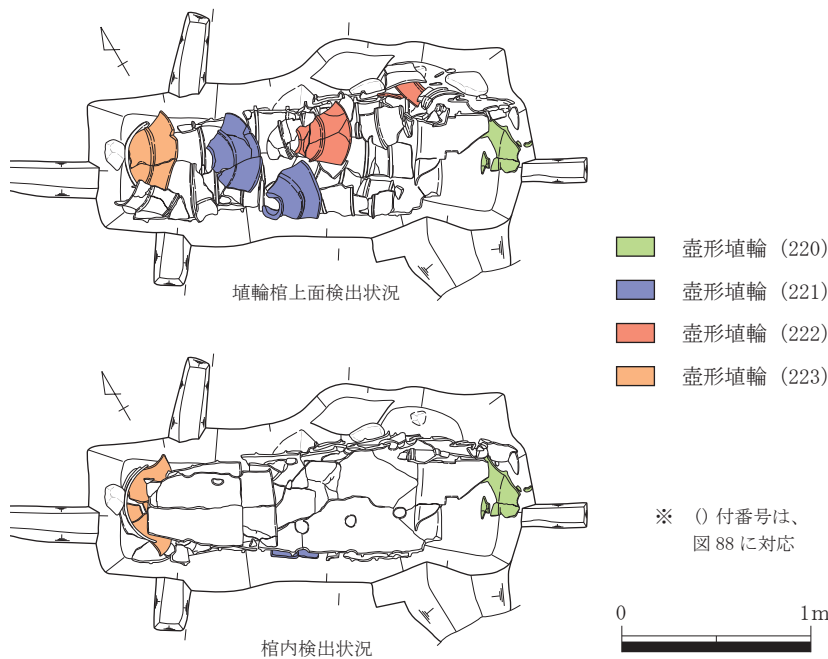


図 28 埴輪棺 1 における壺形埴輪使用状況 (S=1/40)

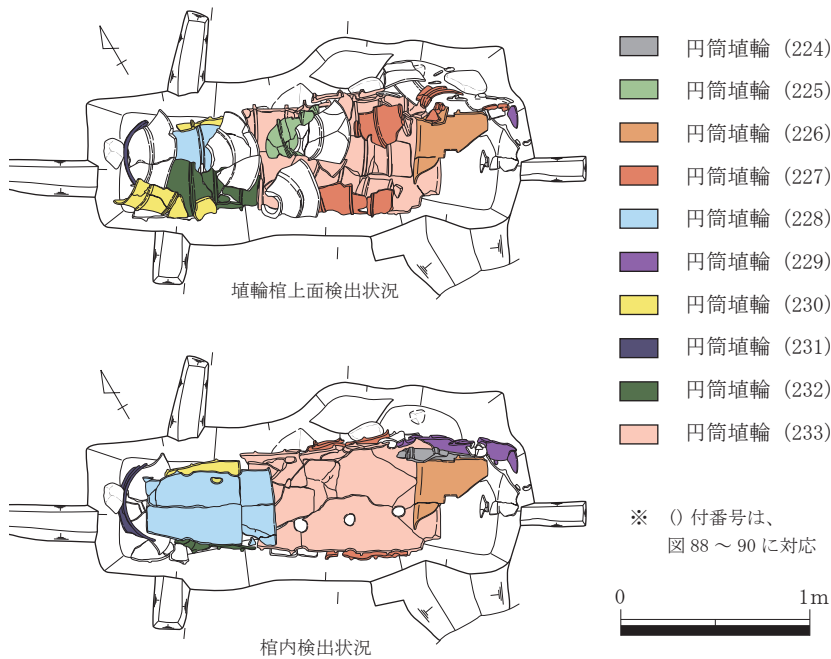


図 29 埴輪棺 1 における円筒埴輪使用状況 (S=1/40)

が、埴輪列は確認されなかった。本来はこの面にも埴輪列が存在したと推定されるが、トレンチ東壁のすぐ外側には石垣が迫っており、この部分では1段目平坦面が既に失われていると推定される。現状の地形状況を考えて、墳丘東側で1段目平坦面が残存している可能性があるのはこの付近のみであり、残念なことであるが、墳丘東側の1段目埴輪列は現段階では全く残存していないと推定される。

次にこの付近で検出された葺石の状況を見ていきたい。まず前方部東側面に相当する部分では、く

棺内では副葬品が検出されなかったが、棺外では南東小口側寄りの棺側部分と北西小口付近の棺上面付近の2箇所において、長頸鎌(284)などの鉄製品が検出されている(図100)。

埋葬が行われた時期については、長頸鎌(284)が存在することから、茅原大墓古墳の築造時期よりも数十年程度遅れるものと考えられる。

墳丘2段目斜面 4-5

トレンチ東端部分では前方部東側面の2段目斜面が葺石を伴った状態で検出されており、その南側にあたる5-1トレンチ範囲ではその南側延長部が確認されている。また5-1トレンチでは後円部2段目にあたる斜面が葺石を伴って検出されており、トレンチ内で墳丘2段目のくびれ部を検出することができた。

上記の斜面の基底にあたる1段目平坦面は、標高82.8m前後で確認されている。この平坦面は最大で2段目基底部から幅1m分を検出している



図30 東側くびれ部2段目の葺石 (S=1/40)

くびれ部から北へ長さ8.5mにわたって斜面部が検出され、最大で高さ約60cm分の葺石が残存していた(図30)。前方部2段目の高さは、1段目平坦面と前方部上面の標高から1m余りと考えられ、おおよそその下半部が残存しているということになる。使用される石材は川原石が中心で、斜面部には20cm前後の石材が用いられるが、基底部には40cmほどの大型の石材が置かれており、その使用に明確な差が見られる。斜面の角度は20°前後であり、後円部3段目などと比較するとやや緩やかである。

後円部2段目斜面にあたる部分では、基底から最大で高さ約70cm分の葺石が残存している。川原石を中心とする20~50cm程度の石が使用されており、明確な目地は観察されないが、部位によって石材の状況が多少異なっている。くびれ部付近では50cm前後の大型の石材を基底石に使用し、その上にも30~40cmの比較的大きな石を使用し、上方に向かうほど小ぶりの石材が多く用いられている。くびれ

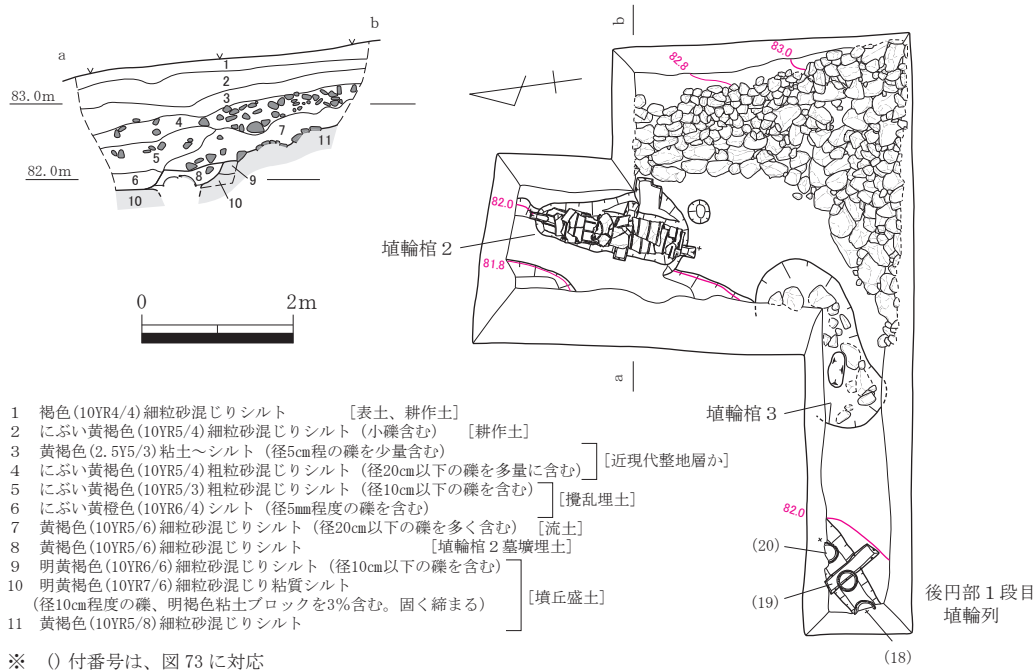


図31 5-2 トレンチ平面・断面図 (S=1/100)

部から1.6mほど南の部分では、基底に大型の石材が存在せず、石の積み上げ方もやや乱雑である。さらにその南側のトレンチ南端付近では、大型の石材が比較的多く使用されており、丁寧に積み上げられている印象を受ける。なおこの部分で確認された斜面の角度は、おおよそ25°前後であった。

(5) 5-2 トレンチ

トレンチの概要 埴丘西側の2段目くびれ部の位置を確認することを目的として調査を実施している。当初の予定ではまず東西長8m、南北幅1.5mの細長いトレンチで前方部西側面の2段目基底部の位置を確認し、その後南側へ拡張してくびれ部を検出する考えであったが、この細長いトレンチを掘削したところ、後円部2段目基底部が検出され、これに平行するように並ぶ後円部1段目埴輪列が検出された。これを受けて北壁の東半部を南北2.5m、東西4mの規模で拡張を行ったところ、この範囲において2段目くびれ部を検出することができた。またその北壁付近において、1段目平坦面に設けられた埴輪棺が検出されたため、さらに東西2.5m、南北2mの規模で北側へ拡張を行っている(図31)。このトレンチの最終的な面積は27㎡であり、掘削から埋め戻しまで、全て人力により行った。

土層の状況 トレンチ付近は北西側へと下がる緩傾斜面に位置しており、地表面から30～50cmの深さまでは新旧の耕作土が確認された。その下層には他の土層と比較して異質な黄褐色粘土～シルト層(図31-3層)が存在している。この層の性格は不明であるが、すぐ西側に存在する小池の池底を浚えた土が置かれたものではないかと思われる。その下のにぶい黄褐色土層(4層)以下には葦石に由来すると思われる石が多量に含まれており、トレンチ北西隅には、埋土中に古墳時代後期頃の埴輪片(図103)や須恵器片が含まれる落ち込みが存在する(5・6層)。この落ち込みの時期については、

切込み面が比較的上層にあることから、出土遺物の時期よりも下る可能性が考えられる。また斜面部で検出された葺石の直上では、やはり石を多く含んだ黄褐色土層（7層）が存在しており、これらを掘り下げると墳丘1段目の平坦面と、そこから立ち上がる2段目斜面の葺石が検出されている。

墳丘1段目平坦面 トレンチの中央付近から南西側の部分において、標高82.2m前後の平坦面が検出されている。墳丘西側の1段目平坦面に相当するものと考えられ、墳丘東側の4-5トレンチ、5-1トレンチで検出されている1段目平坦面と比較すると、60cmほど低い位置にあることがわかる。この平坦面では、流土層の上面から切り込む落ち込みがトレンチ北東隅で確認されているほか、前方部2段目の基底に沿う位置と後円部2段目の基底に沿う位置でそれぞれ埴輪棺

が1基ずつ検出された。またトレンチの西端部分では、この平坦面に巡らされた後円部1段目の埴輪列が検出されている。この1段目平坦面の幅については不明であるが、上記の埴輪列が後円部2段目基底から2m以上離れた位置にあることから、後円部2段目平坦面よりも広いものであったと推定される。

なお5-2トレンチ範囲内では前方部1段目を巡る埴輪列は確認されなかったが、トレンチ範囲よりも西側に存在したとしても、おそらく上記の北東隅の落ち込みにより失われている可能性が高いと考えられる。またこれより北側の範囲でも、前方部1段目平坦面が残存していると思われる部分は皆無であり、現段階では前方部1段目埴輪列が残存する箇所は存在しないのではないと思われる。

後円部1段目の埴輪列 (図32) トレンチの西端部分において、南西から北東方向へと並ぶ埴輪列の存在が確認された。後円部2段目基底と平行していることから、後円部1段目の埴輪列であるといえることができる。トレンチ内では、壁面にもぐり込む個体も含めて計3個体の円筒埴輪が検出されており(図73-18~20)、いずれの個体も底部から1条目突帯の少し上までが残存していた。幅40~50cmの布掘状の掘方の中に据え付けられており、埴輪の中にはそれぞれ底部から10cm程度の厚さで置土が入れられていた。各個体間の間隔は15cm程度であり、後円部2段目や後円部頂の埴輪列と大差ない。し

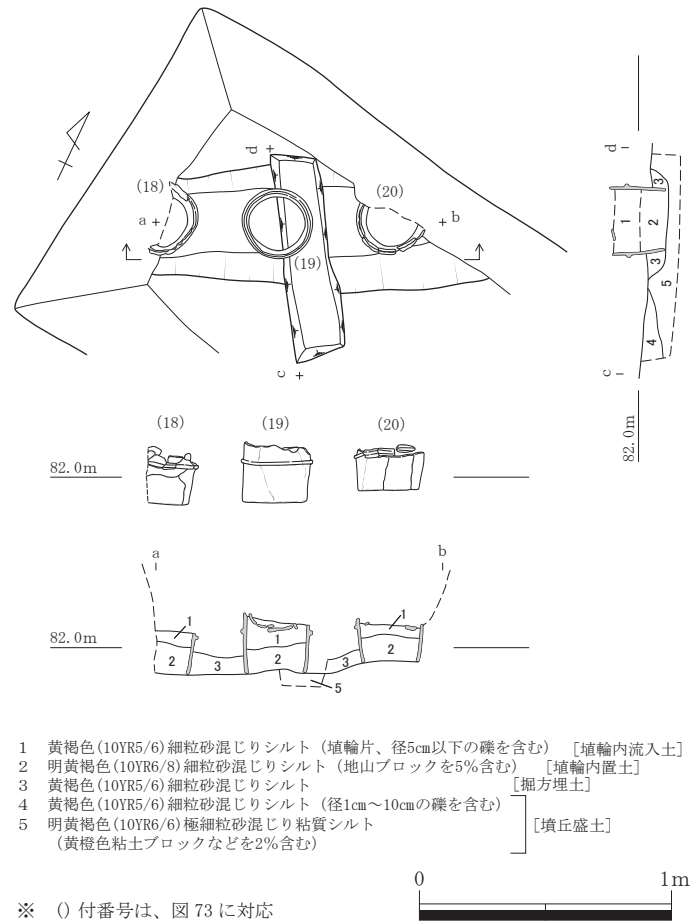


図32 後円部1段目の埴輪列 (S=1/30、5-2トレンチ)

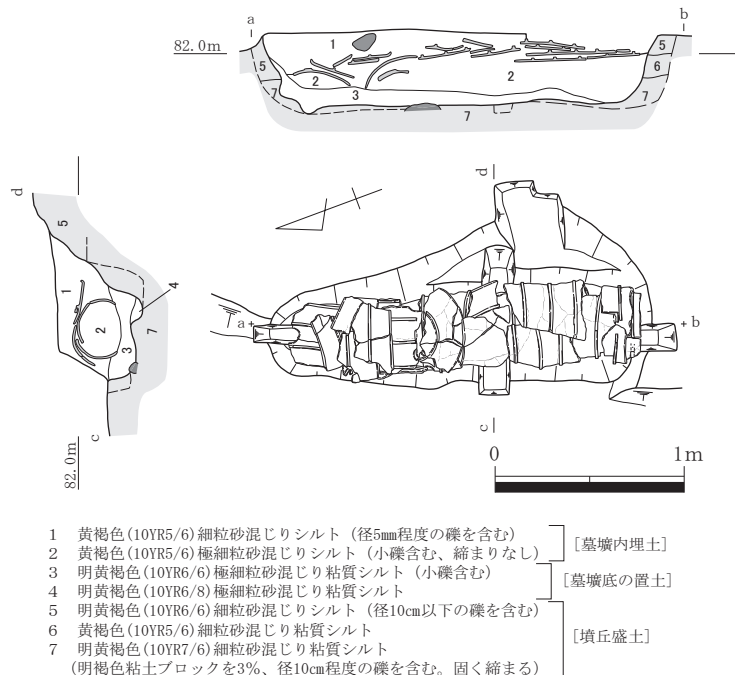
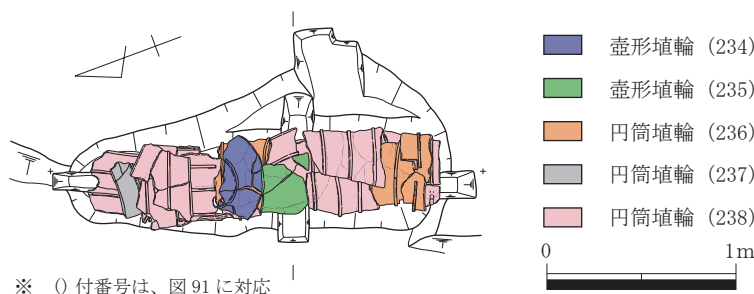


図 33 墳輪棺 2 平面・断面図 (S=1/40)



※ () 付番号は、図 91 に対応

図 34 墳輪棺 2 における墳輪使用状況 (S=1/40)

墓壇は検出面で長さ約 2 m、最大幅約 1 m を測り、その長軸は前方部 2 段目の基底ラインに平行するように南北に向けられている。西側部分がトレンチ北東隅の落ち込みにより一部失われているが、それ以外の部分は良好な残存状況にあった。深さは約 40 cm である。

墳輪片は墓壇内の南北約 1.9 m、東西約 50 cm の範囲で検出されている。壺形墳輪の口縁部付近の破片 (図 91-234) と底部付近の破片 (235)、3 個体の円筒墳輪 (236~238) が使用されていた。いずれも完形に復元されるものではなかったが、大型の円筒墳輪である (238) は、底部から後円部までの約 2/3 周が残存し、(236) についても底部と口縁部は残存しないが、中ほどの 3~4 段分は全周するなど、比較的残存率の高いものがみとめられる。いずれも元は墳丘上に配列されたものであると考えられる。

墳輪片の出土状況を見ると、まず南側 1.2 m の範囲では、個体の上下方向を墓壇の主軸ラインに平行するように置かれている。その際に残存率の高い (236) や (238) をそのまま埋置するのではなく、

かし後で見ると、ここでは小型の円筒墳輪が使用されており、配列当時は 2 段目などに比して粗く並べられている印象であったと思われる。

なお墳輪列が検出されたトレンチ西端付近では、墳丘上面において多くの墳輪片が検出されており、その中には壺形墳輪の破片も一定量含まれていた。これらの墳輪片は 2 段目斜面の基底から離れた位置で出土しており、1 段目墳輪列に由来するものと推定される。このことから 1 段目墳輪列では、壺形墳輪が円筒墳輪とともに一定量並べられていた可能性が考えられる。

墳輪棺 2 (図 33) 1 段目平坦面の前方部 2 段目基底に近接する位置において、南北に長い土坑内に多数の墳輪片が埋置された遺構が検出された。下記のような状況から、墳輪片を使用した埋葬施設であったと考えている。

30～40cm程度の大きめの破片に分割していることがわかる（図34）。ほぼ全ての破片が埴輪の内面を下方ないし内側に向けるように置かれており、これらの破片の内側に幅約30cm、高さ約20cmの空間を形成するが、墓壙の底面部には破片は置かれていなかった。

北側70cmの範囲でも内面側を下方に向け、底面部には破片が置かれていなかったが、個体の上下方向を墓壙主軸に直交するようにして置かれる破片が目立っており、南側とは若干異なる。このため北側部分では、埴輪片により南側のような空間を形成することはできなかったと思われる。

上記のようにこの遺構は、4～5トレンチの埴輪棺1のように明確な形態を持った棺を有するものではないが、遺構の形態や規模から埋葬施設である可能性が高いと考えられる。埴輪片の下層では木棺などの存在を示すような土層は確認されておらず、埴輪片は主に遺体に覆い被せる意図を持って置かれたものと考えられる。なお副葬品については一切確認されなかった。

埴輪棺 3 1段目平坦面の後円部2段目基底に沿う位置において、北東－南西方向を長軸とする長さ約2.4mの土坑の上面が検出されている。この土坑の埋土上層には葺石の転落石と思われる石が多数含まれており、その石を一部除去したところ、下方に空洞が存在することが確認された。空洞内には円筒埴輪片が落ち込んでおり、その内部を手探りで確認すると、大きな埴輪の破片の感触が得られた。そこで空洞内にカメラを挿入して撮影したところ、壺形埴輪の口縁部と思われる大きな破片の存在が確認されている（図版53）。この破片のあり方は、4～5トレンチの埴輪棺1の小口部における壺形埴輪の使用方法和類似していたことから、この土坑は埴輪棺を納めた埋葬施設であると判断された。

なおこの遺構については、現在でも空洞を保つほど良好な残存状況にあったことから、現状保存することが望ましいと判断し、墓壙の上面検出を行ってその規模と位置を記録して調査を完了している。

墳丘 2段目斜面 トレンチ内の東寄りの部分では、墳丘1段目平坦面より立ち上がる斜面が葺石を伴った状態で検出されている（図35）。その基底ラインは、トレンチ北壁から直線的に南へ2mほどのびた地点から南西方向へ大きく屈曲しており、この屈曲部分が墳丘2段目の西側くびれ部に相当するものと判断できる。

葺石は、くびれ部付近で高さ約1.2m分が残存していた。トレンチ東壁に沿う部分では葺石が検出されていないが、この部分は前方部上面ではなく、葺石が流失したものと考えられる。斜面の傾斜は前方部側で30°前後、縦目地が通るくびれ部では20°前後となっている。葺石は他の地点と同様に河原石が中心で、10cm前後から60cm程度までの石が用いられる。

前方部側では、斜面基底部に長軸で40cm前後を測る石が横位に据えられ、その一段上にも同様の石を置いており、さらに上では20cm前後の小ぶりの石を葺いている。後円部側でも基底石は横位に置かれるが、60cm前後の大型の石材が使用される点で前方部とやや異なっている。またくびれ部付近では斜面の上においても比較的大きな石を使用しており、30cm以上の石の存在が目立っている。



図 35 西側くびれ部 2 段目の葺石 (S=1/40)

(6) 小結

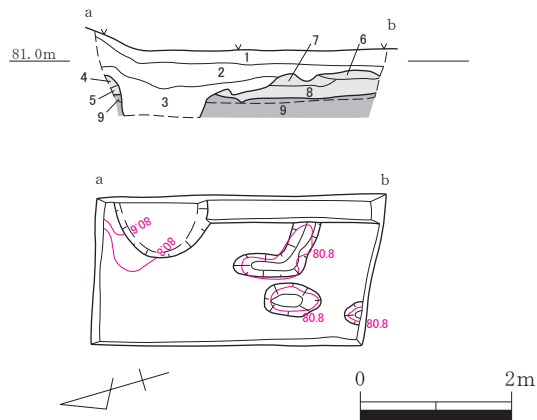
現在の茅原大墓古墳の墳丘には、後世の石垣の構築や耕作により改変されている箇所が多く見られたが、計 6 箇所にてトレンチを設定して発掘調査を実施したことにより、墳丘構造や外表施設の状況を復元する上で重要な成果を得ることができた。段築については、後円部は 3 段、前方部は 2 段築成であることが明らかとなっている。後円部では各段の平坦面に埴輪列が巡ることが確認されているが、前方部では後世の改変のためか、埴輪列を検出することはできなかった。また斜面部では葺石が残存する箇所があり、河原石を中心に使用されていることが明らかとなっている。

なお復元される墳丘形態については、次節で報告する墳丘周辺の調査成果を踏まえた上で、第 7 章において詳細に検討することとしたい。

3. 墳丘周辺の発掘調査

(1) 3-5 トレンチ

トレンチの概要 茅原大墓古墳の墳丘南側には灌漑用池である「丸池」が存在しており、古墳築造当時の地形は大きく損なわれていると考えられる。3-5 トレンチは、この丸池と、現状で墳丘が高まりとして残存する部分の間に設定された。南北長3.5m、東西幅2mの規模とし(図36)、3-3 トレンチや3-4 トレンチと同様、おおよそ墳丘主軸が推定されるライン上に設定して調査を実施した。掘削前の地表面の標高は81.2m前後であり、すぐ北側の3-4 トレンチ南端よりも約3.8m低くなっている。また現況の測量図を見ると、高まりの輪郭の形態は、西側の小池に面する部分では円弧を描く



- | | | |
|---|---|-----------|
| 1 | にぶい黄褐色(10YR4/3)極細粒砂混じりシルト | [耕作土] |
| 2 | 褐色(10YR4/4)細粒砂混じりシルト | |
| 3 | 褐色(10YR4/4)細粒砂混じりシルト(地山ブロックを5%含む) | [近現代井戸埋土] |
| 4 | 明褐色(7.5YR5/6)極細粒砂混じりシルト(地山ブロックを1%含む) | [墳丘盛土] |
| 5 | にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂混じり粘質シルト(地山ブロックを1%含む) | |
| 6 | にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂混じり粘質シルト(地山ブロックを5%含む) | |
| 7 | 黄褐色(10YR5/6)細粒砂混じりシルト | |
| 8 | にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂混じり粘質シルト | |
| 9 | 橙色(7.5YR6/8)粘質シルト(径15cm程度の礫を多く含む) | [地山] |

図36 3-5 トレンチ平面・断面図 (S=1/100)

のに対し、3-5 トレンチが位置する南側部分では東西に直線的な形状となっている。このことからこのトレンチ周辺では、墳丘が削平されている可能性が高いと考えられた。なおトレンチの掘削及び埋め戻し作業は、全て人力により行った。

土層・遺構の状況 地表面以下には厚さ40cm前後の耕作土が存在し、その直下で地山ブロックを含む明褐色土層・黄褐色土層・にぶい黄褐色土層(図36-4~8層)が検出された。この4~8層については、他のトレンチで確認されている墳丘盛土層と類似していることから、墳丘盛土であると判断することができる。盛土は厚さ30cm程度が残存するのみで、盛土の下層には風化礫を含む地山層(9層)が存在する。こうした状況から、当初想定されたように、3-5 トレンチ周辺では墳丘が大きく削平されていることが明らかとなっている。

遺構としてはトレンチ東壁に沿う位置で径1.2m程の円形の土坑が検出されている。墳丘盛土上面から掘られており、埋土が上層の耕作土層と類似することから、近現代に属するものと思われる。また付近の地山層から湧水があることを考えると、素掘りの井戸としての用途が推定される。

(2) 1-1 トレンチ

トレンチの概要 後円部南西側に、東西長5m、南北幅1.5mの規模で設定された(図37)。トレンチの東側部分は高まりの南西裾に相当し、現地表面をトレンチ上面とする。西側部分は小池の池底に位置し、池底をトレンチ上面としている。トレンチ上面の標高は、東端で81.9m、西端で79.9mであ

る。トレンチの掘削及び埋め戻しは、全て人力により行われている。

土層の状況 トレンチ東端部分では現地表下に厚さ50cm程度の耕作土が存在し（図37-1・2層）、その下層で墳丘盛土と判断される土層が、1m以上の厚さで積み上げられている（14～23層）。トレンチ西端より約3mの範囲は小池の池底にあたっており、池底の堆積土である粘質土層が約50cmの厚さで存在していた（3～10層）。その下層には暗灰色～淡灰色の粘土層が見られ、これらについては後述する1-2トレンチの成果から、後円部南西側を巡る周濠の埋土と判断することができる。

後円部南西端 トレンチの中央から西寄りの範囲においては、地山及び墳丘盛土の上面において多数の石が検出されている。これらの石の検出状況を見ると、南東から北西方向に続く幅1m程の帯状の範囲に石が集積しているように観察される（図37、図版55）。この方向は、この箇所想定される墳丘端ラインの向きと概ね一致するものであることから、これらの石は墳丘南西裾に葺かれた葺石に由来するものと考えられる。なおこのトレンチでは、転落石を残した状態で調査を完了しているため、墳丘端の位置を明確にすることはできなかった。しかし検出された石の中には30cm以上の比較的大型の石も含まれており、転落石の下に原位置を保つ葺石が残存していた可能性も考えられる。いずれにせよ石が集積するこの部分が、概ね後円部南西側の墳丘端にあたると考えてよいと思われる。

（3）1-2トレンチ

トレンチの概要 東西長12.5m、南北幅1mの主要部分と幅の狭い拡張部分で構成される計15.5㎡のトレンチで（図38）、後円部西側に存在する「小池」の南端部分に設定された。高まりをなす墳丘残存部からはトレンチ東端で5m余り離れており、トレンチ範囲の全体が小池の池底に位置している。トレンチ上面の標高は80.4m前後でほぼ一定している。この小池は先に見たように、以前から後円部西側を巡る周濠の痕跡であると推定されており、この部分では周濠に関連する遺構が確認されることが期待された。なおトレンチの掘削及び埋め戻しは、全て人力により行っている。

土層の状況 池の底面にあたるトレンチ上面から深さ約60cmまでは、粘質土層や砂質土層が混在する状況が見られ、池底に形成された堆積土であると考えられる（図38-1～16層）。これらを除去すると、トレンチ西側部分では、その直下において地山と判断される黄褐色礫混じり土（21層）が検出されている。

後円部南西側の周濠 池底の堆積層を除去した段階で精査を行ったところ、トレンチ東端から約8mの範囲に広がる落ち込みの存在が確認された。落ち込みは地山を切り込んで墳丘側に向かって落ち込むもので、検出面からの深さは50cm程度を測り、埋土は1-1トレンチで確認された葺石の転落石を覆う粘土層（図37-11層）と共通する暗灰色粘土層（図38-17・18・20層）などで構成されている。こうした状況からこの落ち込みは、後円部の南西側を巡る周濠である可能性が高いと判断される。

なお周濠の痕跡と考えられる小池は、現在は幅16m以上の規模で後円部の西側を巡っており、特に1-2トレンチが位置する南端部分では20m以上と幅が広がっている。これは元来の周濠規模をそ

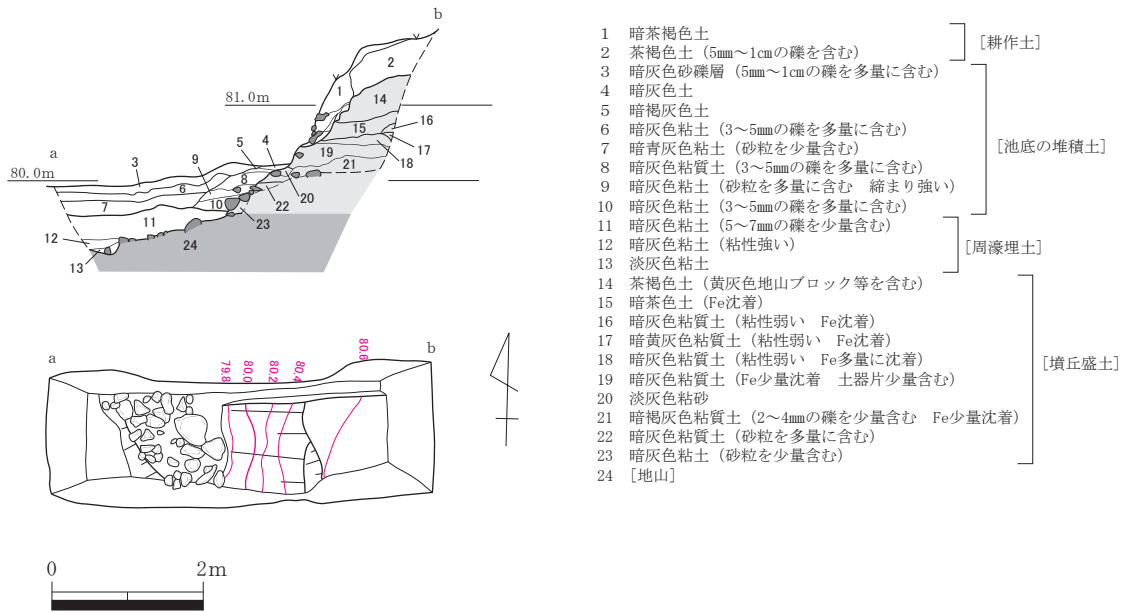


図37 1-1 トレンチ平面・断面図 (S=1/100)

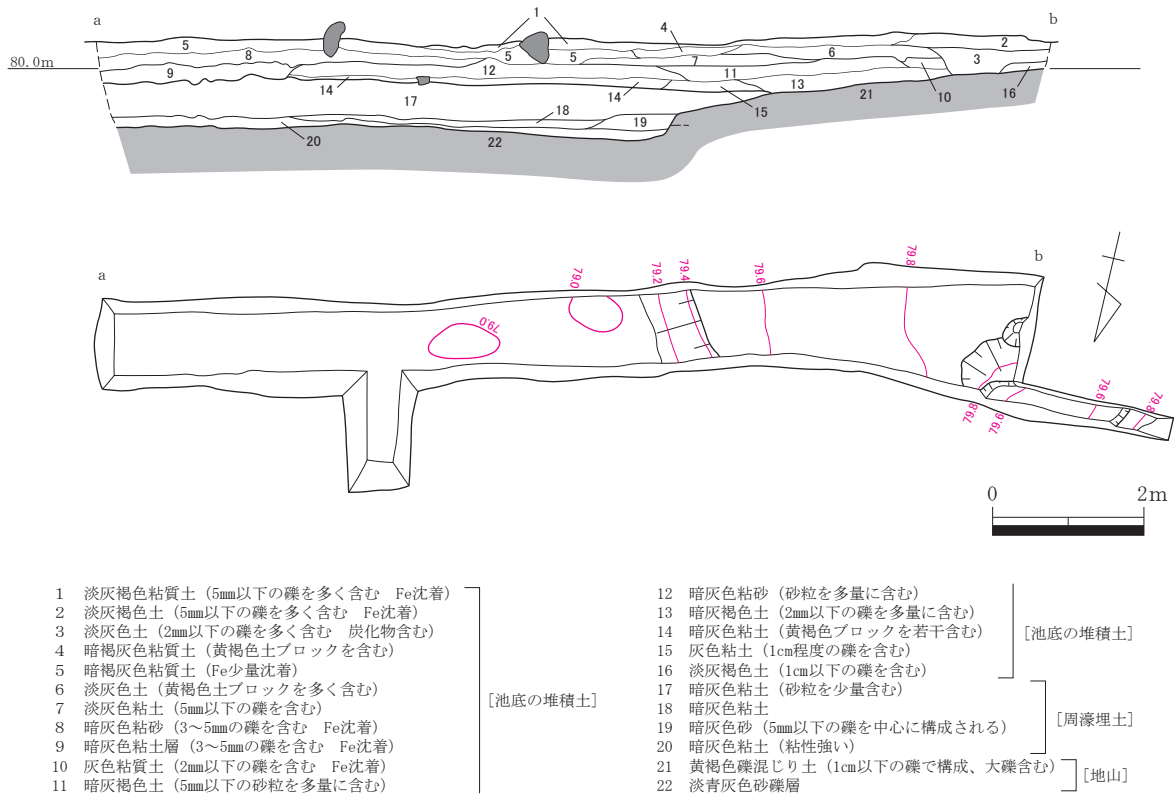


図38 1-2 トレンチ平面・断面図 (S=1/100)

のまま踏襲しているのではなく、落ち込みの西肩の地山直上に池底堆積が存在することから明らかなように、小池は周濠を外側へ拡張する形で整備されたと考えられる。1-1トレンチで想定された後円部南西端から落ち込み西端の立ち上がりまでの距離は約12mであり、これが本来の周濠規模を反映するものといえることができる。

(4) 4-1 トレンチ

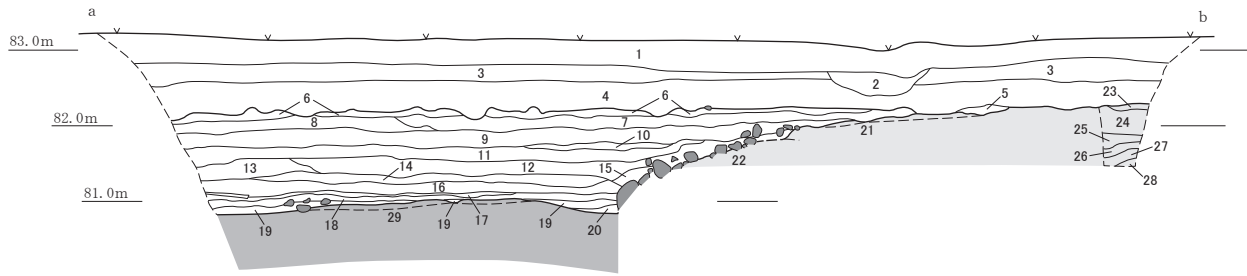
トレンチの概要 後円部の東側の現況を見ると、特に南東側部分は墳丘の高まりを切り込んで宅地が存在しており、墳丘の旧観が大きく損なわれている。その宅地の北側ではかつて水田耕作が行われ、東側の道路面よりも低い位置に水田面が存在したが、史跡指定に伴う公有化に先立って部分的に整地が行われ、宅地に近い部分では道路面の高さに合わせて造成土が入れられている。4-1トレンチはこの宅地のすぐ北側において、まず東西15m、南北3.5mの範囲で造成土を除去し、その中央に東西長14m、南北幅2.5mの規模で設定している(図39)。造成土の上面はほぼ平坦で、現地表面の標高は83.2m前後でほぼ一定している。

4-1トレンチが位置する部分は後円部の東側に相当し、トレンチの西端は、現況の後円部の高まりの裾から1.2m東側に離れた地点に位置している。先行して行われた調査成果などから、本来の墳丘端は高まりの外側に存在すると想定され、このトレンチ内で後円部の東端が確認されることが想定された。また後円部東側の周濠に関する情報が得られることも期待された。なおこのトレンチの掘削にあたっては、造成土の除去及び耕作土層の掘削まではバックホーにより行い、それ以下の周濠堆積層や墳丘盛土の断ち切りは人力により行っている。埋め戻し作業は、葦石が検出された部分については人力で、それ以外の部分はバックホーで行っている。

土層の状況 現地表下には厚さ40cm程度の造成土が存在し(図39-1層)、その下層には厚さ20~30cmの現代耕作土(3層)、さらにその下層には厚さ40cm程度の旧耕作土層が存在していた(4層)。旧耕作土層を除去すると、トレンチ西端に近い部分では地山ブロックを含むにぶい黄色粘土層(21層)が検出されたのに対し、その東側では暗灰黄色粘質土層(6~8層)が広がる状況が確認されている。前者は墳丘盛土、後者は周濠埋土の最上層に相当するものであると判断された。

墳丘盛土 トレンチの西半部において確認されており、その東端には後述する葦石が残存していた。トレンチ南西隅において一部断ち切り調査を行ったところ、地山ブロックを多く含む黄褐色~明黄褐色土層、灰オリーブ色土層などが続いており(23~28層)、少なくとも厚さ90cm以上にわたって盛土が積み上げられていることがわかる。墳丘の保存を考慮し、これ以上の断ち切り調査を行わなかったが、この部分では周濠底と同一面から盛土が積み上げられている可能性が考えられる。

後円部1段目斜面 トレンチのほぼ中央において、後円部1段目斜面が葦石を伴った状態で検出されている。後円部東端にあたるこの斜面の基底は、トレンチ西端より7.4m東側の地点に位置し、現況の高まりの東端から見ると8m以上も東へ離れていることから、後世に墳丘が大きく削り込まれていることがわかる。



- 1 明褐色(7.5YR5/8)中粒砂～粗粒砂混じりシルト(径10cm前後の礫、コンクリート片を含む) [現代盛土]
- 2 褐灰色(10YR4/1)細粒砂混じりシルト(明褐色シルトブロックを10%、コンクリート片を含む)
- 3 オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂混じりシルト(Feわずかに沈着)
- 4 にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂混じりシルト(Mn沈着、Feわずかに沈着) [耕作土]
- 5 オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質シルト(にぶい黄色粘土ブロックを20%含む、Mn沈着)
- 6 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂～粗粒砂混じりシルト(にぶい黄色粘土ブロックを1%含む、Fe沈着)
- 7 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂混じり粘質シルト(Feわずかに沈着)
- 8 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂混じり粘質シルト(Fe沈着)
- 9 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂混じり粘質シルト
- 10 黄褐色(2.5Y5/3)極細粒砂混じり粘質シルト
- 11 黄褐色(2.5Y5/3)粘土～シルト(Fe沈着著しい)
- 12 黄褐色(2.5Y5/3)粘土(Fe沈着著しい)
- 13 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土 [周濠埋土]
- 14 黄灰色(2.5Y5/1)粘土
- 15 黄灰色(2.5Y5/1)粘土(炭化物粒を含む)
- 16 黄灰色(2.5Y4/1)粘土
- 17 黄灰色(2.5Y4/1)粘土(腐植質を10%含む)
- 18 黒色(2.5Y2/1)粘土～シルト(腐植層)
- 19 灰オリーブ色(5Y5/2)シルト
- 20 灰オリーブ色(5Y5/2)シルト(小礫含む)
- 21 にぶい黄色(2.5Y6/4)細粒砂混じり粘土(地山ブロックを10%含む、Fe沈着)
- 22 灰オリーブ色(5Y6/2)シルト(地山ブロックを5%含む)
- 23 黄褐色(10YR5/6)細粒砂混じり粘土～シルト
- 24 黄褐色(10YR5/6)細粒砂混じり粘質シルト(地山ブロックを3%含む) [墳丘盛土]
- 25 明黄褐色(10YR6/6)細粒砂混じり粘質シルト(地山ブロックを30%含む)
- 26 明黄褐色(10YR6/8)極細粒砂混じりシルト
- 27 明褐色(7.5YR5/8)極細粒砂混じりシルト
- 28 灰オリーブ色(7.5Y5/2)極細粒砂～シルト(地山ブロックを3%含む)
- 29 灰色(7.5Y5/1)極細粒砂～粗粒砂(径20cm以下の塊石、風化礫を含む) [地山]

図39 4-1 トレンチ平面・断面図 (S=1/100)

葺石は高さ約1.2m分が残存しており、30～50cmの川原石が主に使用されていた(図40)。トレンチ内で検出された範囲では基底石が明瞭に並ぶ状況は確認されておらず、斜面の上方ほど石材が小さくなる傾向はあるものの、基底部と斜面部の石材が明確に使い分けられているようには観察されなかった。なお後円部1段目斜面は25°前後の角度で立ち上がっている。その基底部の標高が81.0m前後、5-1 トレンチで確認された後円部1段目平坦面が82.8m前後であることから、この部分における後円部1段目の高さは約1.8mに復元される。

後円部東側の周濠 トレンチ東半部において、周濠内の埋土と判断される土層が厚さ約1.3mにわたって確認されている。上層は暗灰黄色粘質土(6～9層)、中層には鉄分が顕著に沈着する黄褐色

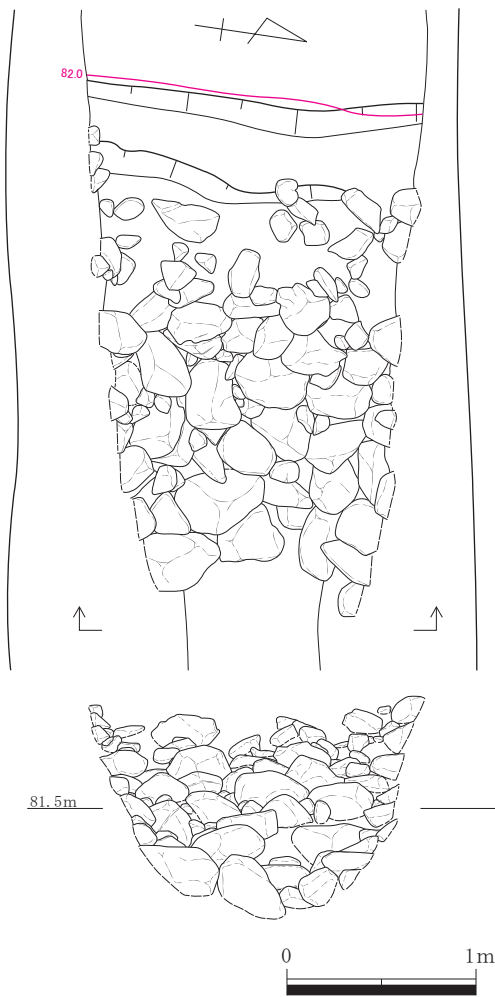


図40 後円部1段目東側の葺石 (S=1/40)

調査を行った2トレンチの成果から、墳丘端は現況の高まりの端から一定の距離を隔てた位置で検出されると推定されたため、4-2トレンチは高まりから3m余り離れた位置に設定することとした。また効率的にくびれ部を検出し、かつ良好な土層の記録を残すことを意図して、トレンチの平面形は不等辺五角形を呈するものとした。なおトレンチの規模は、南北長が最大8m、東西長が最大7mであり、面積は約37㎡である(図41)。

トレンチ上面にあたる地表面の標高は82.7~82.8mでほぼ一定しており、4-1トレンチ付近とは異なり、水田として使用されていた頃の平坦な地形がよく残されている。なおこのトレンチは、地表面から耕作土まではバックホーにより掘削し、それより下層では人力により精査・掘削を行っている。埋め戻し時は葺石残存部など、遺構の保存を考慮すべき部分については人力で行い、それ以外はバックホーによって行っている。

土層の状況 トレンチのほぼ全体で、地表面下約60cmまで耕作土が存在する状況が確認されている(図41-1・2層)。トレンチ南西隅付近では、その直下で地山である灰白色砂礫層(20層)が検出されたが、それ以外の範囲では、さらに厚さ30cmほどの旧耕作土層が存在していた(3・6層)。

粘土層(11・12層)、下層には黄灰色粘土層(14~17層)、底面に近い位置には腐植層(18層)が形成されており、特に中層以下は粘性の高い土層で構成されている。腐植層の存在から、古墳が築造されて間もない段階から滞水があったものと推定される。

周濠底面は、後円部東端から5.4mの地点まで確認されているが、わずかな高低はあるものの概ね平坦である。上記の埋土についても、トレンチ東端に至るまでほぼ水平に堆積していることから、そのすぐ東側に周濠外側の立ち上がりが存在することは無いと考えられる。なお周濠内では、トレンチ東端の中層埋土に棒状の木製品が存在したほか、上層で葺石の転落石に混じって少量の埴輪片が出土しているものの、下層以下では埴輪は一切確認されなかった。

(5) 4-2トレンチ

トレンチの概要 現存する墳丘の高まりの輪郭は、帆立貝形の墳丘形態を概ね反映しており、その東側にはくびれ部に相当する屈曲部が存在している。4-2トレンチはその屈曲部のすぐ東側において、墳丘東側くびれ部の位置を確認すべく設定している。先行して

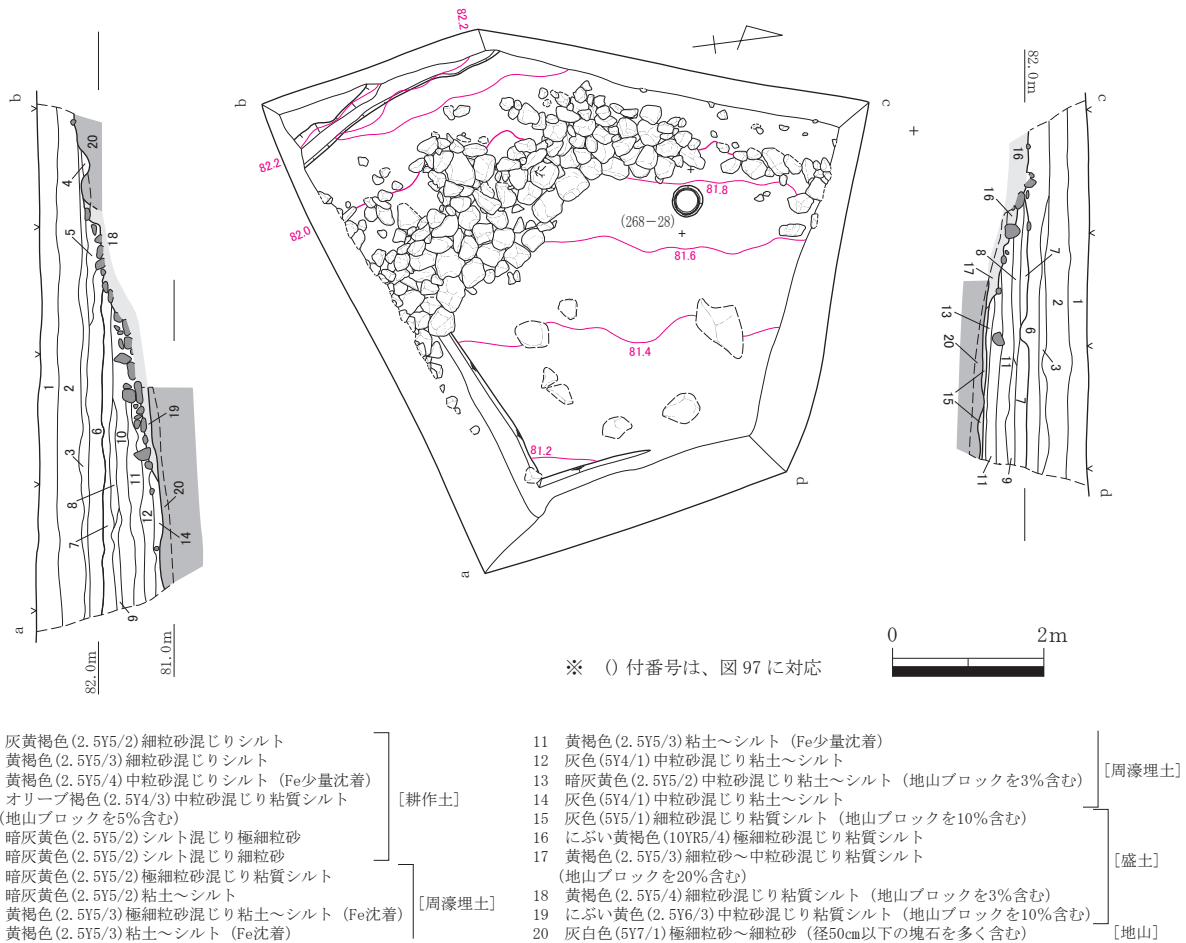
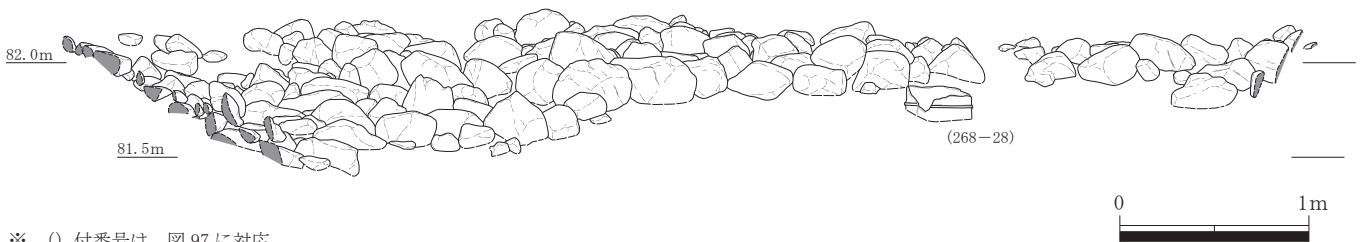
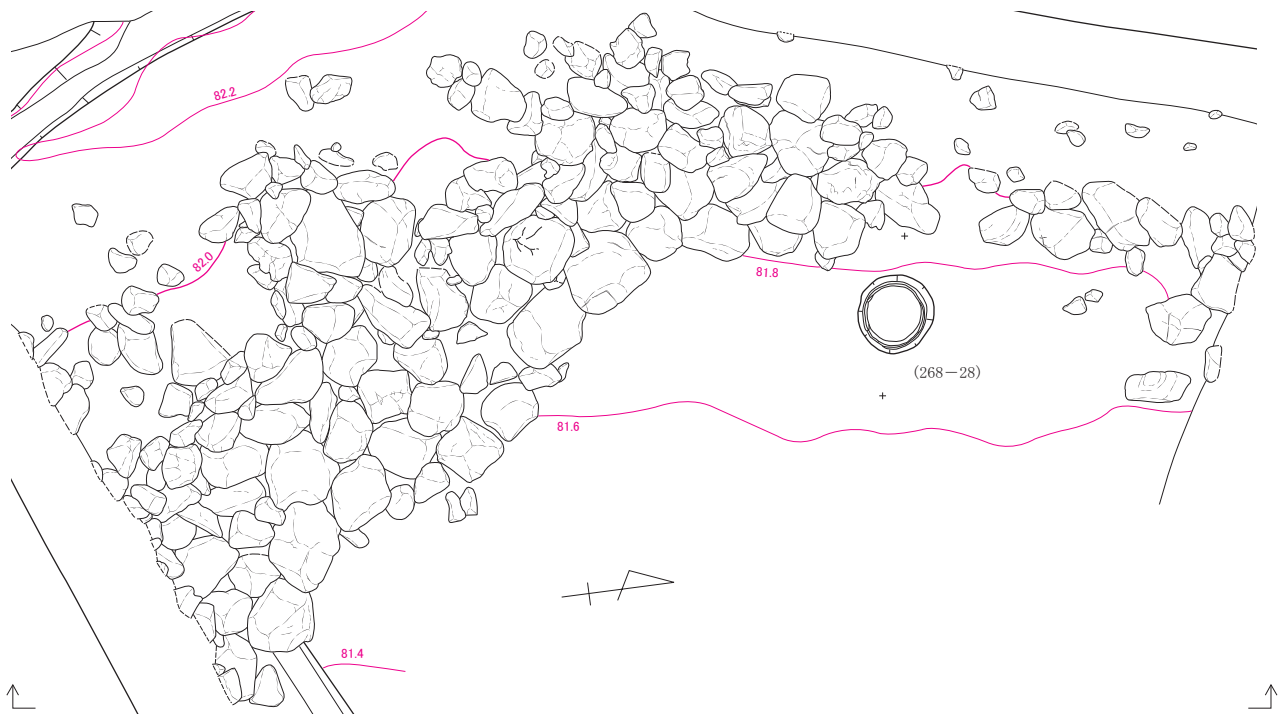


図41 4-2 トレンチ平面・断面図 (S=1/100)

耕作土を除去すると、トレンチ西側において葺石及びその転落石の上端が姿を現し、その東側では周濠埋土が広く検出されている。周濠の埋土は最大で80cm存在し、上層に暗灰黄色粘質土（7・8層）、中層に鉄分が沈着する黄褐色粘質土（9～11層）、下層には灰色粘土あるいは地山ブロックを含む粘質土が存在していた（12～14層）。4-1 トレンチのような腐植層は確認されなかったものの、中・下層は粘性が高く、周濠内には一定の滞水があったものと推定される。なお埋土中からは後述するように、葺石の転落石や埴輪が多数検出されている。

墳丘1段目斜面 トレンチの中央からやや西寄りの位置において、後円部北東側から前方部東側に相当する部分の墳丘1段目斜面が検出された。斜面部には葺石が残存しており、前方部側で一部基底石が失われていたものの、おおよそ東側くびれ部付近の墳丘端ラインを確認することができた（図42）。

前方部東側面はトレンチ北壁から長さ約3m分が検出されており、その南端は墳丘東側のくびれ部に相当する。基底の標高は81.9m前後で、葺石は高さ40cm程度が残存していた。後円部1段目斜面は長さ3.3mにわたって検出されている。基底の標高はくびれ部付近で81.8mであるが、南東側に向かって徐々に低くなっており、トレンチ南壁付近では81.5mとなっている。このため後円部側の1段目斜



※ () 付番号は、図 97 に対応

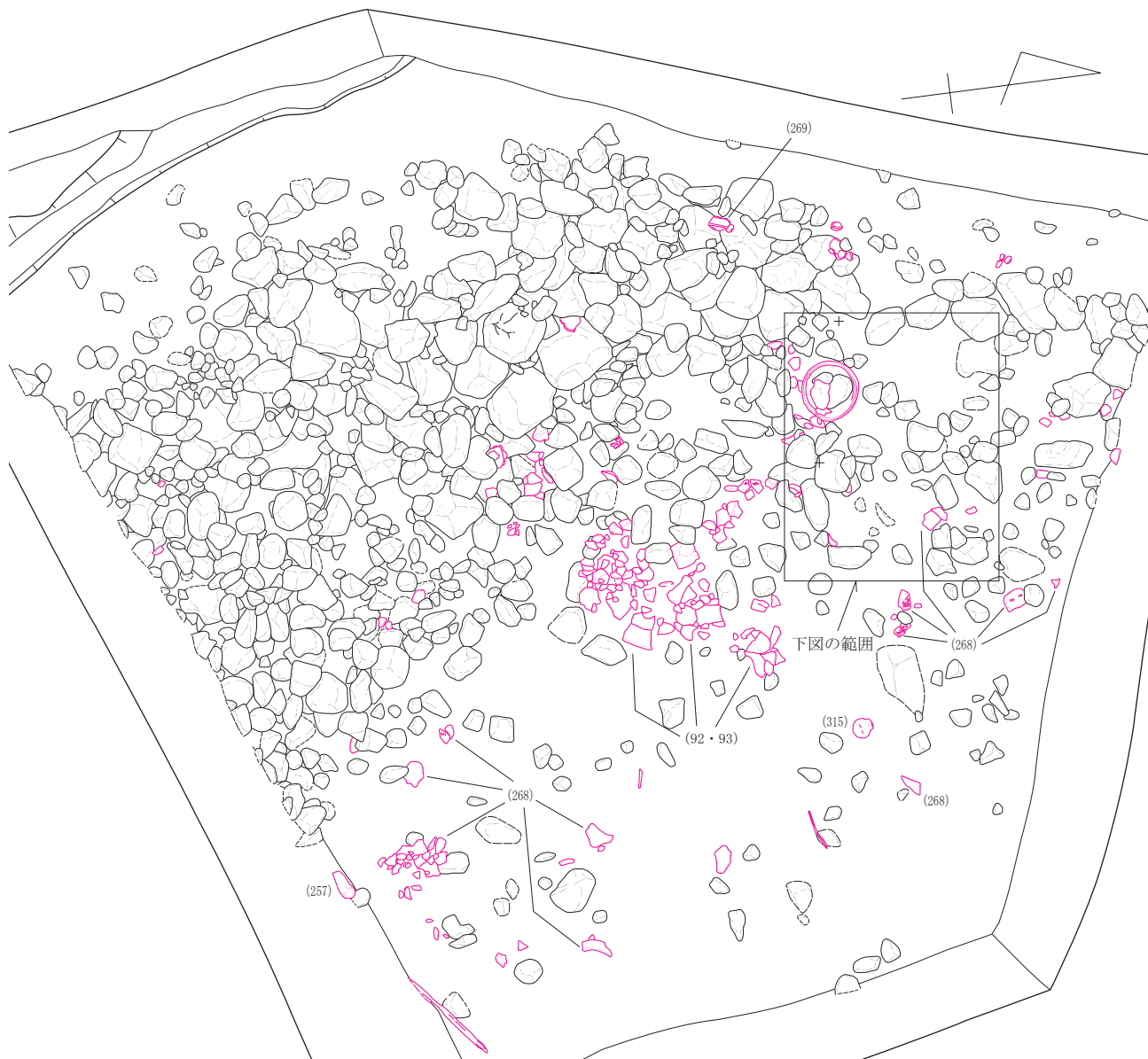
図 42 東側くびれ部 1 段目の葺石と盾持人埴輪基部 (S=1/40)

面は、最大で高さ80cm分が残存していた。

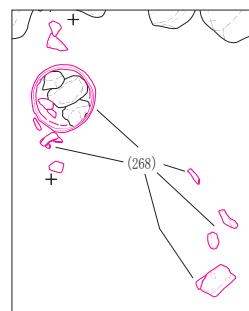
葺石の石材には主に川原石が用いられ、40~50cmほどの大型の石の存在が目立っている。基底石にはそうした大型の石が、概ね横位に置いて並べられている。これより上の斜面部でも大型の石が使用されており、基底部と斜面部の石は明確に使い分けされていなかったと考えられる。斜面の立ち上がり角度は15°前後で、他のトレンチで確認されている埴丘斜面と比較すると、緩やかな印象を受ける。なお次に見るように、これらの葺石は裏込め土は有さないものの、地山直上ではなく一定の盛土を置いた上に葺かれていることがわかっている。

埴丘基底付近 4-2 トレンチではくびれ部付近に基底石が残存していたため、埴丘端の位置を明確にすることができた。基底石付近で部分的な断ち割り調査を行ったところ、この基底石は地山直上に据えられたものではなく、盛土を置いた上に据えられていることが明らかとなっている。

4-2 トレンチ範囲では、東壁沿いで周濠底にあたる地山面が確認されているほか、埴丘部にあたる南西隅においても地山が検出されている。前者の標高は81.2~81.4m、後者は82.3mであることから、



※ 遺物のみ着色して表示
 () 付番号は、図 78、95～99、104 に対応



転落石下の遺物出土状況

図 43 東側くびれ部付近の転落石・遺物出土状況 (S=1/40)

墳丘東側では少なくとも1 m以上の深さで地山を掘り込み、周濠が形成されたと考えられる。断ち割り調査を行っていないため明確ではないが、検出された葺石の下には最大で厚さ1 m近い盛土が存在する可能性が考えられる。

基底石下にも地山ブロックを多く含む黄褐色～にぶい黄色粘質土（16～19層）が10～20cmほどの厚さで存在しており、基底石が盛土の上に置かれていることが明白である。またこの盛土は基底石よりも東側、すなわち墳丘の外側にも広がっており、その範囲はトレンチの東壁近くにまで及んでいる。この部分の盛土の上面は緩やかに傾斜しており、礫敷きなどがあつた痕跡は見られない。図41で見ると等高線は墳丘主軸に平行しており、墳丘端から離れるにしたがって低くなるというよりは、墳丘主軸より離れるにしたがって低くなっているように見受けられる。

周濠内の遺物出土状況（図43） 4-2 トレンチでは葺石に由来する転落石が多量に検出されており、これらに混じるようにして埴輪などの遺物が多数検出されている。完形に復元される個体はなく、多くの破片が周濠埋土の下層（図41-12～14層）に含まれていた。

出土状況の傾向を見ると、くびれ部基底より1.5m東側において特に埴輪片が集中して検出されていることがわかる。これらは2個体の円筒埴輪（図78-92・93）を構成する破片であり、底部は残存しなかったものの比較的残存率が高く、墳丘1段目あるいは前方部上面より転落したものと推定される。

これらに次いで残存率が高かった盾持人埴輪（図96・97-268）は、トレンチ北壁沿いから南壁に近い位置まで、南北約4.5mの範囲に破片が散った状態で検出されている。この盾持人埴輪の基部は、後で見ると前方部基底に樹立された状態で残存しており、その内部には盾面や円筒部を構成する破片が多数落ち込んでいた（図44）。また基部から見て北東側1.5mまでの範囲では、顔面部を構成する破片や、盾面の比較的大きな破片が複数検出されている。基部の樹立位置から南東に3～4 m離れたトレンチ南東隅に近い位置では、盾面上半から頸部にかけての大きな破片が、押しつぶされたような状態で検出されており、その周辺にも頭部や盾面にあたる破片が多数検出されている。いずれも同一個体を構成するものと考えられ、東側くびれ部付近に樹立された盾持人埴輪はこの1個体のみであったと考えられる。

このほか4-2 トレンチでは、家形埴輪と思われるもの（図99-269）や鳥形埴輪の破片が出土している。前者はくびれ部付近の葺石上面で1点検出されている。後者は複数の破片が検出されており、トレンチ南壁では頸部にあたる円筒状の破片（図95-257）が出土している。鳥形埴輪は他のトレンチでは確認されておらず、くびれ部に近い墳丘東側に配置された可能性が考えられる。

また周濠埋土下層では、須恵器甗（図104-315）が出土している。茅原大墓古墳に直接伴うものとは考えられないが、埴輪の転落や周濠の埋没時期を考える上で参考となる資料といえる。

墳丘基底部の埴輪 くびれ部より約1 m北側、前方部1段目の基底石に接するような位置において、埴輪の基部が樹立した状態で検出されている（図44）。円筒形を呈する埴輪の基部は、径40cmの円形の掘方の中に据えられており、底部から最大で2条目突帯付近までが残存していた。埴輪の内部には葺石の転落石のほか、盾持人埴輪（図96・97-268）の破片が多数落ち込んでいた。破片は基部の底

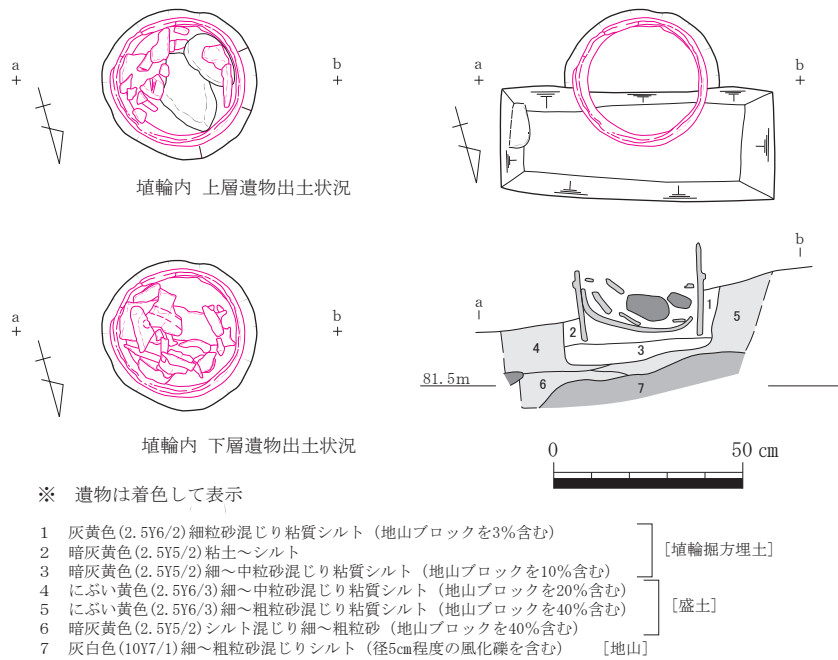


図44 盾持人埴輪(268)基部平面・断面図(S=1/20)

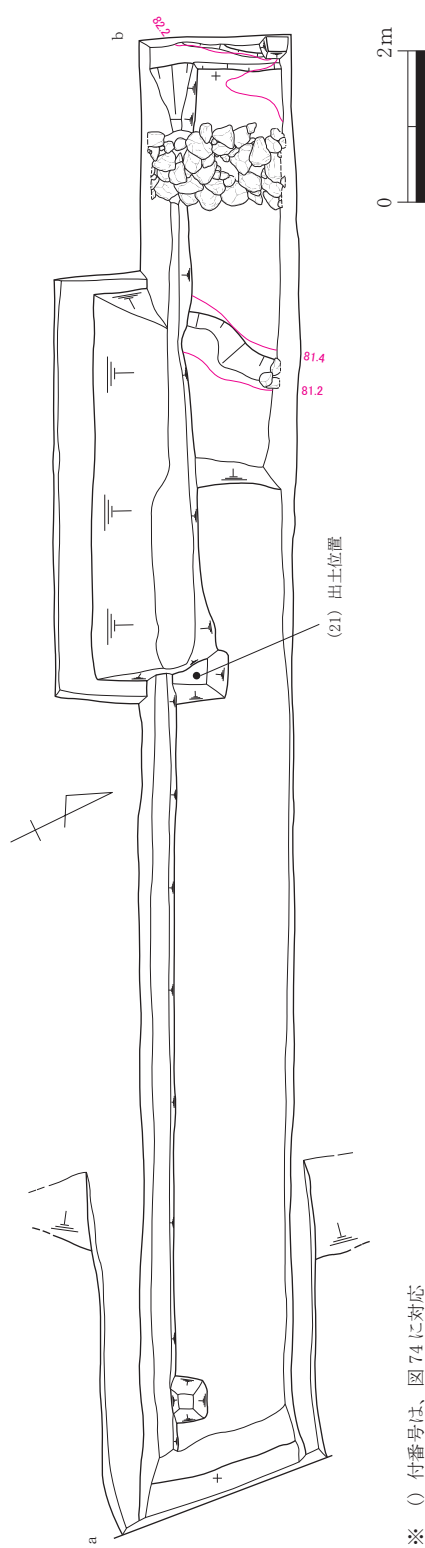
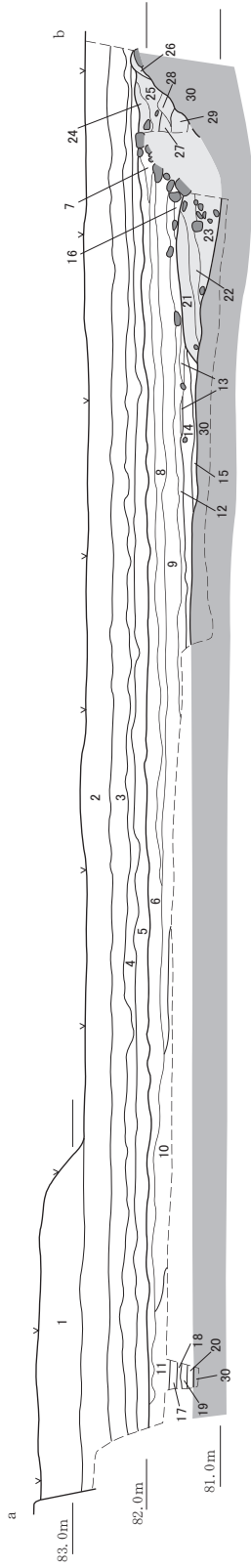
面に近いレベルまで落ち込んでいたことから、基部を据える際に内部に置土がなされなかったと考えられる。

くびれ部に近い埴丘基底部に樹立されたこの埴輪は、内部に破片が多数落ち込んでいたことや、据え付ける際に通常の間筒埴輪のように置土が入られていない点、あるいは胎土が類似することなどから、頭部から盾面の上半部が残存していた盾持人埴輪(図96の268-1)の基部であると判断することができる。

(6) 2トレンチ

トレンチの概要(図45) 第2次調査は埴丘の東側におけるはじめての発掘調査であり、前方部の存在を遺構として確認することと、埴丘東側の周濠の有無とその範囲を確認することを意図して、前方部東側にトレンチを設定している。西端は現況の高まりの東裾近くとし、東端は古墳の東側を南北に走る市道西側の擁壁までにかけて、東西長約19m、南北幅2mの規模でトレンチを設定している。調査過程で南壁の一部が崩落することがあったため、一部拡張を行い、最終的なトレンチ面積は44㎡となっている。

トレンチが立地するのは4-2トレンチと同じ旧水田部分であり、トレンチ西端から中ほどにかけての現地表面の標高は、82.8mではほぼ一定であるが、道路に近い東端部分では4-1トレンチ付近と同様に現代の造成土が存在し、現地表面の標高は83.4mで西側よりも約60cm高くなっている。なおこのトレンチの掘削は、造成土及び現地表面から耕作土まではバックホーにより行い、それ以下については人力により行っている。埋め戻しは、葺石が検出された箇所については遺構の保存を考慮して人



※ () 付番号は、図 74 に対応

- | | |
|--|---|
| <p>1 [現代盛土層] 1 黄褐色 (10TR4/2) 細粒砂混じりシルト 2 灰黄色 (2.5V5/2) 極細粒混じりシルト 3 暗灰黄色 (2.5V4/2) 極細粒混じりシルト (Fe, Mn沈着) 4 暗灰黄色 (2.5V4/2) 極細粒混じり粘質シルト 5 暗灰黄色 (2.5V4/2) 極細粒混じり粘質シルト (Fe少量沈着) 6 暗灰黄色 (2.5V5/2) 細粒砂混じり粘質シルト (Fe少量沈着) 7 暗灰黄色 (2.5V5/2) 細粒砂混じり粘質シルト 8 黄褐色 (2.5V5/3) 粘土 (Fe沈着) 9 黄褐色 (2.5V5/3) 粘土 (Fe沈着) 10 黄褐色 (2.5V5/3) 粘土混じり中粒砂～細粒砂 (Fe沈着) 11 暗灰黄色 (2.5V5/2) 粘土 (細粒砂を5%程度含む) 12 暗灰黄色 (2.5V5/2) 粘土 13 暗灰黄色 (2.5V4/2) 小礫混じり粘質シルト (地山ブロックを5%含む) 14 暗灰黄色 (2.5V4/2) 小礫混じり粘質シルト (地山ブロックを20%含む) 15 黄褐色 (2.5V5/3) 粗粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを20%含む)</p> | <p>16 黄褐色 (2.5V5/3) 細粒砂混じり粘土 (地山ブロックを5%含む、炭化物粒含む) 17 灰黄色 (2.5V4/1) 粘土 18 暗灰黄色 (2.5V5/2) 細粒砂 19 灰黄色 (5V4/1) 粘土 20 灰色 (5V4/1) 細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを20%含む) 21 黄褐色 (2.5V5/4) 細粒砂混じり粘土 (明礫灰色シルトなどの地山ブロックを40%含む) 22 灰オリーブ色 (7.5V5/2) 小礫混じり粘土 (地山ブロックを20%含む) 23 オリーブ灰色 (2.5V5/1) シルト混じり細粒砂～粗粒砂 (地山ブロックを50%含む) 24 黄褐色 (2.5V5/4) 中粒砂混じり粘質シルト (明褐色シルトブロックを5%含む) 25 黄褐色 (10TR5/6) 小礫混じり粘質シルト (地山ブロックを10%含む) 26 黄褐色 (2.5V5/4) 細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを5%含む) 27 黄褐色 (2.5V5/4) 細粒砂混じり粘質シルト 28 明褐色 (7.5V5/8) 細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを20%含む) 29 灰オリーブ色 (5V5/3) 粗粒砂混じり粘土～シルト (地山ブロックを30%含む) 30 灰白色 (10TR8/2) 細粒砂～粗粒砂 (径30cm以下の塊石、風化礫を含む) [地山]</p> |
|--|---|

図45 2トレンチ平面・断面図 (S=1/100)

力により行い、その他の部分はバックホーで行っている。

土層の状況 トレンチ東端付近に厚さ60cm程度の現代造成土が置かれている（図45-1層）。それ以外の部分では現地地表下約60cmまで耕作土が存在し（2・3層）、その下層の旧耕作土層と思われる暗灰黄色土（4・5層）を除去すると、トレンチ西端部において黄褐色の墳丘盛土（24~26層）と、葺石の一部が検出された。これより東側では、耕作土の直下において周濠の上層埋土が検出されている。

前方部東側の周濠 周濠埋土は厚さ約60cmにわたって残存しており、上層は暗灰黄色粘質土（6~8層）、中層は鉄分が顕著に沈着する黄褐色粘質土（9・10層）、下層は暗灰ないし灰色粘土層（12・13・19層）で構成され、最下層には地山ブロックを多く含む暗灰黄色~黄褐色の粘質土（14~16・20層）が存在していた。周濠埋土の掘削は墳丘端に近い部分のみに限定したため、周濠底面の詳細な状況は明らかにできなかった。しかし東端に近い位置で断ち割り調査を行ったところ、墳丘側とはほぼ同じ標高81.4mで周濠底の地山面が検出されたことから、トレンチ範囲内では周濠底面はほぼ平坦であったと推定される。なお周濠埋土のうち、中層以下の9~11層などは、トレンチ東半部において東側より流れ込んだような堆積状況が見られる。これは周濠東側の立ち上がり、トレンチ範囲のすぐ東側に存在することを示唆していると考えられる。トレンチ東側の道路のさらに東側に一段高い水田が存在することから、周濠外側の立ち上がりは現在の道路下付近に推定することができる。

前方部1段目斜面 トレンチの西端に近い位置において、前方部東側面の1段目斜面が葺石を伴った状態で検出されている（図46）。葺石は川原石を中心とするもので、40cm前後の大型の石が多く使用されていた。最大で高さ約80cm分が残存しており、基底には横位の状態で用いられた石が並べられ、斜面部にも基底石と同様に大型の石が用いられる。斜面の基底の標高は81.5mで、確認された斜面は40°前後の角度で立ち上がっており、他のトレンチで確認されている斜面よりも急角度で立ち上がっていることがわかる。この斜面の基底は、前方部東側面の墳丘端にあたるもので、現況の高まりの裾の約3m東側で検出されている。後世に耕作等によって墳丘が大きく削り込まれていることがわかる。

なお確認された葺石は、以下で見るように直接地山面に葺かれるのではなく、地山を掘り込んだ後に一定量の盛土を置いた上で葺かれていることがわかっている。

前方部基底付近 前方部基底付近で断ち割り調査を行ったところ、確認された葺石の基底石は地

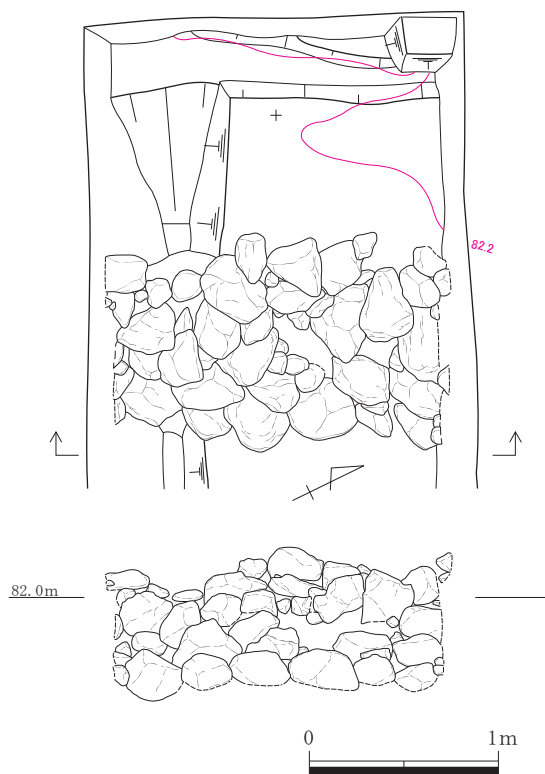


図46 前方部東側1段目の葺石（S=1/40）

山面に据えられているのではなく、厚さ50cmほどの盛土（21～23層）を置いた上に据えられていることが明らかとなった。これは4-2トレンチの葺石の状況と概ね共通するものである。またこの盛土の範囲は、斜面の基底から2m余り東側にまで及んでおり、その上面には周濠底よりも20cm高いテラス面が形成されている。こうしたテラス面は他のトレンチでは確認されていないことから、墳丘を全周するものではないと考えられる。なおテラス面には礫敷きなどの痕跡は見られず、遺物が顕著に出土する状況は確認されていない。

遺物の出土状況 葺石残存部周辺の周濠埋土中に若干の埴輪片が見られたほか、墳丘端から東へ約6m離れた周濠の中層埋土より、円筒埴輪（図74-21）の比較的大きな破片が出土している。周濠の埋没が一定程度進んだ段階に墳丘上より転落したと考えられ、前方部付近に配列されていたものと推定される。

(7) 4-3・4トレンチ、5-3トレンチ

4-3・4トレンチの概要 4-3・4トレンチは、当初個別に設定した2つのトレンチ（4-3トレンチ、4-4トレンチ）が拡張の末に結合したものである（図47）。4-3トレンチは前方部の北東隅の位置を確認することを目的として、現況の高まりの北東側に接する位置に、5m×5mの規模で当初設定している。4-4トレンチはその南東側に、周濠の広がりを確認すべく5m×2.5mの規模で当初設定した。設定位置はかつて水田であったために平坦な地形となっており、現地表面の標高は、83.0m前後であった。これらのトレンチの調査を進める過程において、4-4トレンチでは想定された

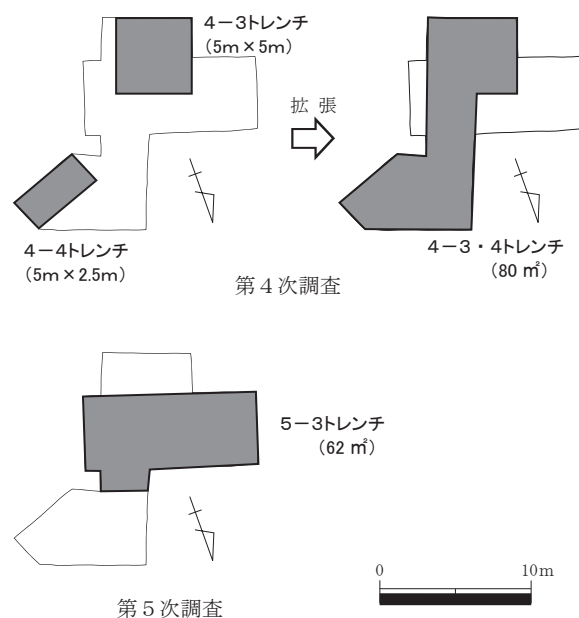


図47 各調査時のトレンチの形態 (S=1/500)

ように周濠外側の立ち上がりが検出されたが（図版75）、4-3トレンチでは前方部東側面の葺石が当初のトレンチ範囲よりも北側へと続く状況が確認されている。

こうした状況を受けて、4-3トレンチを北側に拡張したところ、最終的に両トレンチが結合することとなった。4-3・4トレンチは南北約14mの範囲に及ぶものとなり、トレンチ面積は80m²となっている。葺石は南西-北東方向に少なくとも10m以上にわたって続いており、その北東端は後述する4-6トレンチの成果から、前方部前面よりも明らかに前方に位置するものと考えられた。また葺石を施した斜面の延長部は、そのまま周濠外側の立ち上がりに接続していたことから、渡土堤が存在している可能性が考えられた。なおこのトレンチ調査では、周濠部分は埋土上層の一部を掘り下げるに止めている。時間的な制約もあり、前方部隅の位置や渡土堤の存否、周濠や葺石の状況の把握につい

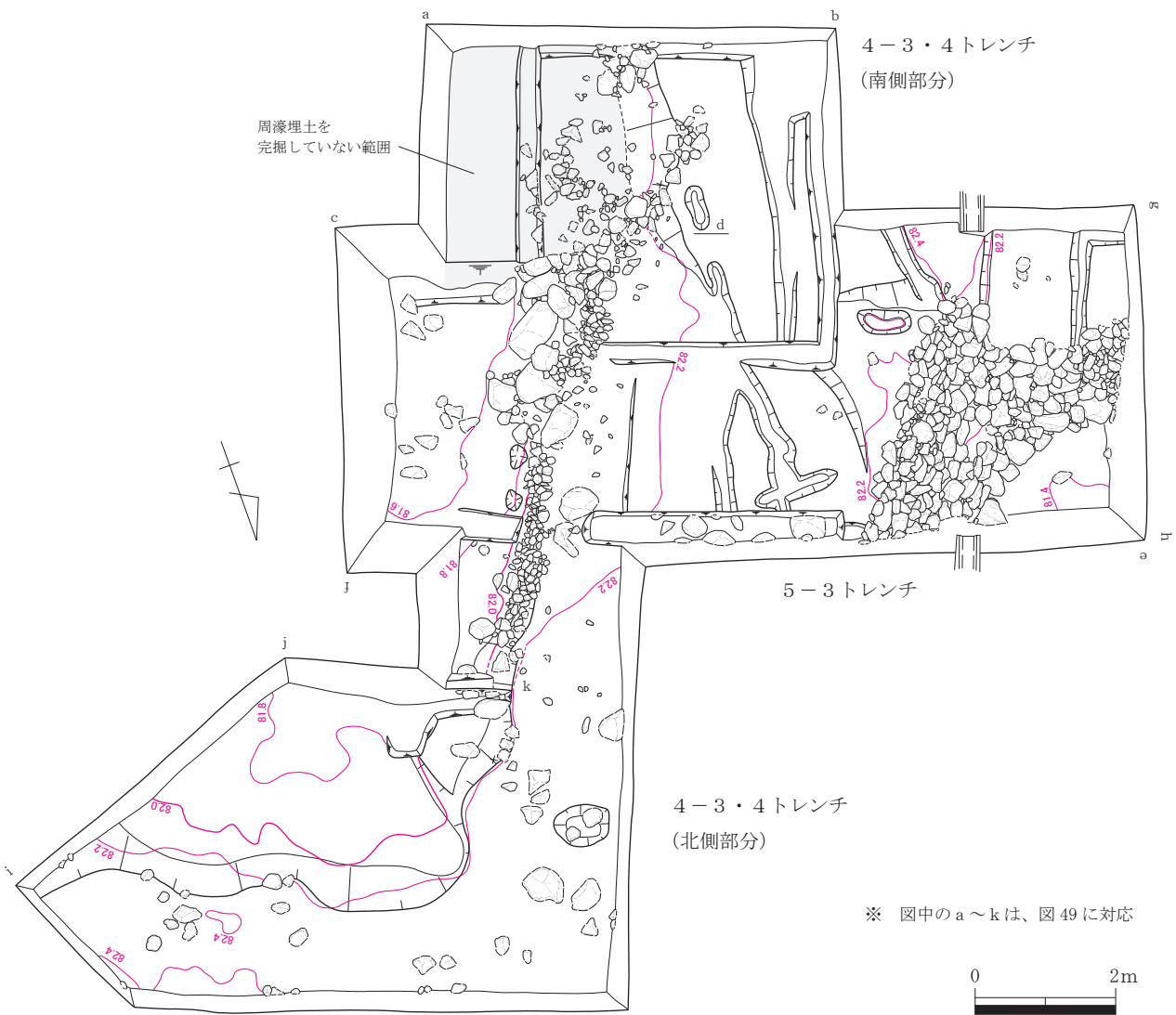


図48 4-3・4、5-3トレンチ平面図 (S=1/100)

では次年度の調査に委ねることとした。

4-3・4トレンチの掘削は、現地表面から耕作土まではバックホーにより行い、それ以下については人力により行っている。埋め戻しの際は、葺石が検出された箇所については次年度に再発掘することを見越して土嚢などで覆い、その他の部分はバックホーで埋め戻している。

5-3トレンチの概要 5-3トレンチは、4-3・4トレンチの調査で明らかにできなかった前方部北東隅の位置の確認と、渡土堤の存否及びその形態の確認を目的として、前方部北東側に設定された。設定位置を決定する際には、4-6トレンチで確認された前方部前面の位置を参考とし、かつ渡土堤が存在した場合はその幅が確認できるよう、東西長11.5mの東西に長い形態としている。4-3・4トレンチとは一部重なる位置関係にあり (図47)、最終的なトレンチ面積は62㎡である。現地表面の標高は、トレンチ西端部分が一段低い水田の範囲に及ぶため82.6mと低くなっているが、それ以外は4-3・4トレンチと同様83.0m前後であった。調査の結果、前方部北東側には渡土堤が存在す

ることが明らかとなり、渡土堤と前方部前面の接続部が検出されている。

なおこのトレンチの掘削は、現地表面から耕作土まではバックホーにより行い、それ以下については人力により行っている。埋め戻しは、葺石が検出された箇所では人力にて行うこととし、その他の部分はバックホーで行っている。

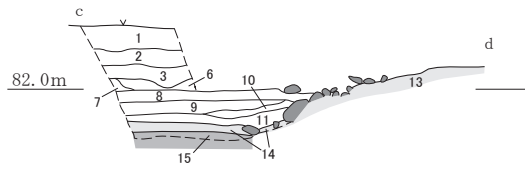
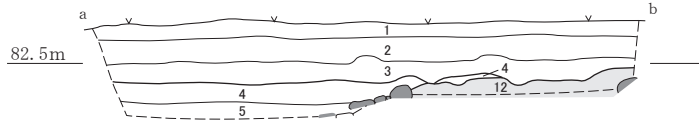
土層の状況 (図49) 現地表下50~70cmまでは耕作土が存在し、これを除去すると4-3・4トレンチ北端部では地山面が、それより北側では墳丘盛土あるいは周濠埋土上面が検出され、墳丘盛土に沿う位置では葺石残存部の上端が確認された。

渡土堤 前方部前面の東端部から北東側にのびて、周濠外側へとつながる渡土堤の存在が確認されている。トレンチ内では、渡土堤の東側面部の全体と、西側面部の墳丘側部分を検出することができた(図48)。渡土堤は基底部での幅が約7m、長さ約7mで、上面は削平を受けており、高さは最大で80cm分が残存していた。両側面の斜面には葺石が施されており、大部分が盛土により構築されているが、周濠掘削時に地山を削り残していると思われる箇所が部分的に存在する。渡土堤の盛土は前方部の墳丘盛土と同質のもので、墳丘と一連で構築されたと考えられる。

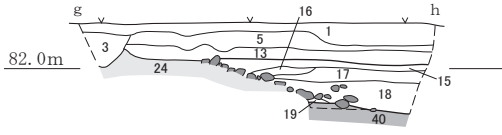
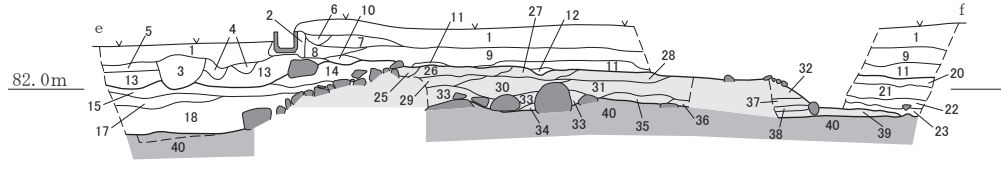
堤の側面部分を見ると、全体が検出された東側面部では、前方部前面から約4mの範囲には葺石が残存していた(図50)。これより北東側では原位置を保つ葺石が確認されなかったが、付近の周濠埋土中に転落石が多く見られたことから、本来は周濠外側へ接続する部分まで葺石が存在したと推定される。東側面部に残存していた葺石は、10~20cmの比較的小さな川原石が主に使用されており、基底石は大部分が失われていると考えられる。わずかに残存部の北東端に30cmほどの石が存在し、基底石が抜け落ちた痕跡と思われる凹みが存在することから、基底にはやや大きめの石が据えられていたと推定される。なおこれらから基底の標高を推定すると、石の抜け落ち痕がある墳丘側では81.9m前後であり、残存部の北東端ではこれより10cm余り高くなっている。周濠底面が北側に向かって高くなっていることから考えると、東側面の基底は北東側に向かって徐々に高くなっていたと推定される。

西側面部でも葺石が検出されているが、その状況は東側とは異なっている。トレンチ内では前方部前面から渡土堤の西側面にかけての斜面が、葺石を伴った状態で検出された(図51)。葺石の残存高は渡土堤部分で最大約80cmであり、25°前後の角度で立ち上がっている。葺石には川原石が主に用いられ、30~40cmの比較的大きな石が目立っており、特に基底石には50cm以上の大型の石材が使用されている。基底石は墳丘東側の各所とは異なり、地山上面に直接据えられていた。その並びを見ると、前方部前面と渡土堤西側面の境界に明確な屈曲部が存在するのではなく、円弧を描くように配されていることがわかる。斜面部では概ね石材を横位にして積み上げる傾向が見られるが、前方部と渡土堤との境に明確な目地通りがあるわけでもなく、この部分の葺石は一連で葺かれているものと推定される。

前方部北東隅 前方部東側面部では、4-3・4トレンチの調査時には周濠埋土を完掘しなかったため、その基底の位置を明らかにすることはできなかった。しかし5-3トレンチ内では周濠埋土を掘り下げており、前方部北東隅付近の基底を検出することができた。この部分では葺石に60cm以上の大型の石材が複数使用されており、長軸で長さ90cmを測る相当大きな石も見られた(図50)。これは



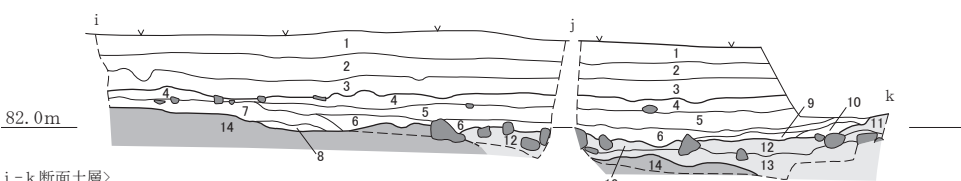
- <a-b、c-d断面土層>
- 1 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂混じりシルト
 - 2 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂混じりシルト
 - 3 にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂混じりシルト (Fe、Mn沈着)
 - 4 暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂混じりシルト (Fe沈着)
 - 5 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂混じり粘質シルト (Fe沈着)
 - 6 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂混じり粘質シルト (Fe少量沈着)
 - 7 灰黄褐色(10YR5/2)細粒砂混じり粘土〜シルト (Fe沈着)
 - 8 黄褐色(2.5Y5/3)粘土〜シルト (Fe沈着)
 - 9 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土〜シルト
 - 10 灰黄褐色(10YR5/2)粘土〜シルト
 - 11 黄灰色(2.5Y4/1)粘土〜シルト (地山ブロックを2%含む)
 - 12 黄褐色(10YR5/6)中粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを3%含む)
 - 13 黄褐色(2.5Y5/3)粘質シルト (Fe少量沈着)
 - 14 灰黄色(2.5Y6/2)中粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを10%含む)
 - 15 灰白色(10YR8/2)細粒砂〜粗粒砂 (塊石、風化礫を含む)
- [耕作土層]
[周濠埋土]
[盛土]
[地山]



<e-f、g-h断面土層>

- 1 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂混じりシルト
 - 2 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂混じりシルト (細粒砂を10%含む)
 - 3 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂混じりシルト (24のシルトブロックを5%含む)
 - 4 褐灰色(10YR5/1)細〜中粒砂混じりシルト
 - 5 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂混じりシルト
 - 6 にぶい黄褐色(10YR5/3)中粒砂混じりシルト (Mn沈着)
 - 7 にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂混じりシルト (Fe沈着)
 - 8 にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂混じりシルト (Mn沈着著しい)
 - 9 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂混じりシルト
 - 10 にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂混じりシルト
 - 11 黄褐色(10YR4/4)粗粒砂混じりシルト (Fe、Mn沈着)
 - 12 オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂混じり粘質シルト
 - 13 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂混じりシルト
 - 14 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂混じりシルト
 - 15 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂混じり粘質シルト (Fe沈着)
 - 16 暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒砂混じり粘質シルト
 - 17 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂混じり粘土〜シルト
 - 18 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土〜シルト (径20cm以下の礫を含む)
 - 19 黄灰色(2.5Y4/1)粘土〜シルト
 - 20 灰黄褐色(10YR5/2)細粒砂混じり粘土〜シルト (Fe沈着)
- [耕作土]
[周濠埋土]

- 21 黄褐色(2.5Y5/3)粘土〜シルト
 - 22 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土〜シルト
 - 23 黄灰色(2.5Y4/1)粘土〜シルト (地山ブロックを2%含む)
 - 24 黄褐色(2.5Y5/6)極細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを1%含む)
 - 25 にぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂混じり粘質シルト
 - 26 黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂混じり粘質シルト (25のシルトブロックを3%含む)
 - 27 黄褐色(10YR5/6)極細粒砂混じり粘質シルト
 - 28 明黄褐色(10YR6/6)極細粒砂混じり粘質シルト
 - 29 にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを1%含む)
 - 30 にぶい黄色(2.5Y6/3)極細粒砂混じり粘質シルト
 - 31 にぶい黄褐色(10YR6/4)細粒砂混じり粘土〜シルト (地山ブロックを1%含む)
 - 32 明黄褐色(10YR6/6)中粒砂混じりシルト (径10cm以下の礫、地山ブロックを1%含む)
 - 33 にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを2%含む)
 - 34 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂混じり粘土〜シルト
 - 35 黄褐色(10YR5/4)細粒砂混じり粘質シルト (地山・33のシルトブロックなど3%含む)
 - 36 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂混じり粘土〜シルト (炭化物を含む)
 - 37 にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒砂混じりシルト (地山ブロックを20%含む)
 - 38 明黄褐色(10YR6/6)細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを5%含む)
 - 39 灰黄色(2.5Y6/2)細〜中粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを10%含む)
 - 40 灰白色(10YR8/2)細粒砂〜粗粒砂 (風化礫を含む)
- [周濠埋土]
[墳丘盛土]
[渡土堤盛土]
[地山]



<i-j-k断面土層>

- 1 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂混じりシルト
 - 2 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂混じりシルト
 - 3 にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂混じりシルト (Fe、Mn沈着)
 - 4 暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂混じりシルト (Fe沈着)
 - 5 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂混じり粘質シルト (Fe沈着)
 - 6 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂混じり粘土〜シルト
 - 7 にぶい黄色(2.5Y6/3)粘土〜シルト
 - 8 明黄褐色(10YR6/6)粘土
 - 9 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土 (オリーブ黒色粘土ブロックを20%含む)
 - 10 にぶい黄色(2.5Y6/3)粗粒砂混じりシルト (黒色粘土ブロックを3%含む)
 - 11 黄褐色(10YR5/6)細粒砂混じり粘質シルト (暗灰黄色粘土ブロックを2%含む)
 - 12 黄褐色(10YR5/6)細粒砂混じり粘質シルト (暗灰黄色粘土ブロックを5%、地山ブロックを2%含む)
 - 13 灰オリーブ色(5Y5/2)細粒砂混じり粘質シルト (地山ブロックを10%含む)
 - 14 灰白色(10YR8/2)細粒砂〜粗粒砂 (径5cm〜30cmの塊石、風化礫を含む)
- [耕作土層]
[周濠埋土]
[盛土]
[地山]



※ 図中のa〜kは、図48に対応

図49 4-3・4、5-3トレンチ土層断面図 (S=1/100)

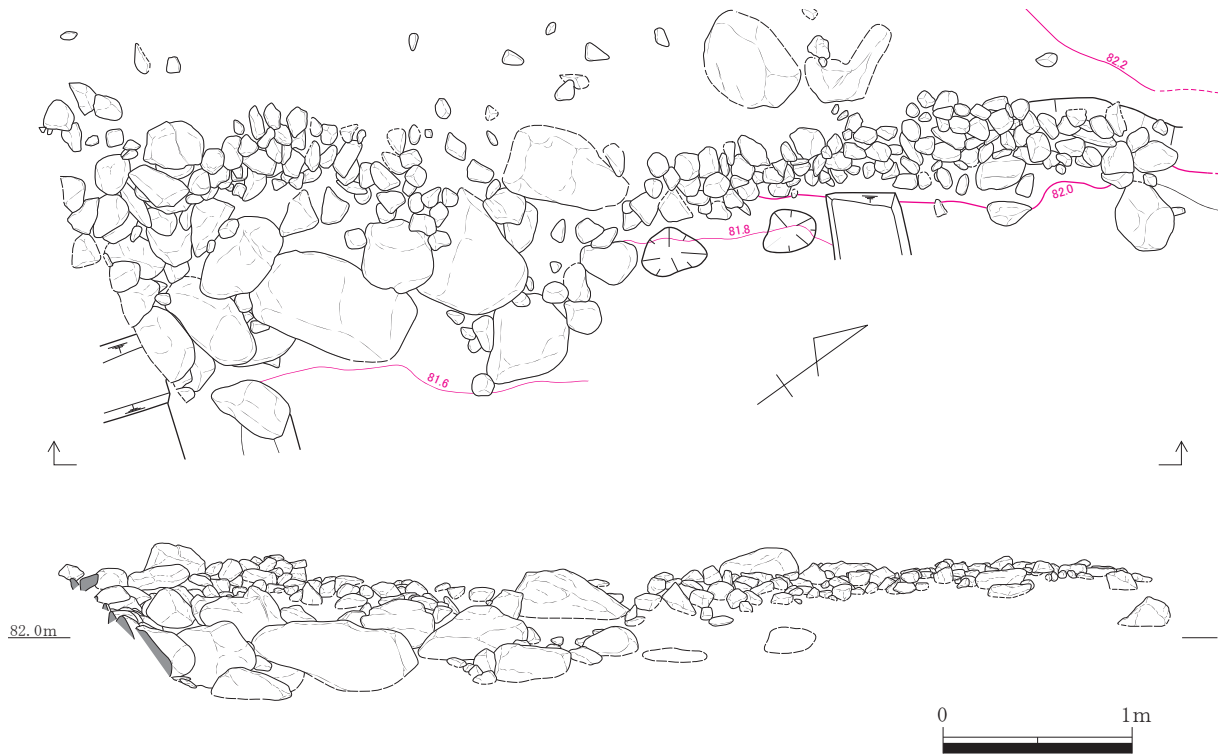


図50 前方部北東隅と渡土堤東側の葺石 (S=1/40)



図51 前方部前面と渡土堤西側の葺石 (S=1/40)

茅原大墓古墳で確認された葺石石材の中でも最大のものである。なおこれらの上方では、10～30cmの小さな石材が使用されていた。

これら大型の石材が検出された箇所北側には、先に見た渡土堤の東側面の葺石が接続している。石材の大きさの差は歴然としており、加えて渡土堤側の基底位置が若干西側に位置していることから、両者の境を前方部と渡土堤の接続部として捉えることができる。なお前方部北東隅にあたるコーナー部は、渡土堤が存在するために明瞭な形では存在しないと考えられる。上記のように特に大きな石材を使用することにより、前方部隅であることを視覚的に示しているものと思われる。

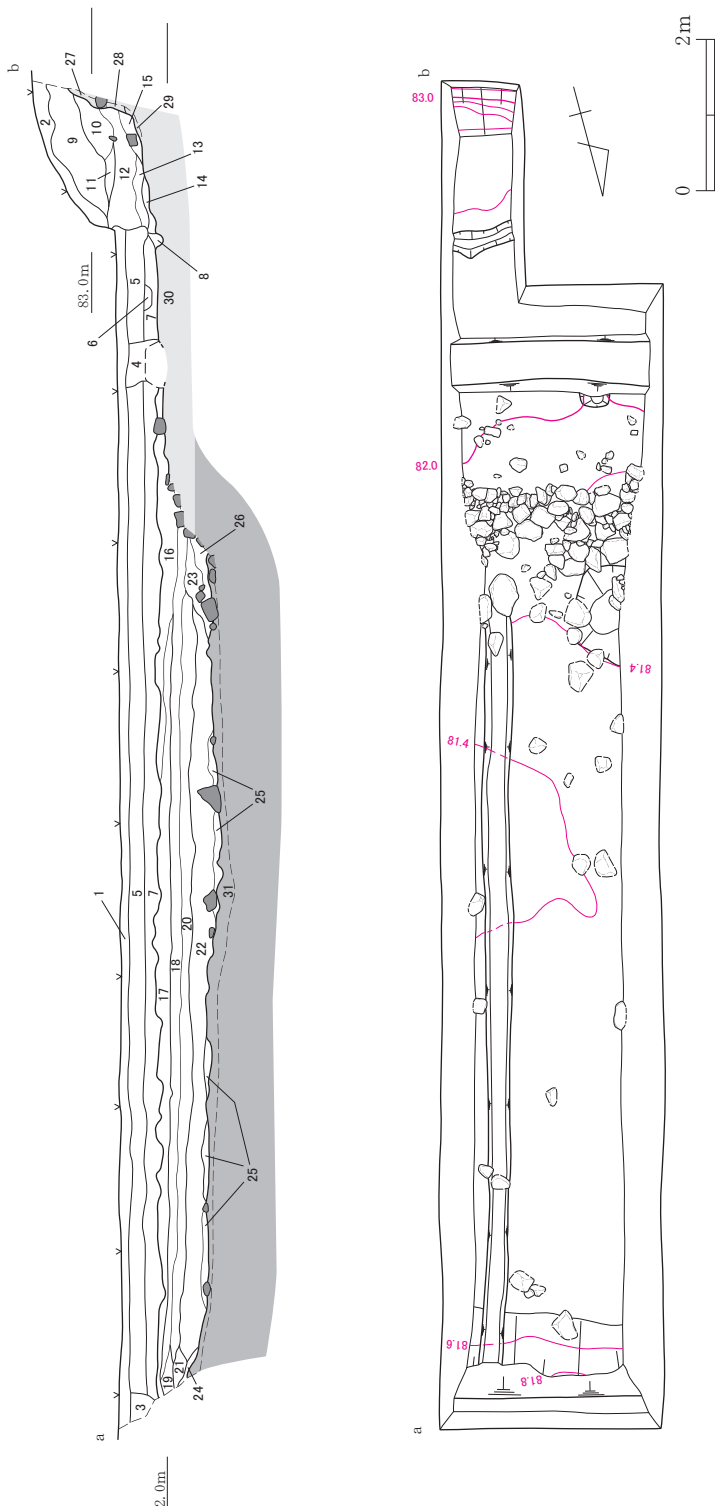
周濠の状況 渡土堤を挟んで東西で周濠が検出されている。東側では最大で厚さ約60cmの周濠埋土が残存しており、中層に鉄分が沈着する粘質土層（図49、i-j-k断面の5層など）が存在する点などは、墳丘東側のトレンチで確認された周濠埋土と共通している。底面には地山ブロックを多く含む粘質土が存在する箇所が見られ（i-j-k断面の12・13層など）、地山が掘削された後に、底面の一部が人為的に埋められているものと考えられる。また4-3・4トレンチの北側部分では、周濠底の地山が北側に向かってわずかに立ち上がる状況が確認されている。耕作などによる削平の影響のため明瞭ではないが、周濠外側の立ち上がりには相当するものと考えられる。

渡土堤の西側では厚さ70cm程度の周濠埋土が残存していた。底面の標高は81.4mで、東側と比較すると20cmほど低くなっている程度であり、大差は見られない。しかしここでは底面に人為的に埋められたような痕跡はなく、先に見たように葺石の基底石は地山上面に直接据えられているなど、東側の周濠とは異なる要素が見られた。埋土には腐植土層は存在しなかったものの、下層には粘性の強い暗灰黄色粘土層が存在しており（e-f断面の18層）、古墳築造後に一定の滞水があったものと推定される。

遺物の出土状況 耕作土層及び周濠埋土中より若干の埴輪片が出土しているが、その量は他のトレンチと比較しても少なく、渡土堤周辺や周濠外肩付近には埴輪は配置されていなかったと考えられる。また茅原大墓古墳に直接伴う遺物とは考えられないが、渡土堤西側の周濠埋土中より鉄製品が1点出土している（図105-324）。

（8）4-6トレンチ

トレンチの概要 4-6トレンチは前方部北側の水田部分において、前方部前面の墳丘端の位置を確認することを目的として設定された。3-3トレンチや3-4トレンチと同様に墳丘主軸想定ライン上に設定しており、水田の北端から高まりの北斜面部分までを範囲とした。トレンチの規模は南北長約18mで、東西幅は水田部分では3m、高まり斜面部分では1mとしている。現地表面の標高は、高まりの斜面に位置するトレンチ南端部が83.8mで最も高く、水田部分は82.6m前後であった（図52）。なおこのトレンチの掘削は、水田部分については現地表面以下の耕作土を除去する段階まではバックホーにより行い、それより下層については人力で行った。南端の高まり斜面部は全て人力で掘削している。埋め戻しは、高まり斜面部と葺石検出部分は人力により行い、それ以外の部分はバックホーで行っている。



- 1 灰色(5Y4/1)細粒砂混じりシルト
- 2 オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂～中粒砂混じりシルト
- 3 灰オリーブ色(5Y5/2)中粒砂混じりシルト (オリーブ褐色シルトプロックを10%含む)
- 4 灰オリーブ色(5Y5/2)中粒砂混じりシルト (オリーブ褐色シルトプロックを5%含む)
- 5 灰オリーブ色(5Y5/2)中粒砂混じりシルト (オリーブ褐色シルトプロックを5%含む)
- 6 灰オリーブ色(5Y5/2)中粒砂混じりシルト (オリーブ褐色シルトプロックを2%含む)
- 7 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂混じりシルト (Fe・Mn少量沈着)
- 8 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土～シルト (Fe沈着)
- 9 褐色(10YR4/4)細粒砂～粗粒砂混じりシルト
- 10 褐色(10YR4/4)細粒砂混じり粘質シルト (地山プロックを20%含む)
- 11 褐色(10YR4/4)極細粒砂混じり粘質シルト
- 12 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト混じり極細粒砂～細粒砂 (Mn多量に沈着)
- 13 オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂混じり粘質シルト (Mn多量に沈着)
- 14 黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂混じり粘質シルト (Mn多量に沈着)
- 15 黄褐色(2.5Y5/6)細粒砂混じり粘質シルト (Mn多量に沈着)
- 16 オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質シルト (径1cm以下の礫を含む Fe・Mn沈着)
- 17 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質シルト (径5mm以下の礫を少量含む Fe多量に沈着)
- 18 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土～シルト (小礫を少量含む Fe沈着)
- 19 オリーブ褐色(2.5Y4/2)粘土～シルト (Fe沈着)
- 20 オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂混じり粘質シルト (Feわずかに沈着)
- 21 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂混じり粘土～シルト (径5cm程度の礫を含む)
- 22 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土～シルト (やや筋層質含む Feわずかに沈着)
- 23 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土～シルト (Feわずかに沈着)
- 24 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土～シルト (地山プロックを20%含む)
- 25 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土～シルト (地山プロックを5%含む)
- 26 暗灰黄色(2.5Y6/1)細粒砂～粗粒砂混じりシルト (地山プロックを20%含む)
- 27 黄褐色(10YR5/6)小礫混じり粘質シルト (地山プロックを5%含む)
- 28 黄褐色(10YR5/6)小礫混じり粘質シルト (地山プロックを7%含む)
- 29 黄褐色(10YR5/6)極細粒砂混じり粘質シルト (径10cm程度の礫、地山プロックを5%含む Mn沈着)
- 30 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂混じり粘質シルト (径10cm程度の礫、地山プロックを5%含む)
- 31 灰白色(5Y7/1)シルト混じり極細粒砂～細粒砂 (径30cm以下の塊石、風化礫を多く含む)

図52 4-6 トレンチ平面・断面図 (S=1/100)

土層の状況 水田部分では現地表下に厚さ約60cmの耕作土が存在しており（図52-1・5・7層）、これらを除去すると、高まりに近い南側部分では墳丘盛土にあたる黄褐色粘質土（30層）が、トレンチ北端から約13m南側までの範囲では、周濠上層埋土であるオリブ褐色粘質土、暗灰黄色粘質土が検出された（16・17層）。

高まりの斜面部分では、表土以下に締まりのない褐色～オリブ褐色土が厚さ1m以上にわたって存在していた（9～13層）。墳丘残存面の標高は、水田南側部分で確認された残存面よりわずかに高い82.3m付近であったが、トレンチ南端部では83.3mと高くなっている。

こうした土層の状況から、墳丘の高まりの北側部分は、近世以降のある段階に標高82.1～82.3mのレベルまで削り落とされ、その後1.6mほどの幅で北側に盛り戻されたと考えられることができる。

前方部1段目斜面 トレンチ南端より北へ5.5～6.5mの地点において、前方部前面の1段目斜面が葺石を伴った状態で検出された（図53）。前方部前面の墳丘端にあたる斜面の基底は、現況の墳丘高まりの北端より約4.5m北側で確認されている。

葺石は高さ60cm余りが残存しており、川原石を中心とする10～40cm程度の石が使用されていた。斜面部にも比較的大きな石が葺かれており、基底にあたる部分の残存状況が悪いため明確ではないが、基底石が斜面部の石に比べて特に大きなものであったとは考えられない。石材が抜け落ちている部分を観察すると、葺石の裏側には裏込め土に相当する土層は存在せず、斜面部分の上半は盛土であり、下半の高さ20cm程度は地山が立ち上がっている状況が確認された。このことから前方部前面の1段目斜面の葺石は、基底石は地山上面に置かれ、それより上の斜面部分では盛土に葺かれていることが明らかとなった。

周濠の状況 上記の前方部1段目斜面の北側では、前方部の北側を巡る周濠の存在が確認されている。周濠埋土は最大で80cm程度の厚さが残存しており、上層にはオリブ褐色～暗灰黄色粘質土（16～18層）、中層にはオリブ褐色粘質土（19・20層）、下層には暗灰黄色粘質土（21～23層）、最下

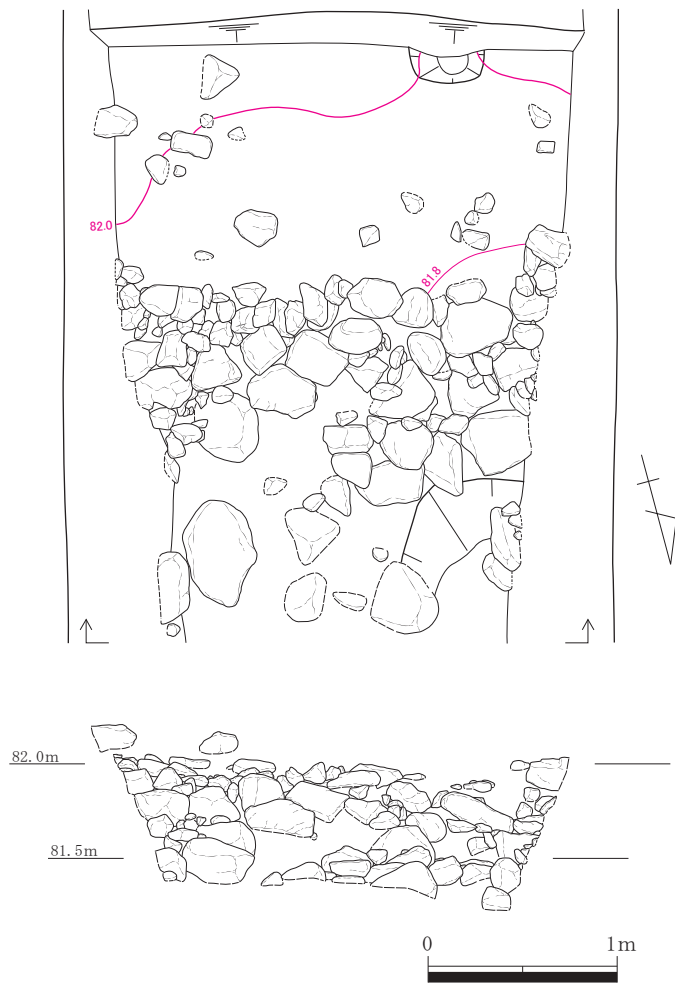


図53 前方部前面1段目の葺石（S=1/40）

層には地山ブロックを多く含む黄灰色～暗灰黄色粘質土（24～26層）が存在していた。このうち下層の22層は腐植質を含んでおり、周濠内には古墳築造後に一定の滞水があったと考えられる。

周濠底面は地山面が露出しており、墳丘東側のように人為的な埋土あるいは盛土は存在していなかった。底面の標高は81.4m前後で、地山に多くの石が含まれているため多少の凹凸が見られるが、概ね平坦であるといえる。なお前方部前面の墳丘端より北側へ約10mの地点で、地山が北側へ立ち上がる状況が確認されている。トレンチが位置する水田面は、現況でも北側に隣接する畑作地より70cmほど低くなっており、以前よりその北端付近が周濠の北縁にあたると推定されてきた。こうした現況の地形状況から、上記の地山の立ち上がりは周濠外側斜面の基底にあたるものと評価することができる。これにより前方部前面の周濠は、底面では約10mの幅を有していたことがわかっている。なお周濠の外側斜面付近では顕著に石が検出されるようなことはなく、この部分には葺石は存在しなかったと考えられる。

遺物の出土状況 耕作土中や周濠埋土中より埴輪片が出土しているが、墳丘斜面付近で特に集中して検出されるような状況は見られなかった。また周濠外側斜面付近では埴輪は出土していないことから、前方部北側の周濠外肩には埴輪は配置されていなかったと考えられる。

（9）6-1トレンチ、6-2トレンチ

6-1トレンチの概要 前方部北西側の水田面において、前方部北西隅の位置を確認することを目的としてトレンチを設定している。5-3トレンチ、4-6トレンチで前方部前面の位置が確認されていることから、その西側延長部を中心として、当初63㎡の四角形のトレンチを設定して調査を行った。その結果、トレンチの西側では想定どおり周濠が検出されたが、前方部隅のコーナー部分が検出されず、後述する6-2トレンチの成果から、東側と同様の渡土堤状の遺構が存在する可能性が考えられるに至った。このためトレンチの北壁に沿う位置で、東側へ長さ9m、幅1.5mの規模で拡張を行い、渡土堤状の遺構であるかどうかの確認と、その規模の確認を目指すこととした。これにより最終的なトレンチ面積は76.5㎡となっている（図54）。現地表面の標高は、かつて水田であったために82.1m前後ではほぼ一定であった。

なおこのトレンチの掘削は、現地表面下の耕作土まではバックホーにより行い、それ以下では人力により掘削している。埋め戻しについては、特別な保存上の配慮を要する遺構が確認されなかったことから、すべてバックホーにより行っている。

6-2トレンチの概要 6-1トレンチの西側で確認されている周濠は、北側に向かって次第に幅を減じていく状況が見られた。6-2トレンチはその北側延長部分にあたる位置において、東西長6m、南北幅3.5mの規模で設定している（図55）。後述のように周濠の北端部がトレンチ内でほぼおさまるように検出されたため、北壁部分をわずかに拡張しその範囲の確認を行った。6-1トレンチと同様、耕作土までの掘削と埋め戻しはバックホーで行い、遺構検出及び周濠埋土の掘削は人力で行っている。なお現地表面の標高は82.1m前後であった。

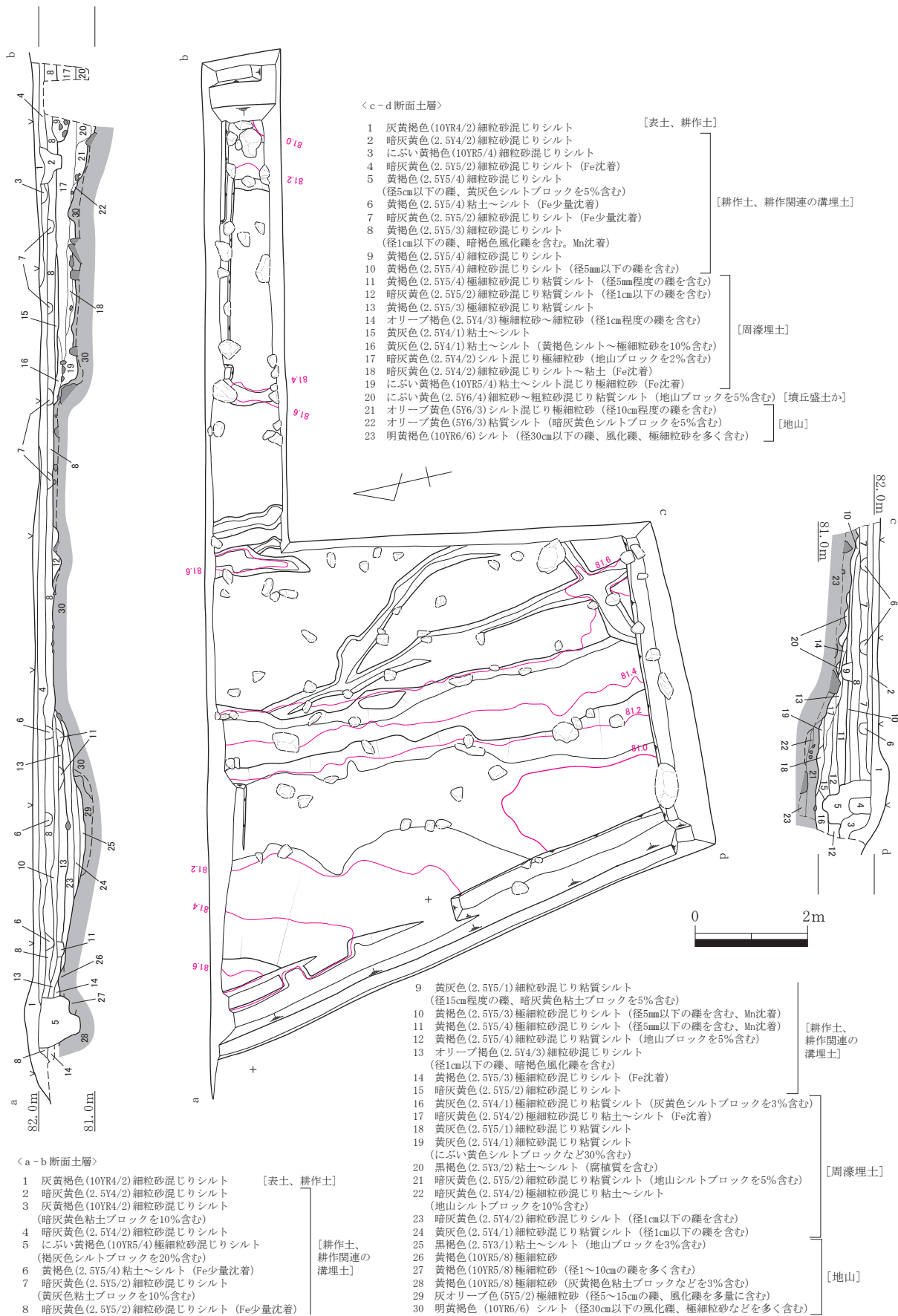


図54 6-1 トレンチ平面・断面図 (S=1/100)

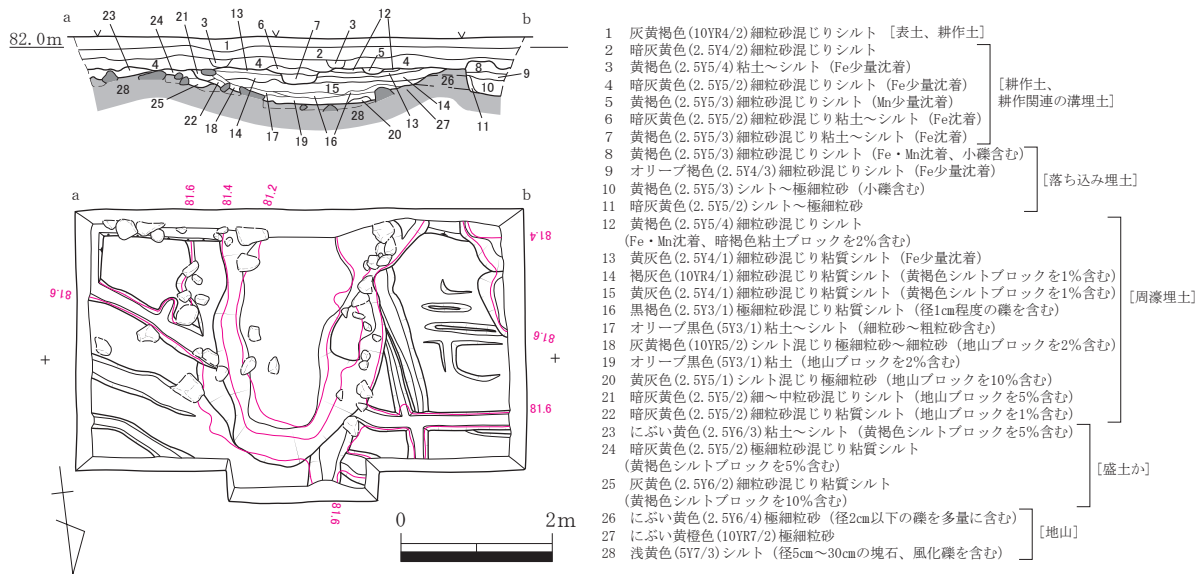


図55 6-2 トレンチ平面・断面図 (S=1/100)

周濠の状況 6-1 トレンチ、6-2 トレンチでは、現地表下に40~50cmの厚さで耕作土が存在していた。これらを除去すると、大小の塊石を多く含んだ地山層と、それを切り込む周濠の埋土上面が検出されている。周濠は6-1 トレンチの西側部分と、6-2 トレンチの中央部、6-1 トレンチの東側拡張部の3箇所を確認されており、前2者は位置関係から一連のものと判断されるが、後者はこれらとはつながらないものと考えられる (図56)。

6-1 トレンチ西側から6-2 トレンチへと続く周濠は、6-2 トレンチの北壁近くを北端としており、南側ほど幅が広がる平面形態を持つ。検出面での幅は、6-2 トレンチ南壁部分で3.3m、6-1 トレンチ北壁部分で4.8mである。これより南側では西側の肩が検出されていないが、周濠の痕跡と考えられてきた墳丘西側の「小池」に繋がるように、南側へ向かって大きく広がるものと考えられる。両側の斜面は緩やかに立ち上がっており、その角度は墳丘側にあたる東側では20°前後であるが、外側にあたる西側斜面は10°前後と非常に緩やかなものであった。底面は地山面が露出しており、盛土や人為的な埋土は見られない。埋土は上層では1cm以下の礫を多く含む暗灰黄色層などが存在するが、下層には粘土層が存在しており (6-1 トレンチ北壁の25層、6-2 トレンチの19層など)、一定の滞水があったと推定される。なお底面の標高は、6-1 トレンチ南壁付近が81.0mで最も低く、北端に近い6-2 トレンチ部分で81.2mとわずかに高くなっているが、大きなレベル差は見られなかった。

6-1 トレンチの東側拡張部で確認された周濠は、トレンチ東端より約6m西側において、その西肩が検出されている。位置関係から、5-3 トレンチ西側や4-6 トレンチで確認された前方部北側の周濠と一連のものと考えられる。断面形状を見ると、西肩付近では比較的急角度で深さ30cm程度落ち込み、そこから東へ3.5mほどの範囲には標高81.4m前後の平坦面が存在する。そのさらに東側は徐々に深くなっており、トレンチ東端近くの底面の標高は81.0mであった。

前方部北西隅 5-3トレンチ

チや4-6トレンチの状況などから、6-1トレンチの中央付近において前方部北西隅が検出されると想定された。しかし6-1トレンチでは、墳丘西側の周濠と、前方部西側面に相当する地山の斜面が検出されたものの、そこから東側へと回り込む前方部隅のコーナー部分は検出されなかった。こうした状況は前方部北東隅付近と類似しており、後述するような渡土堤状遺構が存在することに起因するものと考えられる。

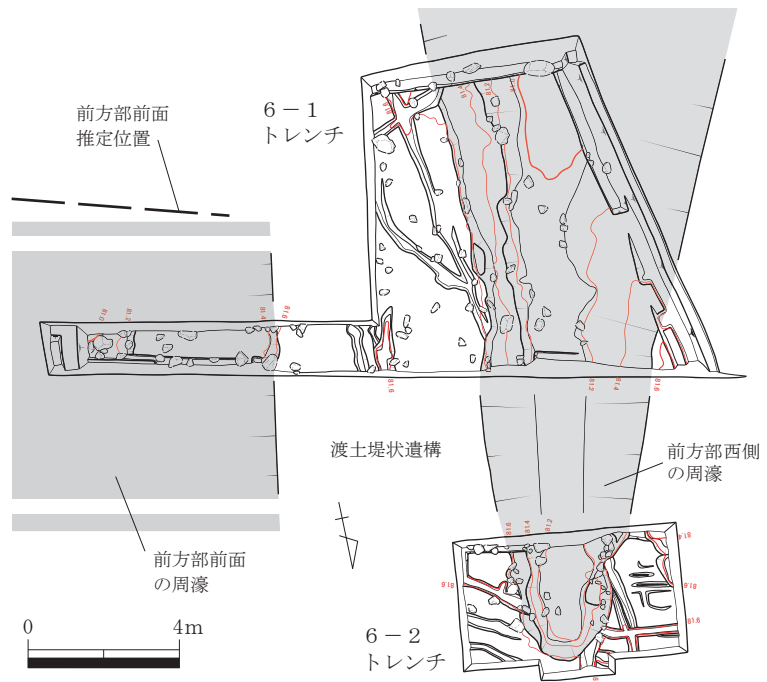


図56 6-1、6-2トレンチと周濠 (S=1/200)

5-3トレンチや4-6トレンチ

で確認された前方部前面の墳丘端との位置関係から、前方部北西隅に相当する位置は、6-1トレンチの南壁から約5m北側の辺りとする事ができる。したがってこれより南側で検出されている地山の斜面は、前方部西側面に相当するものと理解できる。この斜面部では葺石は確認されておらず、周濠底面に転落石が集積する状況も確認されなかった。明確な攪乱の痕跡が見られないため、当初よりこの部分には葺石が存在しなかった可能性も考えられるが、古墳築造後の早い段階に葺石が取り除かれた可能性も考える必要がある。

渡土堤状遺構

6-1トレンチでは、東西で検出された周濠に挟まれるようにして、南北にのびる地山の高まりが存在している。高まりの幅は下端部で約7.5m、残存高は最大で約50cmを測る。前方部前面との接続位置は明瞭ではないが、前方部北西隅に相当する位置から6-2トレンチの周濠北端までの距離が約11mであることから、前方部前面と北側の周濠外側をつなぐ長さ約11mの遺構であったと考えられる。ほぼ全体が地山の削り出しにより形成されているが、その上面に盛土の可能性が考えられる土層がわずかに存在することから(図55-23~25層)、本来は盛土により成形されていた可能性も考えられる。いずれにせよ周濠が掘削される際に削り残されていると判断できることから、掘削当初よりこの箇所を周濠を区切ることが意図されていたと推定される。

側面の状況を見ると、西側斜面部分では、地山に含まれる石は多く見られたものの、葺石と判断できるものは確認されなかった。これは前方部西側面に当たる斜面部と同様であり、当初より葺石が存在しなかったか、あるいは早い段階に取り去られた可能性が考えられる。東側斜面部分では、斜面に沿う位置で20cm前後の石が集中して検出されたが(図版97)、原位置を保つものは存在しなかった。トレンチ幅が狭かったこともあり明確ではないが、葺石の存在を示唆するものとして注意される。

このように前方部北西側で確認された地山の高まりは、前方部北東側に存在した渡土堤と墳丘主軸を挟んでおおよそ対称的な位置にあり、前方部前面と西側の周濠を明確に区切るものであることから、渡土堤と同様の機能を有するものと推定される。しかし前方部北東側の渡土堤のように盛土や葺石の存在が明確ではないことから、本報告中では「渡土堤状遺構」と呼ぶこととしている。

遺物の出土状況 6-1トレンチでは遺物の出土量は少なく、周濠埋土中より埴輪片や須恵器片がわずかに出土している程度であった。6-2トレンチの周濠上層埋土中では複数の埴輪片が検出されているが(図84)、その総量は少なく、これにより渡土堤状遺構や周濠外肩に埴輪が配置されたと判断することはできないだろう。

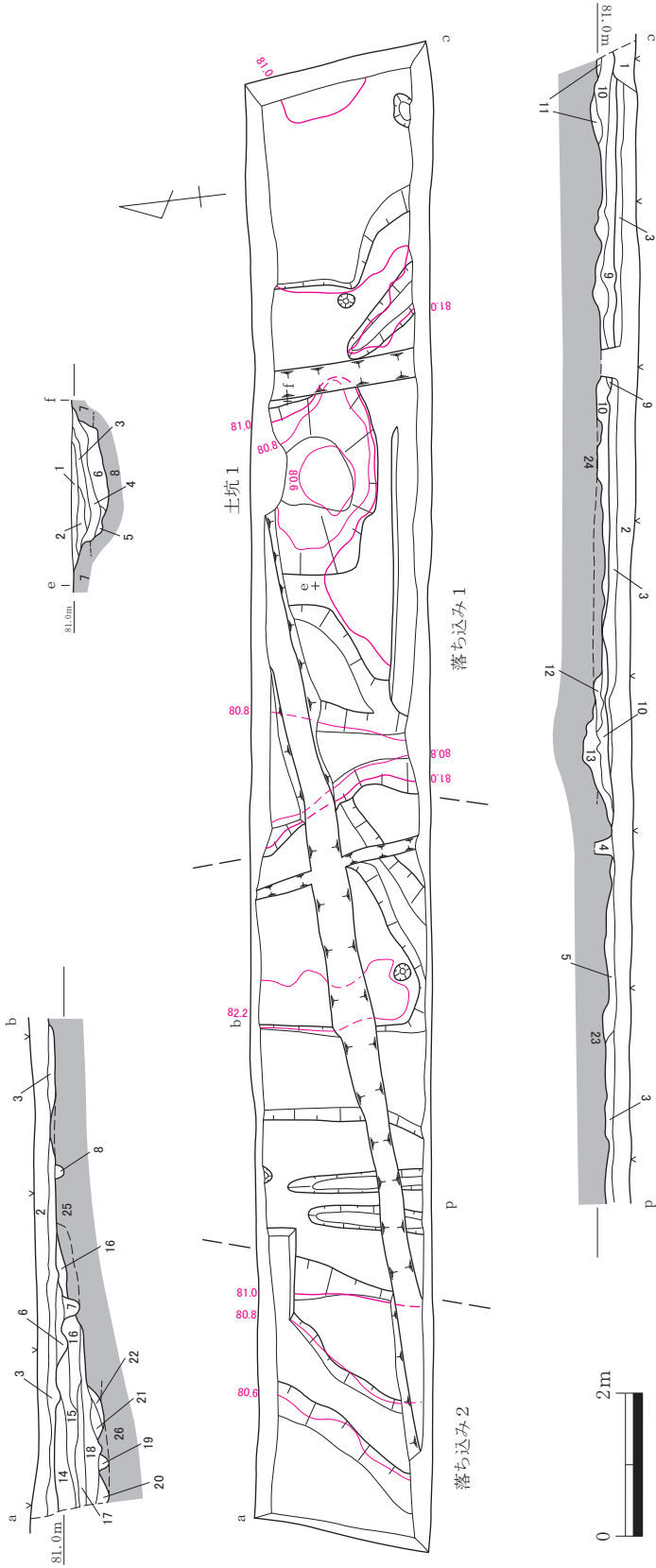
(10) 3-1トレンチ

トレンチの概要 前方部北西側の、6-1・6-2トレンチが位置する水田面より西へ一段下がった畑作地において、東西長20~21m、南北幅約2.5mのトレンチを設定している(図57)。このトレンチは墳丘西側の周濠の痕跡と考えられてきた「小池」の北側に位置することから、前方部西側を巡る周濠が検出されることが予想された。現地表面の標高は81.5mでほぼ一定で、6-1・6-2トレンチが位置する水田面よりも60cmほど低くなっている。なおこのトレンチの掘削は、現地表下の耕作土まではバックホーにより行い、それ以下については人力により行った。埋め戻しについては、特に保存上の配慮を要する遺構が検出されなかったことから、すべてバックホーで行っている。

土層の状況 現地表下に厚さ30cm程度の現代耕作土が見られ(図57-2層)、その下層にはそれ以前の耕作に伴うものと考えられる旧耕作土層(3~5層)が存在していた。これらを除去し精査を行ったところ、トレンチの中央から西寄りの位置では、地山である明黄褐色極細粒砂~細粒砂層(23層)が検出されたほか、瓦を蓋に使用した現代の暗渠がみついている。またトレンチ東半部と西端付近においては、この地山面より切り込む落ち込みの埋土上面が検出されている(落ち込み1、落ち込み2)。

落ち込み1 トレンチ中央付近から東端まで広がる落ち込みで、地山(23層)を切り込んでおり、深さは20~30cmを測る。底面の標高は81.0m前後で、やや凹凸が見られるほか、径約2.5mの土坑1が検出されている。埋土は暗灰黄色粘質土(9・10層)などで構成される。

この落ち込みについては、調査当時はその位置関係から、茅原大墓古墳の前方部西側を巡る周濠に相当するものである可能性が考えられた。しかしその後、すぐ東側で調査された6-1・6-2トレンチにおいて明確な周濠が確認されている。両者を比較すると、底面の標高は81.0m前後でほぼ一致しているが、落ち込み1西肩の位置は、6-1で確認された周濠のそれよりも10mほど西側に離れている。このことから落ち込み1は、6-1などで確認されている周濠と一連のものではないと考えられる。なお落ち込み1の埋土中には、この遺構の時期や性格を判断できるような遺物はしなかったが、周濠が埋土を切り込むような状況が確認されなかったことから、古墳の築造よりも時期が下るものと判断される。



- <トレンチ北壁・南壁土層 (a-b, e-d断面) >
- 1 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)極細粒混じりシルト
 - 2 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂混じりシルト
 - 3 にぶい黄褐色(10YR5/3)中粒砂混じりシルト
 - 4 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂混じりシルト (地山ブロックを30%含む)
 - 5 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト混じり細粒砂 (径1cm以下の礫を含む)
 - 6 にぶい黄褐色(10YR5/3)中粒砂混じりシルト (Mn沈着、細粒砂を2%含む)
 - 7 灰黄褐色(10YR5/2)小礫混じり粘質シルト (下層に砂礫含む)
 - 8 黒褐色(10YR3/2)小礫混じりシルト
 - 9 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂混じりシルト (暗灰黄色粘土ブロックを3%含む)
 - 10 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂混じり粘質シルト (暗灰黄色粘土ブロックを5%含む)
 - 11 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト
 - 12 灰オリーブ色(5Y5/2)粘土 (径2cm以下の礫を少量含む)
 - 13 黄褐色(2.5Y5/3)粘土 (地山ブロックを1%含む)
 - 14 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂混じりシルト (径1cm以下の礫を含む、Mn沈着)
 - 15 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂混じり粘質シルト (径1cm~5cmの礫を含む、Mn沈着)
 - 16 灰黄褐色(10YR4/2)シルト混じり細粒砂 (径1cm以下の礫を含む)
 - 17 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂混じり粘質シルト (径1cm以下の礫を含む)
 - 18 暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒砂混じり粘質シルト (径5mm~5cmの礫を含む)
- [耕作土]
- 19 灰色(5Y4/1)細粒砂混じりシルト (径5cm以下の礫を含む)
 - 20 オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘質シルト (地山シルトブロックを10%含む)
 - 21 オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘質シルト (地山シルトブロックを10%含む)
 - 22 灰色(7.5Y4/1)小礫混じりシルト (径1cm程度の礫を含む)
 - 23 明黄褐色(10YR6/6)極細粒砂混じり細粒砂 (径10cm以下の礫を多く含む)
 - 24 にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト混じり細粒砂 (径10cm以下の礫を多く含む)
 - 25 灰色(7.5Y5/1)シルト~極細粒砂
 - 26 灰色(10Y5/1)シルト
- <土坑1土層 (e-f断面) >
- 1 黄褐色(10YR5/6)極細粒砂混じりシルト (黄褐色粘土を5%含む)
 - 2 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質シルト
 - 3 黄褐色(2.5Y5/4)粘土~シルト
 - 4 にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト~極細粒砂
 - 5 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質シルト (細粒砂を含む)
 - 6 明黄褐色(10YR6/6)極細粒砂混じり細粒砂
 - 7 にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト混じり細粒砂 (径10cm以下の礫を多く含む)
 - 8 にぶい黄褐色(10YR6/4)シルト~細粒砂
- [落ち込み1埋土]
- [土坑1埋土]
- [落ち込み2埋土]
- [地山]

図57 3-1 トレンチ平面・断面図 (S=1/100)

落ち込み2 トレンチ西端において、標高81.1m前後の地山面より切り込む落ち込みが検出されている。落ち込みの東肩ラインはおおむね南西－北東方向にのびるもので、北西側に向かって深くなっており、トレンチ北西隅の最深部の標高は80.4mであった。埋土は最大で80cmの厚さで残存しており、上層には黄褐色土層（14・15層）、中層には灰黄褐色砂層（16層）、下層には暗灰黄色粘質土層（17・18層）が存在していた。また底面付近には若干の凹凸があり、地山ブロックを含んだオリーブ黒色粘質土などが確認されている（19～21層）。埋土中からは少量の遺物が出土しており、全体で古式土師器と考えられる土師器小片が出土しているほか、上層では瓦器塊片が、中層では須恵器片が出土しており、茅原大墓古墳に伴う埴輪は1点も確認されなかった。

この遺構の性格については、調査当時は上記のような遺物の状況から、茅原大墓古墳に関連するものである可能性は低いと考えられた。しかし後に調査された6－1・6－2トレンチにおいて前方部西側の周濠が検出され、その西肩の推定ラインが落ち込み2の東肩ラインと概ね平行するものであったことから、周濠のさらに外側を巡る濠状遺構である可能性が生じている。今後周辺で調査が行われる際には、注意しておく必要があるだろう。

土坑1 トレンチ内の東寄りの位置において、落ち込み1の底面より切り込む土坑が検出されている。一部がトレンチ北壁にかかるため全体は検出できなかったが、検出面での規模が東西約2.5m、南北1.5m以上で、東西にやや長い形態であることがわかっている。深さは最大50cmを測り、埋土は上層から中層にかけては黄褐色～にぶい黄褐色粘質土が存在し、下層では明黄褐色の極細粒砂～細粒砂層が確認されている。遺物が一切出土していないことから、用途や時期を判断することは難しいが、落ち込み1の埋土が上面を覆っており、落ち込み1より先行する時期のものと考えられることができる。

(11) 小結

現在の茅原大墓古墳の墳丘周辺は、現代に至るまでため池や宅地、水田として使用されてきたこともあり、古墳築造当時の状況を窺い知ることは難しい状況にある。しかし計10箇所にとレンチを設定して発掘調査を実施したことにより、墳丘の輪郭や周濠の広がり、渡土堤の存在など、茅原大墓古墳の全体像を復元する上で重要な成果を得ることができた。特に渡土堤の確認は当初予想されなかったものであり、当時の古墳築造のあり方を知る上で貴重な成果であったといえることができる。

なお復元される古墳の全体像については、前節で報告した墳丘上の調査成果も加えて、第7章において検討することとしたい。

第4章 物理探査の成果

1. はじめに

茅原大墓古墳は4世紀末頃に築造された前方後円墳（帆立貝式古墳）である。昭和57年に国史跡に指定され、桜井市では古墳の整備に向け平成20年度から墳丘や濠の発掘調査を進めている。

平成25年度は円筒埴輪列で囲まれた後円部の埋葬主体部を物理探査で探る事となった。探査は平成25年12月13日～19日に実施している。

2. 探査の方法と測定範囲（図58）

探査の手法として、電気探査と地中レーダー探査を行った。

それぞれの測定は後円部の中央に10m四方の基準杭（A～D）を設定し（A～Dの座標数値は表2のとおりである）、さらに杭Aから西2m、南1mに新たな測定起点を設けた。レーダー探査はこの起点から東西・南北に、電気探査は測定起点の東1mから東西に測定した。

（1）電気探査

電気探査は地中に電気を流し、地中の電気抵抗を測定して地中に含まれている物体や土質の違いを、

また等電気抵抗値の拡がりから同一土質の拡がりを推測する手法である。一般的に土中に石や礫また空洞などが有れば電気抵抗が高く、水分を多く含んだ土が堆積していれば抵抗値は低くなる。使用した機器はイギリスGeoscan Research社製RM15電気抵

抗測定器である。測定では4本の電極棒を用い、内2本に電気を流し、残り2本で電位を測定する2極法を採用した。作業時間の短縮と測定精度の向上のため、多数の電極棒を地面に打設しコンピュータ制御により各電極棒に配電する手法を行った。出力電力は40V、1mAである。測定線間隔は南北間0.5mで南から北に27本（L-1～L-27）設定し測点間隔は0.5m、測定深度は0.5m区切りで0.5mから3.0mまでの6深度を測定した。

探査成果図としてそれぞれの測定線毎の電気抵抗における疑似断面図と深度毎の比抵抗平面図を作成した。探査面積は156㎡、全測定線長は324mである。

（2）地中レーダー探査

地中レーダー探査はアンテナから地中に向け電波（電磁波）を送信し、地層の境界面や石などから反射して戻ってくる反射波を受信する。受信した電波をコンピュータで戻ってきた順に信号の強弱と

表2（世界測地系）

| 杭番号 | X座標 | Y座標 |
|-----|-------------|------------|
| A | -162334.044 | -14034.757 |
| B | -162335.145 | -14024.913 |
| C | -162325.218 | -140237.10 |
| D | -162324.095 | -14033.647 |

して置き直し、色を付けて土層の疑似断面図として視覚化する。今回作業に使用したレーダー・アンテナは光電製作所製GPR-8型で周波数は300MHzである。

測定起点から東西・南北格子状に0.5m間隔で走査線（Line）を設定し、東西・南北計Line54本、全測定線長702m走査した。探査面積は169㎡である。

探査成果図としては走査線（Line）毎の断面図とタイムスライス平面図を作成した。

3. 探査成果（図59～65）

それぞれの探査で注意をひく箇所には「実線」や「破線」、「アルファベット」で明示する。

（1）電気探査（図59）

疑似断面図（図59上）

各測定線の断面には深度1.5m付近に電気抵抗値に変化が認められる（白一点破線）。

L-10、L-11、L-13では測定線中央部（3.0mから10mの間）が深度2.0m付近まで下がる箇所が認められる（白破線）。特にL-13では深度3.0m付近まで下がる。

平面図（図59下）

深度0.5mで中央部に高数値の抵抗の高い纏まりがあり反対に深度3.0mには高比抵抗に囲まれた低比抵抗の箇所が見られる。

（2）地中レーダー探査（図60～64）

地層や堆積土の違い（境界面・不連続面）を白色の破線で表す。地中（墳丘中）で電波の反射が強い箇所は円形の実線で表示する。

地中レーダー探査で深度を表示するには電波が対象物に当たり反射して戻るまでの時間（ns ナノ秒）で表示する。電波速度（1 ns）を3 cmと換算する（例えば10ns × 3 cm = 30cm）。

東西走査断面（図60）

深度50cm前後まで特に大きな土層の変化は認められない。

L-7から北の走査線に中央部が窪む土層の境界面が認められる。L-9からL-17に明瞭に認められる。深度は60cmから始まり150cmに達する。幅は5 m前後である（白破線）。

L-15やL-17では窪みの中に強い反射の箇所が認められる（白楕円）。



写真9 地中レーダー探査風景

L20には10.5m付近に点状の強い電波の反射の箇所が認められる。

東西走査平面図（図61、62）

深度36cm付近で墳丘中央部の東・西・北側に直線的な方形の区画（白破線）が見られる。

深度60cm付近から中央に強い反射が深度108cm付近まで認められる。また、深度84cmや深度96cm付近では方形区画の中に見られる。方形区画は深度204cm付近や深度228cm付近まで弱い反射ながら認められる。深度180cm付近から点状の反射がある。

南北走査断面図（図63）

L-4～L-18で5mから10mに中央部が窪む土層の境界面が認められる。深さは150cmに達する。

L-10や～L-17では深度90cm付近に強い反射をする箇所が見られる。L-22には深度150cmで北に9.5mの箇所に点状の強い反射の箇所が認められる。

南北走査平面図（図64）

深度60cm付近から中央に強い反射が深度108cm付近まで認められる。深度180cm付近から北東部に点状の強い反射の箇所が認められる。深度204cmや深度216cm付近に方形区画の弱い反射の箇所が認められる。

4. おわりに（探査成果の解析）（図65）

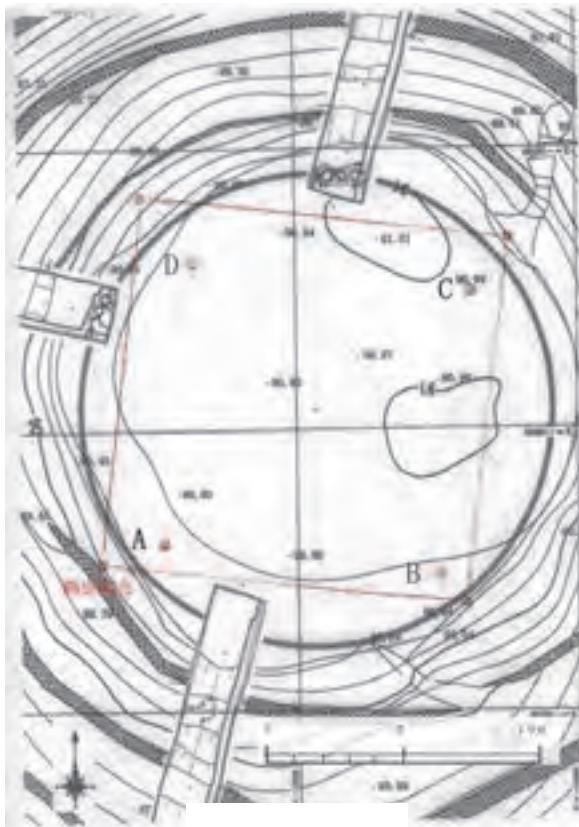
電気探査の抵抗値からは深度1.5m付近に堆積土層の境が認められる。また、L-10、L-11やL13では深度2.0m付近まで中央部が大きく下がる変化がみられ、墓壙掘方のようにも推測される。ただし、深度0.5mや3.0mの平面から高比抵抗や低比抵抗の纏まりはあるが墓壙掘方を証する抵抗値の変化は認められなかった。

地中レーダー探査測定ではそれぞれ成果図に表示した変化（土層の境）が見られ、東西、南北走査の断面図から深度60cm付近から深度150cm付近に土層の境界面が認められる。東西走査ではL-9からL-17に南北走査ではL-4からL-14に窪み状の不連続面がみられる。ほぼ墳丘の中央で墓壙の窪みと推測する。掘方内には石材などの規模を有する物体の反射はみとめられず堅穴式石室ではないと推測する。墳丘表面から大きく掘削された痕跡は認められず、ほぼ築造時の状況を遺している様である。ただし、墳頂北東部に攪乱の痕跡が見られる。

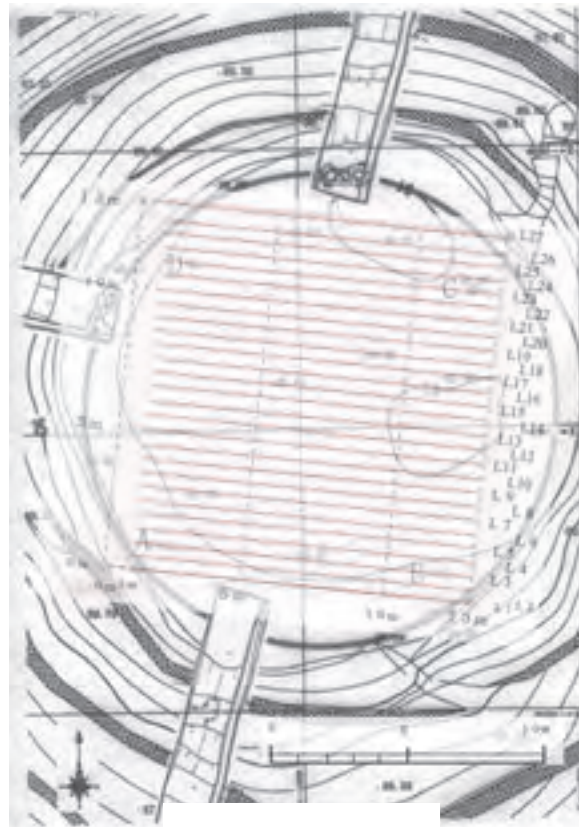
平面図からは墳丘の中央部、深度60cm付近に電波を強く反射する物体（1m前後）が埋まっている可能性がある。

東西走査L-20のA、平面図の深度180cmのBまた南北走査断面のCは鉄片の反応と推測する。

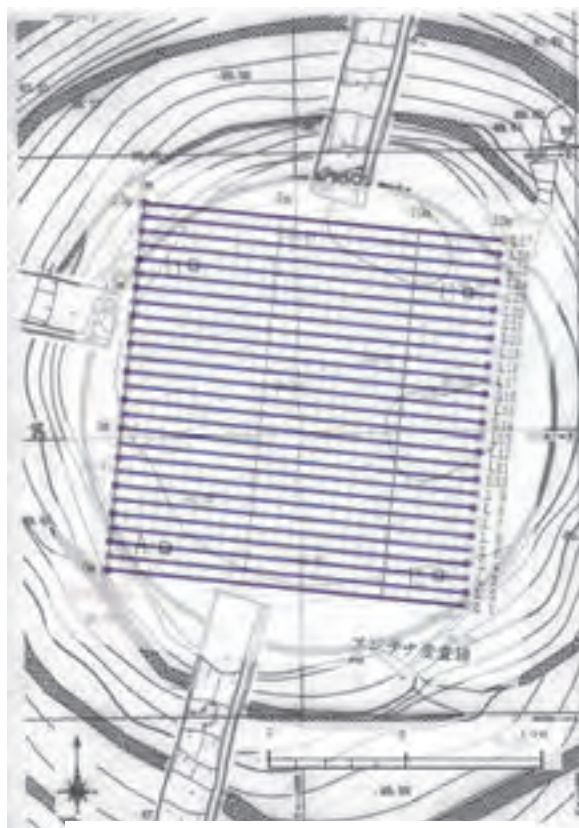
墳丘図と地中レーダー平面成果図を併せると墓壙掘方は図65のようになる。



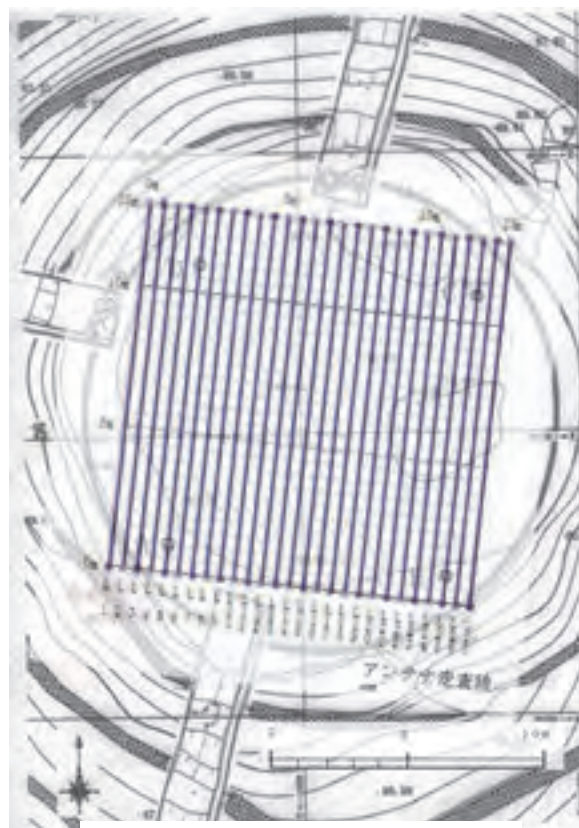
測定範囲図



電気探査測定線図



地中レーダー探査東西測定線図



地中レーダー探査南北測定線図

図58 探査測定範囲図

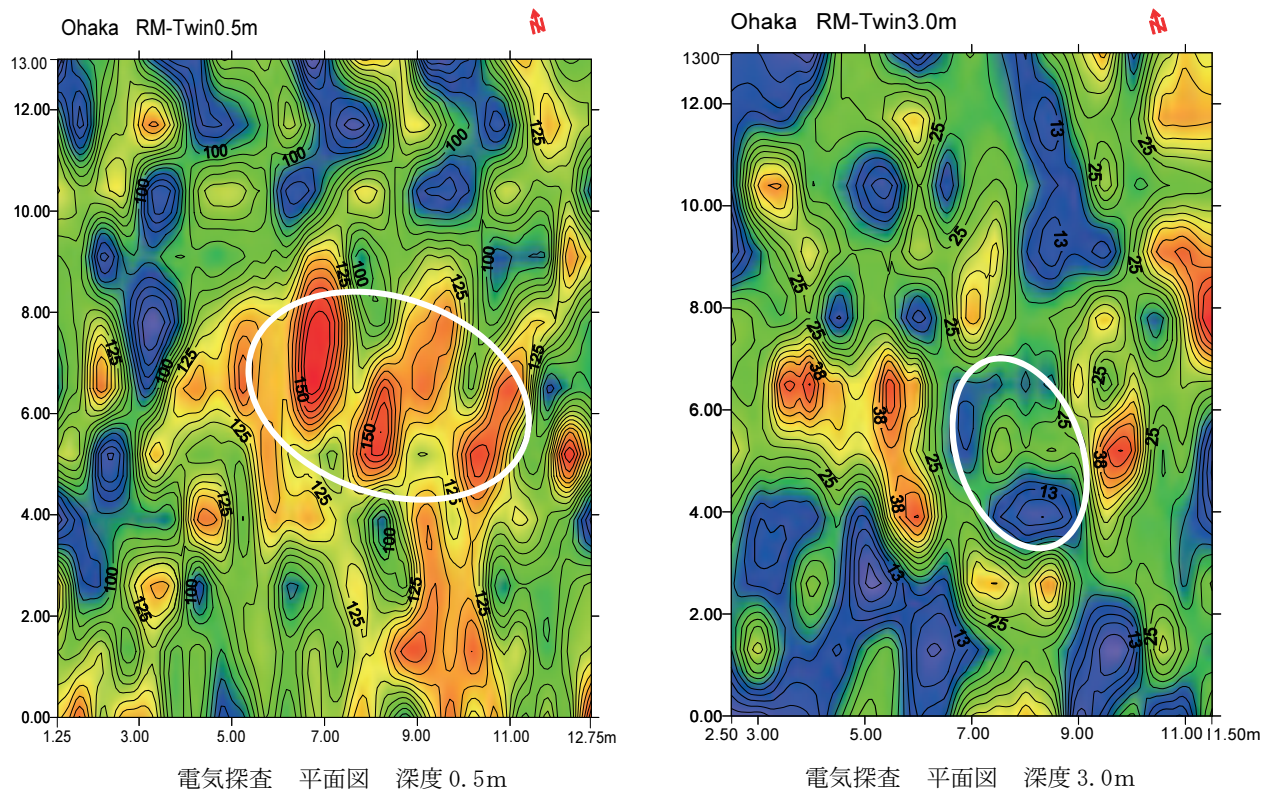
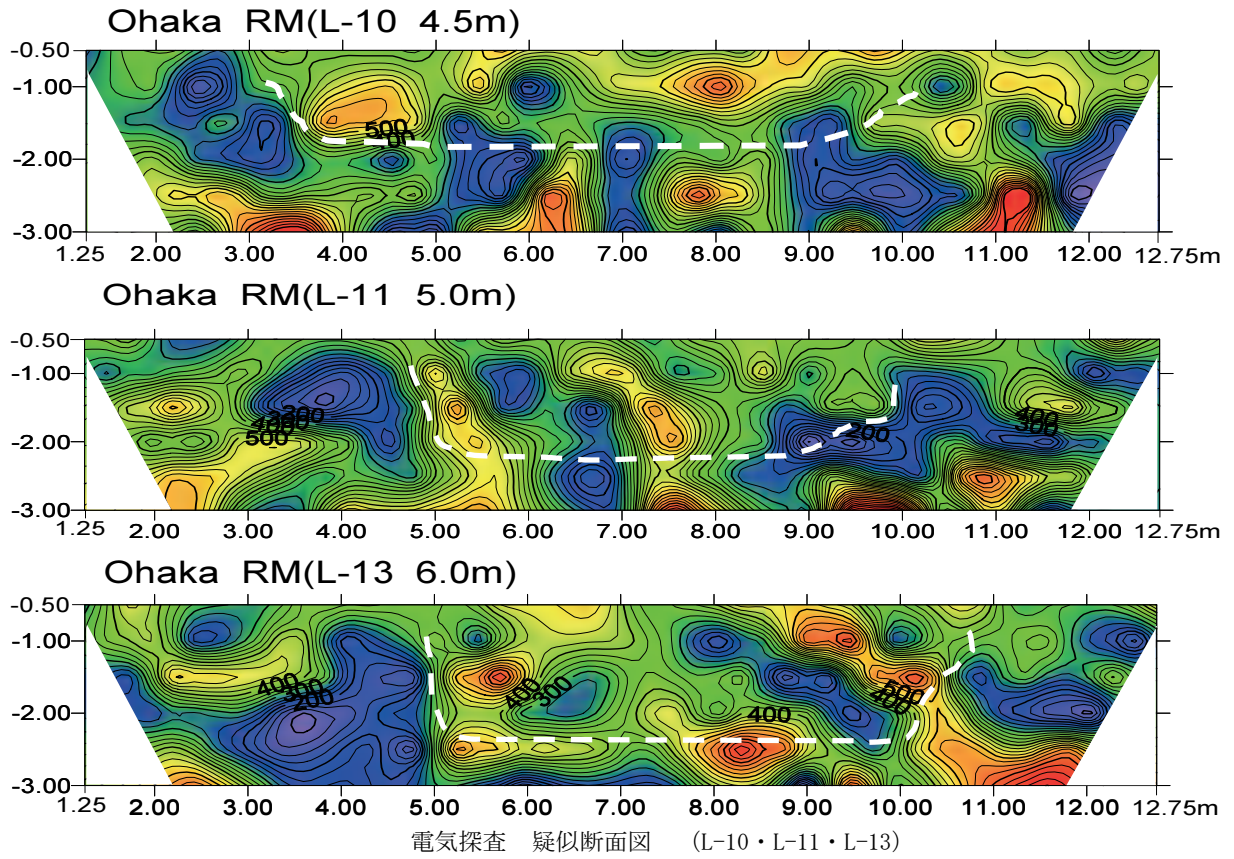
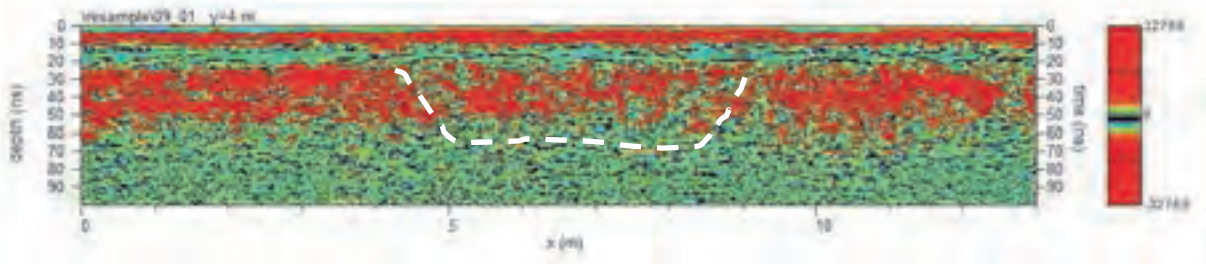
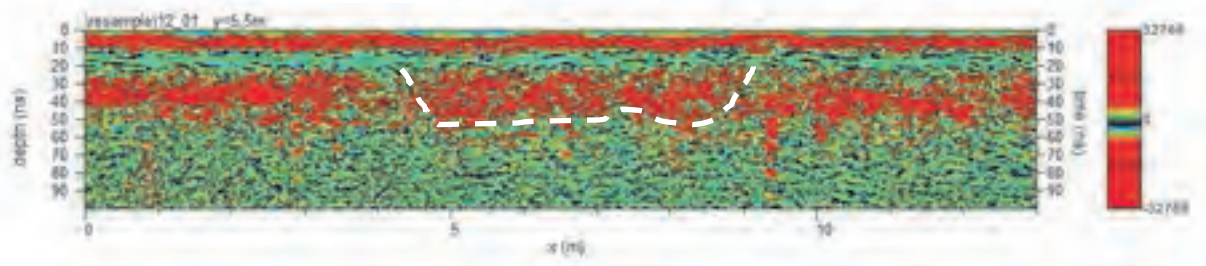


図59 電氣探査成果図

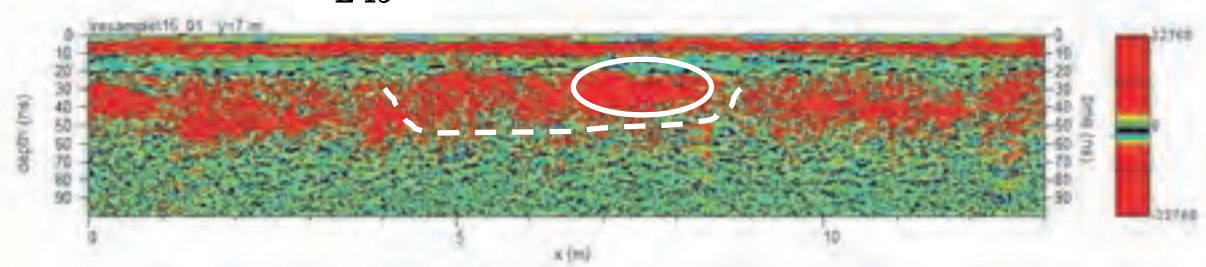
L-9



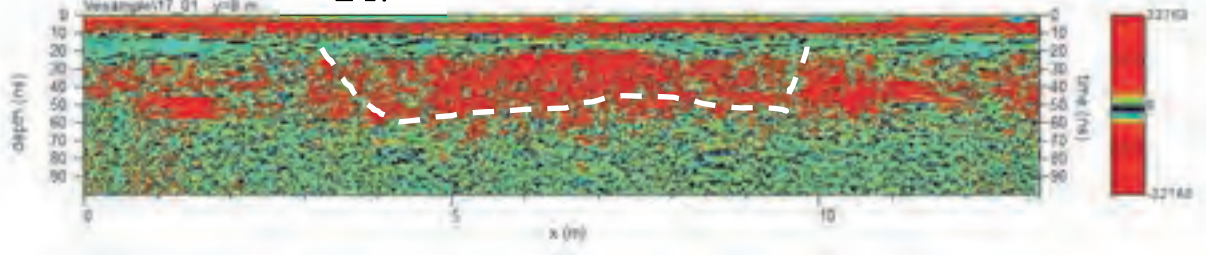
L-12



L-15



L-17



L-20

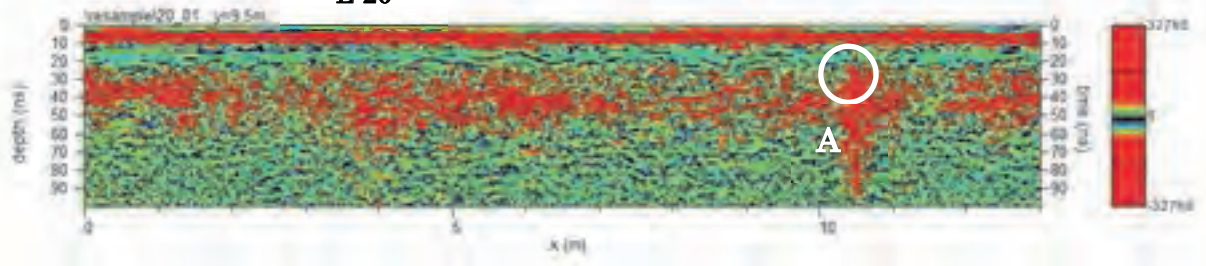
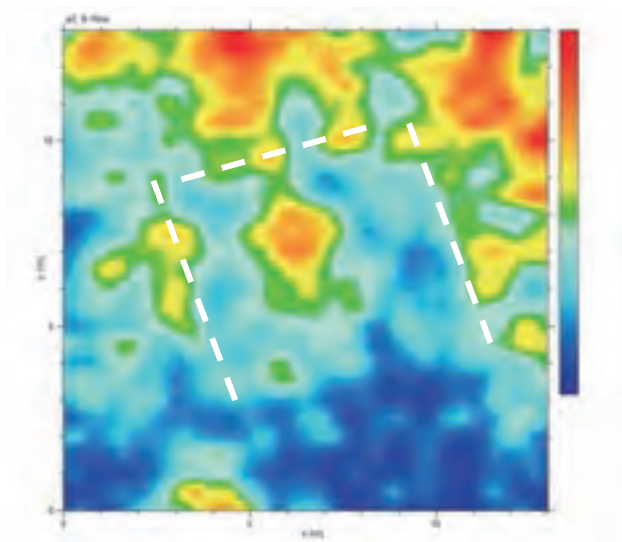
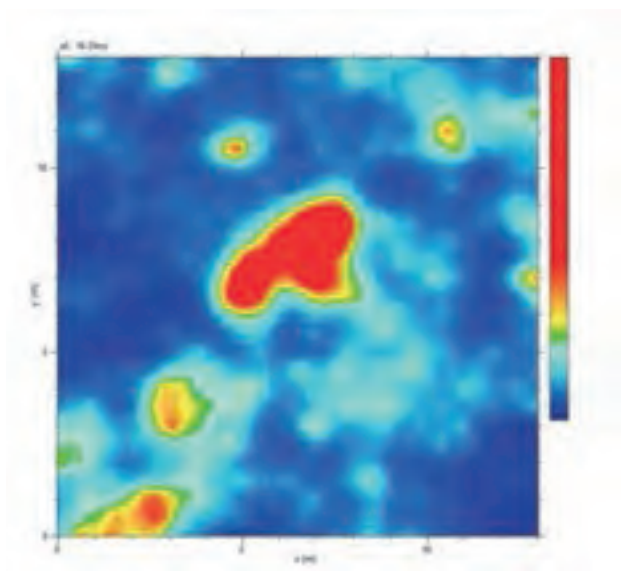


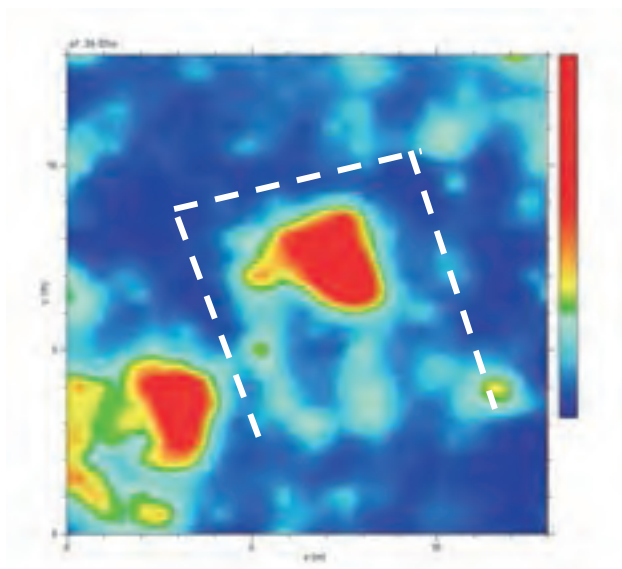
图60 東西走査断面成果図 (L-9・L-12・L-15・L-17・L-20)



深度 36 cm付近

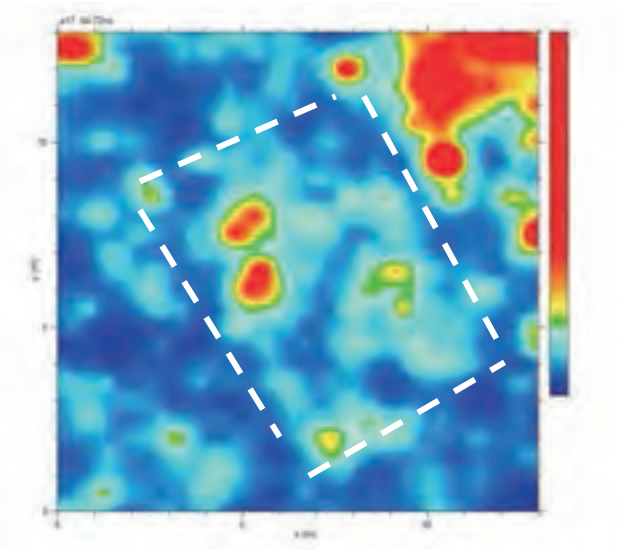


深度 60 cm付近

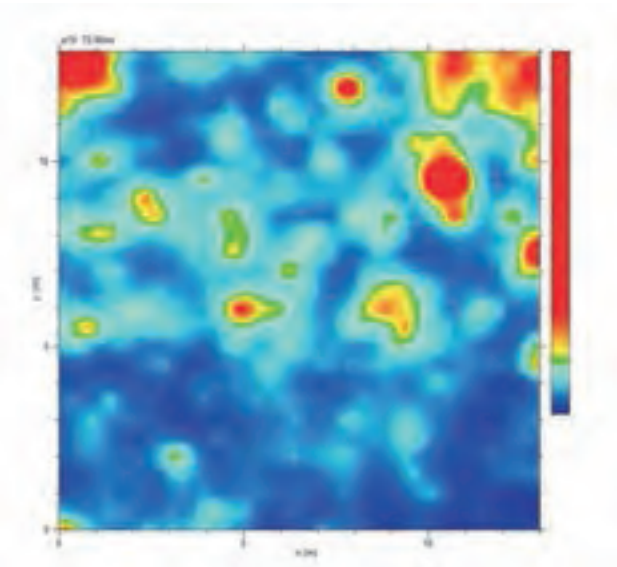


深度 84 cm付近

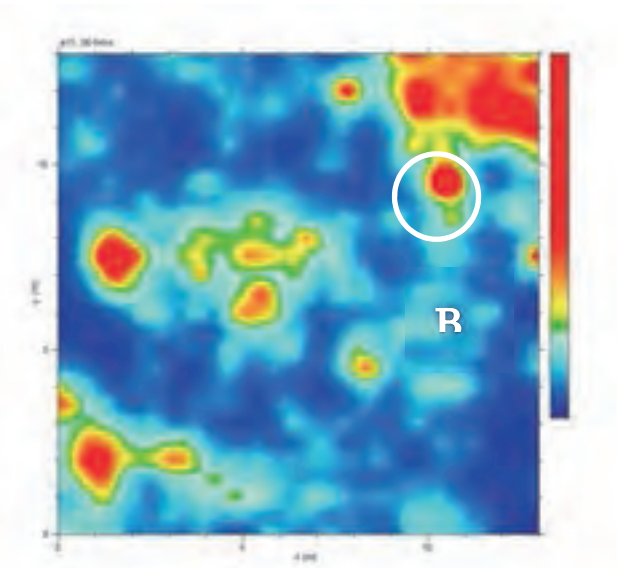
図61 東西走査平面図 1



深度 204 cm附近



深度 228 cm附近



深度 180 cm附近

图62 東西走査平面図 2

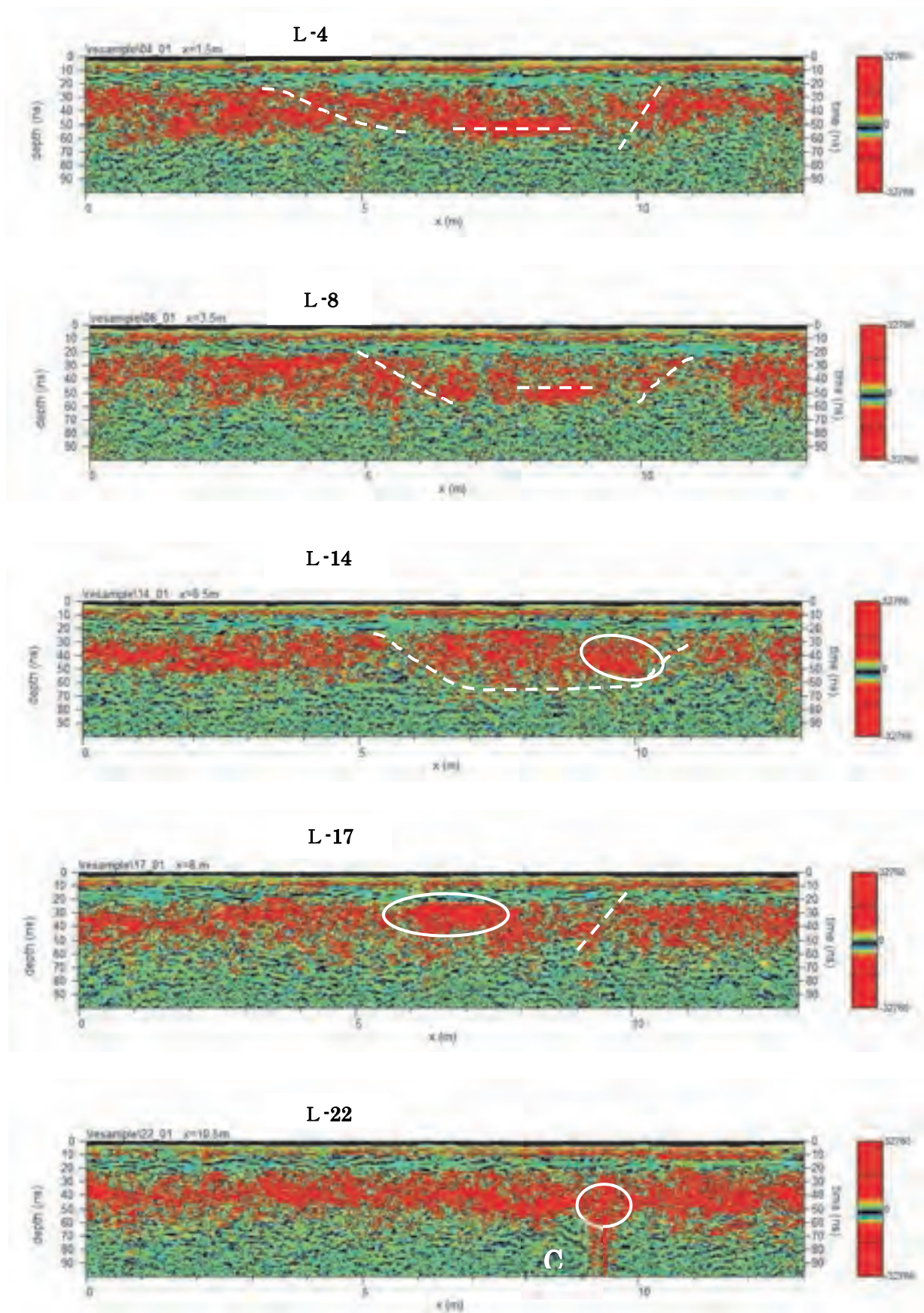
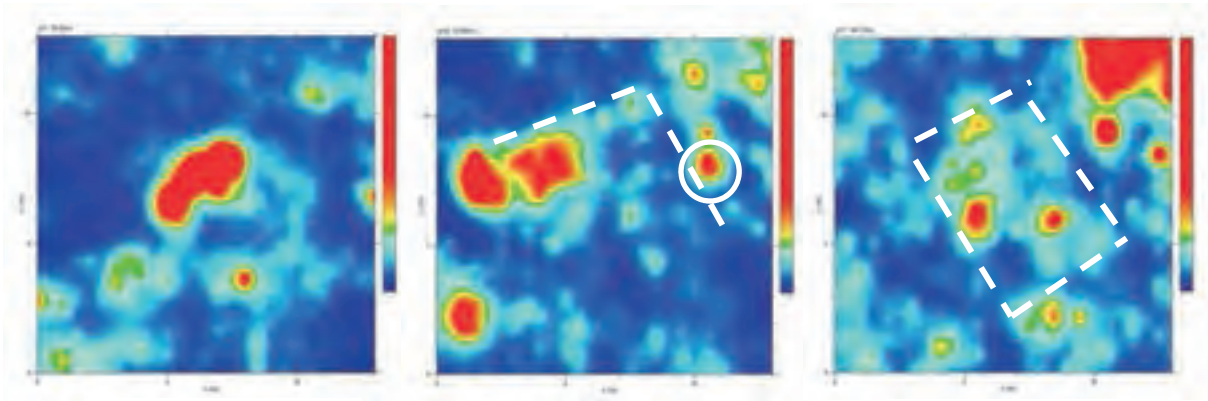


图63 南北走查断面成果图 (L-4 · L-8 · L-14 · L-17 · L-22)

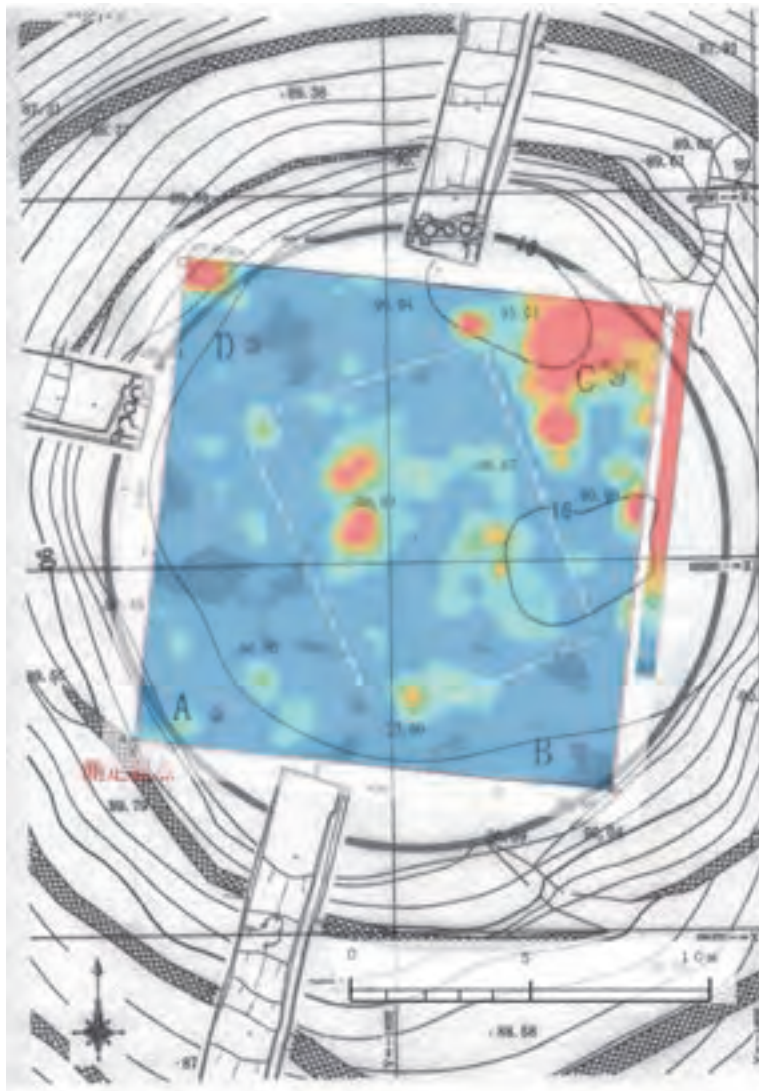


深度 60 cm付近

深度 168 cm付近 図

深度 204 cm付近

図64 南北走査平面図



深度 204 cm付近に合成

図65 掘方推定図

第5章 出土遺物

1. 出土遺物の概要

茅原大墓古墳における6次にわたる発掘調査では、各トレンチで多くの遺物が出土した。次節以降において遺物の種類ごとに詳述するが、ここではまず出土遺物の概要について触れておきたい。

出土遺物中で最も多くを占めているのは、墳丘およびその周辺に配列されたと考えられる埴輪である。原位置を保って検出されたもののほか、流土中や周濠埋土中に転落した状態で出土している個体や、埴輪棺として転用された個体が存在する。埴輪の種類は多様で、円筒埴輪、壺形埴輪のほか、様々な種類の形象埴輪の存在が確認されている。

上記の埴輪以外に茅原大墓古墳に関わる遺物としては、埴輪棺1より出土している鉄製品が挙げられる。後述するようにこの鉄製品の存在から、埴輪棺1の時期は茅原大墓古墳築造よりも若干新しくなると考えられる。しかしながら他の2基も含め、いずれの埴輪棺も墳丘斜面基底ラインに平行して配置されており、これらは茅原大墓古墳に従属する埋葬施設であると判断することができるだろう。

このほか茅原大墓古墳に直接的に関連しない遺物として、墳丘盛土中に含まれていた土器や、前方部上面の木棺墓に伴う鉄釘、周濠埋土中や流土・造成土中より出土した須恵器・埴輪や鉄製品が確認されている。

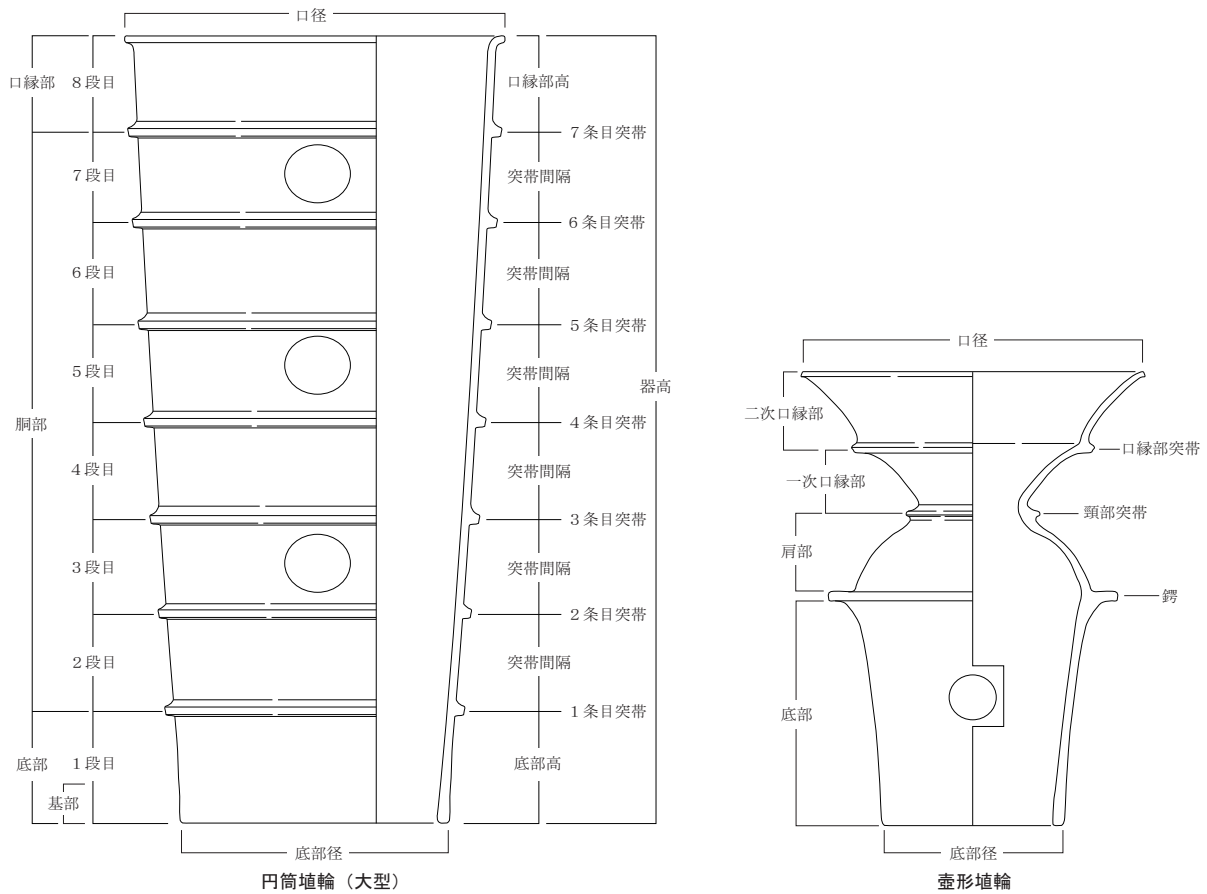


図66 円筒埴輪・壺形埴輪の部分名称図

2. 円筒埴輪と壺形埴輪

(1) 概要

図71～91において、176点の円筒埴輪と、62点の壺形埴輪を図示することができた。このうち円筒埴輪20個体は埴輪列を構成するもので、ほぼ原位置を保った状態で検出されている。また円筒埴輪13個体、壺形埴輪6個体は埴輪棺に使用された状態で出土している。その他は墳丘上およびその周辺において出土しており、多くは墳丘上での配列位置を推定することが難しい状況にあった。

以下では出土遺構、出土位置ごとに報告し、各個体の法量や形態などについては表5・6に示すこととする。ただし確認されている円筒埴輪や壺形埴輪は多様な形態を有しており、まずは次項においてその形態の概要を確認しておくこととしたい。なお以下で円筒埴輪として報告している個体のうち、底部付近のみが残存するものや、口縁端部付近の小片については、壺形埴輪あるいはその他の埴輪である可能性を有するものも含まれるが、ここではすべて円筒埴輪として扱うこととした。

(2) 円筒埴輪の特徴

全体形状と段構成 全体形状がわかる円筒埴輪は、埴輪棺に使用された2個体のみである。いずれも底部から口縁部に向かって徐々に広がる形態で、(228)は4条突帯5段構成、(238)は7条突帯8段構成であった。このほかにも7条・8段分が残存する(233)や、5条・6段分が残存する(236)などが存在しており、4条突帯5段構成の個体に加えて、6段以上の大型の円筒埴輪が一定量存在していたと考えることができる。

器高 器高が判明する個体は、先に見た埴輪棺の2個体のみで、4条突帯5段構成の(228)は66.7cm、7条突帯8段構成の(238)は104.1cmを測る。また底部側を欠いている(233)は残存高で101.9cmを測り、器高が1m以上の大型の個体が複数存在していることがわかる。

底部径と口縁部径 底部径は復元可能な個体が82個体存在し、図67に示すように11.4cm～49.8cmに分布する。20cm前後と33cm前後に分布の山が見られ、およそ28cm前後を境として、大型と小型の2種類に大きく分類することが可能である。口径は27.3cm～56.1cmに分布しており、16個体と点数が少ないため分布の大きな山は見られないが、36cm前後を境として大型と小型に分類することができるだろう(図68)。なおこの大小2類型を配置位置別に見ると、後円部頂では両者が使用されており、後円部2段目では大型のみが確認されている。後者には基部を欠いた状態で据えられた個体も存在するが、これらについても胴部径が40cm前後を測り、大型に分類することができる。対して後円部1段目の3個体はいずれも小型であり、ここには小型のみが使用されている可能性が考えられる(図92)。

底部高・口縁部高と突帯間隔 底部高が判明する個体は15個体存在し、12.5cmから15.1cmの間に分布する。上記の底部径による分類と対比すると、小型の個体は14.6～15.1cmで比較的底部高が高くなる傾向が見られる。

突帯間隔は10.3cmから15.1cmまで確認されるが、特に12cm～13.5cm前後のものが目立っている。突帯間隔が底部高よりも大きくなる個体は存在せず、両者が確認できる個体では後者に対し前者が1.3cm～

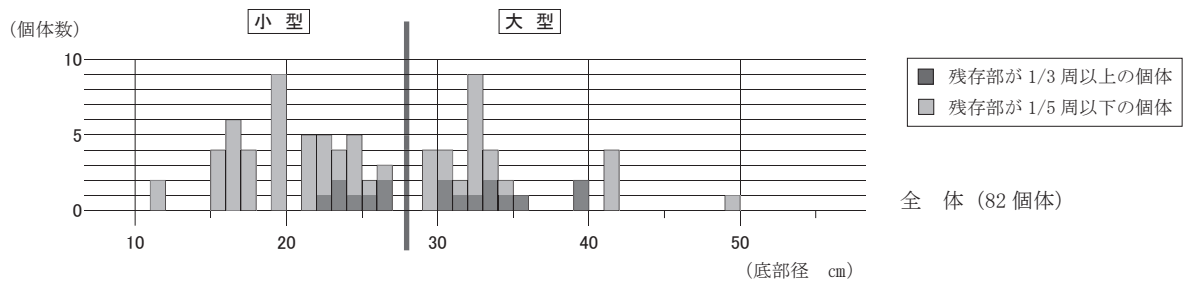


図67 円筒埴輪底部径の分布

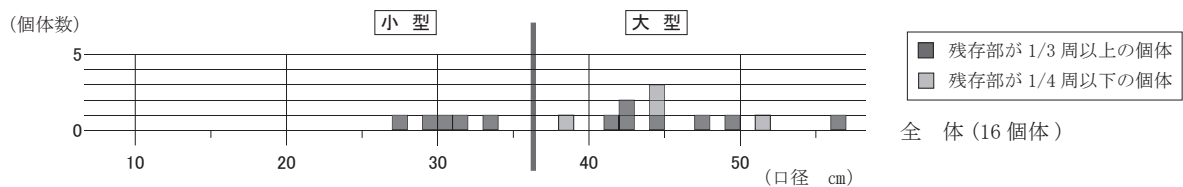


図68 円筒埴輪口径の分布

3.3cmほど大きくなっている。

口縁部高は14個体で確認されており、12.3cmから16.1cmに分布する。突帯間隔とほぼ同等となる個体と、突帯間隔よりも2～3cmほど大きくなる個体が存在している。

透孔 透孔は図示した176点のうち28個体で確認されており、円形、方形、半円形、三角形、鉤形が存在する。このうち円形ないし円形と思われる透孔を有する個体は、28個体中19個体で最も多く、次いで方形が5個体、半円形ないし半円形と思われるものが4個体、三角形が2個体、鉤形は1個体確認されている。このほか径1～2cmほどの円形の小穿孔を有する個体も存在する(21・232)。

穿孔位置を見ると、底部に透孔を持つものは3個体存在する。いずれも透孔の全体が残存するものではないが、(7)は1条目突帯との位置関係から半円形と判断され、(152・153)についても推定される底部高を考慮すると半円形である可能性が高いと思われる。2段目に透孔を有する個体は4個体存在し、うち2個体は三角形の透孔、残り2個体は円形の透孔が穿たれる。また2段目以下に透孔を有さず3段目に透孔を持つ個体は4個体存在し、うち1個体は方形透孔であるが(2)、他の3個体は円形透孔であった。なお口縁部に透孔を持つものは(227)のみで、半円形の透孔を有する。このほかでは先に挙げた小穿孔の事例が、いずれも口縁部に穿たれたものである。

また透孔は基本的には1段置きに穿たれているが、隣接する段にそれぞれ透孔を穿つものが2個体存在する(225・227)。

穿孔方向については、2方向に穿つものが8個体確認されているほか、4方向に穿つ個体も5個体存在する。2方向のものは1個体が三角形透孔であり、それ以外は円形透孔であった。対して4方向のものは方形透孔が3個体と多く、円形透孔が2個体存在する。方形透孔を有する個体はこのほか2個体確認されているが、これらも4方向に穿孔されている可能性がある。なお2方向のものはほぼ1/2周の間隔で配され、4方向のものはほぼ1/4周の均等な間隔で穿たれている。ただし(233)については

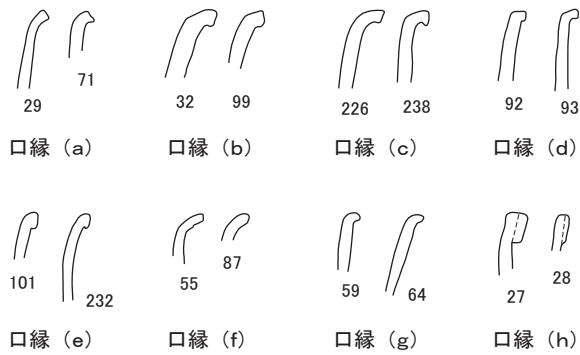


図 69 円筒埴輪の口縁形態の分類 (S=1/6)

配置に偏りがあり、狭い部分では1/6周前後、広い部分では1/3周近くの間隔があげられている。

口縁部の形態

口縁部付近の小片から、完形に復元される個体まで、計82点の口縁部が確認されている。このうち79点までは端部付近が外側に屈曲しており、3点は貼付口縁と呼ばれるものである。屈曲の状態や口縁端部の仕上げ方などから、以下の8つの形態に分類することができる。

ができる。

- a. 端部近くで外側上方に向けて屈曲し、端部に外傾する面を有する口縁。
- b. 端部近くで外側上方に向けて屈曲し、屈曲部の内面に稜が形成される口縁。端部に面を有する。
- c. 端部近くで外側水平方向に屈曲し、端部に面が形成される口縁。
- d. 端部近くで外側水平方向に屈曲し、屈曲部の内面には稜が形成される口縁。端部に面を有する。
- e. 端部近くで外側水平方向に屈曲し、端部には強いナデにより、やや幅の広い面が形成される口縁。
- f. 端部近くで外側上方に向けて屈曲し、端部が丸くおさめられる口縁。
- g. 端部近くで外側水平方向に屈曲し、端部が丸くおさめられる口縁。
- h. 貼付口縁と呼ばれるもので、やや外反して広がり、その端部の外面に粘土帯を貼り付ける口縁。

このほか外側に屈曲しない口縁部片が1点確認されているが(121)、これについては非常に小さな破片であり、かつこれ以外に同様の形態のものが見られないことから、円筒埴輪ではない可能性も考えられる。したがってこの形態は分類に含めていない。

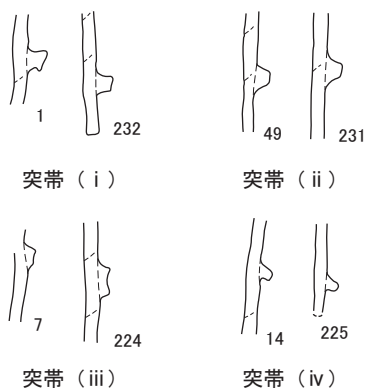


図 70 円筒埴輪の突帯形態の分類 (S=1/6)

突帯の形態

図示した個体のうち41個体で突帯が確認されている。様々な形態のものがあるが、大きく以下の4種類に分類することができる。

- (i) 突出度が高く、上面や側面、下面が強いナデにより凹む突帯。
- (ii) 突出度がそれほど高くなく、断面形が台形をなす突帯。
- (iii) 突出度が低く、側面部が強クナデにより凹む突帯。
- (iv) 上下幅が小さく、やや下方に突出する突帯。

突帯設定技法 (9)の1条目突帯の剥離部分において、一辺約1cmの方形刺突が約9cm間隔で存在することが確認されている(写真10)。これ以外に突帯設定技法が明瞭な個体は存在しない。

器面調整 外面調整は一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケを基本とする。しかし少数ではあるが、二次調整のヨコハケを欠いている可能性がある個体が存在する(2、9、12、14など)。また

(236) のように、タテハケが突帯の上面にまで及んでいる個体も存在する (写真11)。ハケメの条線は幅 1 cm あたり 9 条前後で、個体間で多少の差が見られる。

二次調整のヨコハケはストロークの長いもので、最も器面調整が良好に残存する個体の一つである (230) では、少なくとも胴部の1/4以上に及んでいる。ただしこの個体も含め、静止痕が明瞭にみとめられる個体は存在しなかった。ハケ原体は幅3~5cmと判断されるものが複数確認されている。(230) では口縁部外面で幅 5 cm 以下のハケ単位が確認されるが、その下の胴部では 1 段を 1 周で仕上げるような幅 10 cm 程度の原体が使用されている可能性がある。ただし段の中ほどにヨコハケが及ぶ箇所が少なく、そうした幅の広い原体の存在は明瞭ではない。内面調整ではハケ調整を施す個体が一定量存在しており、ハケメが一切観察されない個体も存在する。

なお (93) と (230) では、共通するハケメパターンが確認されている (写真12)。後述するように両者は形態的に共通する部分が多く、同工品である可能性が考えられる。

赤色顔料 外面に赤色顔料が観察される個体は一定量存在するが、その残存状況は器表面の風化・剥離などにより、決して良好なものではない。したがって各個体における赤色顔料の塗布の有無についても明確に判断することは難しいが、多くの個体に塗布されていたものと推定される。

焼成 多くの個体で黒斑が観察することができる。残存状況が良好でない個体のなかには黒斑が確認されないものも存在するが、明確に窯焼きと判断できる個体は無く、全てがいわゆる野焼き焼成の埴輪であると判断される。

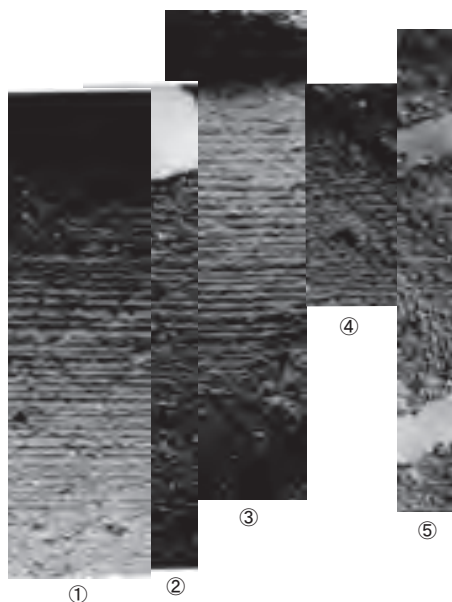
円筒埴輪の分類 これまで見てきた円筒埴輪の諸要素について、主に法量から分類される大型・小型との相関関係を以下で見たい (表 3)。まず口縁



写真10 円筒埴輪 (9) の方形刺突 [矢印の位置]



写真11 突帯上面に及ぶタテハケ (236)



① : (230) 口縁部より 1 段下の外面一次調整タテハケ [左が口縁側]
 ② : (93) 口縁部より 2 段下の外面二次調整ヨコハケ [上が口縁側]
 ③ : (230) 口縁部より 2 段下の外面二次調整ヨコハケ [上が口縁側]
 ④ : (93) 口縁部外面の二次調整ヨコハケ [下が口縁側]
 ⑤ : (93) 口縁部外面の二次調整ヨコハケ [下が口縁側]

写真12 円筒埴輪 (93) と (230) のハケメ (S≒1/1)

部形態から見ると、口縁 d を持つ個体は、全体像が判明しない小片を除くと、いずれも小型に分類されるものであった。対して口縁 c 及び e を持つ個体は、全体像が判明する個体はいずれも大型である。このようにまず口縁部形態は、埴輪の大小と相関関係があると捉えられる。

突帯形態については、(i) は大型に限られており、(iv) についても大型で多くみとめられる。対して (ii) は小型の多くを占めるが、大型でも一定量存在する。ただし、大型で (ii) とした個体は原位置を保つものではなく、残存率が低いという傾向が見られる。このことからこれらは元々 (i) あるいは (iv) の形態であった突帯が、風化・磨滅した結果 (ii) の形態となった可能性が考えられる。いずれにせよ (i)・(iv) がほぼ大型に限定されることは指摘できるだろう。

透孔の形態・配置について見ると、まず方形透孔を有する個体は大型に限られており、円形透孔でも4方向に穿孔するものについても同様である。いっぽうで底部に半円形と思われる透孔を有する個体はいずれも小型であり、2段目に円形透孔を有する個体もまた小型に限られている。

表3 円筒埴輪の分類

| 埴輪No. | 法量分類 | 口縁分類 | 突帯分類 | 透孔 | 円筒分類 | 出土遺構・位置 | 備考 |
|---------|------|------|------|----------------------------------|------|-------------|--------|
| 図72-12 | 大 | | i | 円/2方 | I | 後円部2段目埴輪列 | 打ち欠き |
| 図72-14 | 大 | | iv | 円? (3段目) | I A | | |
| 図72-16 | 大 | | i | 円? (3段目) | I A | | |
| 図75-49 | 大 | | ii | 円 | I | 後円部2段目付近 | |
| 図75-50 | 大 | | i | 円 | I | | |
| 図75-54 | 大 | | ii | 円 | I | | |
| 図89-231 | 大 | c | ii | 円 (口縁の2段下) | I | 埴輪棺1 | |
| 図89-229 | 大 | e | ii | 円 (口縁の1段下と3段下) | I | | |
| 図91-238 | 大 | c | ii | 円 (3段・5段・7段目) / 2方 | I A | 埴輪棺2 | |
| 図89-232 | 大 | e | i | 円 (口縁の1段・4段下) / 4方 | I B | 埴輪棺1 | 口縁に小穿孔 |
| 図90-233 | 大 | c | i | 円 (口縁の1段・3段・5段下) / 4方 | I B | | 線刻 |
| 図71-8 | 大 | | iv | 三角 (2段目) | I C | 後円部頂埴輪列 | |
| 図71-10 | 大 | | i | 三角 (2段目) / 2方、円 (3段目) | I C | | |
| 図88-225 | 大 | | iv | 円、鉤 (円形透孔の間の段に) | I D | 埴輪棺1 | |
| 図71-2 | 大 | | iv | 方 (3段目) | II A | 後円部頂埴輪列 | |
| 図75-52 | 大 | | ii | 方 | II | 後円部2段目付近 | |
| 図88-226 | 大 | c | iv | 方 (口縁の1段・3段下) / 4方 | II A | 埴輪棺1 | 線刻 |
| 図91-236 | 大 | | i | 方 (1段おき) / 4方 | II A | 埴輪棺2 | 線刻 |
| 図88-227 | 大 | c | i | 方 (口縁の1段・3段下) / 4方、半円 (口縁とその1段下) | II B | 埴輪棺1 | |
| 図73-18 | 小 | | ii | | III | 後円部1段目埴輪列 | |
| 図73-19 | 小 | | ii | 円 (2段目) / 2方 | III | | |
| 図73-20 | 小 | | iv | | III | | |
| 図74-21 | 小 | d | ii | 円 (口縁の1段下) / 2方 | III | 前方部東、周濠 | 口縁に小穿孔 |
| 図78-92 | 小 | d | ii | 円 (口縁の1段下) | III | 東くびれ部、周濠 | |
| 図78-93 | 小 | d | ii | 円 (口縁の1段・3段下) / 2方 | III | | 線刻 |
| 図89-228 | 小 | d | ii | 円 (2段目・4段目) / 2方 | III | 埴輪棺1 | 穿孔? |
| 図89-230 | 小 | d | ii | 円 (口縁の1段・3段下) / 2方 | III | | |
| 図71-7 | 小 | | iii | 半円 (底部) | IV | 後円部頂埴輪列 | |
| 図82-152 | 小 | | | 半円? (底部) | IV | 後円部1段目埴輪列付近 | |
| 図82-153 | 小 | | | 半円? (底部) | IV | | |

このような諸要素の状況から、茅原大墓古墳の円筒埴輪は次のように分類することができる。以下では大別で4類型を示しているが、特にⅠ類やⅡ類についてはさらに細分される可能性が考えられる。

Ⅰ類：底部径が概ね30cmを超える大型の個体で、7条突帯8段構成の個体が存在する。透孔は3段目以上に、1段おきに円形透孔が2方向に配するものが基本であるが（ⅠA）、これに加えて2段目に三角形透孔を穿つもの（ⅠC）や、鉤形透孔が穿たれる個体（ⅠD）、円形透孔を4方向に配している個体（ⅠB）も存在する。

Ⅱ類：底部径が30cm以上、口径が概ね40cm以上の大型の個体で、全体像がわかる個体を欠いているものの、突帯5条と6段分が残存する個体が存在する。透孔は3段目以上に、1段おきに方形透孔が4方向に配するものが基本と考えられるが（ⅡA）、これに加えて口縁部などに半円形の透孔が穿たれる個体も存在する（ⅡB）。

Ⅲ類：底部径が27cm以下の小型の個体で、透孔を3段目以上に、1段おきに円形透孔が2方向に配される。口縁部の形態はdが多数を占める。この類型に含まれる（93）と（230）に共通するハケメパターンが見られ、両者は同工品である可能性が考えられる。なお全体像がわかる個体は1個体に過ぎないが、他の類型に比して個体間の共通要素が多く見られることから、いずれも4条突帯5段構成であった可能性が高いと考えられる。

Ⅳ類：底部径が27cm以下の小型の個体で、底部に半円形ないし円形の透孔を有する。全体像がわかる個体は存在しないが、Ⅲ類と同じ4条突帯5段構成か、それよりも小さい可能性が考えられる。なおⅣ類とされるもののうち（152）と（153）は残存状況が悪く、同一個体の可能性も考えられる。底部径も小さく、円筒埴輪以外の埴輪である可能性も有している。

（3）壺形埴輪の特徴

壺形埴輪は図85～91で計62点を図示することができた。原位置で出土された個体は無く、完形に復元される個体も存在しなかったが、部分的に良好な残存状況を示す個体が存在しており、これらを組み合わせることで全体像を推定することができる。

全体形状 底部から肩部にかけての形態は、（185）が良好に残存しており参考となる。底部は基部から上方に向かってやや外傾して立ち上がっており、その中ほどには円形透孔が2方に穿たれ、底部と肩部の境界の外面には鏝を有している。鏝は端部の幅が1cm余りで、概ね水平方向かわずかに上方に向かって、外側に3.5～5cmほど張り出している。鏝の端部はナデにより面が形成され、鏝のみが剥離して出土しているものが複数見られるが、接合した状態で出土している個体では接合を補強するように下方に粘土が充填されるものが目立っている（182・183・185など）。肩部は鏝接合部で最大径を測り、その上方でさらに外側に張り出すような形態のものは見られなかった。

口縁部は（185）では残存していないが、埴輪棺に使用された個体を参考とすることができる（220～223）。口縁部は下半の一次口縁部と上半の二次口縁部で構成され、前者は肩部の上端から外反して大きく広がり、さらにその上端から後者が外反して大きく広がる形態である。また肩部と一次口縁部

の境界及び一次口縁部と二次口縁部の境界の外面には、突帯が巡らされる。

法量 口径が復元できる個体は7個体で、42.8～45.5cmにおさまり、大きな差は見られない。口縁部高は20cm前後で、後で見るように高い個体とやや低い個体が存在する。底部径は復元できる個体は1点のみであり(235)、23.5cmを測る。(185)は底部下端を欠いているが、おおよそ24cm前後の底部径が推定され、(235)と大差はない。肩部最大径は30cm前後、鏝最大径は35～40cmに集中しており、これらについても大きな差は無いと言えるだろう。

このように壺形埴輪においては、円筒埴輪に見られたような大きな形態差は存在せず、ほぼ同一の規格で作られていると考えられ、全体の器高は60cm前後であったと推定される。

器面調整 底部外面はタテハケあるいはナナメハケで仕上げられ、底部内面はタテ方向のナデないしハケ調整が施されている。鏝は上下面及び端面のいずれもナデにより仕上げられる。肩部は外面にヨコハケが施され、内面にもヨコハケがみとめられる。口縁部は外面は主としてタテハケで仕上げられているが、ヨコハケが施される個体も存在する(222)。口縁部内面は、特に二次口縁部においてハケメが顕著に残存しており、主にヨコハケが見られる個体(220・221)と左上がりのナナメハケが見られる個体(222・223)が存在する。なお(220)では一次口縁部の内面にもハケメがみとめられるが、二次口縁部のものと比較して条線が粗くなっており、両者が別の原体により施されたと考えられる。

焼成 大半が残存率の低い個体であり、黒斑が確認できるものはそれほど多くはない。ただし窯焼成と思われるような個体は存在しないことから、円筒埴輪と同様に、いわゆる野焼き焼成であると判断される。

形態の多様性 上記のように各個体は法量の面で大きな差は見られないが、細部においては若干のバリエーションがみとめられる。まず肩部から一次口縁部へと移行する部分の屈曲度合には個体間で差があり、比較的緩やかに屈曲する個体(206・207・221など)が存在するいっぽうで、(192)などは内面に稜が形成されるほどの屈曲をみせる。また口縁部全体の形状としては、一次口縁部と二次口縁部の境界における屈曲が明瞭で、口縁部全体の高さが20cmに満たないもの(220・221)と、屈曲が不明瞭で口縁の広がりがやや小さく、口縁部全体の高さが22cm以上と高いもの(222・223など)がみとめられる。両者は二次口縁部の内面調整において差異があり、前者の個体は主にヨコハケで仕上げられるが、後者の個体は左上がりのナナメハケにより仕上げられている。

突帯形状では、口縁部突帯は円筒埴輪の突帯(ii)のような台形の断面形状でほぼ共通しているが、頸部突帯の形状は多様である。突出度が低く断面形が三角形をなすものや(191・222など)、一定の突出度があるものの断面形が三角形となり、突帯上面がおおよそ水平となるもの(181・185など)、断面形が台形を呈するもの(198・221など)が存在する。このほか口縁端部の形態では、ナデにより明瞭に端面が形成される個体が多数を占めており、残存率の低い個体の中には端部が丸くおさまられるものも存在する。

このように壺形埴輪は、概ね同一規格で製作されていると考えられるいっぽうで、諸要素において多様性がみとめられる。この多様性は埴輪の生産体制を考える上で重要なものと考えられるが、茅原

大墓古墳の壺形埴輪においては資料数に限りがあり、明確な類型を抽出することはできなかった。

(4) 埴輪列を構成する埴輪

後円部頂埴輪列の埴輪 (図71) ほぼ原位置を保った状態で検出された9個体と、3-2トレンチの北壁で検出された底部片(5)の計10個体を図示することができた。このうち7個体は大型、3個体は小型に分類されるもので、いずれも上部は削平を受けており、小型の3個体(4、6、7)は他よりも底部が高い位置に据えられていた。このため小型の個体は残存状況が悪く、底部の残存率も1/2周以下であった。対して大型の個体は(5)以外は底部が全周しており、概ね2~3段目までが残存していた。

(1)~(5)は3-2トレンチより出土した。(1)は大型の個体で2段目以上の残存率が低く、透孔の配置や形態は不明である。(2)は大型の個体で3段目に方形透孔を有し、II A類に分類される。外面にはタテハケが見られるが、ヨコハケは確認されない。(3)は大型の個体で、大きく歪んでいる。2段目の残存率が低く、透孔の状況は不明である。(4)は小型の個体で、底部下半の1/2周が残存し、外面にヨコハケが観察される。

(6)~(10)は3-3トレンチより出土した個体である。(6)及び(7)は小型の個体で、(7)は底部に透孔が穿たれている。透孔は下部が円弧を描く形態で、そのすぐ上に突帯が巡ることから半円形の透孔であると判断される。IV類に分類される個体である。(8)は大型の個体で、2段目に三角形透孔を有する。3段目の透孔の状況は不明であるが、I C類に分類されるものかと思われる。(9)は大型の個体で2段目以下が残存する。内面・外面ともにタテハケ調整が顕著に見られ、ヨコハケは見られない。特に内面のハケメは単位が明瞭で、原体幅は3cm前後であることがわかる。なお1条目突帯の剥離部には、一辺1cm程度の方形の刺突痕が2箇所を観察される。(10)は大型の個体で2段目に三角形透孔を有するが、その向きは(8)と上下逆方向のものである。また3段目にはこれに直交する方向に、円形透孔が穿たれている。外面には一次調整タテハケと二次調整ヨコハケが、内面にはヨコハケ・ナナメハケが顕著に残存する。I C類に分類することができる。

後円部2段目埴輪列の埴輪 (図72) ほぼ原位置の状態で検出された7個体を図示している。このうち後円部南側の3-4トレンチで検出された3個体(11~13)は削平の影響により相対的に残存率は低く、いずれも底部が打ち欠かれた状態で据えられていた。対して北側の3-3トレンチ出土の4個体(14~17)は打ち欠かれておらず、(14)~(16)は掘方内に埋められた2段目以下が良好に残存していた。(17)はこれら3個体よりも高い位置に据えられていたため、底部のみが残存する状況にあった。

(11)は大型の個体で、突帯付近の1/6周分が辛うじて原位置で残存していた。出土状況から下部を打ち欠いて据えられていると考えられる。(12)は1段分がほぼ全周する状態で、原位置で検出されている。胴部径が40cm以上の大型の個体で、下部を打ち欠いて据えられていることは明白である。円形透孔が2方向に穿たれ、外面にはやや目の粗い一次調整タテハケが観察されるが、ヨコハケは施さ

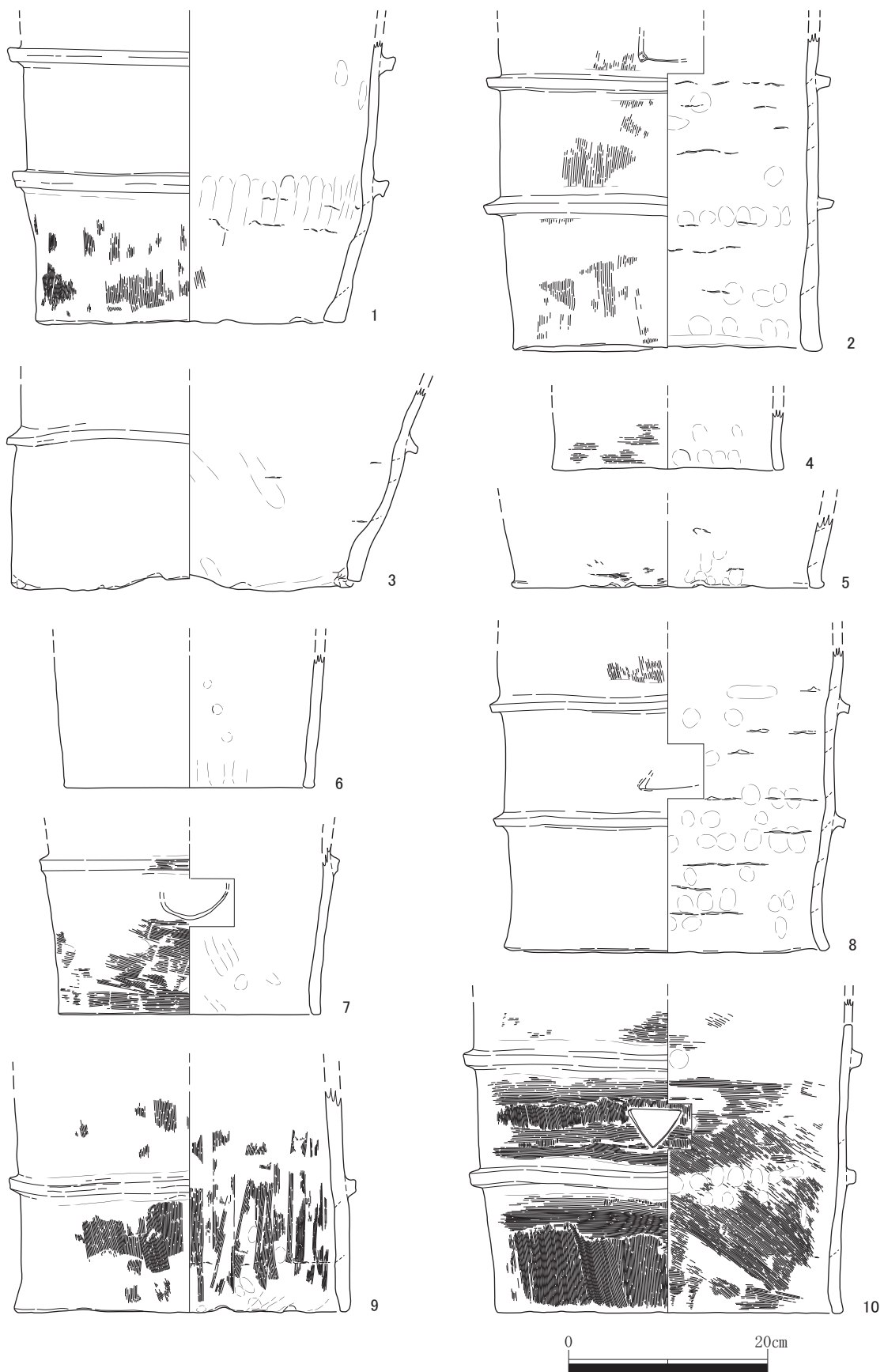


図71 後円部頂埴輪列の埴輪 (S=1/6)

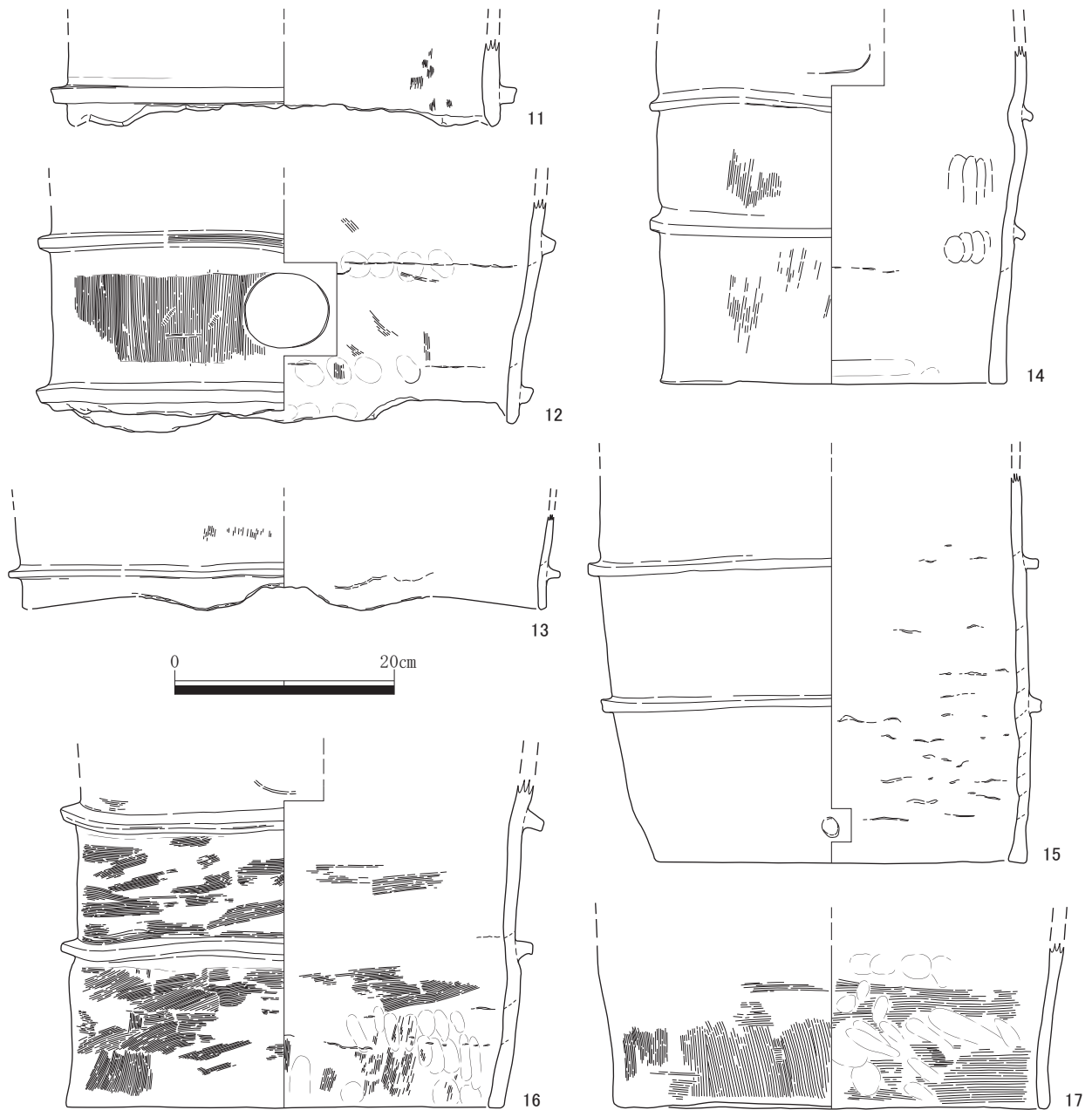


図72 後円部2段目埴輪列の埴輪 (S=1/6)

れていない。(13)は3-4トレンチの東壁で検出された1/8周程度の破片であるが、その位置から原位置を保つものと判断される。上下幅が小さい突帯(iv)を有しており、やはり下部が打ち欠かれている。

(14)は大型の個体で、3段目に円形と思われる透孔を有し、I A類に分類される。(15)は大型の個体で3段目下半までが残存する。3段目以上の透孔の状況は不明であり、器面の風化が激しく外面調整も不明である。なお基部の外面の1箇所には、径1.8cm前後の円形の粘土板が貼り付いている。(16)は大型の個体で、3段目に円形と思われる透孔を有し、I A類に分類される。外面には一次調整タテハケと二次調整ヨコハケが観察され、内面にもハケ調整が見られる。(17)は底部径が40cm近い大型の

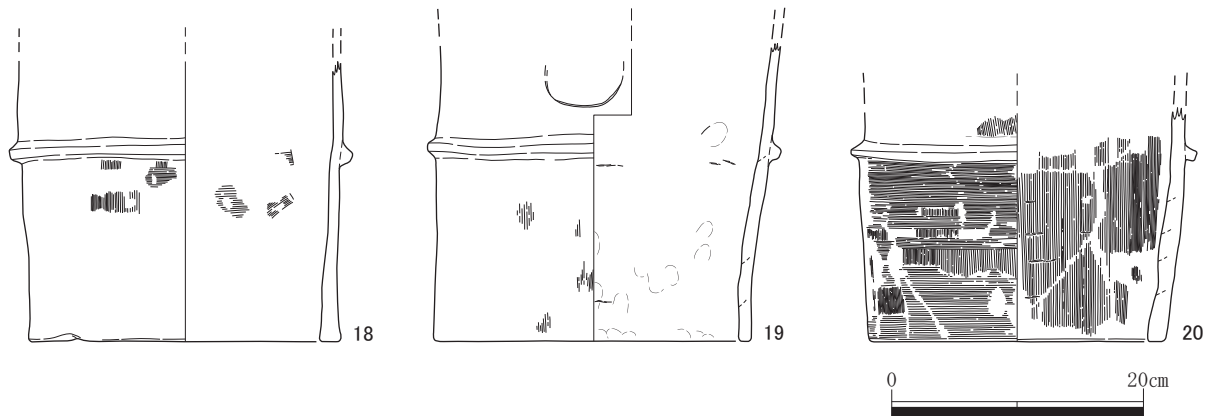


図73 後円部1段目埴輪列の埴輪 (S=1/6)

個体で、底部のみが残存する。内外面ともにハケ調整が観察される。

後円部1段目埴輪列の埴輪 (図73) 後円部北西側の5-3トレンチにおいて、3個体が原位置を保った状態で検出されている(18~20)。いずれも小型に分類されるもので、2段目の下半部までが残存していた。この3個体は底部径が23.3~25.0cm、底部高が14.6~14.8cmとほぼ揃っており、また全て小型で構成される点で、後円部2段目や後円部頂の埴輪列と異なっている。なお(19)は2段目に円形透孔を有することからⅢ類に分類することができる。(18)・(20)については2段目の残存状況が悪く、透孔の存在は確認されていないものの、法量の類似性から(19)と同様にⅢ類に含むべきものと考えられる。

(5) 各トレンチ出土の円筒埴輪

2トレンチ出土の円筒埴輪 (図74) 前方部東側の2トレンチではそれほど多くの埴輪は出土していないが、2個体を図示することができた。(21)は前方部東端より約6m東へ離れた周濠埋土中より出土している。口縁部周辺が残存する小型の個体で、口縁dを有しており、Ⅲ類に分類される。口縁部より1段下に円形透孔が穿たれるほか、口縁部に径2cm程度の円形の小穿孔が存在する。(22)は前方部東端付近の周濠埋土中より出土しており、40cm以上の胴部径を持つことから大型に分類される個体である。外面にはヨコハケが顕著にみとめられる。

3-2トレンチ出土の円筒埴輪 (図75) 後円部西側斜面の3-2トレンチでは、先に見た後円部頂埴輪列の個体(図71-1~5)が原位置を保った状態で検出されているが、これ以外にも比較的多くの埴輪が出土している。図75では、これらの中から比較的残存率が高い個体を抽出し、また口縁部や底部の端部が残存する個体については小片であっても極力図示することとした。

まず表土層や石垣の裏込め土より出土した個体を見ると(23~36)、口縁hとした貼付口縁とよばれるものが3点確認されている点は注意される(27・28・33)。この形態の口縁部は他のトレンチでは1点も出土していないことから、後円部西側にのみ限定的に使用されている可能性も考えられる。なおこれらのうち2点はトレンチ西端に近い石垣の裏込め土より出土しており、後円部頂ではなく後円部



図74 2トレンチ出土円筒埴輪 (S=1/6)

2段目に配置された個体の口縁であると推定される。このほかの口縁部形態では、aやeの存在が目立っている。

後円部頂埴輪列の西側に集積していた埴輪 (37~45) は、墳頂の埴輪列に由来するものが多く含まれていると考えられる。復元底部径が40cm以上の大型の個体 (44・45) とともに、小型の個体 (43) が含まれていた。口縁部の形態はc (37)、f (38)、e (39・40) が確認されている。

このほか3-2トレンチでは、トレンチ中央のやや西寄りの位置でも埴輪が集中して検出されている。このトレンチでは後円部2段目埴輪列が検出されなかったが、埴輪が集中していた位置やレベルが埴輪列想定位置に近いことから、これらの埴輪は2段目埴輪列に由来するものを多く含むと推定される。9個体を図示しており (46~54)、口縁部の破片 (46~48) はいずれも大型に顕著に見られる口縁eを有していた。胴部の破片 (49~54) は、いずれも胴部径が35cm以上の大型の個体であり、(52) が方形透孔を有するほか、円形透孔を持つ個体が3個体存在する (49・50・54)。前者はⅡ類、後者はⅠ類に分類される。

3-3トレンチの円筒埴輪 (図76) 3-3トレンチは後円部頂と2段目において埴輪列が原位置で確認されているが、それ以外は埴輪の出土量が相対的に少なく、口縁部の小片13点が図示されたに過ぎない。

後円部墳頂付近の表土層より出土した3点 (55~57) は、口縁fが2点 (55・56)、口縁aが1点 (57) 存在する。後円部2段目埴輪列付近の耕作土層では7点 (58~64) が出土しており、口縁dが2点 (58・61)、口縁gが2点 (59・64)、口縁fが1点 (60)、口縁eが1点 (62)、口縁cが1点 (63) とその形態はバリエーションに富んでいる。このほか後円部と前方部の接続部付近の表土層や耕作土層より出土した3点が存在し (65~67)、口縁c (65)、口縁g (66)、口縁e (67) がそれぞれ1点ずつ確認されている。

3-4トレンチの円筒埴輪 (図77) 3-4トレンチでは後円部2段目の埴輪列を構成する個体 (図72-11~13) が原位置で確認されている。後円部頂ではトレンチ北端近くが埴輪列の想定される位置に相当するが、ここでは原位置を保つ埴輪列は確認されなかった。

後円部頂付近では表土直下において3点の破片が出土しており (68・80・83)、これらが後円部頂の

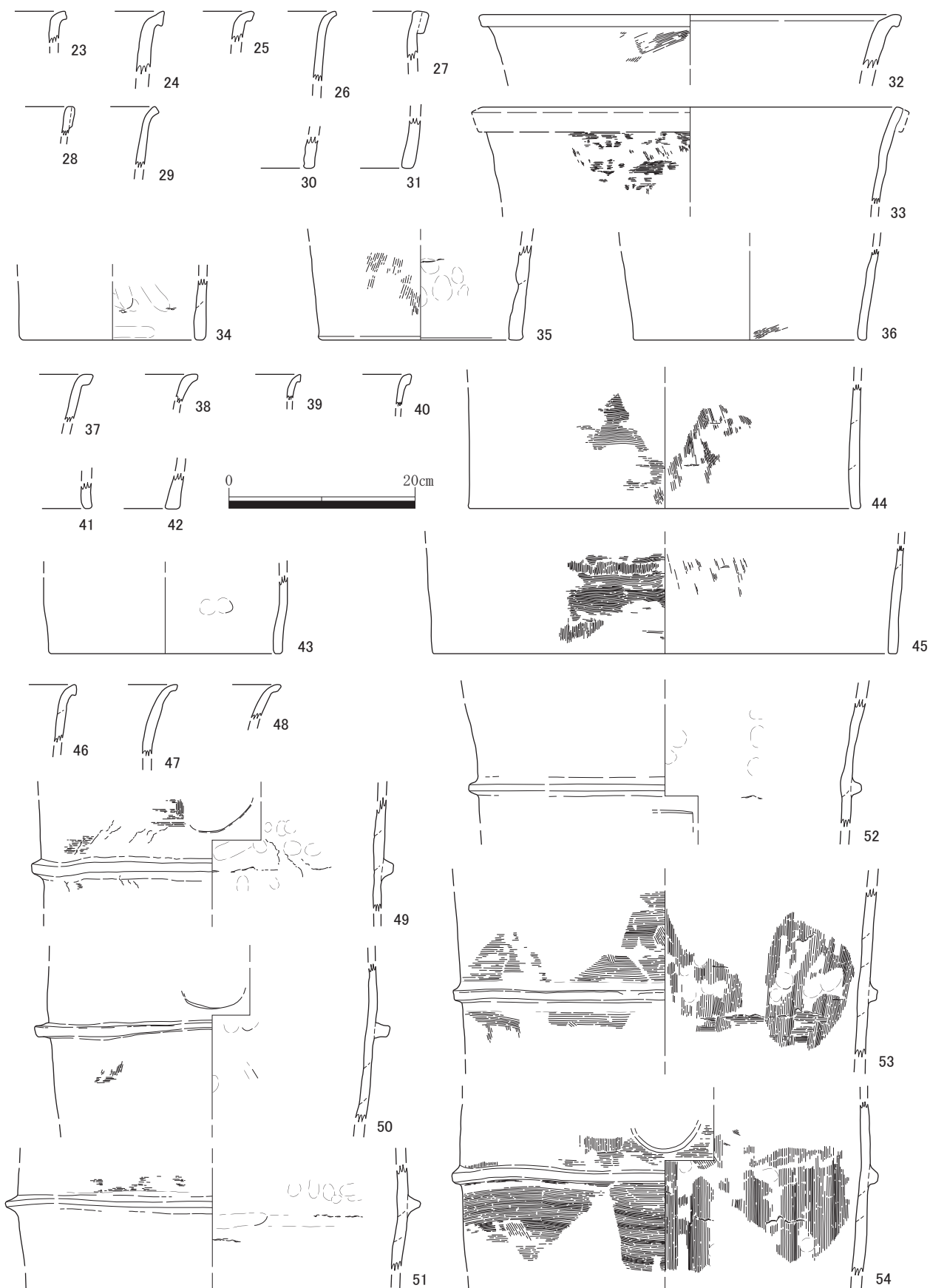


図75 3-2 トレンチ出土円筒埴輪 (S=1/6)

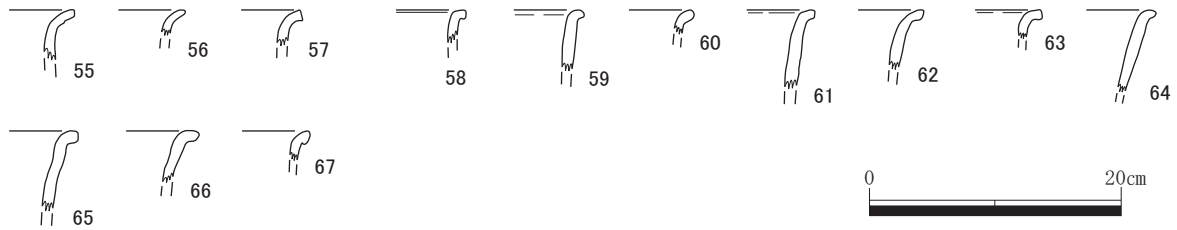


図76 3-3トレンチ出土円筒埴輪 (S=1/6)

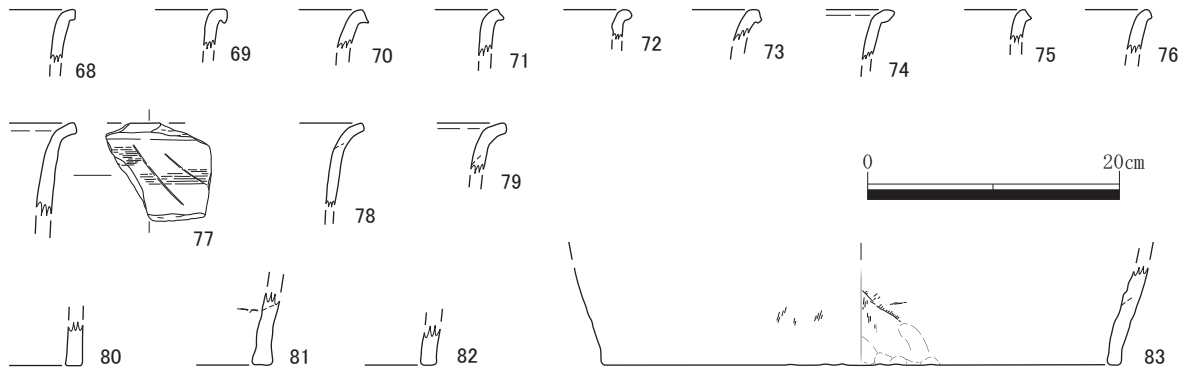


図77 3-4トレンチ出土円筒埴輪 (S=1/6)

埴輪列に由来するものである可能性が考えられる。(68)は口縁部の小片で口縁cを有する。(80)と(83)はともに底部の破片で、このうち(83)は底部径が40cm以上に復元される大型の個体であった。

このほか後円部2段目埴輪列に近いトレンチ南半部の耕作土中より、11点の口縁部の小片が出土している(69~79)。このうちの7点が口縁aと目立っており(70・71・73・75~78)、そのほか口縁b(79)、c(69)、e(74)、g(72)がそれぞれ1点ずつ確認されている。なお(77)では、口縁外面に線刻が施されていた。

4-1トレンチの円筒埴輪(図78) 後円部東側にあたる4-1トレンチでは埴輪の出土量が少なく、1段目斜面を覆う周濠埋土中より数点の埴輪片が出土している程度である。(84)は胴部径が34.6cmに復元される大型の個体で、外面に2条の直線で構成される線刻がみとめられた。

4-2トレンチの円筒埴輪(図78) 墳丘東側のくびれ部付近に位置する4-2トレンチでは、墳丘周辺の他のトレンチに比して多くの遺物が出土している。後述するように形象埴輪が複数出土しているが、円筒埴輪についても比較的残存率が高い個体が存在するなど、一定の出土量が見られた。

まず口縁部の小片は7点が出土している(85~91)。口縁dが最も多く4点出土しており(85・86・89・90)、このほか口縁eが2点(87・88)、口縁gが1点(91)確認されている。

(92)と(93)は、くびれ部基底より約1.5m東側において、破片が集中して検出されている。(92)は口縁以下3段分の1/2近くが残存しており、口縁部の1段下に円形透孔が穿たれている。口径は31.2cmで小型に分類され、口縁dを有していることから、Ⅲ類に分類することができる。外面にはヨコハケが顕著に観察される。(93)は口縁以下4段分が残存する個体で、口径が29.9cmの小型の円筒埴輪である。口縁d、突帯(ii)を有し、口縁部の1段下と3段下には円形の透孔が2方向に穿たれること

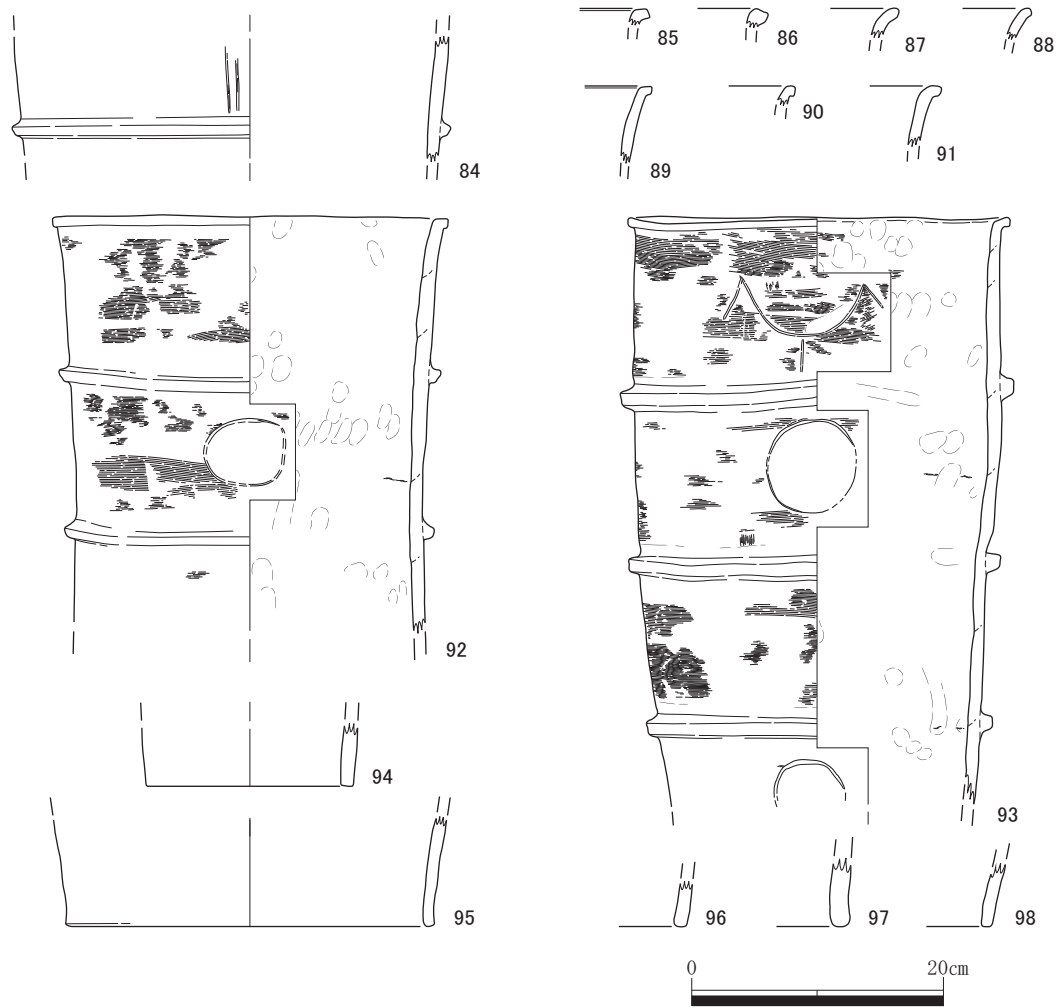


図78 4-1、4-2 トレンチ出土円筒埴輪 (S=1/6)

から、Ⅲ類に分類することができる。外面にはヨコハケが顕著にみとめられ、埴輪棺1に使用された円筒埴輪(230)と共通するハケメパターンが確認されている。なお口縁部の外面には、円弧を描く曲線と3条の直線で構成される線刻がみとめられる。

このほか底部の破片が5点確認されている(94~98)。いずれも残存率が低いですが、(94)は底部径16.5cmで小型、(95)は底部径29.3cmで大型に分類される。

4-5 トレンチの円筒埴輪(図79) 4-5 トレンチでは埴輪棺1において後述のように残存率の高い個体が複数確認されている。このほかトレンチ西側において壺形埴輪の破片がまとまって出土しているが、円筒埴輪の出土量は少なく、図示できたのは7点である。

口縁部の破片は3点で(99~101)、いずれも埴輪棺1を構成する埴輪が多く含まれていた攪乱埋土中より出土している。(99)は口縁b、(100)・(101)は口縁eを有している。底部付近の破片は4点で、(102)~(104)は現代耕作土から、(105)はトレンチ西側の転落石とともに出土している。このうち(105)は底部の約1/2周が残存しており、基部から外側に開くようにして立ち上がっている点で他の個体と異なっている。後述する壺形埴輪(180~185)とともに出土していることから、壺形埴

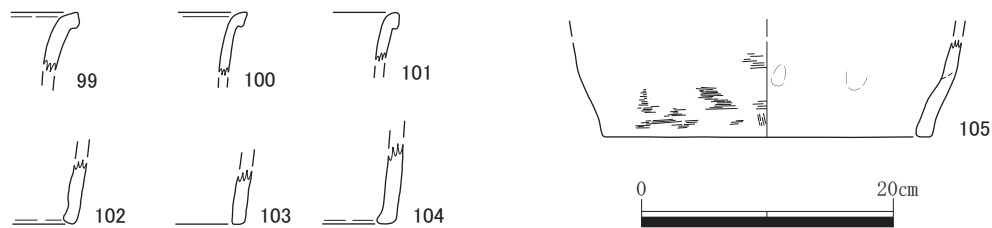


図79 4-5 トレンチ出土円筒埴輪 (S=1/6)

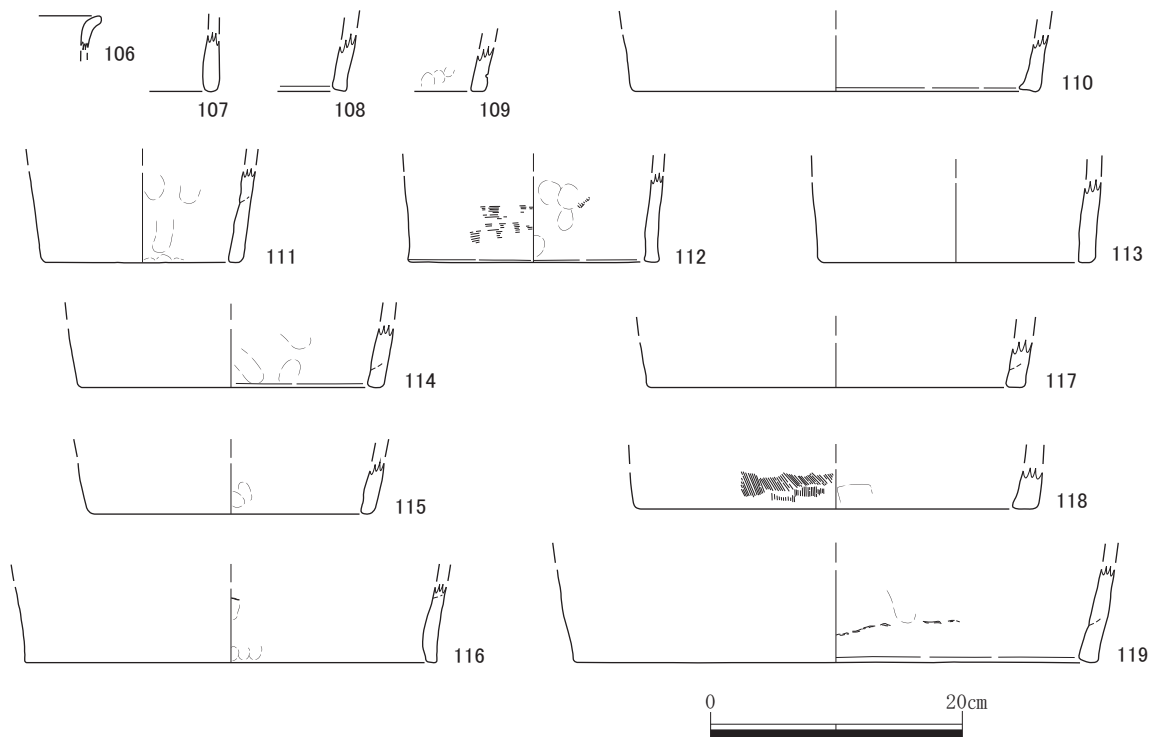


図80 4-6 トレンチ出土円筒埴輪 (S=1/6)

輪の底部である可能性も考える必要があるだろう。

4-6 トレンチの円筒埴輪 (図80) このトレンチでは主に耕作土中から埴輪が出土しており、口縁部片よりも底部片が多く出土している点で他のトレンチとは異なる傾向を示している。

口縁部片は口縁 f に分類されるものが1点出土しているのみである (106)。底部片は計13点出土しており (107~119)、大型に分類されるものが5点 (110・116~119)、小型に分類されるものが5点 (111~115) 存在する。なお後述するように、4-6 トレンチでは埴輪の出土量はそれほど多くなかったが、壺形埴輪の破片は一定量確認されている (図86-186~197)。円筒埴輪の口縁部がほとんど出土していないことを考慮すると、ここに挙げた底部片には壺形埴輪が含まれている可能性が考えられる。

5-1 トレンチの円筒埴輪 (図81) 5-1 トレンチでは多くの転落石が集積するように検出されているが、埴輪の出土量は少なく、図化できるものは6点にとどまっている。

口縁部片は3点で、(120) は口縁 e、(122) は口縁 g に分類される。(121) は円筒埴輪の口縁端部として図示したが、先に挙げた8つの口縁部形態に該当するものは存在しない。小片であるため判断は

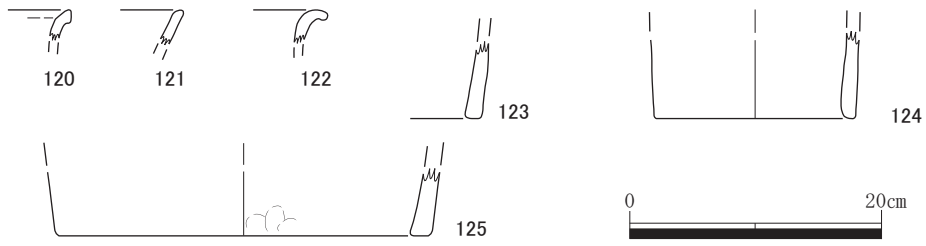


図81 5-1 トレンチ出土円筒埴輪 (S=1/6)

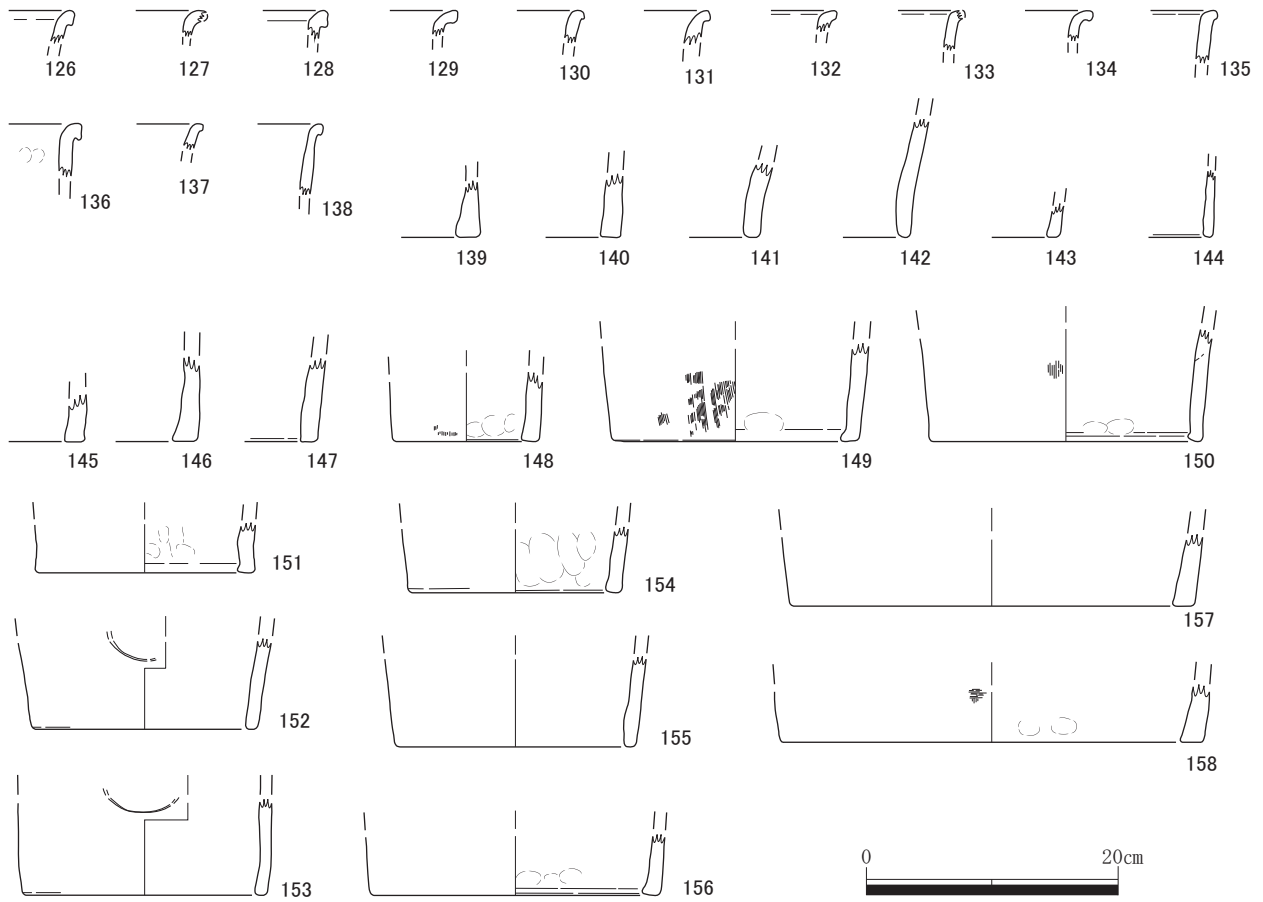


図82 5-2 トレンチ出土円筒埴輪 (S=1/6)

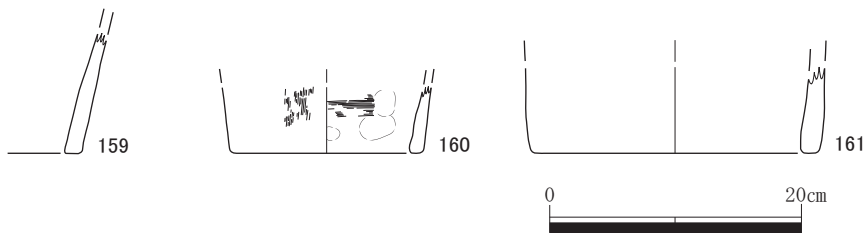


図83 5-3 トレンチ出土円筒埴輪 (S=1/6)

難しいが、円筒埴輪ではない可能性も考えられる。

5-2 トレンチの円筒埴輪 (図82) 西側の2段目くびれ部付近にあたる5-2 トレンチでは、西端部分で後円部1段目埴輪列を構成する3個体の円筒埴輪 (図73-18~20) が原位置で確認されている。また1段目平坦面において2基の埴輪棺が検出されており、このうち埴輪棺2を構成する円筒埴輪については図91に示し、後で報告することとし、ここではそれ以外の33点について報告する。

口縁部付近の小片は13点存在する (126~138)。このうち2点は耕作土下の整地土層より出土しており (126・127)、うち (126) は口縁 e を有する。2段目斜面及び墳丘直上の流土層からは9点確認されており、多様な口縁部形態を示している (128~136)。後円部1段目埴輪列に近いトレンチ西端部分では2点が出土しており (137・138)、このうち (137) はⅢ類の円筒埴輪に顕著に見られる口縁 d を有している。

底部付近の破片は20点存在し (139~158)、このうち11点が反転復元できる個体であった。このうち大型に分類されるものは2点にとどまり (157・158)、それ以外は小型で底部復元径が20cmに満たない個体が複数存在している。残存率が低く正確な底部径が復元されていない可能性もあるが、円筒埴輪以外の埴輪である可能性も考える必要があるだろう。なお (152)・(153) は底部に円形ないし半円形の透孔を有している。両者は同一個体である可能性もあり、円筒埴輪ではない可能性もあるが、円筒埴輪としてはⅣ類に分類することができる。

5-3 トレンチの円筒埴輪 (図83) 前方部北東側の渡土堤接続部付近にあたるこのトレンチでは埴輪の出土量が少なく、図示できるものとしては底部片が3点存在するのみである (159~161)。底部径が復元される2個体 (160・161) はいずれも小型に分類されるものであった。なお (161) は他の円筒埴輪には見られないような白味がかかった色調を呈している。

6-2 トレンチの円筒埴輪 (図84)

前方部北西側の6-2 トレンチで検出された周濠の北端部において、その埋土中から埴輪片が出土している。(162)・(163) とともに突出度が高い突帯 (i) を有している。反転復元を行わなかったが、(162) については胴部径が50cmに及ぶような大型の個体であったと推定される。

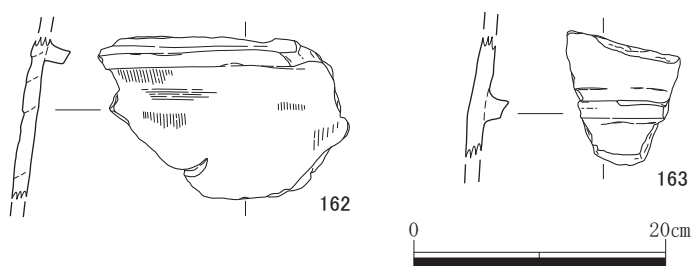


図84 6-2 トレンチ出土円筒埴輪 (S=1/6)

(6) 各トレンチ出土の壺形埴輪

第3次調査トレンチの壺形埴輪 (図85) 3-2 トレンチで3点 (164~166)、3-3 トレンチで2点 (167・168)、3-4 トレンチで4点 (169~172) が確認されている。

(164) ~ (170) は口縁部の小片である。円筒埴輪のように端部付近を明確に屈曲していないことから、壺形埴輪の口縁部であると判断しているが、別の形態の埴輪である可能性も有している。(171)

は鏝付近の破片である。厚みがあるが接合部からの張り出しは約3.5cmで、他の個体と比較してやや小さい。(172)は口縁端部近くの破片である。やや厚みがある点などで他の個体と異なるが、残存率が高い個体と口径がほぼ一致することから、壺形埴輪であると判断した。

第4次調査トレンチの壺形埴輪 (図86) 4-1トレンチで1点(173)、4-2トレンチで4点(174~177)、4-3・4トレンチで2点(178・179)、4-5トレンチで6点(180~185)、4-6トレンチで12点(186~197)が確認されている。

口縁端部の小片(187~189)は、図85の(164)~(170)と同様に円筒埴輪ではないと考えられることから、壺形埴輪であると判断しているが、確証はない。口縁端部が丸くおさまられるもの(187)と、端部に面が形成されるもの(186・188)が存在する。同じく口縁端部付近の破片である(195)は、復元口径や内外面の調整が、残存率の高い個体とほぼ一致している。このことから(195)については壺形埴輪と見てよいであろう。

口縁部突帯付近が残存する個体は5点存在する(173・174・178・184・196)。このうち(178)を除くと、いずれも一次口縁と二次口縁の境界部の屈曲が不明瞭である。

頸部付近のみが残存する個体は5点存在する(180・181・189・191・192)。頸部突帯の形態は、断面形状が三角形で突出度の低いもの(189・191)、断面形状が三角形で、突出度が高いもの(180・181)、断面形状が台形を呈するもの(192)が存在し、多様である。

(175)~(177)や(190)・(193)・(194)は、鏝の破片である。これらのように剥がれ落ちた鏝の多くは、(185)などに見られるような接合部下方の粘土充填の痕跡が見られない。

(182)・(183)は鏝接合部付近が残存する個体である。鏝は(182)では概ね水平方向に張り出すが、(183)では水平よりもわずかに上方に向けて張り出している。両者ともに接合部の下方に粘土が充填され、鏝の接合が補強されている。なお(183)では底部に円形透孔が確認される。

(185)は壺形埴輪の中で最も残存率が高い個体であり、口縁部を欠いているものの、肩部から底部にかけてはよく残存している。頸部突帯は比較的突出度が高く、断面形状は三角形を呈する。肩部は丸みを帯びているが、鏝接合部で最大径を測り、これより上方で張り出す形態ではない。鏝は概ね水平方向に3.6cmほど張り出しており、端部には幅1cm余りの面が形成されている。なお接合部の下方には、(183)などと同様に粘土が充填されている。底部はわずかに外傾して立ち上がる形態で、中ほどには円形の透孔が2方向に穿たれている。

第5次調査トレンチの壺形埴輪 (図87) 5-1トレンチで1点(198)、5-2トレンチで17点(199~215)、5-3トレンチで4点(216~219)が出土している。

口縁端部付近の破片(199~204)は、第3次・第4次調査トレンチのものと同様に円筒埴輪ではないと判断されるが、壺形埴輪ではない可能性も有している。

(198)・(206)・(207)・(213)・(217)~(219)は頸部付近が残存する個体である。頸部突帯の形状にバリエーションがあり、(198)や(218)では断面形状が台形を呈し、(217)では断面三角形で突出度も低くなっている。

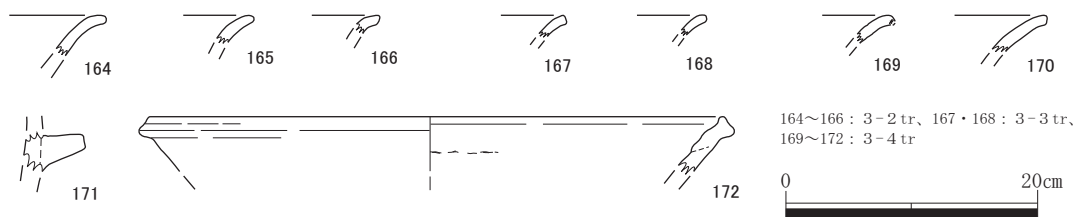


図85 第3次調査トレンチ出土壺形埴輪 (S=1/6)

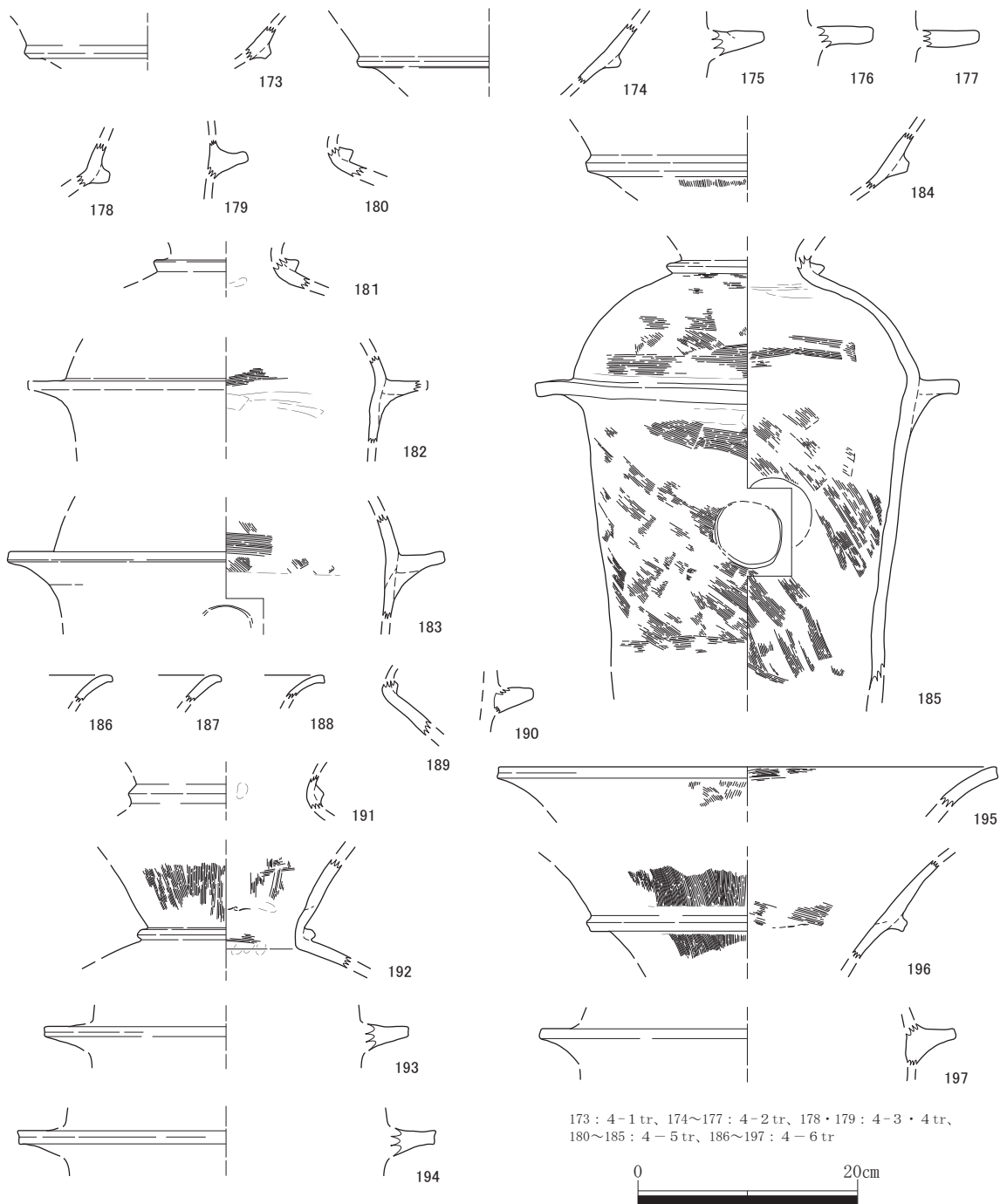


図86 第4次調査トレンチ出土壺形埴輪 (S=1/6)

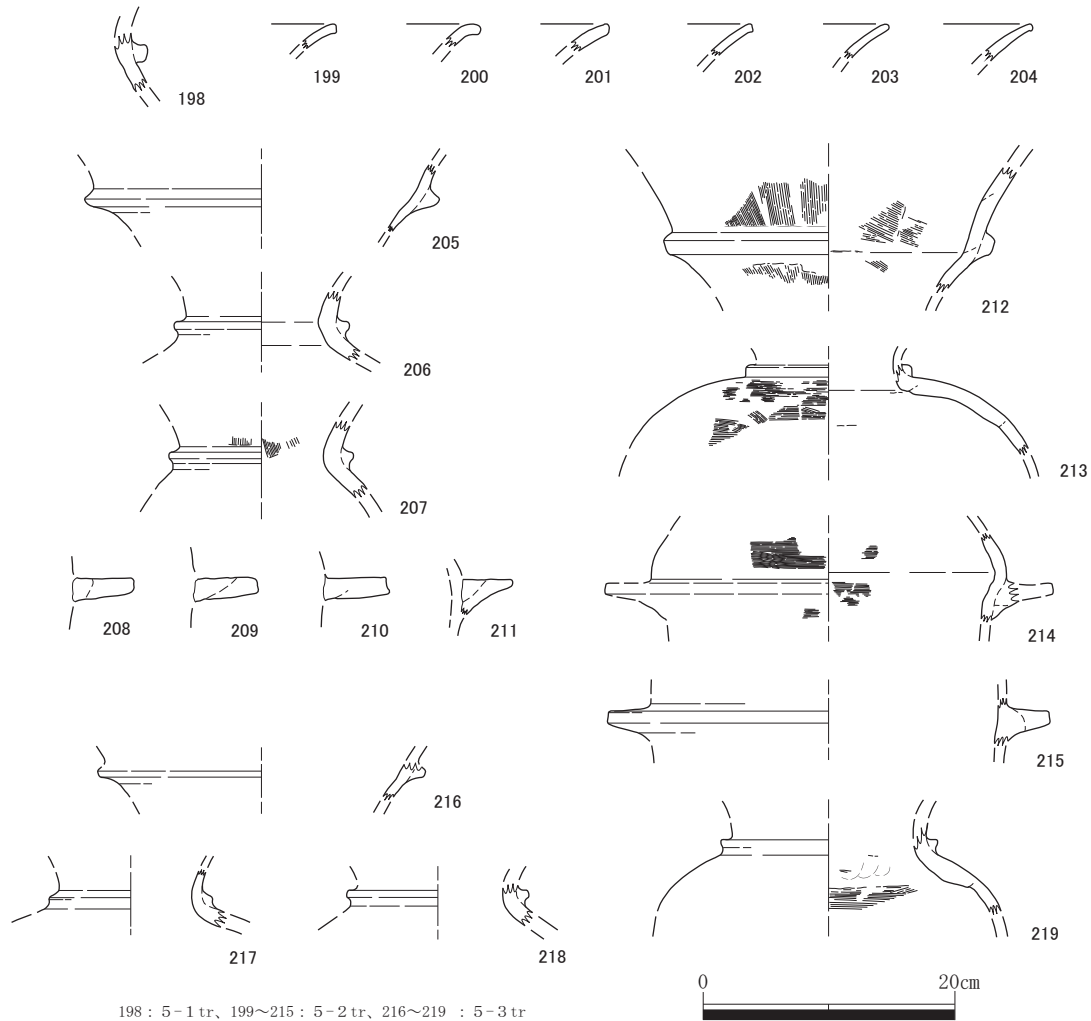


図87 第5次調査トレンチ出土壺形埴輪 (S=1/6)

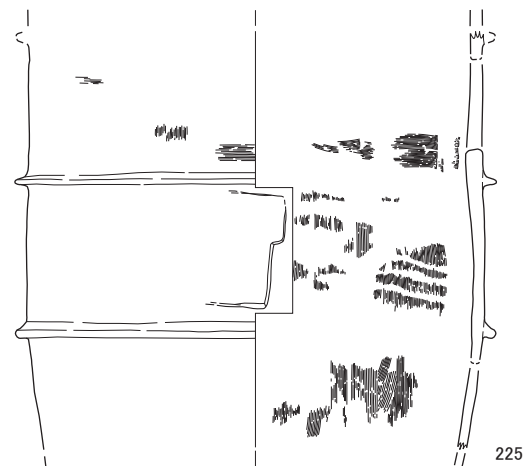
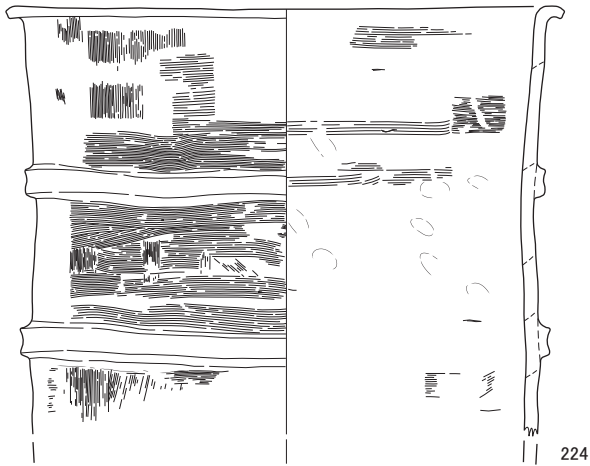
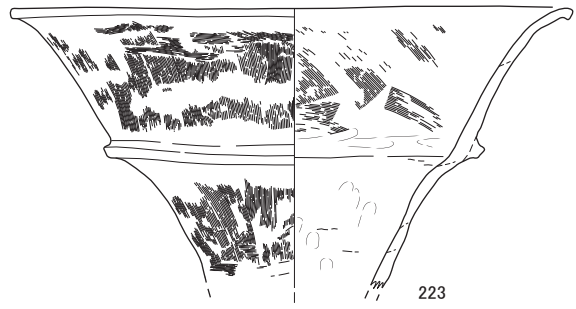
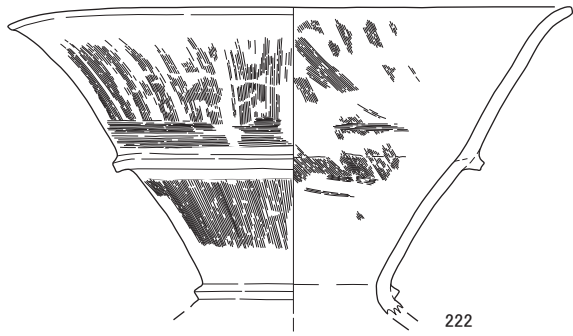
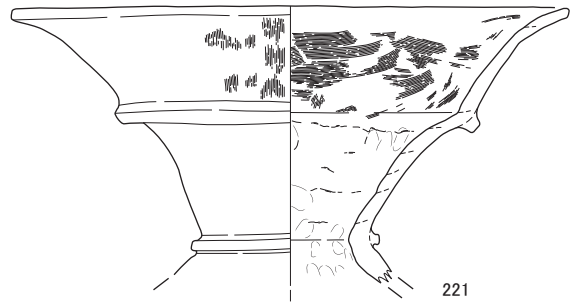
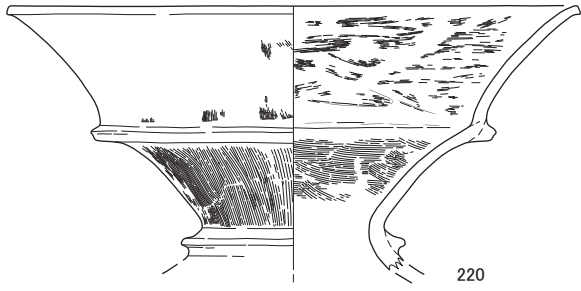
(205)・(212)・(216) は口縁部突帯付近が残存する個体である。後述する図88の (220) や (221) と比較すると、口縁部の開きはやや小さいと考えられる。なお (212) では口縁部外面にタテハケ、二次口縁部の内面に左上がりのナナメハケが観察される。

(208) ~ (211) は鏝が剥がれ落ちた状態で出土したものである。いずれも接合部の下方に粘土が充填されたような痕跡は見られなかった。(214)・(215) は鏝接合部付近が残存する個体で、前者では鏝接合部の下方に粘土が充填されている。

(7) 埴輪棺に使用された埴輪

埴輪棺 1 に使用された埴輪 (図88~90) 前方部上面で確認された埴輪棺 1 には、10個体の円筒埴輪と 4 個体の壺形埴輪が使用されていた。

壺形埴輪 (220) ~ (223) はいずれも口縁部付近のみが残存しており、意図的に口縁部のみを打ち欠いて使用しているものと考えられる。(220) は棺の南東側小口部に使用されたもので、頸部から口縁部までが残存する。口径44.9cmに対して口縁部高は18.9cmとやや低く、一次口縁部・二次口縁部とも



0 20cm

図88 埴輪棺 1 に使用された埴輪① (S=1/6)

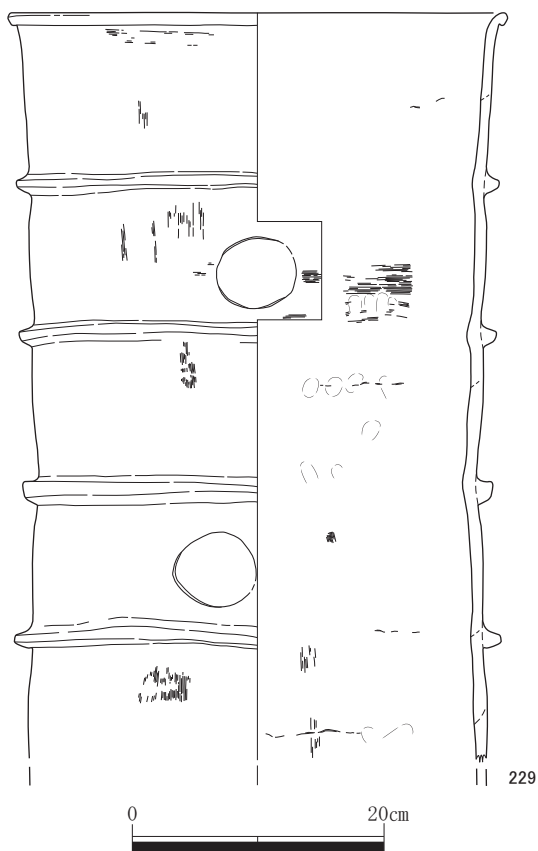
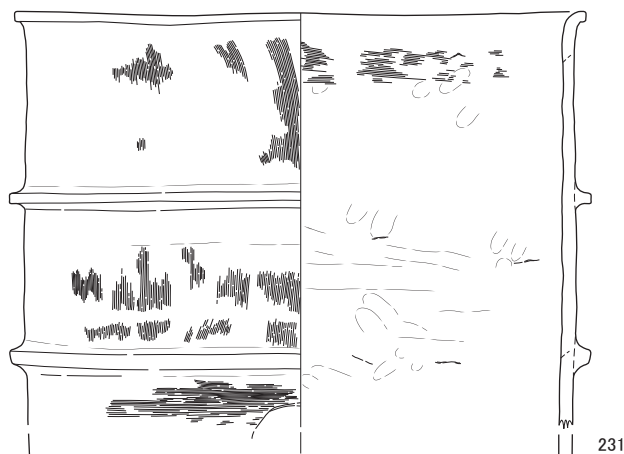
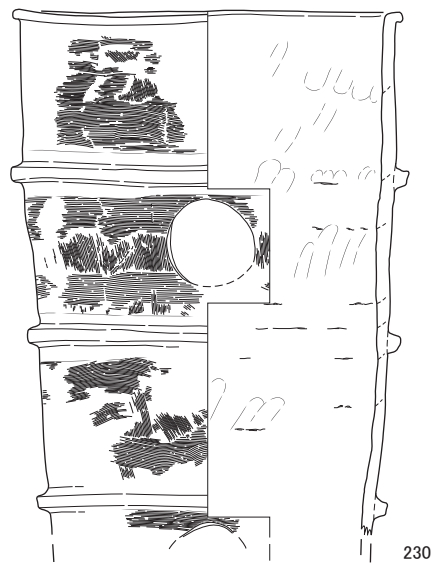
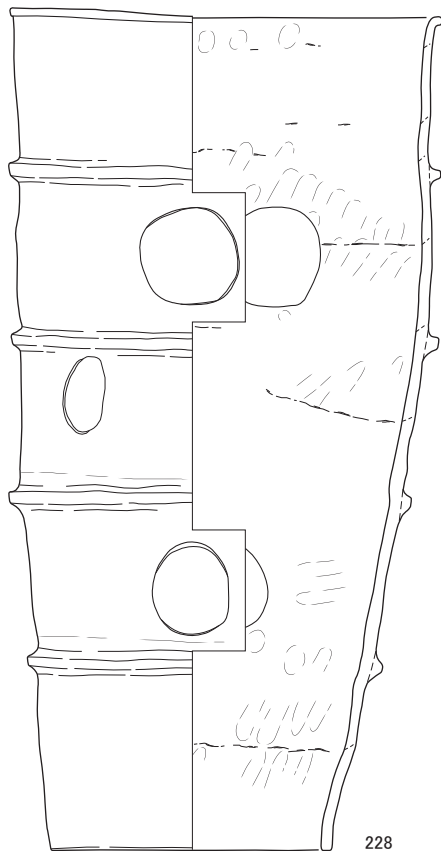


図89 埴輪棺 1 に使用された埴輪② (S=1/6)



図90 埴輪棺 1 に使用された埴輪③ (S=1/6)

に強く外反しており、両者の間の屈曲部は明瞭である。口縁端部には明瞭な面を有し、口縁部外面にはタテハケが顕著に見られる。内面は一次口縁・二次口縁ともに主にヨコハケにより仕上げられるが、前者のハケメの条線は1 cmあたり6条と粗く、後者では1 cmあたり14条以上と非常に細かくなっている。これらは別の工具を用いて施されたものと考えられる。(221) は大きく2分割にされた状態で棺上面において検出された個体であり、棺上面の継目や透孔を塞ぐことを目的として置かれたものと考えられる。頸部付近から口縁部までのほぼ全体が残存しており、口縁部高は18.8cmとやや低く、一次口縁部・二次口縁部ともに強く外反し、両者の間の屈曲は明瞭である。頸部突帯は断面形状が台形で、

口縁端部には面が形成されている。器面調整は、二次口縁部外面はタテハケが観察され、内面は二次口縁部に主にヨコハケがみとめられる。

(222) は (221) と同様に棺上面において検出された個体である。頸部から口縁部にかけて良好に残存しており、口縁部高は22.6cmで、(220) や (221) と比較して高くなっている。一次口縁部・二次口縁部ともにほぼ直線的に広がる形態で、両者の境界の屈曲は明瞭ではなく、口縁端部付近においてやや外反している。口縁端部の面は不明瞭で、頸部突帯の断面形状は三角形を呈する。口縁部の外面調整はタテハケが基本であるが、口縁部突帯の直上にはヨコハケが施されている。内面は二次口縁部を中心に、左上がりのナナメハケがみとめられる。(223) は棺の北西小口部に使用されたもので、口縁部が全周するほどに残存している。口縁部高は22cm以上と高いもので、一次口縁部・二次口縁部ともに直線的に広がり、それぞれ上端部において外反する形態であり、口縁端部には面が形成されている。外面調整はタテハケが中心で、口縁端部に近い部分でヨコハケがみとめられる。内面は二次口縁部に左上がりのナナメハケが施されていた。

(224) は口径42.8cmの大型の円筒埴輪で、南東小口寄りの棺側部分に使用されていた個体である。口縁部以下の1/3周分が残存するが、透孔は確認されていない。口縁cを有し、突帯は他の個体に比して幅が広く、突帯(iii)に分類することができる。(225) は胴部の1/4周程度が残存する円筒埴輪で、(221)・(222)などと同様に棺の上面に使用されていた。3段分が残存しており、中央の段には鈎形の透孔が穿たれ、その上下の段には、約90°方向を違って円形透孔が配されている。上下幅が狭くやや下方に突出する突帯(iv)を有しており、I D類に分類することができる。(226) は南東小口寄りの位置において棺本体に使用されていた円筒埴輪で、口径41.1cmの大型の個体である。口縁より1段下と3段下に、正方形に近い方形透孔が4方向に穿たれている点が大きな特徴であり、II A類に分類することができる。また口縁の1段下の胴部外面には線刻が施されている。この個体は棺本体に使用されているが、口縁部側の3段分が残存しているに過ぎないことから、棺に転用する際に下半部が打ち欠かれたものと推定される。(227) は大型の円筒埴輪で、棺の両側部と上面において使用されていた。この個体は透孔に特徴があり、まず口縁部には1方向に半円形の透孔が穿たれ、それに相対する方向の1段下にも同様の透孔が配される。これに加えて長方形の透孔が、口縁の1段下及び3段下に、4方向に穿たれる。こうした透孔の状況から、II B類に分類することができる。

(228) は北西小口寄りの部分で棺本体として使用された円筒埴輪であり、全体像がわかる数少ない個体の一つである。4条突帯5段構成で器高は66.7cmを測り、口径は33.7cmで小型に分類される。2段目と4段目にそれぞれ円形透孔が2方向に配されており、小型の個体に顕著に見られる口縁dと突帯(ii)を有し、III類に分類される。なお3段目には焼成後に穿たれた径6cmほどの穿孔があるが、埴輪への転用に際して穿たれたものかどうかは不明である。(229) は南東側小口近くの棺側部分に使用されていた。口径が38.8cmに復元される大型の円筒埴輪で、口縁の1段下と3段下に円形透孔が穿たれている。(230) は北西小口寄りの棺側と上面に使用されていた個体で、口径30.1cmの小型の円筒埴輪である。口縁の1段下と3段下に円形透孔が2方向に穿たれ、口縁dを有しており、III類に分類さ

れる。この個体は器面調整が比較的良好に残存しており、少なくとも胴部の1/4周に及ぶストロークの長い二次調整ヨコハケが施されている。ヨコハケには静止痕は見られず、口縁より1段下や2段下では1段を1周で仕上げるような幅の広い原体が使用されている可能性があるが、段の中央部にヨコハケが及んでいる部分が少なく、明確には判断できなかった。なおこの個体と4-2トレンチ出土の円筒埴輪(93)において、ハケメパターンの一致が確認されている(写真12)。ともにⅢ類に分類され、同工品である可能性が考えられる。

(231)は北西小口の(223)の外側に、口縁部を上に向けて立てられていた円筒埴輪である。口径44.8cmを測るかなり大型の個体で、口縁の2段下において円形透孔が穿たれる点が大きな特徴である。

(232)もまた大型の円筒埴輪で、口径は47.8cmを測る。棺の北西小口寄りの棺側部分に使用されていた個体である。口縁の1段下と3段下に円形透孔が4方向に穿たれているようであり、ⅠB類に分類される。なお口縁部には、径1cm余りの小穿孔が穿たれていた。

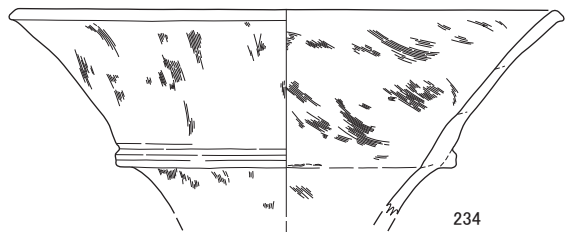
(233)は棺の中央部分に使用されていた円筒埴輪で、おそらく7条突帯8段構成であると推定されるが、基部付近を欠いている。残存高は101.9cm、口径は56.1cmを測り、茅原大墓古墳で確認されている円筒埴輪の中でも最大のものである。突帯間及び口縁部高は、2段目と推定される段で15.1cmとやや広がるが、それ以外は12~13cmでほぼ一致している。円形の透孔が1段おきに4方向に穿たれているが、その透孔が均等に配されていない点の特徴的である。相対する2つの透孔を1対と見ると、2対の透孔が直交する位置にあるのではなく、60~70°の角度を違えて配されており、相当に偏った配置である印象を受ける。口縁部の外面には、2条の曲線で構成される線刻がみとめられる。なおこの個体は基部を欠失しているが、それ以外の部分は残存状況が良好であった。この底部の欠失は棺への転用時の打ち欠きではなく、図72の(12)などと同様に、墳丘上に配列される際に打ち欠かれたものではないかと考えられる。

埴輪棺2に使用された埴輪(図91) 前方部1段目平坦面で確認された埴輪棺2には、2個体の円筒埴輪と2個体の壺形埴輪が使用されていた。

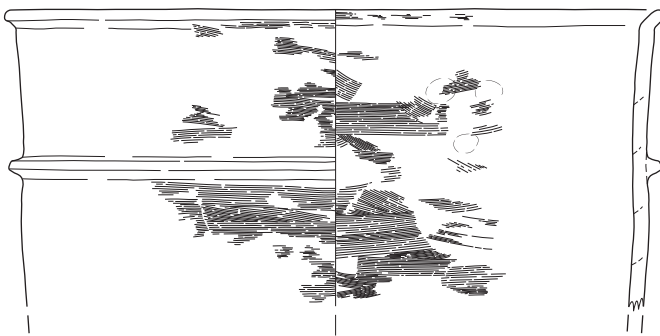
(234)は壺形埴輪の口縁部で、棺の上面において検出された。図88の(220)や(221)と比較すると、口縁部の外反の度合いは弱く、その端部には面が形成されている。外面にはタテハケ、二次口縁部の内面には左上がりのナナメハケが施されていた。(235)は壺形埴輪の底部と考えられるもので、棺の上面において使用されていた。底部の約1/2周が残存し、円形の透孔が穿たれている。

(236)は4~5段分が残存する円筒埴輪で、棺の中央と南小口側の2箇所分割して使用されていた。胴部径が37cm前後の大型の個体で、5条分の突帯が残存する。胴部には1段おきに長方形の透孔が4方向に穿たれており、ⅡA類に分類することができる。外面には数条の直線で構成される線刻が確認できる。外面調整はタテハケが見られるのみで、ヨコハケは観察されない。なおこのタテハケは、胴部から突帯の上面にも及んでおり(写真11)、二次調整のタテハケであることがわかる。

(237)は口縁部から2段分の約1/5周が残存し、棺の北寄りの位置に使用されていた。復元口径が50cm以上となる大型の個体で、口縁部形態は内面に稜を有する(b)に分類される。



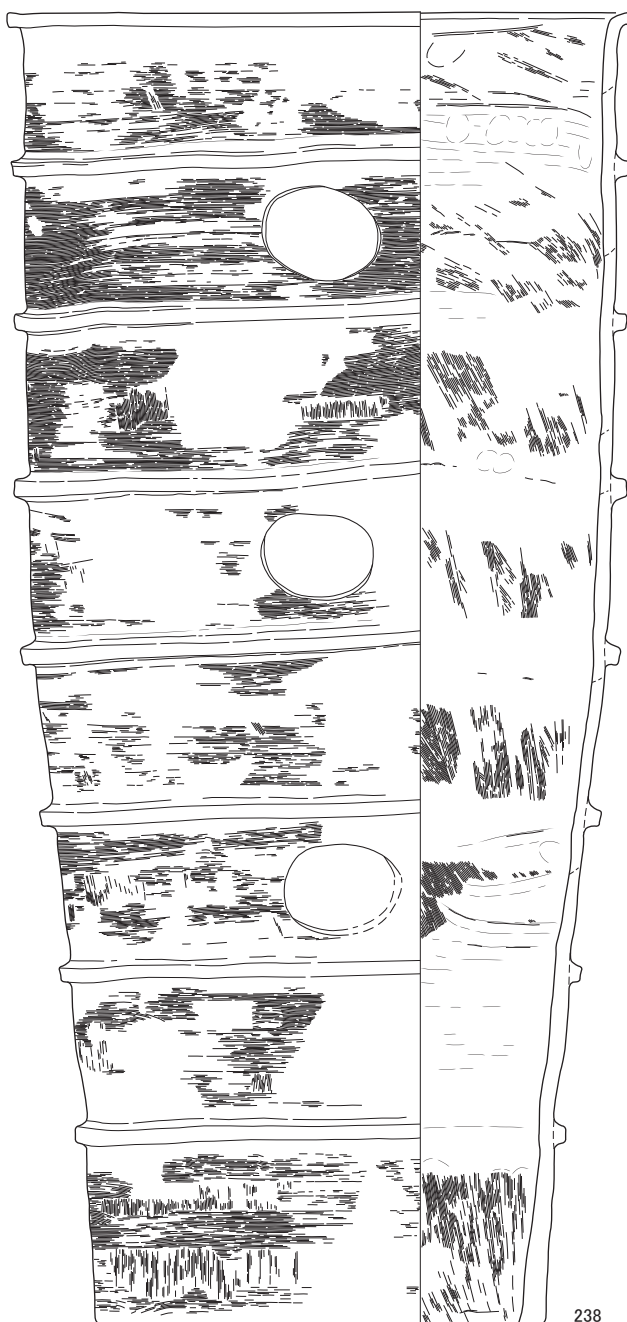
234



237



235



238



236



図91 埴輪棺 2 に使用された埴輪 (S=1/6)

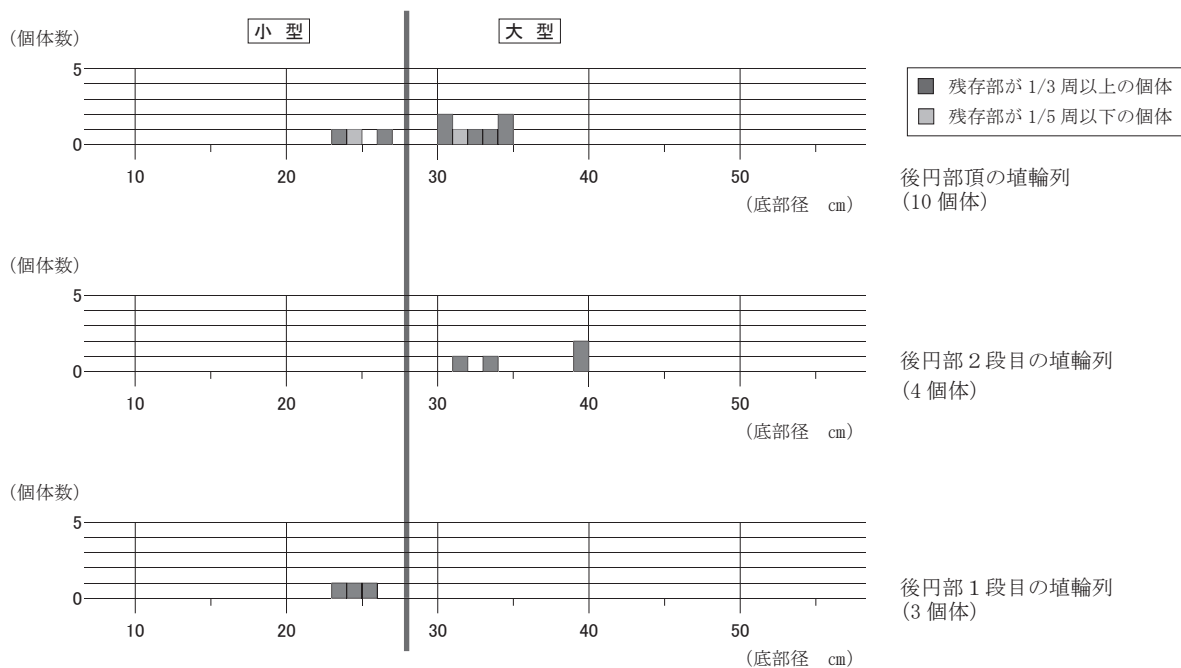


図92 配置位置別の円筒埴輪底部径の分布

(238) は底部から口縁部までの約 3/4 周が残存する円筒埴輪であり、棺の大部分を占める個体である。7 条突帯 8 段構成で、器高は 104.1cm、口径は 49.1cm、底部径は 35.4cm を測る大型の個体である。3 段目・5 段目・7 段目に円形透孔が 2 方向に穿たれ、外面の各段において一次調整のタテハケと二次調整のヨコハケが確認できる。内面においてはタテハケが顕著に存在している。

(8) 小結

円筒埴輪の配置傾向 茅原大墓古墳では各トレンチの調査成果から、後円部の各段に埴輪列が存在することが明らかとなっている。前方部では原位置で確認された個体は存在しなかったが、周辺のトレンチより一定量の埴輪が出土していることから、埴輪の配列があったと推定することができる。

後円部頂では、埴輪列を構成する 10 個体の円筒埴輪が確認されており、うち 7 個体は大型、3 個体は小型の円筒埴輪であった (図92)。埴輪の使用傾向の特徴としては、他の箇所では見られない三角形透孔を有する IC 類が 2 個体存在している点、透孔形態が円形のみで構成される個体が確認されていない点などが挙げられる。なお小型の 3 個体は、据え付けの際に大型の個体よりも底部を高い位置に置くという傾向が見られた。また埴輪列の検出範囲が少ないため明確ではないが、このように底部を高い位置に据える個体は、3-2 トレンチと 3-3 トレンチの状況から、4 個体に 1 個体程度の割合で配置されている可能性が考えられる。

後円部 2 段目の埴輪列では 7 個体が原位置で検出されている。うち底部が残存する 4 個体はいずれも大型であり (図92)、底部が打ち欠かれた個体についても胴部径が大きく、大型と判断することができるものであった。また 3-2 トレンチの 2 段目想定位置付近に集積していた個体についても、底部

の復元径がいずれも35cm以上であり、かつ口縁部形態が大型に多くに見られる口縁eであることから、いずれも大型であった可能性が高いと考えられる。このことから後円部2段目の埴輪列は、全て大型で構成されていたと推定することができる。なお3-3トレンチでは、検出された4個体のうち1個体が、他よりも底部が高い位置に据えられていた。後円部頂埴輪列で先に見たような配置の規則性が存在した可能性が考えられる。また後円部南側の3-4トレンチで検出された3個体は、底部が打ち欠かれた状態で据えられていた。埴輪棺1に使用された(233)についても同様に底部が打ち欠かれたものと考えられるが、このように底部を打ち欠く個体はいずれも大型の円筒埴輪で、かつ後円部2段目埴輪列を構成する個体に限られている可能性が考えられる。

後円部1段目の埴輪列では、原位置で検出された3個体がいずれも小型に分類されるものであった(図92)。また2段目や墳頂の埴輪列の個体と異なり、互いの個体の法量が近似しており、Ⅲ類に分類されるものであった。このほか墳丘の1段目より転落したものと推定される円筒埴輪が、4-2トレンチの東側くびれ部の墳丘端付近で2個体検出されている。これらもまたⅢ類に分類されるものであることから、後円部1段目の埴輪列では、Ⅲ類の円筒埴輪が多用されていたと考えることができる。

前方部では原位置を保つ個体は確認されていない。しかし前方部1段目平坦面は後円部1段目平坦面から連続するものであることが、5-1トレンチや5-2トレンチの状況から明らかであり、埴輪列についても後円部から連続していたと推定される。前方部東側の2トレンチでは周濠埋土中よりⅢ類に分類される小型の円筒埴輪(21)が出土しており、その可能性を補強するものと言えるだろう。

壺形埴輪の配置傾向 壺形埴輪は原位置を保った状態で検出された個体は存在しておらず、このためその配置状況を推定することは難しい。しかし出土位置などからある程度の傾向を指摘することが可能である。埴輪棺に使用されたものを除いたトレンチ別の壺形埴輪の出土状況を見ると、4-5トレンチ、4-6トレンチ、5-2トレンチにおいて比較的まとまった量が出土していることがわかる。

このうち4-5トレンチでは、後円部2段目斜面基底に近い前方部上面において出土量が多く、(185)など残存率が高い個体も存在する。この(185)は、破片が1箇所集中して検出されている(図25)ことを考えると、すぐ上の後円部2段目に配置されたものではないかと推定される。前方部前面に位置する4-6トレンチでは、壺形埴輪が一定量出土するいっぽうで、円筒埴輪の出土量が少ない点が指摘できる。図80に示すように、4-6トレンチ出土の円筒埴輪としたものの多くは底部の破片であり、これらに壺形埴輪の底部が含まれている可能性を考えると、円筒埴輪に対する壺形埴輪の比率は他のトレンチに比して高いと言えるだろう。トレンチの位置を考慮すると後円部に配置された個体が混入する可能性は低く、前方部には壺形埴輪が配列されていたと考えることができる。

5-2トレンチでは、出土位置から2箇所の配列位置を推定することができる。一つは墳丘2段目斜面を覆う流土より出土しているもので(203・205~207・214など)、これらは4-5トレンチで推定されたのと同様に、後円部2段目に置かれたものと考えられる。もう一つは後円部1段目埴輪列周辺で出土している個体(199・202・204・208~212など)である。これらには2段目平坦面より流れ落ちたものが含まれる可能性もあるが、後円部2段目斜面の基底から離れた位置で出土していることから

表4 円筒埴輪・壺形埴輪の配置

| 位置 | 埴輪列の存在 | 円筒埴輪の使用状況 | 壺形埴輪の使用状況 |
|--------|--------|--|--|
| 後円部頂 | ○ | 大型の個体が多数を占めるが、小型の個体が4個体に1個体ほどの割合で存在する。 | 使用されていないか、使用されていたとしても個体数は少ないと推定される。 |
| 後円部2段目 | ○ | 大型の個体のみで構成される可能性高い。 | 円筒埴輪とセット関係にあったかどうかは不明であるが、配置されたと考えられる。 |
| 後円部1段目 | ○ | 小型のⅢ類により構成される。 | 円筒埴輪とセットで配列された可能性が高い。 |
| 前方部 | △ | 1段目は、後円部1段目と同様の状況が推定される。2段目は不明。 | 1段目は、後円部1段目と同様である可能性が考えられる。2段目は不明。 |

(図版47)、大半は1段目埴輪列に伴うものと考えられることができる。

なお茅原大墓古墳の壺形埴輪は、鏝を有する形態であり、他の古墳でも見られるように円筒埴輪とセットで使用された可能性が考えられる。すなわち樹立する円筒埴輪の口縁部側より壺形埴輪の底部を差し込み、円筒埴輪の口縁部が壺形埴輪の鏝の下面を受けることにより、朝顔形埴輪のような全体形状を形づくったと考えられる。出土した壺形埴輪の肩部最大径は28.3～31.5cm、鏝部最大径は33.2～39.9cmであることから、これを支える円筒埴輪は小型に分類される口径30cm余りの個体が適当であるといえることができる。

これを踏まえて上記の壺形埴輪と円筒埴輪の配置傾向を見ると、後円部1段目埴輪列の円筒埴輪は小型のⅢ類であり、これに近接して出土した壺形埴輪とセット関係にあったと考えて矛盾はないだろう。ただし壺形埴輪の出土量は円筒埴輪のそれを大きく下回っており、円筒埴輪数個体に対して1個体の壺形埴輪が配されたと推定される。

いっぽう後円部2段目にも壺形埴輪の配置が考えられるが、ここでは埴輪列を構成する円筒埴輪がいずれも大型と考えられ、壺形埴輪とセットとすることは難しい状況にある。壺形埴輪が単独で据えられたか、あるいは埴輪列の中にこれと組み合わせる小型の個体がわずかながら含まれていた可能性を考える必要がある。

編年の位置付け 円筒埴輪・壺形埴輪はいずれもいわゆる野焼き焼成のものと考えられ、窖窯焼成技術が導入される以前の時期のものであることがわかる。外面調整や透孔の形態・配置はバリエーションに富んでおり、まず古い様相を持つものとしては、方形透孔を4方向に配して二次調整にタテハケを施す(236)など、埴輪棺に使用された個体の中には川西編年Ⅰ期の特徴を持つ円筒埴輪が複数存在している¹⁾。

これに対して墳丘上で出土した円筒埴輪の多くは円形透孔を有し、二次調整にヨコハケを施す個体であった。後者の中にはストロークの長いヨコハケもみとめられたが、いずれもA種ないし一瀬分類のCa種ヨコハケ²⁾(Ab種ヨコハケ³⁾)と見られるもので、静止痕を有するB種ヨコハケは確認されていない。こうした調整の特徴は川西編年Ⅱ期に位置付けられるものであるが、大和におけるB種ヨコハケの導入が古市よりも遅れることや、底部高が13～15cm低くなることなどから、埴輪検討会編年の

Ⅲ-1段階に含まれるものとして理解することができる⁴⁾。

このように茅原大墓古墳で確認されている円筒埴輪は、新旧の要素を持つ個体が混在する状況が見てとれる。古い要素を持つ円筒埴輪は埴輪棺に集中しており、これらの個体が別の古墳より持ち込まれた可能性が想起されるが、茅原大墓古墳の付近には当該期の古墳の存在は知られておらず、また少ないながらも、埴輪列を構成する個体の中にも方形透孔を有する個体が存在することから、強いて別の古墳のものとする必要はないと思われる。したがって埴輪棺に使用された個体も茅原大墓古墳に配置されたものであり、両者の形態差は工人の技術系統の違いを反映しているものと考えられる。

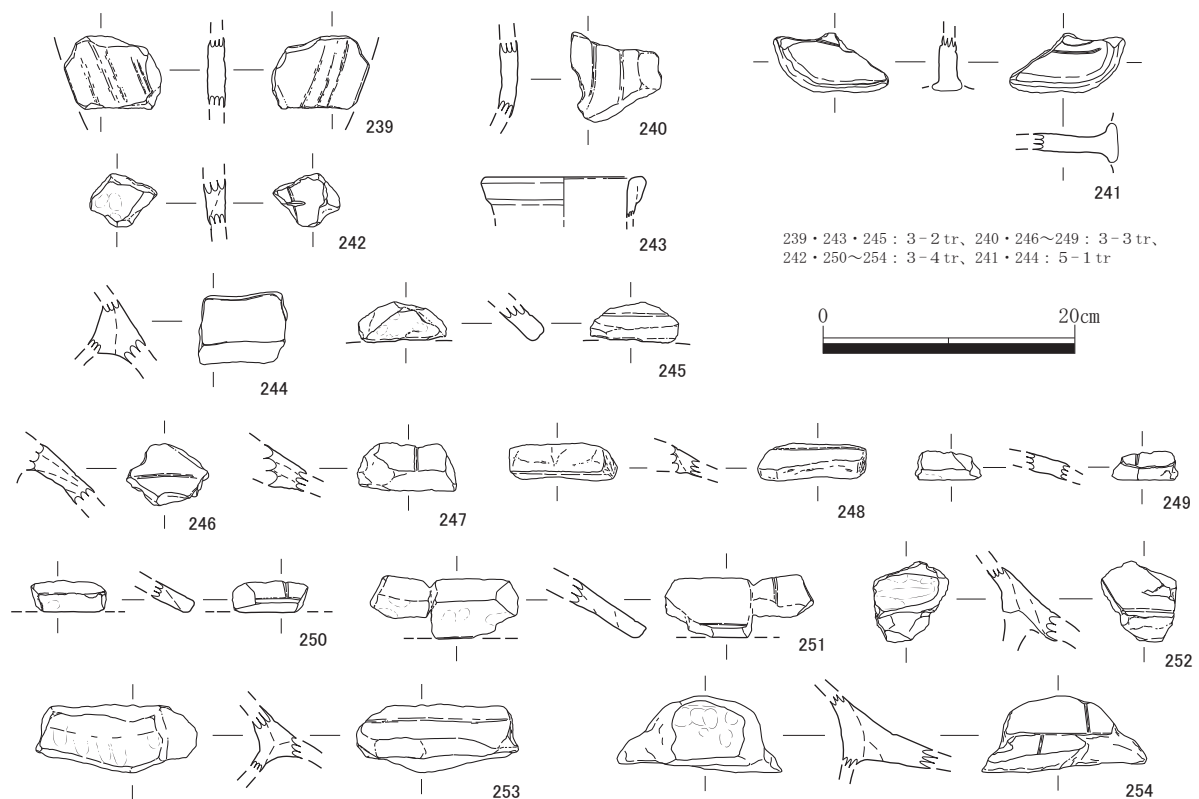
壺形埴輪の形態的特徴としては、鏝を有する点と、鏝以下の底部の高さが比較的高い点が挙げられる。鏝を有する壺形埴輪の底部高は、川西編年Ⅲ期以降次第に低くなる傾向が指摘されていることから、上記の円筒埴輪の時期と矛盾はないといえる⁵⁾。

3. 形象埴輪

茅原大墓古墳から出土している形象埴輪としては、蓋形埴輪、鳥形埴輪、盾持人埴輪などがあげられる。当節では、それぞれの形象埴輪についてその種類ごとに詳述する。

(1) 蓋形埴輪

蓋形埴輪は3次調査トレンチでの出土が多いことから、墳丘上に樹立していたものと考えられる。



239・243・245：3-2 tr、240・246～249：3-3 tr、
242・250～254：3-4 tr、241・244：5-1 tr

図93 蓋形埴輪①(S=1/6)

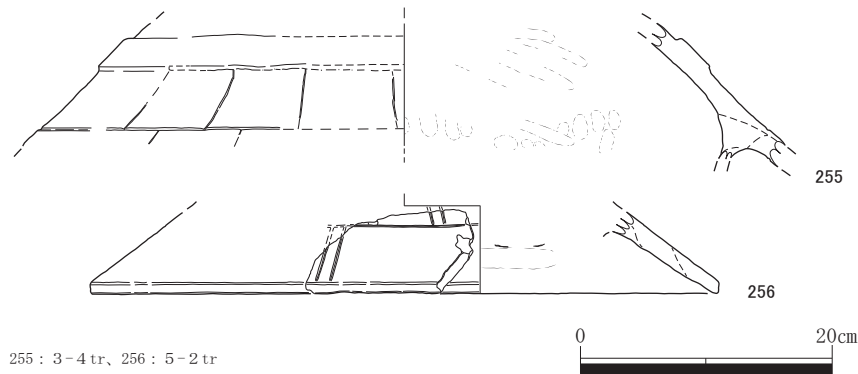


図 94 蓋形埴輪②(S=1/6)

しかしながら、完形に復元できる個体はなく、笠部や立飾部の一部が残存しているのみである。全体的に摩耗が激しく、調整が確認できないものも多い。胎土は粗いものの、焼成は良好なものが多くみられる(図93・94)。

(239) から (242) は蓋形埴輪の立飾りであるが、線刻の全体像は不明である。(241) は下部に剥離痕がみられることから、立飾部と軸部が接合する部分だと考えられる。

(242) は径が12.4cmと小さいこと、口縁端部に貼り付けが見られることから、蓋形埴輪の軸受部と考えられる。

(244) から (256) は蓋形埴輪の笠部にあたる部分である。特に (253) ～ (256) については比較的よく残存している。(255) は、笠部の中段ほどの部分であり、低平な突帯の貼り付けがみられる。突帯部分での径はおよそ44cmである。突帯より下半では、1条の線刻が放射状に施される。(256) は(255) よりも径が小さく、笠部先端の径が50cmである。また、(255) とは異なり、2条1組の沈線が放射状に巡る。(254) は笠部下半にあたる部分である。沈線が1条であることから、(255) と類似する個体であると考えられる。

以上から、蓋形埴輪のなかでも笠部の特徴が比較的明白である。製作技法の点からは、(251)・(252) の笠部断面をみると、粘土帯を継ぎ足して笠部を形成していることが分かる。

また、笠部文様に注目すると、1条の線刻がめぐる(255)と2条1組の線刻がめぐる(256)がみられる。(255) では、中位分割に低平な突帯が用いられ、沈線が1条であるため、蓋形埴輪のなかでも古い様相を示す。一方、(256) では、交互配置の2条1組の沈線がみられ、(255) よりも新しい特徴を有する。よって、茅原大墓古墳の蓋形埴輪は中位突帯を用いて1条の沈線で布張りを表現する形態から2条1組の沈線に変化する過渡期の時期の蓋形埴輪であると考えられる。

(2) 鳥形埴輪

鳥形埴輪と考えられる破片は11点あるが(図95)、完形にはならず、鶏形埴輪か水鳥形埴輪かは不明である。羽部と考えられる破片が最も多い。出土場所は4-2トレンチがそのほとんどをしめ、一部4-3・4トレンチの排土中出土のものが含まれる可能性がある。このことから、墳丘もしくは周濠のくびれ部付近にまとめて置かれていた可能性が考えられる。

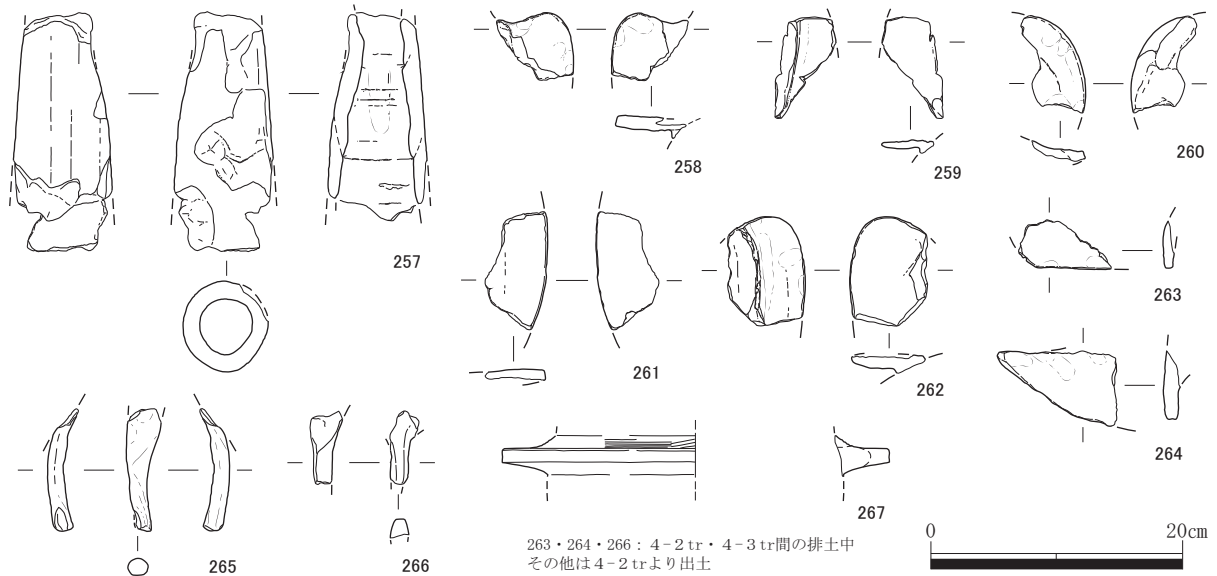


図 95 鳥形埴輪 (S=1/6)

(257) は鳥形埴輪の頸部であると考えられる。上部の径が5.3cm、下部の径が7.5cm、残存高が19cmをはかる。内面には粘土接合痕が明瞭に確認できる。

(258) ～ (264) は、鳥形埴輪の羽部であると考えられる。(258) ～ (262) は羽の前方、(263)、(264) は羽の後方の部分である。接合の方向から、(258) と (262) は別個体の鳥形埴輪についていた可能性が高く、2 個体以上の鳥形埴輪の存在が推測される。

(265)、(266) は鳥形埴輪の脚だと考えられる。接合する鳥形埴輪の胴部が残存せず、取り付けの角度などは不明であるが、(265) の剥離痕から考えると、脚の全面が胴部に貼りつけられるものではなく、脚の上部のみが胴部と接着する貼り付けであったと推測される。先端まで残っておらず、脚先の表現は不明である。

(267) は壺形埴輪の鏝に類似するが、上記の鳥形埴輪片とともに周濠埋土下層より出土しており、鳥形埴輪の基部に伴う鏝であると考えられる。

(3) 盾持人埴輪

盾の下半部と裏面の円筒部を除く、大部分が良好に残っており、残存高は67.6cmをはかる (図96)。東側のくびれ部にあたる 4-2 トレンチにおいて、一本の円筒形の埴輪の基部が樹立しており、その内側や周囲から盾持人埴輪の破片が出土していることから、この埴輪が盾持人埴輪の基部円筒である可能性が高い。全体的に焼成は悪く、盾面には黒斑が認められる。また、剥離している破片が多い。胎土は粗く、径 1 ～ 3 mm の白色粒を含む。以下で、それぞれのパーツごとにその特徴を述べる。

円筒部 (268-28) については、底部が良好に残存しており、径33.8cm、底部高14.6cm、突帯間隔13.2cmをはかる。突帯の突出度は大きい。底部には丁寧なヨコハケが施されており、体部にはヨコハケのちに一部タテハケが施されている。赤彩はみられない。2 条目突帯付近から盾面が貼り付けられていたと考えられる。盾面の高さで残存している突帯間隔から推定すると、頸部下端突帯も含め、突帯

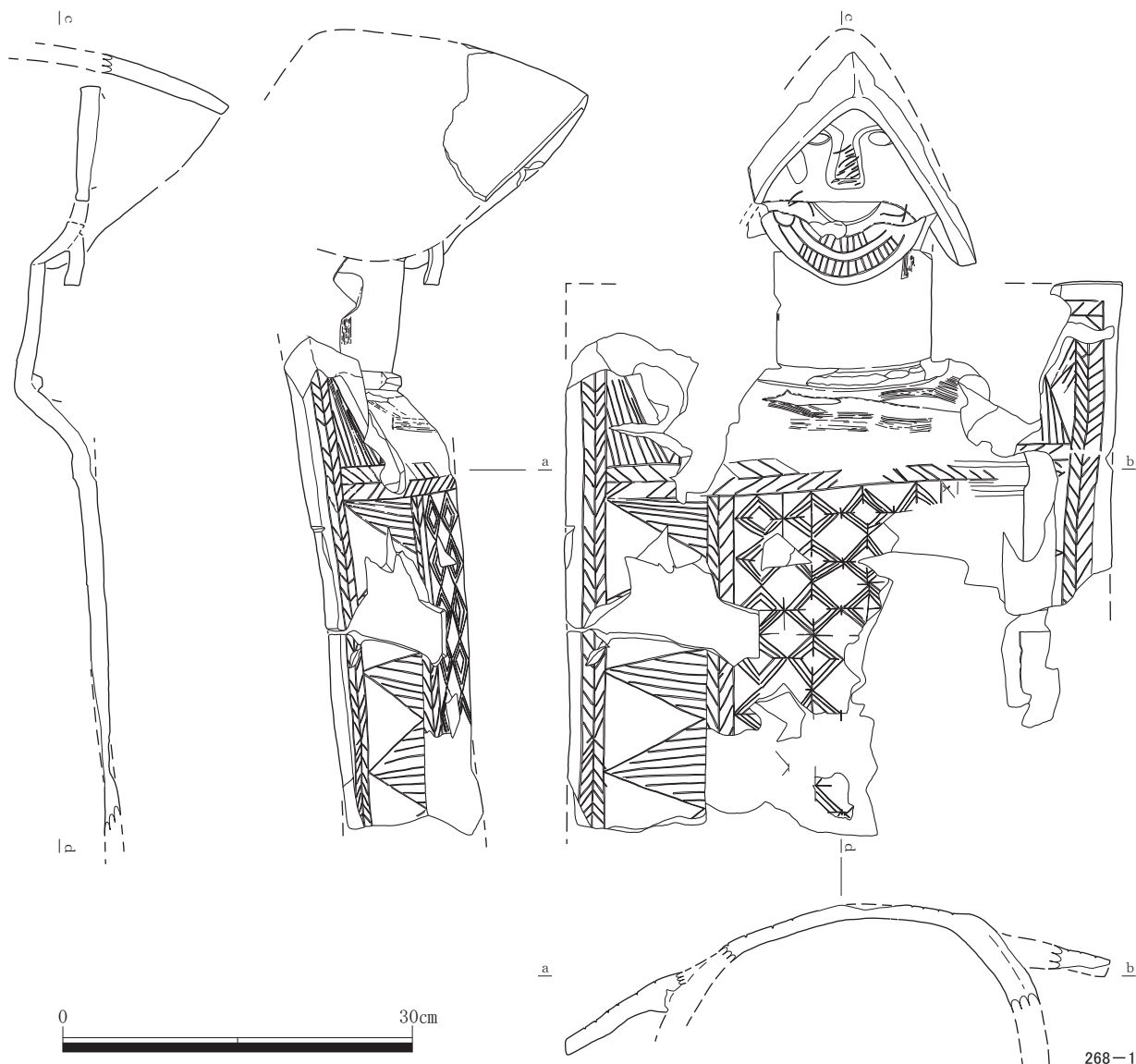


図96 盾持人埴輪①(S=1/6)

は6条であったと考えられる。円筒部から頸へは、朝顔形埴輪の壺部のようなドーム状を呈しており、円筒部の中心よりやや前寄りに頸がつく。盾面後ろの突帯直上に円形透孔が穿孔されるが、孔数は不明である。

盾面は長方形盾を表現しており、残存高47.6cm、残存幅46.5cmである。綾杉文で区切られたいわゆるⅡ字形を呈する。綾杉文の向きが変わる部分から盾面の高さを推定すると、およそ78cmとなる。綾杉文は基本的に3本の平行線を引いたのちにその内部に斜線を線刻することで綾杉文とするが、残存部左下外側の綾杉文については斜線を引いた後に再度縦方向の平行線を引き直している。外区は鋸歯文を線刻し、鋸歯文の内部は三角形の底辺と垂直な平行線で充填する。上下左右ともに盾面の外側に鋸歯文の頂点が向くと考えられる。盾面正面に向かって右上には半分の鋸歯文が線刻されたのちに消された痕跡があり、当初は右側から書き始めたものが何らかの理由で左側から再度書き直されたものと考えられる。内区は三重の菱形文を線刻する。内区の菱形文の線刻前には割付線が明瞭に確認でき、

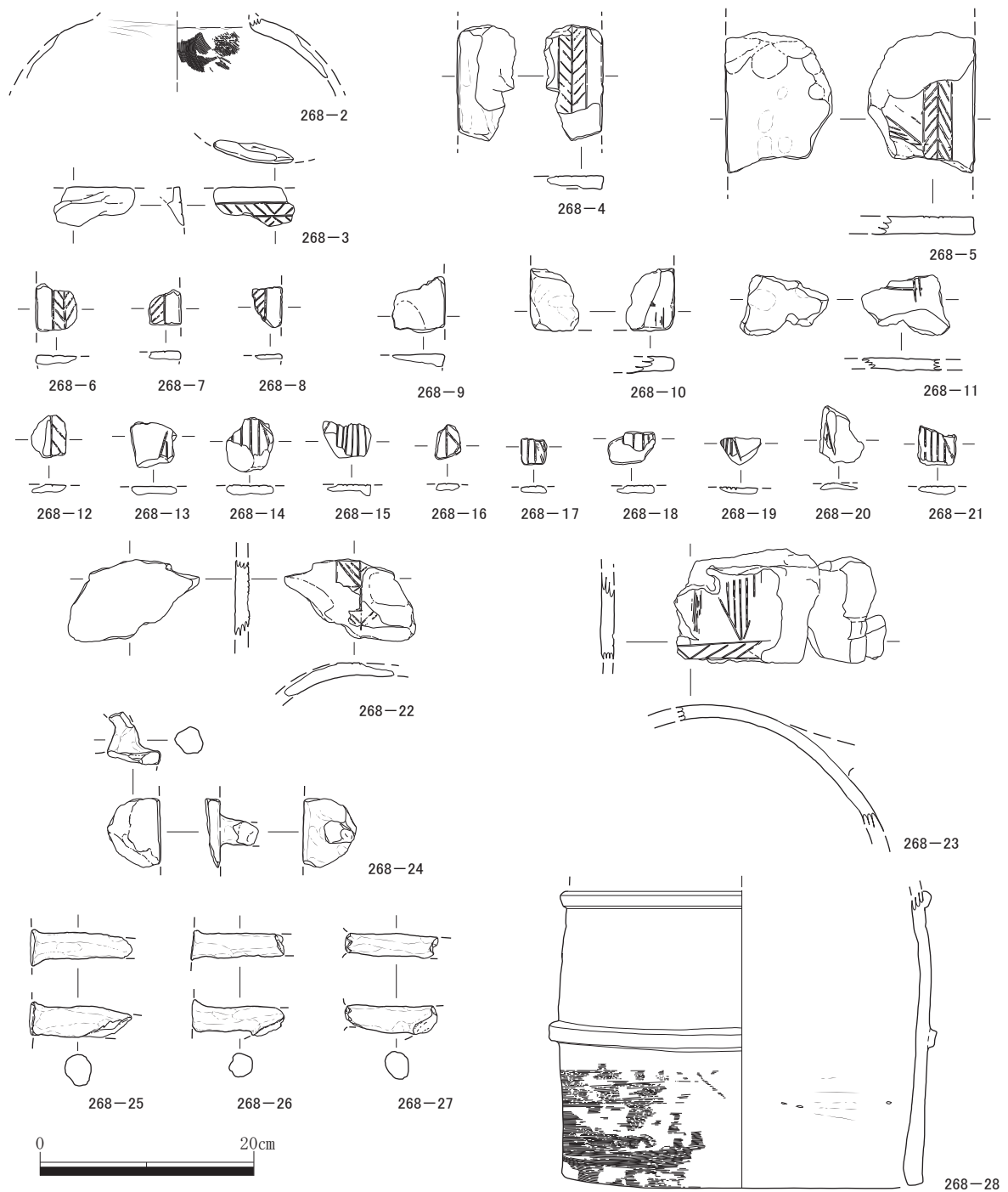


図 97 盾持人埴輪②(S=1/6)

およそ 2 cm 間隔で割付が行われている。

図97の(268-25)～(268-27)は盾部と円筒部を貼り付ける際の補強に使用された棒状の支持具である。良好に残存している3本のうちの2本はいずれも盾面正面に向かって左側の支えとなる。(268-26)は長さ8.5cmで、およそ径2cmをはかる。(268-25)は長さ9.5cm、長径3.0cm、短径2.4cmをはかる。盾面の裏側に接着する端部は、円形に剥離しており、もう片方の先端は突帯の上部に付き、貼り付けに伴う段差がみられる。この支えは全段の突帯の両側についていたと考えられる。(268-27)は、

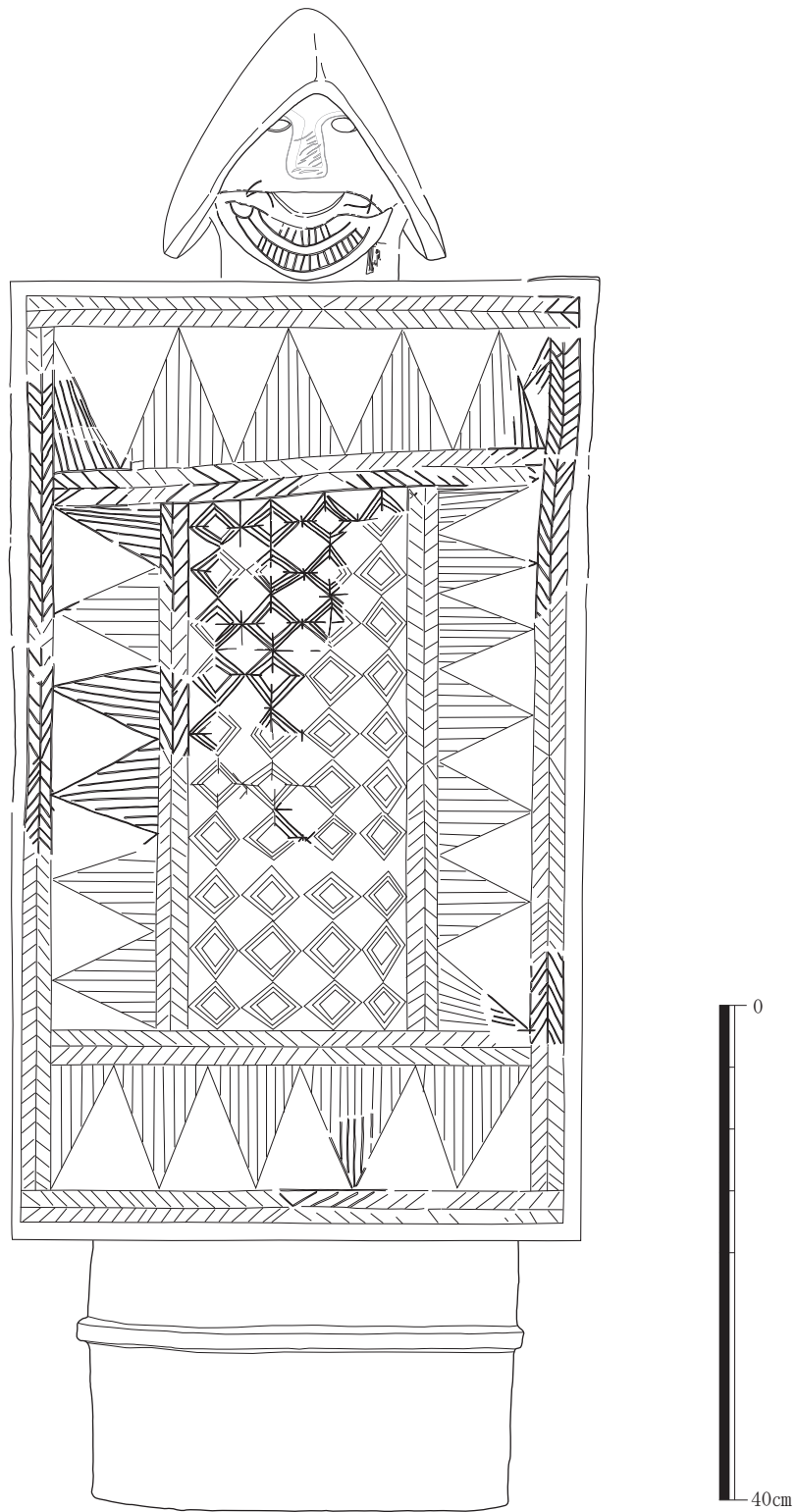


図 98 盾持人埴輪 (268) 復元図 (S=1/6)

端部が破損しているため、左右は不明である。長さ8.6cm、径およそ2cmをはかる。3本ともに焼成は良好であり、胎土は粗雑なものである。(268-25)と(268-27)には微量の赤色顔料が付着している。加えて、支えの長さが3.5cm程度と短いものもみられ(268-24)、盾の上下部と円筒をつなぐもの

も存在した可能性がある。このような棒状の支持具は盾形埴輪の中でも明確な類例がなく、茅原大墓古墳の盾持人埴輪に特有のものであるといえる。

頸部下端から頭頂部までを頭部とすると、その残存高は27.6cmをはかる。頸部下端には突帯が貼り付けられているが、円筒部の突帯とは異なり、断面が明確な台形を呈さず、三角形に近い断面をもつ。頸はやや前方に傾いており、外傾していると考えられる。頸部下端の径は13.1cm、上端の径は13.6cmとなる。頭部は冑と板状の顔面で構成される。顔面は上辺6.8cm、下辺15cmの台形の板と顎部分の粘土貼付けで表現されており、削り抜きで木の葉形の目が表現される。鼻は立体のものが剥離した痕跡のみが残る。剥離部分には粗い刻み目が施されており、剥離を防ぐ目的があったと考えられる。口は上辺が水平で下辺が弧を描く、いわゆる笑った口を削り抜きで表現している。目は幅3.0cm、高さ1.4cm、口は幅5.9cm、高さ2.0cmである。目のうえには棒状に水平に剥離した痕跡があり、眉毛が表現されていた可能性が考えられる。顔面には良好に赤色顔料が遺存しており、一部の赤色顔料は冑部の裏面にも付着している。現状では、顔面上半部の赤色顔料の残りがいいが、下半部の線刻の間に一部赤色顔料がみられることから、本来は顔面全体に塗られていたものと考えられる。また、顔面には線刻も施されており、口の下部にみられる髭状の表現と、口の横には弧状の線刻がみられる。これらの線刻が何を模しているのかは不明である。一方、冑部には線刻が施されず無文である。

茅原大墓古墳出土の盾持人埴輪を盾面の大きさと突帯間隔をもとに復元すると、全高約120cm、盾部高78cm、頭部高約29cmに復元できる（図98）。一般的な盾持人埴輪より盾面が大きく頭部とのバランスは悪いといえる。初現期の盾持人埴輪は人物表現よりも盾面の表現に主眼が置かれていたと考えられ、本例においても、盾面が強調されたものだと考えられる。

最後に、盾持人埴輪の製作技法を検討する。初期の盾持人埴輪で残存状態の良いものは限られており、茅原大墓古墳出土例はその良好な事例だといえる。まず、盾持人埴輪の基部になる円筒を粘土紐で成形する。乾燥工程をおきながら積んでいき、朝顔形埴輪の壺部をつくるようにドーム状につくる。ドームの前寄りの部分に頸部を取り付け、頸部上端を若干屈曲させる。頸部上端に高さ3～5cmの粘土紐を再度積み上げる。その上部に台形の板をのせ、乾燥させる。乾燥した後に衝角付冑を表現した板を側面に貼り付け、目や口の削り抜き、鼻の貼り付け、線刻などを施す。同時に、粘土板を円筒部に貼り付けて盾面を形成する。盾面の形成は円筒部の正面の突帯を切り取るもしくは削り取った後に盾面を貼り付けていると考えられる。盾面を貼り付けたのちに、盾面の線刻と裏面の支持具を貼り付けて、焼成する。黒斑が多く確認できることなどから野焼き焼成されたと考えられる。焼成後、赤色顔料を全面に塗る。

（4）不明形象埴輪

図99の（269）は板状の破片に突帯が確認されるものである。残存高7.3cm、幅12.9cmをはかる。家形埴輪の破片である可能性が考えられる。

（272）・（274）は、ともに円筒状の部位より剥がれ落ちたような痕跡が見られる板状の破片である。

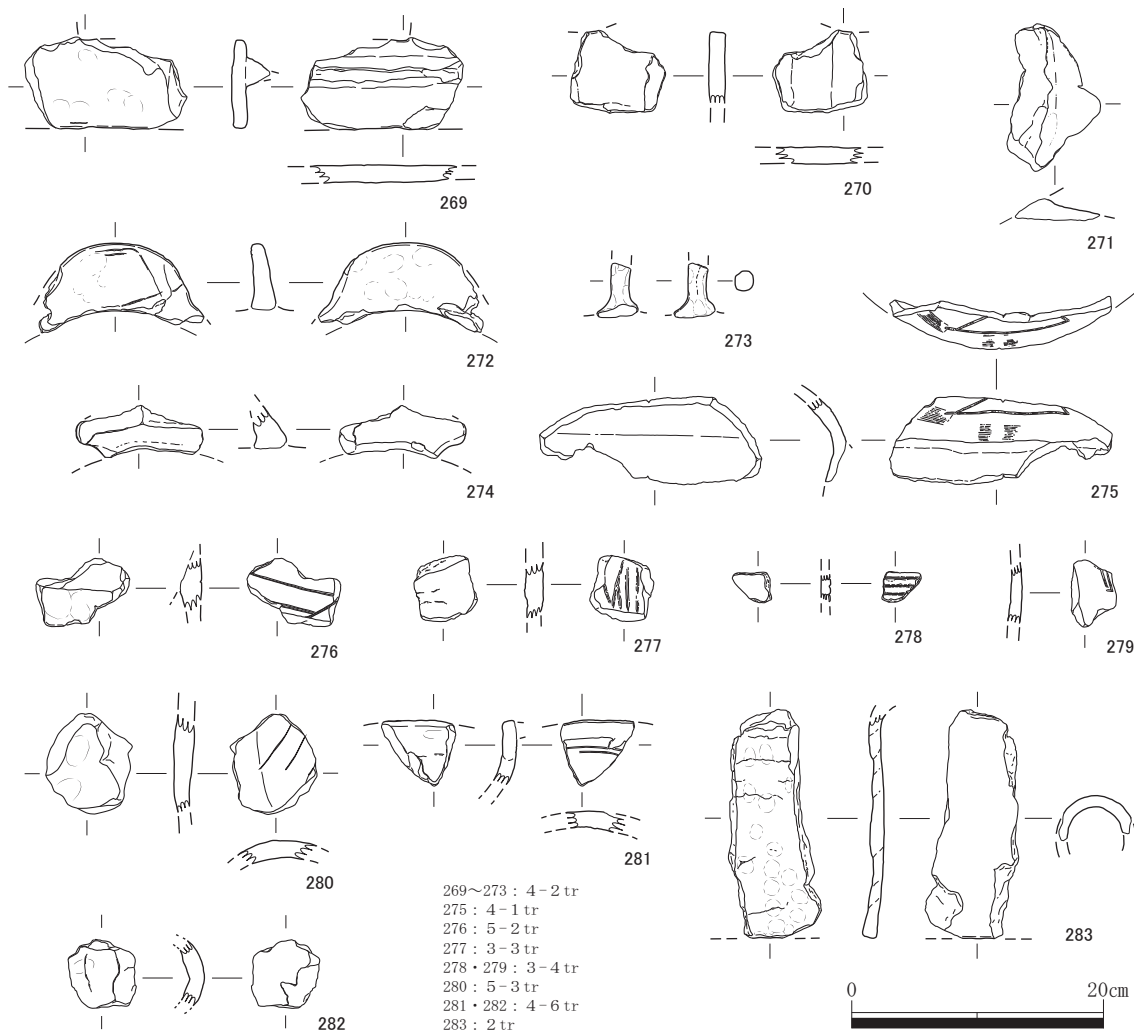


図99 不明形象埴輪 (S=1/6)

(273) は棒状の破片で、一方の端部が平面部に貼りつけられたような痕跡が見られる。鳥形埴輪の脚部である可能性が考えられる。

(275) から (281) は、線刻が施された個体で、蓋形埴輪などの可能性がある。(275) は屈曲部分の上部に三角形になるとみられる線刻が施された破片である。残存部の復元径はおよそ28cmとなる。下部には剥離痕がみられる。(277) には盾持人埴輪 (268) と類似する鋸歯文がみられるが、胎土や出土位置を考慮すると同一個体とは考えにくい。また (278) には3本の条線が施されている。これについても盾持人埴輪や蓋形埴輪の文様とは異なることから、ともに盾形埴輪の破片であるかもしれない。

(283) は径が小さい筒状を呈するものである。蓋形埴輪の軸部とも考えられるが、器壁が薄いことから、確証は持てない。

4. 埴輪棺1の鉄製品

前方部上面の4-5トレンチで確認された埴輪棺1では、4点の鉄製品が出土している (図100)。

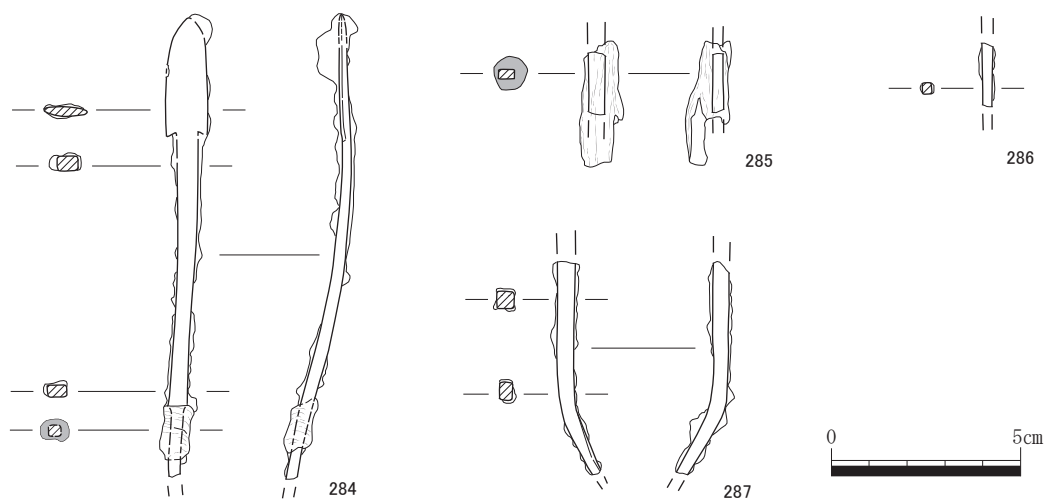


図100 埴輪棺1出土鉄製品 (S=1/2)

いずれも棺外より出土しており、(284)～(286)は南東小口に近い北側の棺側部分、(287)は北西小口の南側に置かれた円筒埴輪(230)の直下で出土している(図版36)

(284)は柳葉形の鍬身を持つ長頸鍬である。残存長は12.2cmで茎部の先端を欠いており、鍬身長は3.2cm、鍬身幅は1.1cmを測る。頸部の断面形は長方形を呈し、茎部は正方形に近い断面形を有している。茎部には木質が遺存しており、その外側には樹皮が巻かれていた。(285)は断面形が長方形を呈する鉄製品の破片で、残存長は1.6cmを測る。木質が遺存しており、(284)と近接した位置で出土していることから、両者は同一個体である可能性も考えられる。(286)は残存長1.7cmの鉄製品の破片で、正方形に近い断面形を有する。やはり(284)と近接して出土しており、同一個体である可能性がある。

(287)は残存長5.6cmの棒状の鉄製品の破片で、両端部を欠いており、断面形は方形を呈する。木質等の遺存は見られず、その全体形状は不明である。

これらの鉄製品は埴輪棺1の埋葬時期を示すものとして重要である。4点の鉄製品のうち(284)は、頸部が長く伸びた長頸鍬であり、古墳時代中期中葉かそれ以降の時期が考えられ、埴輪棺1の時期もこれと同様の時期と考えることができる。

埴輪等から考えられる茅原大墓古墳の築造時期とは数十年程度の開きがあり、埴輪棺1は茅原大墓古墳築造後、一定期間を経たのちに埋葬されたと考えることができる。

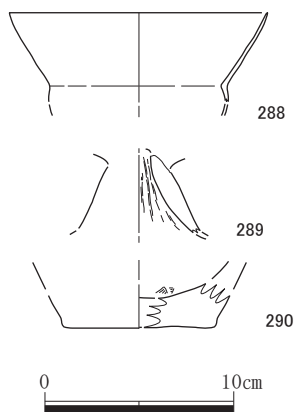


図101 埴丘盛土出土土器 (S=1/4)

5. 古墳築造以前と以後の遺物

(1) 古墳築造以前の遺物

茅原大墓古墳築造以前の遺物としては、埴丘盛土中より出土した土器が確認されている。図101の(288)～(290)はいずれも3-3トレンチより出土しており、(288)と(289)は後円部2段目の埴丘盛土中より、

(290) は前方部上面の墳丘盛土中より出土した。(288) は古式土師器の小型丸底壺で、わずかに内湾して広がる口縁部を有する。古墳時代前期のものと考えられる。(289) は古式土師器の高坏で、中空の脚柱部のみが残存する個体である。低脚の高坏の脚柱部であると考えられ、これについても古墳時代前期のものと考えられる。(290) は底部のみが残存する個体で、平底の底部を有しており、弥生土器の甕の底部であると考えられる。

(2) 古墳築造以後の遺物

前方部上面において、茅原大墓古墳築造後のものである木棺墓が1基確認されており、鉄釘が出土している。このほか遺構に伴うものではないが、墳丘の北西側を中心として埴輪や須恵器が複数点確認されている。

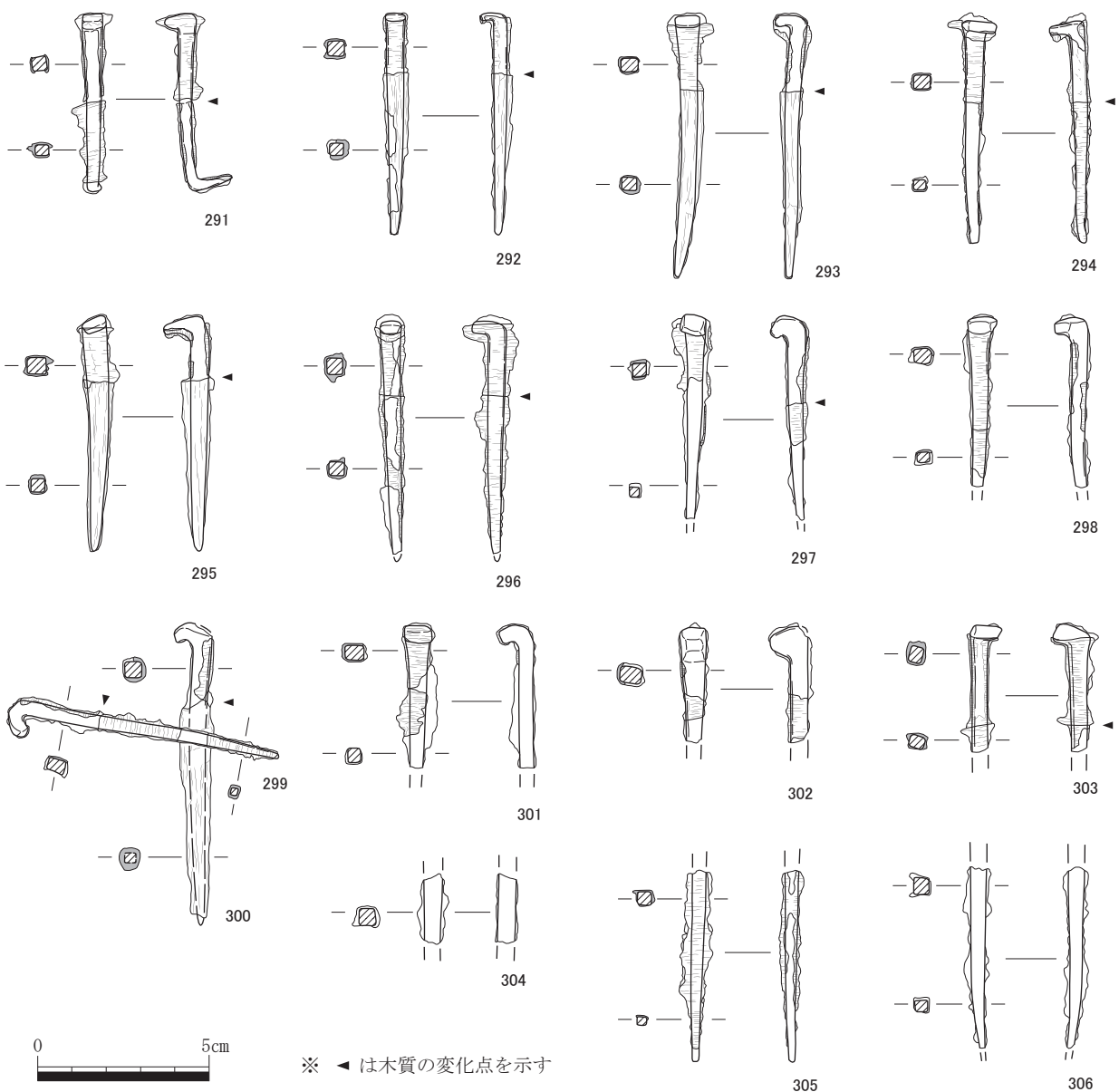


図102 木棺墓出土鉄製品 (S=1/2)

認されている。また5-3トレンチでは前方部前面の周濠埋土中より、鉄製品が1点出土している。

木棺墓出土遺物 (図102) 計16点の鉄釘が出土している。大半の個体に木質が付着しており、木棺の緊結に使用されたものと考えられる。頭部から脚部の先端まで残存する個体は7個体(291~295、299・300)で、頭部は残存するが脚部の先端側を欠く個体は6個体(296~298、301~303)、脚部は残存するが頭部側を欠く個体は1個体(305)存在する。いずれの個体も身部の断面形は方形で、正方形に近いものが多くみとめられる。頭部は身部の先端を折り曲げて形成されており、釘の長軸に対し直角に折り曲げられる個体(292・293など)や、丸みをもって折り曲げられる個体(299~301)などが存在し、若干のバリエーションがみとめられる。なお(291)は脚部の先端が折れ曲がっていた。

鉄釘の全長は7cm前後を中心とし、(291)が約6.0cmで最も短く、(300)が最も長く8.9cmを測る。残存する木質の状況にはいくつかの傾向が見られ、(291)~(297)・(299)・(300)・(303)では、頭部側と脚部側で木質の付着状況が変化している。頭部側に付着する木質の木目は、いずれの個体においても釘の長軸に対して直交する方向のものであるが、脚部側の木質は、釘の長軸に直交する木目を持つもの(291・294・296・297・299・303)と、長軸に平行する木目を持つもの(292・293・295・300)が存在する。出土位置から棺の形態を復元することは難しいが、前者の個体は長側板から底板へ、後者の個体は小口板から長側板あるいは底板に打ち込まれたものではないかと推定される。(299)と(300)はおおよそ直交するように銹着して出土しており、棺の隅部分において使用されたものと考えられる。棺材の厚さは木質の付着範囲から推定され、小口板は1.7~2.0cmで、長側板はこれよりも若干厚く、2.2~2.6cmと考えることができる。

なおこの木棺墓では鉄釘以外に遺物は検出されておらず、その時期を推定することは難しい。鉄釘は古墳時代の木棺に使用されるものと比較すると小さく、明らかにそれよりも時期が下るものと考えられることができる。

埴輪 (図103) 墳丘の北西側にあたる5-2トレンチや6-2トレンチを中心として、茅原大墓古墳よりも明らかに新しい時期の埴輪が複数点出土している。

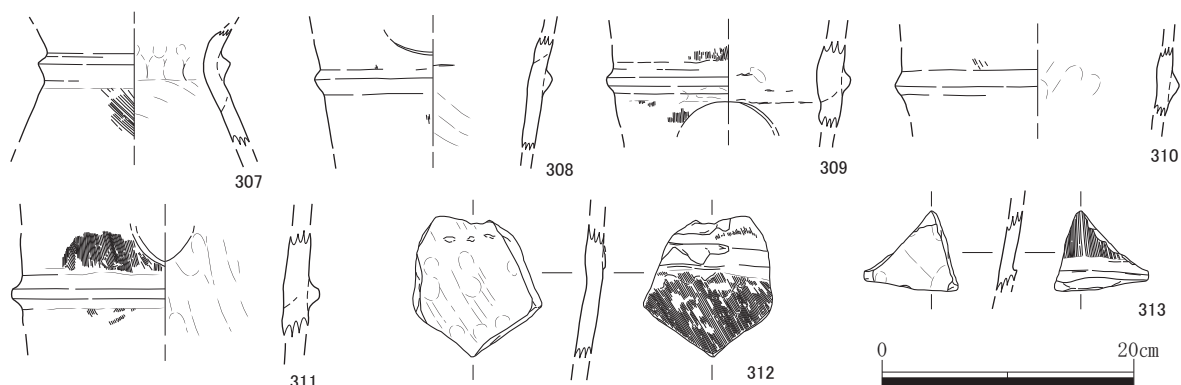


図103 茅原大墓古墳築造後の遺物① (S=1/6)

(307)・(309)~(311)は5-2トレンチ、(308)・(313)は6-2トレンチ、(312)は6-1トレンチより出土しており、耕作土のほか周濠上層埋土から出土している個体も存在する。(307)は朝顔

形埴輪で、その他は円筒埴輪であると考えられる。いずれの個体も外面の二次調整を欠いており、一次調整のタテハケのみがみとめられる。突帯は突出度が低く、断面形が三角形を呈する個体が目立っている。川西編年Ⅴ期に位置付けられるもので、古墳時代中期末～後期頃の古墳に伴うものと考えられる。

茅原大墓古墳の周辺では、わずか100m余り西側に毘沙門塚古墳（全長45m、前方後円墳）が存在するなど、古墳時代中期末～後期の古墳が築造されていることが知られている。出土した上記の埴輪は、茅原大墓古墳に近接して存在した当該期の古墳のものと推定され、耕作や小池の浚渫などにより5-2・6-2トレンチ付近にもたらされたものと推定される。

須恵器（図104） 複数のトレンチにおいて出土しているが、上記の埴輪と同様に、墳丘北西側の6-1・6-2トレンチでの出土が目立っている。

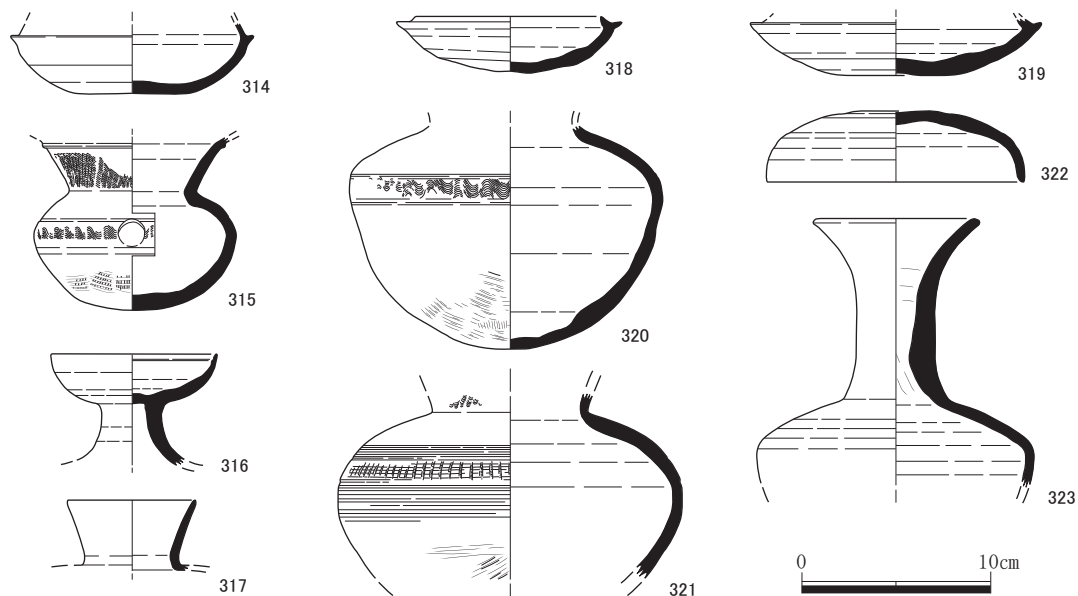


図104 茅原大墓古墳築造後の遺物② (S=1/4)

(314) は後円部西側斜面の3-2トレンチにおいて、石垣裏込め土より出土した坏身である。丸みを帯びた底部の外面下半には回転ヘラケズリが施されており、口径は10cm前後と推定される。(315) は4-2トレンチで出土した甗である。東側くびれ部近くの周濠下層埋土中より出土している。残存率が高く、口縁部を欠いているものの頸部から体部にかけてはほぼ全体が残存していた。短く外反して広がる頸部を有し、頸部と口縁部の境界の屈曲部外面には、突帯が巡る。体部は丸みを帯びた形態で、中ほどに円孔が1箇所に通され、肩部外面には沈線が巡らされる。なお頸部外面と体部中ほどには波状文が施され、底部にはタタキ目が残存している。

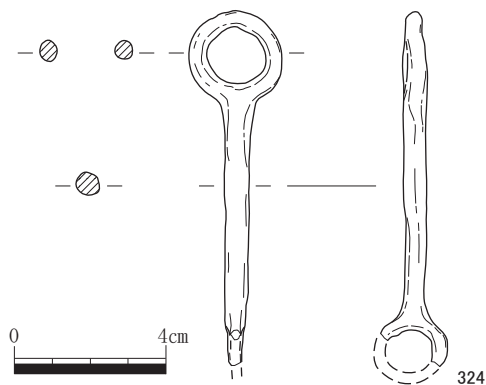
(316) は4-3・4トレンチの北東側で出土した小型の高坏で、口径は8.7cmを測る。(317) は5-1トレンチの1段目平坦面において、葦石の転落石とともに出土した。わずかに外反して広がる短い口頸部を有し、口径は6.7cmを測る。平瓶の口頸部であると思われる。

(318) ~ (321) は6-1トレンチの周濠上層～下層埋土より出土した個体である。(318)・(319)

は坏身で、前者はほぼ完形の状態で出土しており、口径は9.8cmを測る。(320)・(321)は壺で、ともに体部が残存する。(320)はやや肩部にやや張りがあり、体部外面の中ほどには波状文を施す文様帯が存在する。底部外面にはタタキ目が残存する。(321)は肩部の張りが弱く、体部外面の中ほどにはカキメと櫛描列点文が施される。

(322)・(323)は6-2トレンチの周濠上層より出土した。(322)は坏蓋で1/2程度が残存し、口径は13.5cmに復元される。体部と天井部の間には稜が見られず、口縁端部は丸くおさまられる。(323)は長頸壺で、肩部に若干の張りがある個体である。口径は8.3cmを測る。

これらの個体は出土位置が様々であり、時期についても幅がみとめられる。(314)・(315)は概ねTK47型式期頃のものと思われ⁶⁾、おおよそ先に見た埴輪と近い時期のものと考えられる。このうち(315)は周濠下層で出土しており、少なくとも5世紀末頃の段階までは周濠の埋没が進行していなかったと考えられる。このほか(319)～(320)・(321)については古墳時代後期にさかのぼるものと考えられるが、(316)～(318)は飛鳥I～IIで7世紀前半頃、(323)については8世紀前半に下る可能性も考えられる⁷⁾。



周濠出土の鉄製品 (図105) 5-3トレンチの西側、前方部前面側の周濠埋土中より鉄製品(324)が1点出土している。残存長は9.4cmで、一方の端部は破損しているが、両側に円環を有する形態であったと考えられる。円環は互いに約90°向きを違えており、残存する側の円環は径2.4cmを測り、もう一方の欠損する側はやや小さく径2.0cm程度と推定される。断面部の形態は円形を呈している。

図105 茅原大墓古墳築造後の遺物③ (S=1/2)

このような形態から轡の銜である可能性が考えられるが、全体に造りが細く、問題が残る。時期的には同じ周濠埋土中からはわずかに埴輪片が出土しているに過ぎないため判断が難しいが、古墳時代を大きく下るものとは考えられない。

【註記】

- 1) 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号
- 2) 一瀬和夫 1988「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修に伴う発掘調査概要V』大阪府教育委員会
- 3) 一瀬和夫 2003「円筒埴輪の外周調整から～B種ヨコハケの成立と波及に関する覚書」『埴輪-円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析-』第52回埋蔵文化財研究集会 発表要旨集
- 4) 上田睦 2003「古墳時代中期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第5号 埴輪検討会
小浜成 2003「円筒埴輪の観察視点と編年方法 - 畿内円筒埴輪編年に向けて-」『埴輪論叢』第4号 埴輪検討会
- 5) 高井健司 1991「壺形埴輪について」『長原遺跡発掘調査報告IV』財団法人大阪市文化財協会
- 6) 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 7) 西弘海 1978「土器の時期区分と型式編年」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告II』奈良国立文化財研究所
古代の土器研究会 (編) 1997『古代の土器5-1 7世紀の土器 (近畿東部・東海編)』

表5-1-1 円筒埴輪観察表①

| 図番号 | 出土 トレンチ | 出土位置 | 残存 | 法量1 (cm) | 法量2 (cm) | 透孔 | 調整など | 法量 分類 | 口縁 分類 | 突帯 分類 | 円筒 分類 | 備考 |
|--------|------------|-------------------|--------------|----------------------|-------------------------------------|----------------------|--|----------|----------|----------|----------|--------|
| 図71-1 | 3-2 | 後円部 埴頂 埴輪列 | 底部～3段目 全周 | 底部径 30.1 胴部径 36.2 | 残存高 12.3 底部高 13.6 2段目突帯間 10.3 | | 外面：底部にタテハケ 内面：タテ方向ナデ | 大型 | | (i) | | |
| 図71-2 | 3-2 | 後円部 埴頂 埴輪列 | 底部～3段目 全周 | 底部径 30.8 胴部径 32.2 | 残存高 31.5 底部高 14.7 2段目突帯間 12.2 | 3段目：方形 | 外面：一次調整タテハケ 内面：ナデ、指オサエ | 大型 | | (iv) | II A | |
| 図71-3 | 3-2 | 後円部 埴頂 埴輪列 | 底部～2段目 全周 | 底部径 34.8 | 残存高 20.7 底部高 15.1 | | 内面：ナデ、指オサエ | 大型 | | (iv) | | ひずみ大きい |
| 図71-4 | 3-2 | 後円部 埴頂 埴輪列 | 基部 1/2周 | 底部径 23.3 | 残存高 5.9 | | 外面：ヨコハケ 内面：ナデ、指オサエ | 小型 | | | | |
| 図71-5 | 3-2 | 後円部 埴頂 埴輪列 | 基部 1/10周 | 底部径 31.0 | 残存高 6.7 | | 外面：ヨコハケ 内面：ナデ、指オサエ | 大型 | | | | 北壁 |
| 図71-6 | 3-3 | 後円部 埴頂 埴輪列 | 底部 1/6周 | 底部径 24.9 | 残存高 12.9 | | 内面：ナデ、指オサエ | 小型 | | | | |
| 図71-7 | 3-3 | 後円部 埴頂 埴輪列 | 底部 1/2周 | 底部径 26.2 | 残存高 17.1 底部高 15.0 | 底部：半円形 | 外面：ヨコハケ 内面：ナデ、指オサエ | 小型 | | (iii) | IV | |
| 図71-8 | 3-3 | 後円部 埴頂 埴輪列 | 底部～3段目 全周 | 底部径 32.7 胴部径 34.7 | 残存高 30.3 底部高 13.1 2段目突帯間 11.5 | 2段目：三角形 | 外面：3段目に一次調整タテハケ 内面：ナデ、指オサエ | 大型 | | (iv) | I C | |
| 図71-9 | 3-3 | 後円部 埴頂 埴輪列 | 底部～2段目 全周 | 底部径 33.2 胴部径 32.9 | 残存高 22.2 底部高 12.5 | | 外面：一次調整タテハケ 内面：タテハケ、指オサエ | 大型 | | (i) | | |
| 図71-10 | 3-3 | 後円部 埴頂 埴輪列 | 底部～3段目 全周 | 底部径 34.7 胴部径 38.1 | 残存高 31.2 底部高 13.5 2段目突帯間 11.8 | 2段目：三角形/2方 3段目：円形 | 外面：一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ 内面：ナナメハケ、ヨコハケ、指オサエ | 大型 | | (i) | I C | |
| 図72-11 | 3-4 | 後円部 2段目 埴輪列 | 胴部 1/6周 | 胴部径 39.3 | 残存高 7.7 | | 内面：タテハケ | 大型 | | (i) | | 打ち欠き |
| 図72-12 | 3-4 | 後円部 2段目 埴輪列 | 胴部1段以上 全周 | 胴部径 45.2 | 残存高 20.9 突帯間 13.5 | 円形/2方 | 外面：一次調整タテハケ 内面：ナデ、指オサエ、ハケメ | 大型 | | (i) | I | 打ち欠き |
| 図72-13 | 3-4 | 後円部 2段目 埴輪列 | 胴部 1/8周 | 胴部径 49.1 | 残存高 8.4 | | 外面：タテハケ | 大型 | | (iv) | | 打ち欠きか |

表5-2 円筒埴輪観察表②

| 図番号 | 出土 トレンチ | 出土位置 | 残存 | 法量1 (cm) | 法量2 (cm) | 透孔 | 調整など | 法量 分類 | 口縁 分類 | 突帯 分類 | 円筒 分類 | 備考 |
|--------|------------|-------------------|-----------------|----------------------|-------------------------------------|--------------|---|----------|----------|----------|----------|-----------------|
| 図72-14 | 3-3 | 後円部 2段目 埴輪列 | 底部～3段目 全周 | 底部径 31.4 胴部径 33.8 | 残存高 30.3 底部高 13.8 2段目突帯間 10.8 | 3段目：円形？ | 外面：タテハケ 内面：ナデ、指オサエ | 大型 | | (w) | I A | |
| 図72-15 | 3-3 | 後円部 2段目 埴輪列 | 底部～3段目 全周 | 底部径 33.8 胴部径 38.5 | 残存高 35.3 底部高 14.3 2段目突帯間 13.0 | | 内面：ナデ | 大型 | | (i) | | 基部外面に粘 土貼り付け |
| 図72-16 | 3-3 | 後円部 2段目 埴輪列 | 底部～3段目 全周 | 底部径 39.6 胴部径 41.4 | 残存高 29.2 底部高 14.3 2段目突帯間 11.5 | 3段目：円形？ | 外面：一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ 内面：タテハケ、ヨコハケ、ナデ | 大型 | | (i) | I A | |
| 図72-17 | 3-3 | 後円部 2段目 埴輪列 | 底部 全周 | 底部径 39.5 | 残存高 14.7 | | 外面：一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ 内面：ヨコハケ、ナデ | 大型 | | | | |
| 図73-18 | 5-2 | 後円部 1段目 埴輪列 | 底部～2段目 全周 | 底部径 24.6 胴部径 25.9 | 残存高 22.0 底部高 14.6 | | 外面：一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ 内面：ヨコハケ、ナデ | 小型 | | (ii) | III | |
| 図73-19 | 5-2 | 後円部 1段目 埴輪列 | 底部～2段目 全周 | 底部径 25.0 胴部径 27.1 | 残存高 23.3 底部高 14.8 | 2段目：円形/2方 | 外面：タテハケ内面：ナデ、指オサエ | 小型 | | (ii) | III | |
| 図73-20 | 5-2 | 後円部 1段目 埴輪列 | 底部～2段目 全周 | 底部径 23.3 胴部径 25.5 | 残存高 18.2 底部高 14.8 | | 外面：一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ 内面：タテハケ | 小型 | | (w) | III | |
| 図74-21 | 2 | 前方部東側 周濠 | 口縁から2段分 1/3周 | 口径 27.3 胴部径 25.7 | 残存高 20.4 口縁部高 13.4 | 口縁部下の段：円形/2方 | 外面：ナデ 内面：ナデ、タテハケ | 小型 | d | (ii) | III | 口縁に小穿孔 |
| 図74-22 | 2 | 前方部東側 周濠 | 突帯付近 1/8周 | 胴部径 44.5 | 残存高 16.0 | | 外面：ヨコハケ 内面：ナデ、指オサエ | 大型 | | (ii) | | |
| 図75-23 | 3-2 | 後円部 石垣裏込土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 3.4 | | 外面：ヨコハケ 内面：ナデ、ナナメハケ | | a | | | |
| 図75-24 | 3-2 | 後円部 石垣裏込土 | 口縁部 1/10周 | | 残存高 6.5 | | 外面：タテハケ | | e | | | |
| 図75-25 | 3-2 | 後円部 石垣裏込土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 3.0 | | 外面：ヨコハケ 内面：ヨコハケ | | e | | | |
| 図75-26 | 3-2 | 後円部 石垣裏込土 | 口縁部 1/10周 | | 残存高 7.5 | | 内面：ナデ | | a | | | |

表5-3 円筒埴輪観察表③

| 図番号 | 出土 トレンチ | 出土位置 | 残存 | 法量1 (cm) | 法量2 (cm) | 透孔 | 調整など | 法量 分類 | 口縁 分類 | 突帯 分類 | 円筒 分類 | 備考 |
|--------|------------|-------------------|----------------|-------------|-------------|----|-------------------------------|----------|----------|----------|----------|----|
| 図75-27 | 3-2 | 後円部 石垣裏込土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 5.0 | | 外面：ヨコハケ 内面：ナデ | | h | | | |
| 図75-28 | 3-2 | 後円部 排土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.9 | | | | h | | | |
| 図75-29 | 3-2 | 後円部 排土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 6.1 | | | | a | | | |
| 図75-30 | 3-2 | 後円部 石垣裏込土 | 基部 1/10周以下 | | 残存高 3.1 | | | | | | | |
| 図75-31 | 3-2 | 後円部 排土 | 基部 1/10周以下 | | 残存高 5.1 | | | | | | | |
| 図75-32 | 3-2 | 後円部 石垣裏込土 | 口縁部 1/10周 | 口径 44.6 | 残存高 5.4 | | 外面：ナナメハケ 内面：ナデ | 大型 | b | | | |
| 図75-33 | 3-2 | 後円部 石垣裏込土 | 口縁部 1/8周 | 口径 44.6 | 残存高 10.3 | | 外面：一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ 内面：ナデ | 大型 | h | | | |
| 図75-34 | 3-2 | 後円部 排土 | 底部 1/8周 | 底部径 19.5 | 残存高 6.3 | | 内面：ナデ | 小型 | | | | |
| 図75-35 | 3-2 | 後円部 石垣裏込土 | 底部 1/10周 | 底部径 21.7 | 残存高 10.1 | | 外面：タテハケ 内面：ナデ、指オサエ | 小型 | | | | |
| 図75-36 | 3-2 | 後円部 最上段 表土層 | 底部 1/8周 | 底部径 25.0 | 残存高 9.5 | | 内面：ナナメハケ、ナデ | 小型 | | | | |
| 図75-37 | 3-2 | 後円部 埴頭 埴輪集積 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 4.8 | | 外面：ナデ | | c | | | |
| 図75-38 | 3-2 | 後円部 埴頭 埴輪集積 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.9 | | | | f | | | |
| 図75-39 | 3-2 | 後円部 埴頭 埴輪集積 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.5 | | 外面：ナデ | | e | | | |

表5-4 円筒埴輪観察表④

| 図番号 | 出土 トレンチ | 出土位置 | 残存 | 法量1 (cm) | 法量2 (cm) | 透孔 | 調整など | 法量 分類 | 口縁 分類 | 突帯 分類 | 円筒 分類 | 備考 |
|--------|------------|--------------------|----------------|-------------|-------------|----|------------------------------------|----------|----------|----------|----------|----|
| 図75-40 | 3-2 | 後円部 埴頭 埴輪集積 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 3.3 | | | | e | | | |
| 図75-41 | 3-2 | 後円部 埴頭 埴輪集積 | 基部 1/10周以下 | | 残存高 2.7 | | 外面：ナデ | | | | | |
| 図75-42 | 3-2 | 後円部 埴頭 埴輪集積 | 基部 1/10周以下 | | 残存高 3.6 | | | | | | | |
| 図75-43 | 3-2 | 後円部 埴頭 埴輪集積 | 底部 1/10周 | 底部径 24.9 | 残存高 8.2 | | 内面：ナデ、指オサエ | 小型 | | | | |
| 図75-44 | 3-2 | 後円部 埴頭 埴輪集積 | 底部 1/10周 | 底部径 41.9 | 残存高 13.1 | | 外面：ヨコハケ 内面：ナナメハケ | 大型 | | | | |
| 図75-45 | 3-2 | 後円部 埴頭 埴輪集積 | 底部 1/10周 | 底部径 49.8 | 残存高 11.3 | | 外面：一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ 内面：タテハケ | 大型 | | | | |
| 図75-46 | 3-2 | 後円部 2段目 埴輪集積 | 口縁部 1/10周 | | 残存高 6.1 | | 外面：ヨコハケ 内面：ナデ | | e | | | |
| 図75-47 | 3-2 | 後円部2段目 埴輪集積 | 口縁部 1/10周 | | 残存高 7.4 | | | | e | | | |
| 図75-48 | 3-2 | 後円部 2段目 埴輪集積 | 口縁部 1/10周 | | 残存高 3.6 | | | | e | | | |
| 図75-49 | 3-2 | 後円部 2段目 埴輪集積 | 胴部 1/6周 | 胴部径 37.3 | 残存高 11.7 | 円形 | 外面：一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ 内面：ナデ、指オサエ | 大型 | | (ii) | I | |
| 図75-50 | 3-2 | 後円部 2段目 埴輪集積 | 胴部 1/8周 | 胴部径 35.5 | 残存高 16.4 | 円形 | 外面：一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ 内面：ナデ、指オサエ | 大型 | | (i) | I | |
| 図75-51 | 3-2 | 後円部 2段目 埴輪集積 | 胴部 1/8周 | 胴部径 41.8 | 残存高 10.8 | | 外面：ヨコハケ 内面：ナデ、指オサエ | 大型 | | (ii) | | |
| 図75-52 | 3-2 | 後円部 2段目 埴輪集積 | 胴部 1/10周 | 胴部径 43.0 | 残存高 12.9 | 方形 | 内面：ナデ、指オサエ | 大型 | | (ii) | II | |

表5-5 円筒埴輪観察表⑤

| 図番号 | 出土 トレンチ | 出土位置 | 残存 | 法量1 (cm) | 法量2 (cm) | 透孔 | 調整など | 法量 分類 | 口縁 分類 | 突帯 分類 | 円筒 分類 | 備考 |
|--------|------------|--------------------|----------------|-------------|-------------|----|--------------------------------------|----------|----------|----------|----------|----|
| 図75-53 | 3-2 | 後円部 2段目 埴輪集積 | 胴部 1/4周 | 胴部径 453 | 残存高 175 | | 外面：一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ 内面：タテハケ、ヨコハケ | 大型 | | (ii) | | |
| 図75-54 | 3-2 | 後円部 2段目 埴輪集積 | 胴部 1/4周 | 胴部径 440 | 残存高 180 | 円形 | 外面：一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ 内面：タテハケ、ナデ | 大型 | | (ii) | I | |
| 図76-55 | 3-3 | 後円部 墳頂 流土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 4.0 | | | | f | | | |
| 図76-56 | 3-3 | 後円部 表土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 1.9 | | | | f | | | |
| 図76-57 | 3-3 | 後円部 表土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.6 | | 内面：ナデ | | a | | | |
| 図76-58 | 3-3 | 後円部 耕作土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.9 | | | | d | | | |
| 図76-59 | 3-3 | 後円部 耕作土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 4.7 | | 内面：ヨコハケ | | g | | | |
| 図76-60 | 3-3 | 後円部 耕作土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 1.9 | | | | f | | | |
| 図76-61 | 3-3 | 後円部 耕作土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 6.1 | | 外面：ヨコハケ 内面：ヨコハケ | | d | | | |
| 図76-62 | 3-3 | 後円部耕作土 層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 4.5 | | | | e | | | |
| 図76-63 | 3-3 | 後円部 耕作土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.2 | | | | c | | | |
| 図76-64 | 3-3 | 後円部 排土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 6.4 | | 内面：ヨコハケ | | g | | | |
| 図76-65 | 3-3 | 後円部 石垣裏込土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 6.1 | | | | c | | | |

表5-6 円筒埴輪観察表⑥

| 図番号 | 出土 トレンチ | 出土位置 | 残存 | 法量1 (cm) | 法量2 (cm) | 透孔 | 調整など | 法量 分類 | 口縁 分類 | 突帯 分類 | 円筒 分類 | 備考 |
|--------|------------|---------------------|----------------|-------------|-------------|----|-----------------------|----------|----------|----------|----------|----|
| 図76-66 | 3-3 | 前方部 耕作土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 4.1 | | 内面：ナデ | | g | | | |
| 図76-67 | 3-3 | 後円部 表土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.3 | | 内面：ナデ | | e | | | |
| 図77-68 | 3-4 | 後円部 墳頂 流土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 3.9 | | | | c | | | |
| 図77-69 | 3-4 | 後円部 耕作土層 | 口縁部 1/10周 | | 残存高 2.9 | | 外面：ヨコハケ 内面：ナデ、ヨコハケ | | c | | | |
| 図77-70 | 3-4 | 後円部 耕作土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 3.0 | | | | a | | | |
| 図77-71 | 3-4 | 後円部 耕作土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 3.7 | | | | a | | | |
| 図77-72 | 3-4 | 後円部 耕作土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.2 | | | | g | | | |
| 図77-73 | 3-4 | 後円部 耕作土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.5 | | | | a | | | |
| 図77-74 | 3-4 | 後円部 耕作土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 4.0 | | 外面：ヨコハケ 内面：ナデ、ヨコハケ | | e | | | |
| 図77-75 | 3-4 | 後円部 2段目 埴輪列付近 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.4 | | | | a | | | |
| 図77-76 | 3-4 | 後円部 2段目 埴輪列付近 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 3.2 | | | | a | | | |
| 図77-77 | 3-4 | 後円部 2段目付近 表土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 7.2 | | 外面：ヨコハケ 内面：ナデ | | a | | | 線刻 |
| 図77-78 | 3-4 | 後円部 2段目付近 表土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 6.5 | | | | a | | | |

表5-7 円筒埴輪観察表①

| 図番号 | 出土 トレンチ | 出土位置 | 残存 | 法量1 (cm) | 法量2 (cm) | 透孔 | 調整など | 法量 分類 | 口縁 分類 | 突帯 分類 | 円筒 分類 | 備考 |
|--------|------------|----------------------|----------------|-------------|-------------|----|-----------------------------|----------|----------|----------|----------|----|
| 図77-79 | 3-4 | 後円部 2段目付近 表土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 3.7 | | | | b | | | |
| 図77-80 | 3-4 | 後円部 墳頂 表土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 3.2 | | 内面：ナデ | | | | | |
| 図77-81 | 3-4 | 後円部 2段目付近 表土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 5.8 | | 内面：ヨコナデ | | | | | |
| 図77-82 | 3-4 | 後円部 耕作土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.9 | | 外面：タテハケ 内面：ナデ | | | | | |
| 図77-83 | 3-4 | 後円部 墳頂 流土層 | 底部 1/10周 | 底部径 41.2 | 残存高 7.5 | | 外面：タテハケ 内面：ナナメハケ、タテハケ、ナデ | 大型 | | | | |
| 図78-84 | 4-1 | 後円部東側 周濠 | 胴部 1/10周 | 胴部径 34.6 | 残存高 9.6 | | | 大型 | | (ii) | | 線刻 |
| 図78-85 | 4-2 | 東側くびれ部 付近 機械掘削 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 1.2 | | 外面：ナデ 内面：ナデ | | d | | | |
| 図78-86 | 4-2 | 東側くびれ部 周濠埋土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 1.4 | | 外面：ナデ 内面：ナデ | | d | | | |
| 図78-87 | 4-2 | 東側くびれ部 付近 周濠埋土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.1 | | | | f | | | |
| 図78-88 | 4-2 | 東側くびれ部 付近 周濠埋土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.3 | | 外面：ナデ 内面：ナデ | | f | | | |
| 図78-89 | 4-2 | 東側くびれ部 付近 周濠埋土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 6.0 | | | | d | | | |
| 図78-90 | 4-2 | 東側くびれ部 付近 周濠埋土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 1.5 | | | | d | | | |
| 図78-91 | 4-2 | 東側くびれ部 付近 周濠埋土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 4.7 | | | | g | | | |

表5-8 円筒埴輪観察表⑧

| 図番号 | 出土 トレンチ | 出土位置 | 残存 | 法量1 (cm) | 法量2 (cm) | 透孔 | 調整など | 法量 分類 | 口縁 分類 | 突帯 分類 | 円筒 分類 | 備考 |
|---------|------------|----------------------|-----------------|---------------------|--|------------------------------|---|----------|----------|----------|----------|---------------------|
| 図78-92 | 4-2 | 東側くびれ部 付近 周濠埋土 | 口縁から3段分 1/2周 | 口径 31.2 胴部径 28.4 | 残存高 32.8 口縁部高 12.7 突帯間 12.6 | 口縁の1段下：円形 | 外面：ヨコハケ 内面：ナデ、指オサエ | 小型 | d | (ii) | III | |
| 図78-93 | 4-2 | 東側くびれ部 付近 周濠埋土 | 口縁から4段分 全周 | 口径 29.9 胴部径 29.1 | 残存高 46.7 口縁部高 13.6 突帯間 上より 13.9、 12.8 | 口縁の1段下：円形/2方 口縁の3段下：円形/2方 | 外面：一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ 内面：ナデ、口縁付近にヨコハケ | 小型 | d | (ii) | III | 縦刻 230とハケメ 一致 |
| 図78-94 | 4-2 | 東側くびれ部 付近 機械掘削 | 基部 1/10周 | 底部径 16.5 | 残存高 4.8 | | 内面：ナデ、指オサエ | 小型 | | | | |
| 図78-95 | 4-2 | 東側くびれ部 付近 周濠埋土 | 底部 1/8周 | 底部径 29.3 | 残存高 8.5 | | 内面：ナデ、指オサエ | 大型 | | | | |
| 図78-96 | 4-2 | 東側くびれ部 付近 排土 | 基部 1/10周以下 | | 残存高 3.5 | | 内面：ナデ | | | | | |
| 図78-97 | 4-2 | 東側くびれ部 付近 耕作土層 | 基部 1/10周以下 | | 残存高 5.0 | | | | | | | |
| 図78-98 | 4-2 | 東側くびれ部 付近 周濠埋土 | 基部 1/10周以下 | | 残存高 4.9 | | | | | | | |
| 図79-99 | 4-5 | 前方部上面 攪乱埋土 | 口縁部 1/10周 | | 残存高 4.6 | | 内面：ヨコハケ | | b | | | |
| 図79-100 | 4-5 | 前方部上面 攪乱埋土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 4.8 | | | | e | | | |
| 図79-101 | 4-5 | 前方部上面 攪乱埋土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 3.7 | | 外面：ナデ | | e | | | |
| 図79-102 | 4-5 | 前方部上面 耕作土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 4.8 | | 内面：ナデ、指オサエ | | | | | |
| 図79-103 | 4-5 | 前方部上面 耕作土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 4.2 | | | | | | | |
| 図79-104 | 4-5 | 前方部上面 耕作土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 6.3 | | | | | | | |

表5-9 円筒埴輪観察表⑨

| 図番号 | 出土 トレンチ | 出土位置 | 残存 | 法量1 (cm) | 法量2 (cm) | 透孔 | 調整など | 法量 分類 | 口縁 分類 | 突帯 分類 | 円筒 分類 | 備考 |
|---------|------------|-----------------------|----------------|-------------|-------------|----|------------------------------------|----------|----------|----------|----------|----|
| 図79-105 | 4-5 | 後円部2段目 斜面 基底付近 | 底部 1/2周 | 底部径 260 | 残存高 7.5 | | 外面：一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ 内面：ナデ、指オサエ | 小型 | | | | |
| 図80-106 | 4-6 | 前方部前面 機械掘削 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.5 | | | | f | | | |
| 図80-107 | 4-6 | 前方部前面 機械掘削 | 基部 1/10周以下 | | 残存高 4.5 | | 内面：ナデ | | | | | |
| 図80-108 | 4-6 | 前方部前面 高まり部 耕作土層 | 基部 1/10周以下 | | 残存高 4.5 | | | | | | | |
| 図80-109 | 4-6 | 前方部前面 耕作土層 | 基部 1/10周以下 | | 残存高 3.5 | | | | | | | |
| 図80-110 | 4-6 | 前方部前面 耕作土層 | 基部 1/8周 | 底部径 322 | 残存高 4.4 | | 内面：ナデ | 大型 | | | | |
| 図80-111 | 4-6 | 前方部前面 耕作土層 | 底部 1/10周 | 底部径 15.7 | 残存高 7.2 | | 内面：ナデ、指オサエ | 小型 | | | | |
| 図80-112 | 4-6 | 前方部前面 耕作土層 | 底部 1/8周 | 底部径 19.8 | 残存高 6.8 | | 外面：ヨコハケ 内面：指オサエ、ハケ | 小型 | | | | |
| 図80-113 | 4-6 | 前方部前面 機械掘削 | 底部 1/10周 | 底部径 21.9 | 残存高 6.3 | | | 小型 | | | | |
| 図80-114 | 4-6 | 前方部前面 機械掘削 | 底部 1/8周 | 底部径 24.2 | 残存高 4.7 | | 内面：ナデ、指オサエ | 小型 | | | | |
| 図80-115 | 4-6 | 前方部前面 耕作土層 | 底部 1/10周 | 底部径 22.6 | 残存高 3.9 | | 内面：ナデ、指オサエ | 小型 | | | | |
| 図80-116 | 4-6 | 前方部前面 周濠埋土 | 底部 1/10周 | 底部径 32.6 | 残存高 5.9 | | 内面：ナデ、指オサエ | 大型 | | | | |
| 図80-117 | 4-6 | 前方部前面 機械掘削 | 底部 1/10周 | 底部径 30.1 | 残存高 3.5 | | 内面：ナデ、指オサエ | 大型 | | | | |

表5-10 円筒埴輪観察表⑩

| 図番号 | 出土 トレンチ | 出土位置 | 残存 | 法量1 (cm) | 法量2 (cm) | 透孔 | 調整など | 法量 分類 | 口縁 分類 | 突帯 分類 | 円筒 分類 | 備考 |
|---------|------------|----------------------|----------------|-------------|-------------|----|-------------------|----------|----------|----------|----------|----|
| 図80-118 | 4-6 | 前方部前面 周濠埋土 | 底部 1/10周 | 底部径 32.1 | 残存高 3.0 | | 外面：タテハナケ 内面：ナデ | 大型 | | | | |
| 図80-119 | 4-6 | 前方部前面 耕作土層 | 底部 1/8周 | 底部径 41.6 | 残存高 7.4 | | 内面：ナデ | 大型 | | | | |
| 図81-120 | 5-1 | 東くびれ部 2段目斜面 流土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.3 | | | | e | | | |
| 図81-121 | 5-1 | 東くびれ部 2段目斜面 流土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.7 | | | | | | | |
| 図81-122 | 5-1 | 東くびれ部 2段目斜面 流土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.6 | | | | g | | | |
| 図81-123 | 5-1 | 東くびれ部 耕作土層 | 底部 1/10周以下 | | 残存高 6.0 | | 内面：ナデ | | | | | |
| 図81-124 | 5-1 | 東くびれ部 2段目斜面 流土 | 底部 1/5周 | 底部径 16.0 | 残存高 6.8 | | 内面：ナデ | 小型 | | | | |
| 図81-125 | 5-1 | 東くびれ部 耕作土層 | 底部 1/10周 | 底部径 29.6 | 残存高 4.9 | | 内面：ナデ | 大型 | | | | |
| 図82-126 | 5-2 | 西くびれ部 近現代整地土 層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.4 | | 外面：ナデ 内面：ナデ | | e | | | |
| 図82-127 | 5-2 | 西くびれ部 近現代整地土 層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 1.7 | | | | g | | | |
| 図82-128 | 5-2 | 西くびれ部 2段目斜面 流土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.2 | | 外面：ナデ | | e | | | |
| 図82-129 | 5-2 | 西くびれ部 2段目斜面 流土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 1.9 | | 外面：ナデ | | c | | | |
| 図82-130 | 5-2 | 西くびれ部 2段目斜面 流土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.5 | | | | g | | | |

表5-11 円筒埴輪観察表①

| 図番号 | 出土 トレンチ | 出土位置 | 残存 | 法量1 (cm) | 法量2 (cm) | 透孔 | 調整など | 法量 分類 | 口縁 分類 | 突帯 分類 | 円筒 分類 | 備考 |
|---------|------------|----------------------|----------------|-------------|-------------|----|----------------------|----------|----------|----------|----------|----|
| 図82-131 | 5-2 | 西くびれ部 2段目斜面 流土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.6 | | 外面：ナデ | | a | | | |
| 図82-132 | 5-2 | 西くびれ部 2段目斜面 流土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 1.5 | | | | d | | | |
| 図82-133 | 5-2 | 西くびれ部 2段目斜面 流土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 3.0 | | 外面：ヨコハケ | | d | | | |
| 図82-134 | 5-2 | 西くびれ部 2段目斜面 流土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.2 | | 外面：ナデ 内面：ナデ | | g | | | |
| 図82-135 | 5-2 | 西くびれ部 2段目斜面 流土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 3.9 | | 外面：ヨコハケ | | d | | | |
| 図82-136 | 5-2 | 西くびれ部 2段目斜面 流土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 4.2 | | 外面：ヨコハケ 内面：ナデ | | e | | | |
| 図82-137 | 5-2 | 後円部 1段目 埴輪列周辺 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.0 | | | | d | | | |
| 図82-138 | 5-2 | 後円部 1段目 埴輪列周辺 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 5.6 | | 外面：一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ | | e | | | |
| 図82-139 | 5-2 | 西くびれ部 近現代整地土 層 | 底部 1/10周以下 | | 残存高 4.4 | | | | | | | |
| 図82-140 | 5-2 | 西くびれ部 近現代整地土 層 | 底部 1/10周以下 | | 残存高 4.9 | | 内面：ナデ | | | | | |
| 図82-141 | 5-2 | 西くびれ部 2段目斜面 流土 | 底部 1/10周 | | 残存高 5.8 | | | | | | | |
| 図82-142 | 5-2 | 西くびれ部 2段目斜面 流土 | 底部 1/10周以下 | | 残存高 9.2 | | | | | | | |
| 図82-143 | 5-2 | 西くびれ部 2段目斜面 流土 | 底部 1/10周以下 | | 残存高 2.5 | | | | | | | |

表5-12 円筒埴輪観察表⑫

| 図番号 | 出土 トレンチ | 出土位置 | 残存 | 法量1 (cm) | 法量2 (cm) | 透孔 | 調整など | 法量 分類 | 口縁 分類 | 突帯 分類 | 円筒 分類 | 備考 |
|---------|------------|-----------------------|---------------|-------------|-------------|---------|-----------------------|----------|----------|----------|----------|----|
| 図82-144 | 5-2 | 西くびれ部 2段目斜面 流土 | 底部 1/10周以下 | | 残存高 5.2 | | | | | | | |
| 図82-145 | 5-2 | 西くびれ部 1段目平坦面 流土 | 底部 1/10周 | | 残存高 3.8 | | | | | | | |
| 図82-146 | 5-2 | 西くびれ部 1段目平坦面 流土 | 底部 1/10周以下 | | 残存高 6.6 | | 内面：ナデ | | | | | |
| 図82-147 | 5-2 | 後円部 1段目 埴輪列周辺 | 底部 1/10周以下 | | 残存高 6.5 | | | | | | | |
| 図82-148 | 5-2 | 西くびれ部 2段目斜面 流土 | 底部 1/6周 | 底部径 11.4 | 残存高 5.5 | | 外面：タテハケ 内面：ナデ、指オサエ | 小型 | | | | |
| 図82-149 | 5-2 | 西くびれ部 2段目斜面 流土 | 底部 1/10周 | 底部径 19.5 | 残存高 7.5 | | 外面：タテハケ 内面：ナデ、指オサエ | 小型 | | | | |
| 図82-150 | 5-2 | 西くびれ部 2段目斜面 流土 | 底部 1/10周 | 底部径 21.6 | 残存高 8.9 | | 外面：タテハケ 内面：ナデ、指オサエ | 小型 | | | | |
| 図82-151 | 5-2 | 後円部 1段目 埴輪列周辺 | 底部 1/10周 | 底部径 17.2 | 残存高 3.7 | | 外面：ナデ 内面：ナデ、指オサエ | 小型 | | | | |
| 図82-152 | 5-2 | 後円部 1段目 埴輪列周辺 | 底部 1/10周 | 底部径 17.8 | 残存高 7.0 | 底部：半円形？ | | 小型 | | | Ⅳ | |
| 図82-153 | 5-2 | 後円部 1段目 埴輪列周辺 | 底部 1/10周 | 底部径 19.2 | 残存高 7.4 | 底部：半円形？ | | 小型 | | | Ⅳ | |
| 図82-154 | 5-2 | 西くびれ部 1段目平坦面 流土 | 底部 1/6周 | 底部径 16.9 | 残存高 4.9 | | 内面：ナデ | 小型 | | | | |
| 図82-155 | 5-2 | 西くびれ部 耕作土層 | 底部 1/10周 | 底部径 19.0 | 残存高 6.7 | | | 小型 | | | | |
| 図82-156 | 5-2 | 西くびれ部 2段目斜面 流土 | 底部 1/6周 | 底部径 23.0 | 残存高 4.7 | | 内面：ナデ、指オサエ | 小型 | | | | |

表5-13 円筒埴輪観察表⑬

| 図番号 | 出土 トレンチ | 出土位置 | 残存 | 法量1 (cm) | 法量2 (cm) | 透孔 | 調整など | 法量 分類 | 口縁 分類 | 突帯 分類 | 円筒 分類 | 備考 |
|---------|------------|-----------------------|-----------------|---------------------|---|----|--|----------|----------|-------------|----------|----|
| 図82-157 | 5-2 | 西くびれ部 1段目平坦面 流土 | 底部 1/10周 | 底部径 32.2 | 残存高 5.4 | | | 大型 | | | | |
| 図82-158 | 5-2 | 西くびれ部 排土 | 底部 1/10周 | 底部径 33.5 | 残存高 4.4 | | 外面：一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ | 大型 | | | | |
| 図83-159 | 5-3 | 前部北東 機械掘削 | 底部 1/10周以下 | | 残存高 9.5 | | 外面：タテハケ | | | | | |
| 図83-160 | 5-3 | 前部北東 機械掘削 | 底部 1/6周 | 底部径 15.3 | 残存高 5.2 | | 外面：タテハケ 内面：ヨコハケ、ナデ | 小型 | | | | |
| 図83-161 | 5-3 | 前部北東 機械掘削 | 底部 1/10周 | 底部径 22.9 | 残存高 6.6 | | | 小型 | | | | |
| 図84-162 | 6-2 | 前部北西 周濠埋土 | 胴部 1/10周 | | 残存高 12.7 | | 外面：一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ | 大型 | | (i) | | |
| 図84-163 | 6-2 | 前部北西 周濠埋土 | 胴部 1/10周 | | 残存高 9.5 | | | | | (i) | | |
| 図88-224 | 4-5 | 前部上面 埴輪棺1 | 口縁から3段分 1/3周 | 口径 42.8 胴部径 40.1 | 残存高 34.0 口縁部高 14.2 突帯間 12.7 | | 外面：一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ 内面：ナデ、口縁付近を中心にヨコハケ | 大型 | c | (iii) | | |
| 図88-225 | 4-5 | 前部上面 埴輪棺1 | 胴部3段分 1/4周 | 胴部径 36.0 | 残存高 33.1 突帯間 12.0 | | 外面：タテハケ、ヨコハケ 内面：タテハケ、ヨコハケ | 大型 | | (iv) | I D | |
| 図88-226 | 4-5 | 前部埴輪 棺1 | 口縁から4段分 全周 | 口径 41.1 胴部径 35.8 | 残存高 38.0 口縁部高 12.8 突帯間 上より10.8、11.3 | | 外面：一次調整タテハケ 内面：ナデ、指オサエ | 大型 | c | (i) (iv) | II A | 線刻 |
| 図88-227 | 4-5 | 前部埴輪 棺1 | 口縁から4段分 全周 | 口径 42.1 胴部径 39.7 | 残存高 46.8 口縁部高 14.4 突帯間 上より11.7、12.2 | | 外面：一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ 内面：ナデ、ヨコハケ | 大型 | c | (i) | II B | |

表5-14 円筒埴輪観察表⑩

| 図番号 | 出土 トレンチ | 出土位置 | 残存 | 法量1 (cm) | 法量2 (cm) | 透孔 | 調整など | 法量 分類 | 口縁 分類 | 突帯 分類 | 円筒 分類 | 備考 |
|---------|------------|-------------|-----------------|------------------------------|---|--|--|----------|----------|-------------|----------|--------------|
| 図89-228 | 4-5 | 前方部 埴輪棺1 | ほぼ完形 | 口径 337 胴部径 330 底部径 223 | 器高 667 口縁部高 127 4段目突帯間 135 3段目突帯間 124 2段目突帯間 130 底部高 151 | 4段目：円形/2方 2段目：円形/2方 | 内面：ナデ、指オサエ | 小型 | d | (ii) | Ⅲ | 穿孔？ |
| 図89-229 | 4-5 | 前方部 埴輪棺1 | 口縁から5段分 1/4周 | 口径 388 胴部径 363 | 残存高 592 口縁部高 136 突帯間 上より121、 125、116 | 口縁の1段下：円形 口縁の3段下：円形 | 外面：一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ 内面：ヨコハケ、タテハケ、ナデ | 大型 | e | (ii) | I | |
| 図89-230 | 4-5 | 前方部 埴輪棺1 | 口縁から4段分 全周 | 口径 301 胴部径 292 | 残存高 418 口縁部高 136 突帯間 上より130、133 | 口縁の1段下：円形/2方 口縁の3段下：円形/2方 | 外面：一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ 内面：ナデ | 小型 | d | (ii) | Ⅲ | 93とハケメ 一致 |
| 図89-231 | 4-5 | 前方部 埴輪棺1 | 口縁から3段分 1/3周 | 口径 448 胴部径 439 | 残存高 331 口縁部高 150 突帯間 127 | 口縁の2段下：円形 | 外面：一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ 内面：口縁部にヨコハケ、他はナデ | 大型 | c | (ii) | I | |
| 図89-232 | 4-5 | 前方部 埴輪棺1 | 口縁から4段分 1/3周 | 口径 478 胴部径 457 | 残存高 484 口縁部高 141 突帯間 上より125、120 | 口縁の1段下：円形/4方 口縁の3段下：円形/4方 | 外面：口縁部にタテハケ 内面：ヨコ～ナナメハケ、ナデ | 大型 | e | (i) | I B | |
| 図90-233 | 4-5 | 前方部 埴輪棺1 | 口縁から8段分 全周 | 口径 561 胴部径 503 | 残存高 101.9 口縁部高 161 突帯間 上より124、 126、125、132、126、 151 | 口縁の1段下：円形/4方 口縁の3段下：円形/4方 口縁の5段下：円形/4方 | 外面：一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ 内面：タテハケ、ナデ | 大型 | c | (i) | I B | |
| 図91-236 | 5-2 | 前方部 埴輪棺2 | 胴部の6段分 全周 | 胴部径 374 | 突帯間 上より126、 130、121、120 | 残存部の最上段：方形 上より3段目：方形/4方 上より5段目：方形/4方 | 外面：二次調整タテハケ 内面：ヨコハケ、ナデ | 大型 | (i) | (i) | Ⅱ A | 縦刻 |
| 図91-237 | 5-2 | 前方部 埴輪棺2 | 口縁から2段分 1/5周 | 口径 516 胴部径 499 | 残存高 236 口縁部高 124 | | 外面：ヨコハケ 内面：ヨコハケ | 大型 | b | (ii) | | |
| 図91-238 | 5-2 | 前方部 埴輪棺2 | 全体 3/4 | 口径 491 胴部径 471 底部径 354 | 器高 104.1 口縁部高 123 7段目突帯間 123 6段目突帯間 133 5段目突帯間 132 4段目突帯間 128 3段目突帯間 124 2段目突帯間 127 底部高 151 | 7段目：円形/2方 5段目：円形/2方 3段目：円形/2方 | 外面：一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ 内面：タテ～ナナメハケ、ナデ | 大型 | c | (i) (ii) | I A | |

表6-1 壺形埴輪観察表①

| 図番号 | 出土トレンチ | 出土位置 | 残存 | 法量1 (cm) | 法量2 (cm) | 透孔 | 調整など |
|---------|--------|----------------------------|-------------------|--|----------|--------------|--------------------------------|
| 図85-164 | 3-2 | 後円部 排土中 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 3.2 | | 外面：ナナメハケ |
| 図85-165 | 3-2 | 後円部 墳頂流土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.2 | | |
| 図85-166 | 3-2 | 後円部 2段目埴輪集積 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 1.4 | | 外面：ヨコハケ |
| 図85-167 | 3-3 | 後円部 墳頂流土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 1.7 | | 外面：ナデ |
| 図85-168 | 3-3 | 後円部 墳頂流土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 1.6 | | |
| 図85-169 | 3-4 | 後円部 耕作土層 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.2 | | |
| 図85-170 | 3-4 | 後円部 石垣裏込め土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.8 | | 外面：ナデ |
| 図85-171 | 3-4 | 後円部 排土中 | 髷 1/10周以下 | | 残存高 2.8 | | 外面：ナデ |
| 図85-172 | 3-4 | 後円部 耕作土層 | 口縁部 1/8周 | 口径 45.5 | 残存高 4.4 | | 内面：ナデ |
| 図86-173 | 4-1 | 後円部東側 耕作土層 | 口縁突帯付近 1/10周 | 口縁部突帯径 22.5 | 残存高 3.1 | | |
| 図86-174 | 4-2 | 東くびれ部付近 周濠埋土 | 口縁突帯付近 1/10周 | 口縁部突帯径 24.1 | 残存高 5.5 | | |
| 図86-175 | 4-2 | 東くびれ部付近 周濠埋土 | 髷 1/10周以下 | | 残存高 2.3 | | |
| 図86-176 | 4-2 | 東くびれ部付近 周濠埋土 | 髷 1/10周以下 | | 残存高 2.0 | | |
| 図86-177 | 4-2 | 東くびれ部付近 周濠埋土 | 髷 1/10周以下 | | 残存高 1.6 | | |
| 図86-178 | 4-3・4 | 前上部北東側 機械掘削 | 口縁突帯付近 1/10周以下 | | 残存高 3.9 | | 外面：ナデ |
| 図86-179 | 4-3・4 | 前上部北東側 機械掘削 | 髷付近 1/10周以下 | | 残存高 3.5 | | 外面：ナデ 内面：ナデ |
| 図86-180 | 4-5 | 前上部上面 後円部2段目斜面の 基底付近 | 頸部付近 1/10周以下 | | 残存高 2.8 | | 外面：ナデ 内面：ナデ |
| 図86-181 | 4-5 | 前上部上面 後円部2段目斜面の 基底付近 | 頸部付近 1/10周 | 頸部突帯径 13.2 | 残存高 2.8 | | 外面：ナデ 内面：ナデ |
| 図86-182 | 4-5 | 前上部上面 耕作土層 | 髷接合部付近 1/4周 | 肩部最大径 29.2 | 残存高 7.9 | | 外面：ナデ 内面：肩部にヨコハケ、底部にナデ |
| 図86-183 | 4-5 | 前上部上面 後円部2段目斜面の 基底付近 | 髷接合部付近 1/3周 | 肩部最大径 31.5 髷最大径 39.9 | 残存高 9.3 | 底部：円形 | 内面：肩部にヨコハケ、底部にナデ |
| 図86-184 | 4-5 | 前上部上面 後円部2段目斜面の 基底付近 | 口縁突帯付近 1/5周 | 口縁部突帯径 29.5 | 残存高 5.1 | | 外面：タテハケ |
| 図86-185 | 4-5 | 前上部上面 後円部2段目斜面の 基底付近 | 肩部～底部 ほぼ全周 | 口縁部突帯径 14.4 肩部最大径 31.5 髷最大径 38.7 | 残存高 39.5 | 底部：円形 /2方 | 外面：ナナメハケ、ヨコハケ 内面：ナナメハケ、ヨコハケ |
| 図86-186 | 4-6 | 前上部前面 周濠埋土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.3 | | 外面：ナデ |
| 図86-187 | 4-6 | 前上部前面 周濠埋土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.4 | | |
| 図86-188 | 4-6 | 前上部前面 機械掘削 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.0 | | 外面：ナデ |

表 6 - 2 壺形埴輪観察表②

| 図番号 | 出土 トレンチ | 出土位置 | 残存 | 法量 1 (cm) | 法量 2 (cm) | 透孔 | 調整など |
|---------|------------|-------------------|-------------------|--------------|--------------|----|---------------------------------------|
| 図86-189 | 4-6 | 前方部前面 耕作土層 | 肩部 1/10周以下 | | 残存高 5.0 | | 内面：ナデ、指オサエ |
| 図86-190 | 4-6 | 前方部前面 耕作土層 | 髷 1/10周以下 | | 残存高 2.4 | | |
| 図86-191 | 4-6 | 前方部前面 耕作土層 | 頸部付近 1/6周 | 頸部突帯径 17.9 | 残存高 2.8 | | 外面：ナデ 内面：ナデ、指オサエ |
| 図86-192 | 4-6 | 前方部前面 周濠埋土 | 一次口縁～肩 1/6周 | 頸部突帯径 16.3 | 残存高 9.9 | | 外面：口縁部にタテハケ 内面：口縁部にタテハケ、ナデ 頸部にヨコハケ |
| 図86-193 | 4-6 | 前方部前面 機械掘削 | 髷 1/10周 | 髷最大径 33.2 | 残存高 2.5 | | 外面：ナデ |
| 図86-194 | 4-6 | 前方部前面 機械掘削 | 髷 1/10周 | 髷最大径 38.1 | 残存高 2.6 | | 外面：ナデ |
| 図86-195 | 4-6 | 前方部前面 周濠埋土 | 口縁部 1/10周 | 口径 45.2 | 残存高 3.7 | | 外面：タテ～ナナメハケ 内面：ヨコハケ |
| 図86-196 | 4-6 | 前方部前面 周濠埋土 | 口縁突帯付近 1/8周 | 口縁部突帯径 29.2 | 残存高 8.9 | | 外面：タテハケ 内面：ナナメハケ |
| 図86-197 | 4-6 | 前方部前面 機械掘削 | 髷付近 1/10周 | 髷最大径 38.0 | 残存高 3.7 | | 外面：ナデ |
| 図87-198 | 5-1 | 東くびれ部 攪乱埋土 | 頸部突帯付近 1/10周以下 | | 残存高 4.7 | | 外面：ナデ 内面：ナデ |
| 図87-199 | 5-2 | 後円部 1段目埴輪列周辺 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.0 | | |
| 図87-200 | 5-2 | 西くびれ部 1段目平坦面流土 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 1.8 | | |
| 図87-201 | 5-2 | 西くびれ部 排土中 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.3 | | |
| 図87-202 | 5-2 | 後円部 1段目埴輪列周辺 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 2.5 | | 外面：ナデ |
| 図87-203 | 5-2 | 西側くびれ部 2段目斜面流土 | 口縁部 1/10周 | | 残存高 2.7 | | |
| 図87-204 | 5-2 | 後円部1段目 埴輪列周辺 | 口縁部 1/10周以下 | | 残存高 3.0 | | 外面：タテハケ |
| 図87-205 | 5-2 | 西側くびれ部 2段目斜面流土 | 口縁突帯付近 1/10周 | 口縁部突帯径 28.3 | 残存高 5.4 | | |
| 図87-206 | 5-2 | 西側くびれ部 2段目斜面流土 | 頸部付近 1/4周 | 頸部突帯径 14.0 | 残存高 5.6 | | |
| 図87-207 | 5-2 | 西側くびれ部 2段目斜面流土 | 頸部付近 1/8周 | 頸部突帯径 14.8 | 残存高 6.1 | | |
| 図87-208 | 5-2 | 後円部 1段目埴輪列周辺 | 髷 1/10周 | | 残存高 2.0 | | |
| 図87-209 | 5-2 | 後円部1段目埴輪列 周辺 | 髷 1/10周以下 | | 残存高 2.0 | | |
| 図87-210 | 5-2 | 後円部 1段目埴輪列周辺 | 髷 1/10周 | | 残存高 2.0 | | 外面：ナデ |
| 図87-211 | 5-2 | 後円部 1段目埴輪列周辺 | 髷 1/10周以下 | | 残存高 2.9 | | |
| 図87-212 | 5-2 | 後円部 1段目埴輪列周辺 | 口縁突帯周辺 1/5周 | 口縁部突帯径 26.4 | 残存高 9.6 | | 外面：タテハケ 内面：ナナメハケ |
| 図87-213 | 5-2 | 西くびれ部 1段目平坦面流土 | 頸部～肩部 1/6周 | 頸部突帯径 13.3 | 残存高 7.2 | | 外面：ヨコハケ、ナナメハケ 内面：ナデ |

表6-3 壺形埴輪観察表③

| 図番号 | 出土トレンチ | 出土位置 | 残存 | 法量1 (cm) | 法量2 (cm) | 透孔 | 調整など |
|---------|--------|------------------|-----------------|--------------------------------------|--|-------|---|
| 図87-214 | 5-2 | 西くびれ部 2段目斜面流土 | 銜接合部付近 1/8周 | 肩部最大径 28.3 | 残存高 6.9 | | 外面：肩部と底部にヨコハケ |
| 図87-215 | 5-2 | 西くびれ部 近現代整地土層 | 銜接合部付近 1/10周 | 肩部最大径 28.3 頸最大径 35.2 | 残存高 3.7 | | 外面：ナデ |
| 図87-216 | 5-3 | 前方部北東隅 機械掘削 | 口縁突帯周辺 1/10周 | 口縁部突帯径 26.1 | 残存高 2.7 | | |
| 図87-217 | 5-3 | 前方部北東隅 機械掘削 | 頸部付近 1/8周 | 頸部突帯径 13.1 | 残存高 4.6 | | |
| 図87-218 | 5-3 | 前方部前面周 濠埋土 | 頸部付近 1/6周 | 頸部突帯径 14.6 | 残存高 3.3 | | |
| 図87-219 | 5-3 | 前方部前面周 濠埋土 | 頸部～肩部 1/6周 | 頸部突帯径 17.3 | 残存高 7.1 | | 内面：肩部内面にヨコハケ、ナデ |
| 図88-220 | 4-5 | 前方上面 埴輪棺1 | 口縁部～頸部 2/3周 | 口径 44.9 口縁部突帯径 32.2 頸部突帯径 17.8 | 残存高 21.0 二次口縁部高 10.1 一次口縁部高 8.8 | | 外面：タテハケ、ナデ 内面：ヨコハケ、ナナメハケ、ナデ |
| 図88-221 | 4-5 | 前方部 埴輪棺1 | 口縁部～頸部 全周 | 口径 43.9 口縁部突帯径 29.1 頸部突帯径 15.0 | 残存高 21.9 二次口縁部高 9.3 一次口縁部高 9.5 | | 外面：タテハケ 内面：二次口縁部はヨコハケ、それ以下はナデ、指オサエ |
| 図88-222 | 4-5 | 前方部 埴輪棺1 | 口縁部～頸部 全周 | 口径 44.7 口縁部突帯径 29.6 頸部突帯径 16.4 | 残存高 24.4 二次口縁部高 12.4 一次口縁部高 10.2 | | 外面：タテハケ、ヨコハケ 内面：ナナメハケ、ヨコハケ |
| 図88-223 | 4-5 | 前方部 埴輪棺1 | 口縁部全周 | 口径 44.4 口縁部突帯径 30.3 | 残存高 22.3 二次口縁部高 11.4 | | 外面：タテハケ、ヨコハケ 内面：二次口縁部はナナメハケ、一次口縁部はナデ |
| 図91-234 | 5-2 | 前方部 埴輪棺2 | 口縁部2/5周 | 口径 42.8 口縁部突帯径 27.1 | 残存高 16.2 二次口縁部高 12.0 | | 外面：タテハケ 内面：ナナメハケ |
| 図91-235 | 5-2 | 前方部 埴輪棺2 | 底部 1/2周 | 底部径 23.5 | 残存高 22.8 | 底部：円形 | 外面：タテハケ 内面：ナデ |

第6章 茅原大墓古墳の葺石の石種とその採石地

1. 第2次調査の葺石の石種とその使用傾向

桜井市茅原に茅原大墓古墳がある。墳丘の前方部東側に設定されたトレンチにみられる下段の葺石を裸眼で観察した（図106参照）。石材の石種の特徴、使用傾向について述べる。

(1) 石種の特徴

葺石の石種は柘榴石ペグマタイト、黒雲母花崗岩A、斑糲岩Aである。これらの石種の特徴について述べる。

柘榴石ペグマタイト 色は灰白色で、粒形が亜角～亜円である。ペグマタイト構造が顕著で、基質をなす長石に粒状をなす石英や柘榴石が散在する。石英・長石・白雲母・柘榴石が噛み合っている。石英は無色透明、粒状で、粒径が3～10mm、量が中である。長石は灰白色で、粒径が3～20mm、量が非常に多い。白雲母は無色透明、板状で、粒径が3～4mm、量がごく僅かである。柘榴石は濃赤色、粒状で、粒径が1～2mm、量が僅かである。

黒雲母花崗岩A 色は灰色で、粒形が亜円である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が3～6mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が3～8mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が2～3mm、量が中である。

斑糲岩A 色は暗灰緑色、灰緑色で、粒形が角、亜角である。長石・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が1～4mm、量が中である。角閃石は黒色、粒径が3～6mm、量が多い。輝石は暗緑色、粒径が2～5mm、量が多い。

(2) 石材の使用傾向

観察した葺石の石材は48個である。石種構成は、柘榴石ペグマタイトが約2割9分、黒雲母花崗岩Aが約1割3分、斑糲岩Aが約5割8分である。石材のみかけの長径は、5～9cmのものが約1割3分、10～19cmのものが約2割9分、20～29cmのものが約1割9分、30～39cmのものが約2割9分、40～49cmのものが約1割である。使用石材の特徴としては斑糲岩Aが多く、粒径が大きな石材が使用されているといえる（表7参照）。

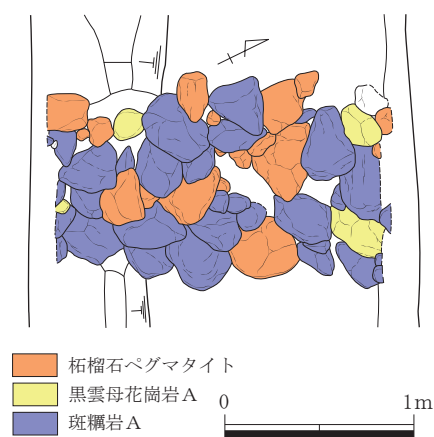


図106 2トレンチ葺石の石種 (S=1/40)

2. 第3次調査の葺石の石種とその使用傾向

茅原大墓古墳の墳丘は畑地となっていたためか、階段状に石垣が積まれている。この石垣の石種は自然石の斑糲岩が半数以上を占めている。数か所にあけられたトレンチで、当古墳が築造された時期

表7 2 トレンチの葺石の粒径

| 石種 | 石材のみかけの長径 (cm) | | | | | 合計 |
|-----------|----------------|-------|-------|-------|-------|----|
| | 5～9 | 10～19 | 20～29 | 30～39 | 40～49 | |
| 柘榴石ペグマタイト | 5 | 4 | 1 | 3 | 1 | 14 |
| 黒雲母花崗岩 A | 1 | 2 | 1 | 2 | | 6 |
| 斑糲岩 A | | 8 | 7 | 9 | 4 | 28 |
| 合計 | 6 | 14 | 9 | 14 | 5 | 48 |

の葺石がみられたのは北側に設定された3-3トレンチのみである。葺石は基底部が残存し、天端部（肩部）が消滅している。石材は畑の石垣に転用されたと推定される。残存する葺石を裸眼で観察した（図107）。石種の特徴、石材の使用傾向について述べる。

（1）石種の特徴

観察した石材は全て川原石様の自然石で、割石や剥石がみとめられない。石種はアプライト、白雲母花崗岩、片麻状黒雲母花崗岩、斑糲岩である。石種の特徴について述べる。

アプライト A 色は灰白色で、粒形が亜角である。基質をなす長石の中に柱状の石英がみられるペグマタイト構造を示すものもある。石英と長石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～8mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が2～6mm、量が多い。

白雲母花崗岩 色は灰白色で、粒径が亜角である。石英・長石・白雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～2mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が1～2mm、量が非常に多い。白雲母は無色透明、板状で、粒径が1～2mm、量が僅かである。

片麻状黒雲母花崗岩 色は灰白色で、風化しているためか砕けやすい。顕著な片麻状を呈する。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が0.5～1mm、量が僅かである。長石は灰白色、粒径が1～1.5mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5～1mm、量が僅かである。

斑糲岩 A 色は暗緑色で、粒形が亜角～亜円である。長石・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が1～3mm、量が中である。角閃石は黒色、粒径が2～5mm、量が多い。輝石は暗緑色、粒径が2～6mm、量が中である。

（2）石材の使用傾向

観察した70個の石材は全て自然石で、割石や剥石、加工石がみられない。石種的にみれば、斑糲岩 A が約6割1分、アプライト A が約2割7分、片麻状黒雲母花崗岩が約9分、白雲母花崗岩が約3分である。斑糲岩 A とアプライト A で、約9割を占める。このような石材の使用傾向は箸墓古墳の前方部北側付近、ホケノ山古墳の括れ部付近、堂ノ後古墳の周濠内等にみられる葺石の使用傾向に似ている。天理市の上ノ山古墳、東田大塚古墳に使用されている葺石の石種構成とは異なる。斑糲岩やアプライトは巻向川の川原石に多くみられる。箸墓古墳、ホケノ山古墳、堂ノ後古墳、茅原大墓古墳は葺

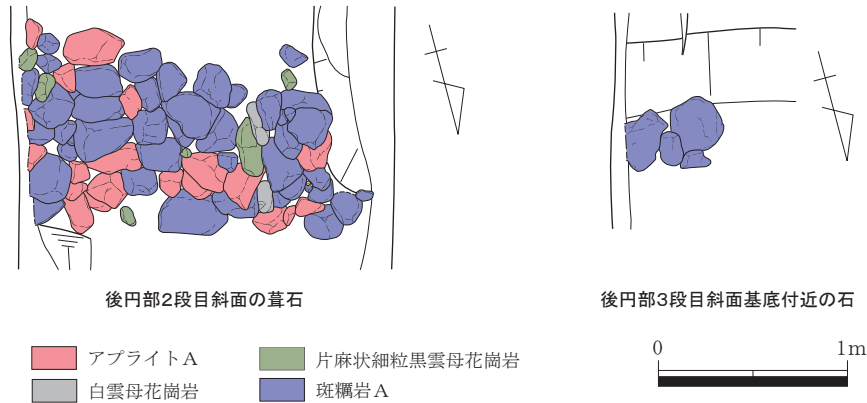


図 107 3-3 トレンチ葺石の石種 (S=1/40)

表 8 3-3 トレンチの葺石の石種とみかけの長径

| 石種 | 2 段目斜面の葺石のみかけの長径 (cm) | | | | 3 段目斜面の葺石のみかけの長径 (cm) | | | | 合 計 |
|-----------|-----------------------|-------|-------|-------|-----------------------|-------|-------|-------|-----|
| | 5~9 | 10~19 | 20~29 | 30~39 | 5~9 | 10~19 | 20~29 | 30~39 | |
| アブライトA | 1 | 10 | 5 | 3 | | | | | 19 |
| 白雲母花崗岩 | | 1 | 1 | | | | | | 2 |
| 片麻状黒雲母花崗岩 | 1 | 4 | | 1 | | | | | 6 |
| 斑瀾岩A | 2 | 15 | 18 | 4 | | 2 | | 2 | 43 |
| 合 計 | 4 | 30 | 24 | 8 | | 2 | | 2 | 70 |

石の採石が巻向川のできる条件にあった古墳といえる。

3. 第4次調査の葺石の石種とその使用傾向

茅原大墓古墳の第4次調査で出土した墳丘の葺石材を裸目で観察し、石種を同定した(図108、109)。石材の石種の特徴、使用傾向について述べる。

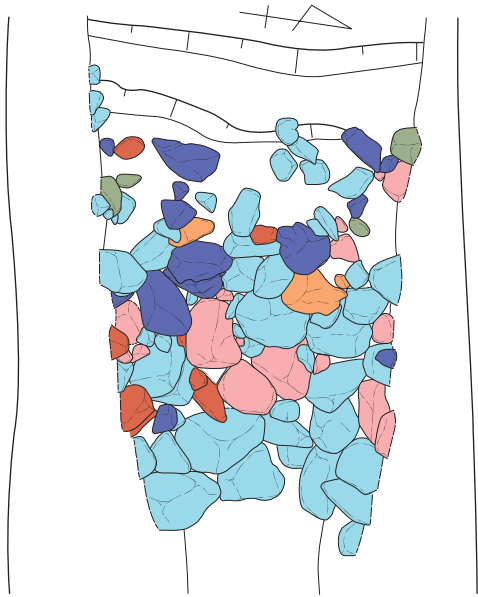
(1) 石種の特徴

識別した石種の特徴について述べる。

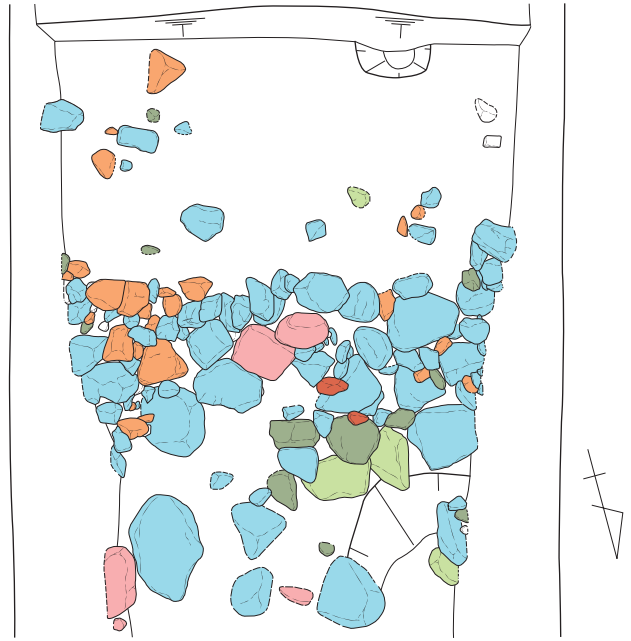
黒雲母花崗岩B 色は灰白色で、粒形が亜円である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1~2mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が1~2mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5~1mm、量が僅かである。

片麻状細粒黒雲母花崗岩 色は灰白色で、粒形が亜円である。顕著な片麻状を呈する。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1~2mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が1~2mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1~1.5mm、量が僅かである。

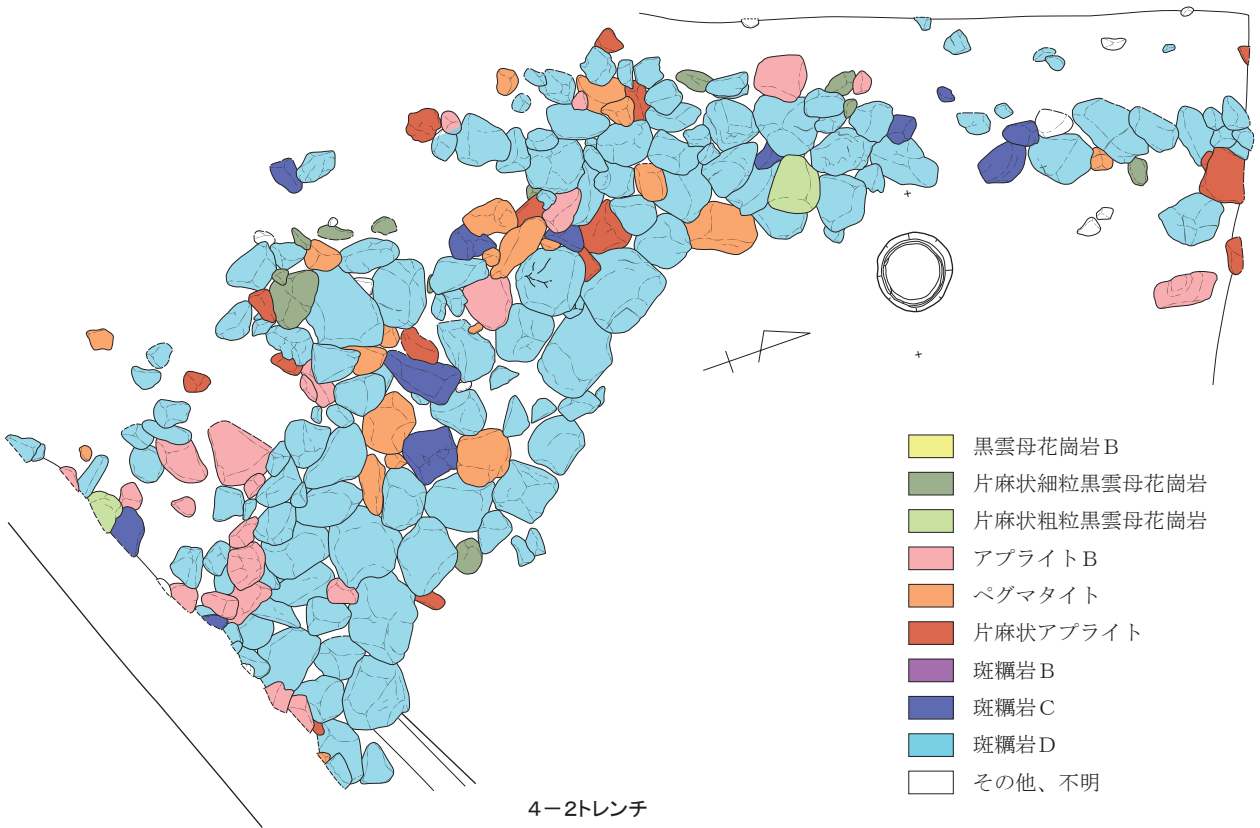
片麻状粗粒黒雲母花崗岩 色は灰白色で、粒形が亜角である。顕著な片麻状を呈する。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が3~8mm、量が中である。長石は灰白色で、



4-1トレンチ



4-6トレンチ



4-2トレンチ

- 黒雲母花崗岩B
- 片麻状細粒黒雲母花崗岩
- 片麻状粗粒黒雲母花崗岩
- アプライトB
- ベグマタイト
- 片麻状アプライト
- 斑糲岩B
- 斑糲岩C
- 斑糲岩D
- その他、不明



図108 第4次調査トレンチの葺石の石種①(S=1/40)

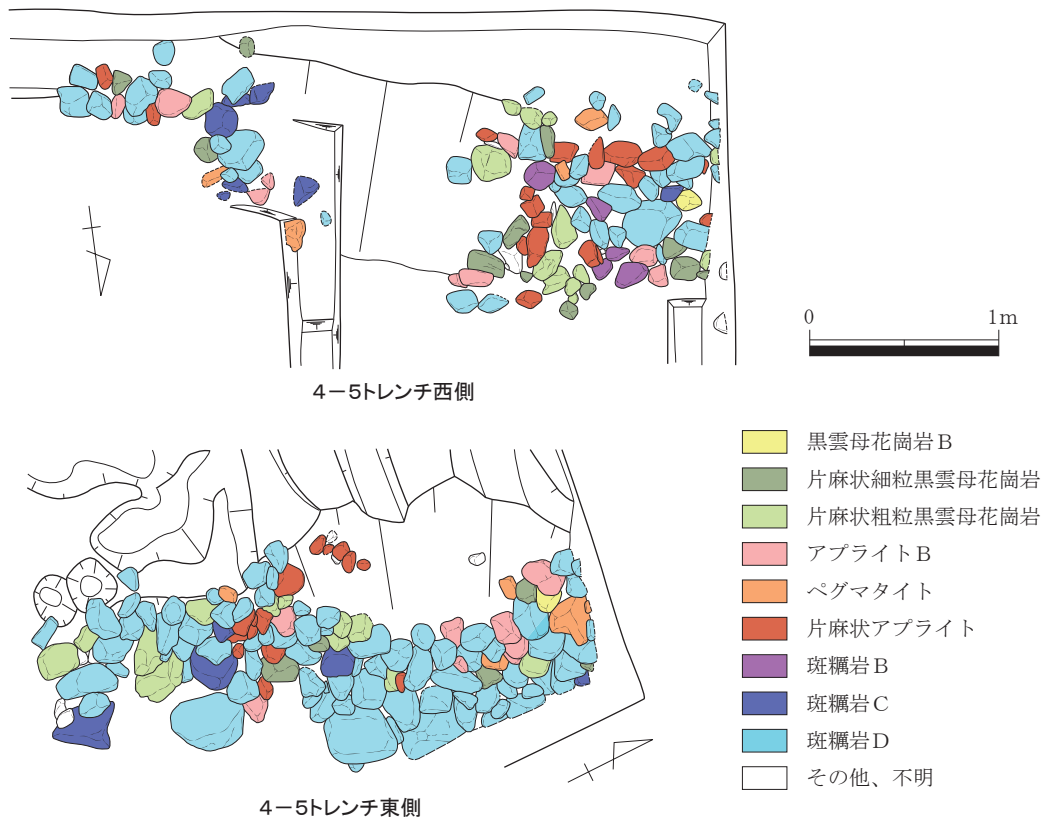


図 109 第 4 次調査トレンチの葺石の石種②(S=1/40)

ややレンズ状をなし、粒径が5～30mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、粒径が0.5～1mm、量が僅かで、レンズ状に集合する。レンズの長径が15～30mm、厚みが3～4mmである。

アプライト B 色は灰白色、粒形が亜角である。石英と長石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～8mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が3～8mm、量が非常に多い。

ペグマタイト 色は灰白色で、粒形が亜角である。石英と長石が噛み合っている。石英は灰色透明、粒状で、長石中に斑晶状に散在する。粒径が3～6mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が8～40mm、量が非常に多い。

片麻状アプライト 色は灰白色で、粒形が角である。片麻状をなす。石英・長石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～2mm、量が僅かである。長石は灰白色、粒径が1～3mm、量が非常に多い。

斑禰岩 B 色は茶褐色で、粒形が円、風化している。細粒～中粒の斑禰岩と推定される。

斑禰岩 C 色は暗灰緑色で、粒形が亜角である。長石・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が2～4mm、量が多い。角閃石は黒色、粒径が1～4mm、量が多い。輝石は暗緑色、粒径が1～3mm、量が僅かである。

斑禰岩 D 色は暗灰緑色で、粒形が亜角である。粒状の暗緑色塊が散在する。その長径は1～3cmで、量が多い。暗緑色塊には粒状の角閃石と輝石が集合している。長石・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が2～4mm、量が多い。角閃石は黒色、粒径が2～4mm、量が多い。輝石は暗緑色、粒径が2～3mm、量が僅かである。

表9 第4次調査トレンチの貫石の石種とその長径

| 調査地点 | 4-1 | | | | | 4-2 | | | | | 4-5東側 | | | | | 4-5西側 | | | | | 4-6 | | | | | 合 計 |
|-------------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|---|-----|
| | 5~9 | 10~19 | 20~29 | 30~39 | 40~49 | 50~59 | 5~9 | 10~19 | 20~29 | 30~39 | 40~49 | 50~59 | 5~9 | 10~19 | 20~29 | 30~39 | 40~49 | 50~59 | 5~9 | 10~19 | 20~29 | 30~39 | 40~49 | 50~59 | | |
| 黒雲母花崗岩B | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 |
| 片麻状細粒黒雲母花崗岩 | 2 | 4 | | | | | 2 | 8 | 2 | 1 | | | 3 | 6 | 1 | 3 | 6 | 3 | | | | | | | | 46 |
| 片麻状粗粒黒雲母花崗岩 | | | | | | | | | 1 | 1 | | | 3 | 6 | 4 | | | | | | | 1 | 2 | | | 29 |
| アブライト | 4 | 5 | 3 | 3 | 1 | | | 9 | 10 | 4 | | | 2 | 8 | 2 | | | | | | 5 | 2 | 1 | 1 | 2 | 63 |
| ペグマタイト | 1 | | 1 | 1 | | | 3 | 8 | 5 | 3 | 1 | | 1 | 4 | 1 | | | | | | 3 | | 7 | 12 | 5 | 56 |
| 片麻状アブライト | 1 | 5 | 2 | | | | 4 | 10 | 7 | 1 | | | 5 | 9 | | | | | | | 4 | 12 | 2 | | | 64 |
| 斑禰岩B | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 | 1 | | | 5 |
| 斑禰岩C | | 8 | | 4 | 1 | | 1 | 7 | 4 | | 1 | | 1 | 2 | 2 | 1 | 1 | | | | 6 | | | | | 39 |
| 斑禰岩D | 4 | 21 | 15 | 9 | 4 | 1 | 7 | 53 | 38 | 30 | 10 | 1 | 5 | 49 | 17 | 2 | 2 | 2 | 5 | 27 | 10 | 13 | 18 | 7 | 3 | 387 |
| その他 | | | | | | | 1 | 4 | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | 9 |
| 合 計 | 10 | 41 | 25 | 17 | 6 | 1 | 18 | 99 | 67 | 40 | 12 | 1 | 16 | 84 | 26 | 3 | 3 | 3 | 16 | 71 | 20 | 24 | 28 | 11 | 3 | 701 |

(2) 石材の使用傾向

墳丘に設けられたトレンチで、葺石が観察できたのは4-1トレンチで100個、4-2トレンチで237個、4-5トレンチの東側で132個、同トレンチの西側で107個、4-6トレンチで125個の合計701個である(表9参照)。

葺石のみかけの長径は5~54cmで、10~29cmの長径を示すものがトレンチ別にみれば66~86%を示す。4-1・4-2・4-6トレンチの葺石は一段目斜面、4-5トレンチ東側の葺石は前方部の中段の葺石、4-5トレンチ西側の葺石は後円部中段の葺石である。一段目と中段の葺石の長径をみれば、10~29cmのものが一段目ではトレンチ別にみれば66~69%、中段では84~86%を占めている。また、30cm以上のものは一段目では12~24%、中段では0~4%を占め、一段目に粒径が大きな石材が使用されているといえる。

葺石の石種は、黒雲母花崗岩B(0.42%)、片麻状細粒黒雲母花崗岩(6.56%)、片麻状粗粒黒雲母花崗岩(4.13%)、アプライトB(8.98%)、ペグマタイト(7.99%)、片麻状アプライト(9.12%)、斑糲岩B(0.71%)、斑糲岩C(5.58%)、斑糲岩D(55.20%)、観察不良(1.28%)である。観察不良の石材を除き、前6種類を花崗岩類、後3種類を斑糲岩類とすれば、前者の石材が37.71%、後者が62.28%となり、6割以上を斑糲岩類が占めている。また、粒径でも斑糲岩に大きなものが多い(表9参照)。

4. 第5次調査の葺石の石種とその使用傾向

茅原大墓古墳の第5次調査の5-1・5-2・5-3トレンチから出土した葺石を裸眼で観察した。観察結果から、石材の石種の岩相と石材の使用傾向について述べる。

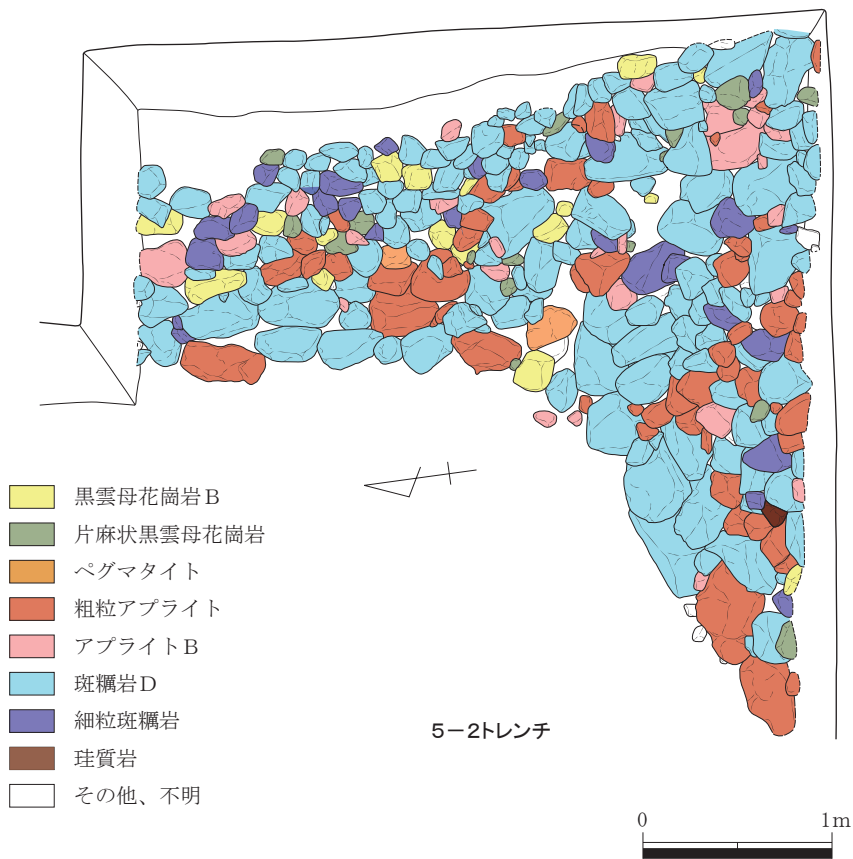
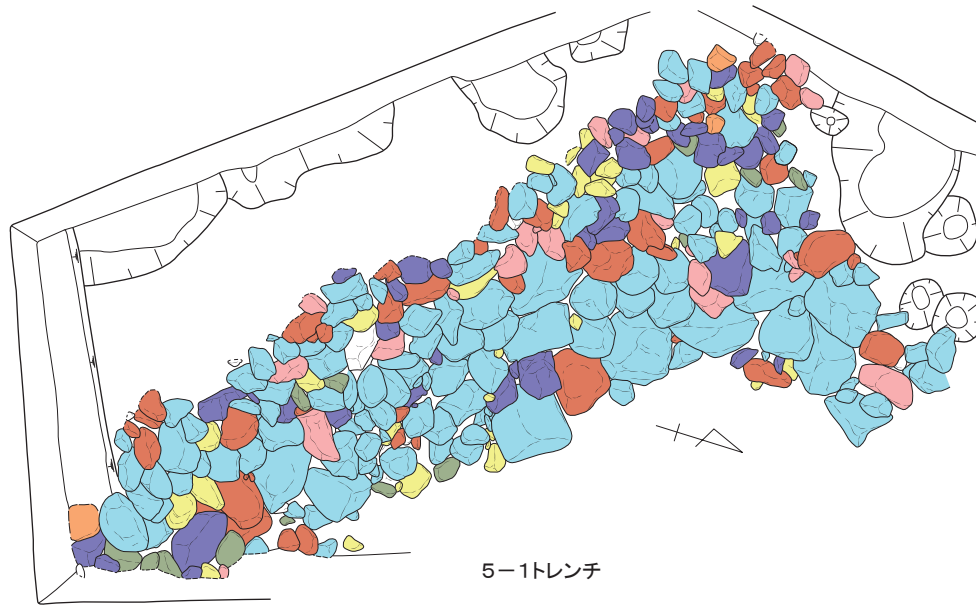
(1) 石材の石種

観察した葺石の石種は、黒雲母花崗岩B、片麻状黒雲母花崗岩、ペグマタイト、粗粒アプライト、アプライトB、斑糲岩D、細粒斑糲岩、珪質岩である(図110、111)。黒雲母花崗岩Bは長石が多いアプライト質の中粒黒雲母花崗岩である。片麻状黒雲母花崗岩は顕著な片麻状(縞状)を呈し、中粒である。黒雲母が少ないものと比較的が多いものがある。ペグマタイト・粗粒アプライト・アプライトBは巻向から笠荒神に通じる巻向川流域に分布する石英や長石を主とする石と岩相的に似ている。

斑糲岩Dや細粒斑糲岩は、岩相変化に富んだ石である。細粒の角閃石と輝石が集合して小指大の斑点模様をなすものもある。珪質岩は暗青灰色を呈し、石英質粒が固まったような石である。一見、チャートのようにもみえる。

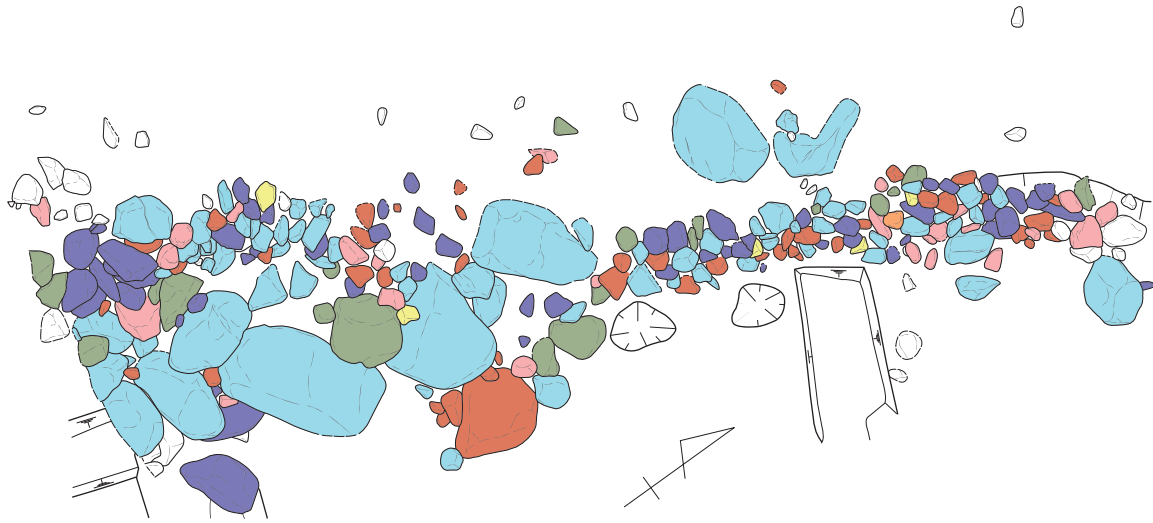
(2) 石材の使用傾向

5-1・5-2トレンチの葺石、5-3トレンチでは渡土堤の東側と西側にみられる葺石、これら4か所での石材の使用傾向について以下に述べる。調査個数は1140個である。石材の粒径については

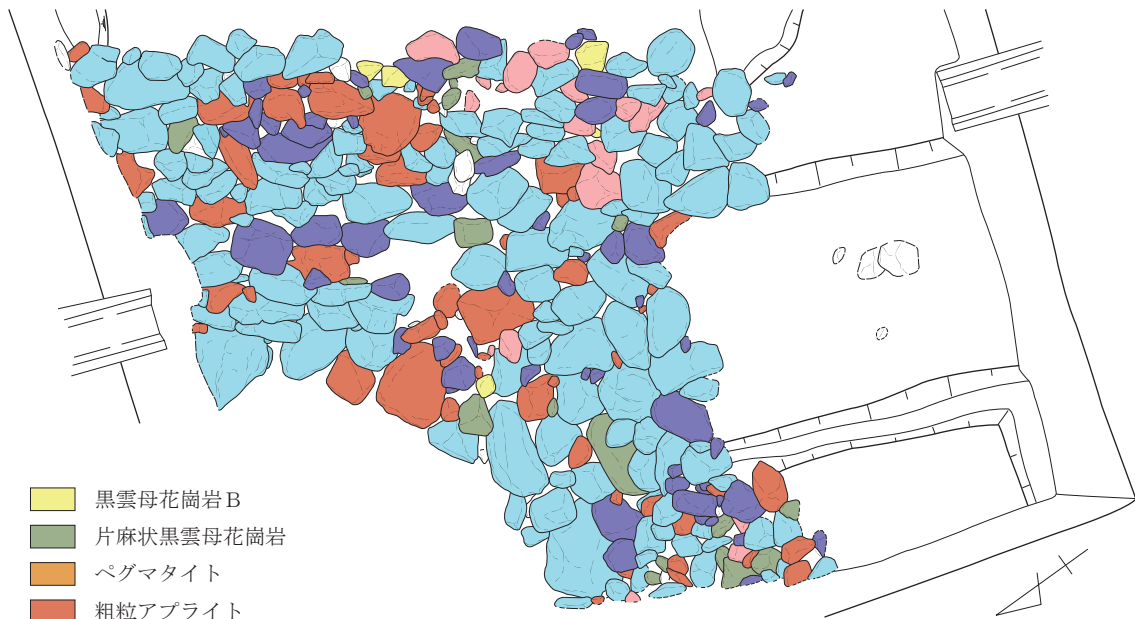


- 黒雲母花崗岩 B
- 片麻状黒雲母花崗岩
- ペグマタイト
- 粗粒アプライト
- アプライト B
- 斑禰岩 D
- 細粒斑禰岩
- 珪質岩
- その他、不明

図 110 第 5 次調査トレンチの葺石の石種①(S=1/40)



5-3トレンチ 渡土堤東側の葺石



- 黒雲母花崗岩 B
- 片麻状黒雲母花崗岩
- ペグマタイト
- 粗粒アプライト
- アプライト B
- 斑瀲岩 D
- 細粒斑瀲岩
- 珪質岩
- その他、不明

5-3トレンチ 渡土堤西側の葺石



図 111 第 5 次調査トレンチの葺石の石種②(S=1/40)

表10 5-1 トレンチの葺石の石種とその粒径

| 石種 | みかけの長径 (cm) | | | | | | | | | | 合計 |
|-----------|-------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-----|
| | 5~9 | 10~19 | 20~29 | 30~39 | 40~49 | 50~59 | 60~69 | 70~79 | 80~89 | 90~99 | |
| 黒雲母花崗岩B | 10 | 17 | 5 | | | | | | | | 32 |
| 片麻状黒雲母花崗岩 | 1 | 11 | 1 | | | | | | | | 13 |
| ベグマタイト | | 2 | 1 | | | | | | | | 3 |
| 粗粒アブライト | 7 | 22 | 11 | 3 | | | | | | | 43 |
| アブライトB | 5 | 10 | 7 | 2 | | | | | | | 24 |
| 斑縞岩D | 11 | 51 | 52 | 10 | 9 | | | | | | 133 |
| 細粒斑縞岩 | 6 | 27 | 10 | 1 | 1 | | | | | | 45 |
| 珪質岩 | | | | | | | | | | | |
| 合計 | 40 | 140 | 87 | 16 | 10 | | | | | | 293 |

表11 5-2 トレンチの葺石の石種とその粒径

| 石種 | みかけの長径 (cm) | | | | | | | | | | 合計 |
|-----------|-------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-----|
| | 5~9 | 10~19 | 20~29 | 30~39 | 40~49 | 50~59 | 60~69 | 70~79 | 80~89 | 90~99 | |
| 黒雲母花崗岩B | 2 | 10 | 3 | 1 | | | | | | | 16 |
| 片麻状黒雲母花崗岩 | 3 | 11 | 2 | | | | | | | | 16 |
| ベグマタイト | 1 | 1 | 1 | | | | | | | | 3 |
| 粗粒アブライト | 7 | 31 | 14 | 4 | 1 | 1 | 1 | | | | 59 |
| アブライトB | 4 | 18 | 4 | 2 | | | | | | | 28 |
| 斑縞岩D | 11 | 62 | 46 | 13 | 13 | 2 | | | | | 147 |
| 細粒斑縞岩 | 3 | 18 | 10 | 1 | | | | | | | 32 |
| 珪質岩 | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| 合計 | 31 | 152 | 80 | 21 | 14 | 3 | 1 | | | | 302 |

表12 5-3 トレンチ 渡土堤東側の葺石の石種とその粒径

| 石種 | みかけの長径 (cm) | | | | | | | | | | 合計 |
|-----------|-------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-----|
| | 5~9 | 10~19 | 20~29 | 30~39 | 40~49 | 50~59 | 60~69 | 70~79 | 80~89 | 90~99 | |
| 黒雲母花崗岩B | 1 | 3 | | | | | | | | | 4 |
| 片麻状黒雲母花崗岩 | 3 | 12 | 3 | 2 | 1 | | | | | | 21 |
| ベグマタイト | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| 粗粒アブライト | 19 | 18 | 2 | | | 1 | | | | | 40 |
| アブライトB | 9 | 23 | 2 | 1 | | | | | | | 35 |
| 斑縞岩D | 10 | 46 | 10 | 3 | 1 | 3 | 1 | 1 | | 1 | 76 |
| 細粒斑縞岩 | 15 | 36 | 7 | | 4 | 1 | | | | | 63 |
| 珪質岩 | | | | | | | | | | | |
| 合計 | 57 | 139 | 24 | 6 | 6 | 5 | 1 | 1 | | 1 | 240 |

表13 5-3 トレンチ 渡土堤西側の葺石の石種とその粒径

| 石種 | みかけの長径 (cm) | | | | | | | | | | 合計 |
|-----------|-------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-----|
| | 5~9 | 10~19 | 20~29 | 30~39 | 40~49 | 50~59 | 60~69 | 70~79 | 80~89 | 90~99 | |
| 黒雲母花崗岩B | 1 | 4 | | | | | | | | | 5 |
| 片麻状黒雲母花崗岩 | 3 | 9 | 6 | | | 1 | | | | | 19 |
| ベグマタイト | | | | | | | | | | | |
| 粗粒アブライト | 16 | 20 | 13 | 5 | 3 | | | | | | 57 |
| アブライトB | 8 | 9 | 5 | 1 | | | | | | | 23 |
| 斑縞岩D | 5 | 47 | 59 | 26 | 8 | 2 | | | | | 147 |
| 細粒斑縞岩 | 15 | 21 | 13 | 4 | 1 | | | | | | 54 |
| 珪質岩 | | | | | | | | | | | |
| 合計 | 48 | 110 | 96 | 36 | 12 | 3 | | | | | 305 |

みかけの長径である（表10～13）。

5-1 トレンチの葺石（東側括れ部中段） 観察した葺石293個の長径は、5cm以上10cm未満が40個（約14%）、10cm以上20cm未満が140個（約48%）、20cm以上30cm未満が87個（約30%）、30cm以上40cm未満が16個（約5%）、40cm以上50cm未満が10個（約3%）である。石種別にみれば、黒雲母花崗岩Bが32個（約11%）、片麻状黒雲母花崗岩が13個（約4%）、ペグマタイトが3個（約1%）、粗粒アプライトが43個（約15%）、アプライトBが24個（約8%）、斑糲岩Dが133個（約45%）、細粒斑糲岩が45個（約15%）である。

5-2 トレンチの葺石（西側括れ部中段） 観察した葺石302個の長径は、5cm以上10cm未満が31個（約10%）、10cm以上20cm未満が152個（約50%）、20cm以上30cm未満が80個（約26%）、30cm以上40cm未満が21個（約7%）、40cm以上50cm未満が14個（約5%）、50cm以上60cm未満が3個（約1%）、60cm以上70cm未満が1個である。石種別にみれば、黒雲母花崗岩Bが16個（約5%）、片麻状黒雲母花崗岩が16個（約5%）、ペグマタイトが3個（約1%）、粗粒アプライトが59個（約20%）、アプライトBが28個（約8%）、斑糲岩Dが147個（約49%）、細粒斑糲岩が32個（約11%）、珪質岩が1個である。

5-3 トレンチ東側の葺石（渡土堤東側） 観察した葺石240個の長径は、5cm以上10cm未満が57個（約24%）、10cm以上20cm未満が139個（約58%）、20cm以上30cm未満が24個（約10%）、30cm以上40cm未満が6個（約3%）、40cm以上50cm未満が6個（約3%）、50cm以上60cm未満が5個（約2%）、60cm以上70cm未満が1個、70cm以上80cm未満が1個、90cm以上100cm未満が1個である。石種別にみれば、黒雲母花崗岩Bが4個（約2%）、片麻状黒雲母花崗岩が21個（約9%）、ペグマタイトが1個、粗粒アプライトが40個（約17%）、アプライトBが35個（約15%）、斑糲岩Dが76個（約32%）、細粒斑糲岩が63個（約26%）である。

5-3 トレンチ西側の葺石（渡土堤西側） 観察した葺石305個の長径は、5cm以上10cm未満が48個（約16%）、10cm以上20cm未満が110個（約36%）、20cm以上30cm未満が96個（約31%）、30cm以上40cm未満が36個（約12%）、40cm以上50cm未満が12個（約4%）、50cm以上60cm未満が3個（約1%）である。石種別にみれば、黒雲母花崗岩Bが5個（約2%）、片麻状黒雲母花崗岩が19個（約6%）、粗粒アプライトが57個（約19%）、アプライトBが23個（約8%）、斑糲岩Dが147個（約48%）、細粒斑糲岩が54個（約18%）である。

5. 石材の採取推定地

観察できた葺石は、角が少し円くなった角～亜円の自然石で、割石や加工石がみられない。葺石材の表面は川原石様に滑らかなもの、山腹や礫層にみられるような表面に凹凸がみられるもの、風化して媒乱しかけているものがある。凹凸がみられるものや風化して媒乱しかけているものに斑糲類が多い。

茅原大墓古墳が位置する付近の地質は、山麓に段丘の地層が分布し、山地には領家花崗岩類が分布

する。このような分布も南北方向や東西方向の断層、堆積当時の古地形等によって地質分布が一様でなく、景行天皇陵付近や大神神社付近では基盤をなす花崗岩類が分布し、当古墳が位置する付近では洪積世の礫層が分布する。また、穴師付近では砂礫層や粘土層が分布する。このような地質・地形条件により山地や谷では岩石分布と同様の石種の礫、洪積層が分布する地では風化した礫や風化しかけた礫、河川では山地や地層から流出した礫が分布する。

岩石分布をもとに各河川の礫種をみれば、巻向川から南の三輪山には黒雲母花崗岩や片麻状黒雲母花崗岩が広く分布し、その中にレンズ状をなす斑礫岩が岩体として含まれる。西門川の右岸には片麻状黒雲母花崗岩、左岸には片麻状粗粒黒雲母花崗岩が分布する。穴師山付近にはアプライト質黒雲母花崗岩、巻向川近くになればペグマタイト質となる。このような地質の影響を受けて、西門川付近では片麻状を呈する黒雲母花崗岩、穴師山付近ではアプライトやアプライト質黒雲母花崗岩、白雲母花崗岩、ペグマタイト、巻向川左岸では黒雲母花崗岩、斑礫岩の礫が分布し、巻向川では穴師山付近や三輪山付近に分布する石種の礫がみられる。

以上のような岩石分布と石材の様相、石種の岩相をもとに石材の採取地を推定すれば、片麻状を呈する細粒黒雲母花崗岩・片麻状黒雲母花崗岩・片麻状粗粒黒雲母花崗岩は礫の形状と石種の岩相から西門川付近の石と推定される。アプライトA・アプライトB・粗粒アプライト・白雲母花崗岩・ペグマタイト・柘榴石ペグマタイトは穴師山付近に分布する石種の岩相に似ており、巻向川の礫と推定される。黒雲母花崗岩A・黒雲母花崗岩B・細粒斑礫岩・斑礫岩A・斑礫岩B・斑礫岩C・斑礫岩Dは三輪山付近に分布する黒雲母花崗岩や斑礫岩に岩相的に似ており、川原石様の石は巻向川の川原石と推定される。媒乱したような斑礫岩Bは茅原付近の洪積層に含まれている礫、当古墳造営時に出土した礫と推定される。

6. 石材の使用傾向

発掘調査時に観察した茅原大墓古墳の墳丘に使用されている葺石材1958個のみかけの長径、石種構成について述べる。

見かけの長径を10cm毎に区分すれば、5cm以上10cm未満が270個（14%）、10cm以上20cm未満が940個（48%）、20cm以上30cm未満が486個（25%）、30cm以上40cm未満が173個（9%）、40cm以上50cm未満が72個（4%）、50cm以上60cm未満が13個（1%）、60cm以上70cm未満が2個、70cm以上80cm未満が1個、90cm以上100cm未満が1個である。長径が10cm以上30cm未満の石が全体の4分の3を占め、50cm以上の石は僅か17個と1%に満たない数である。長径が増せば重量が増すが、30cm程の川原石様の石であれば15kg程の重量となり、一人でも運べる重さである。

葺石材の石種は黒雲母花崗岩Aが6個、黒雲母花崗岩Bが60個、白雲母花崗岩が2個、片麻状細粒黒雲母花崗岩が45個、片麻状黒雲母花崗岩が75個、片麻状粗粒黒雲母花崗岩が29個、アプライトAが19個、アプライトBが173個、粗粒アプライトが199個、片麻状アプライトが64個、ペグマタイトが63

表14 茅原大墓古墳の葺石の石種と粒径

| 石 種 | 粒 径 (cm) | | | | | | | | | | 合 計 |
|-------------|----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|
| | 5～9 | 10～19 | 20～29 | 30～39 | 40～49 | 50～59 | 60～69 | 70～79 | 80～89 | 90～99 | |
| 黒雲母花崗岩 A | 1 | 2 | 1 | 2 | | | | | | | 6 |
| 黒雲母花崗岩 B | 15 | 36 | 8 | 1 | | | | | | | 60 |
| 白雲母花崗岩 | | 1 | 1 | | | | | | | | 2 |
| 片麻状細粒黒雲母花崗岩 | 9 | 25 | 11 | | | | | | | | 45 |
| 片麻状黒雲母花崗岩 | 11 | 47 | 12 | 3 | 1 | 1 | | | | | 75 |
| 片麻状粗粒黒雲母花崗岩 | 3 | 14 | 9 | 3 | | | | | | | 29 |
| アプライト A | 1 | 10 | 5 | 3 | | | | | | | 19 |
| アプライト B | 33 | 88 | 36 | 15 | 1 | | | | | | 173 |
| 粗粒アプライト | 49 | 91 | 40 | 12 | 4 | 2 | 1 | | | | 199 |
| 片麻状アプライト | 14 | 38 | 11 | 1 | | | | | | | 64 |
| ペグマタイト | 13 | 31 | 14 | 4 | 1 | | | | | | 63 |
| 柘榴石ペグマタイト | 5 | 4 | 1 | 3 | 1 | | | | | | 14 |
| 細粒斑糲岩 | 39 | 102 | 40 | 6 | 6 | 1 | | | | | 194 |
| 斑糲岩 A | 2 | 25 | 25 | 15 | 4 | | | | | | 71 |
| 斑糲岩 B | | 4 | 1 | | | | | | | | 5 |
| 斑糲岩 C | 2 | 23 | 6 | 5 | 3 | | | | | | 39 |
| 斑糲岩 D | 71 | 391 | 265 | 100 | 51 | 9 | 1 | 1 | | 1 | 890 |
| 珪質岩 | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| 観察不良 | 2 | 7 | | | | | | | | | 9 |
| 合 計 | 270 | 940 | 486 | 173 | 72 | 13 | 2 | 1 | | 1 | 1958 |

個、柘榴石ペグマタイトが14個、細粒斑糲岩が194個、斑糲岩Aが71個、斑糲岩Bが5個、斑糲岩Cが39個、斑糲岩Dが890個、珪質岩が僅か1個である。これらの石種と推定される石材の採取地を考慮して石種を纏めてみれば、黒雲母花崗岩が66個（3%）、白雲母花崗岩が2個、片麻状黒雲母花崗岩が146個（7%）、アプライトが455個（24%）、ペグマタイトが77個（4%）、斑糲岩が1299個（60%）、珪質岩が1個となる。三輪山付近に分布する斑糲岩が6割を占め、穴師山付近に分布するアプライトやペグマタイトが約3割を占める。巻向川流域の谷や川原で採石されたと推定される石材が9割を占め、西門川付近と推定される石材が7分である。葺石材は主として巻向川の流域で採石されたと推定され、南方にある初瀬川や北方の布留川や高瀬川等から採石されたと推定される石材は認められない。茅原大墓古墳の葺石に使用されている石材は三輪から柳本にかけての付近の山麓に分布する石である。

第7章 総括

1. 茅原大墓古墳の全体像の復元

(1) 墳丘の形態

茅原大墓古墳の墳丘は現状でも比較的良好に残存しており、北側に短い前方部を向ける帆立貝形の墳丘形態であることが以前より推定されてきた。しかし前章までに報告してきた発掘調査成果から、築造当時の墳丘の平面形態をより正確に復元することが可能となっている。

墳丘の全長と輪郭 後円部の中心位置は、確認された埴輪列の位置から復元することができる。埴輪列は後円部頂では北側と西側の2箇所、後円部2段目平坦面では北側と南側の2箇所でそれぞれ確認されており、これらの位置関係から後円部の中心は、現状の後円部頂平坦面のほぼ中心に位置すると考えられる。

次に墳丘主軸ラインについては、上記の後円部中心と、確認されている2段目の東西くびれ部の中間点を結ぶことにより復元が可能である。これにより墳丘主軸ラインは、真北に対し約15°東に振れた方向を指向するもので、おおよそ3-3・3-4・3-5トレンチ及び4-6トレンチの東壁に近い位置に復元することができる。

後円部の規模については、上記の後円部中心から確認された後円部端までの距離から推定することができる。後円部東側では4-1トレンチと4-2トレンチで墳丘端の位置が確認されており、上記の後円部中心からの距離は35m～35.5mを測る。また後円部南西側の1-1トレンチでは葺石の転落石が集積する状況が確認されており、この位置が概ね墳丘端にあたと推定される。後円部中心からの距離は35.5m前後であり、後円部東側の墳丘端までの距離とほぼ一致している。このように後円部では中心から東西の墳丘端までの距離が一致することから、後円部の平面形態は概ね正円形を呈するものであると考えることができる。復元される後円部径は約71mである。

前方部では4-2トレンチにおいて東くびれ部、2トレンチにおいて東側面部、4-3・4トレンチ及び5-3トレンチにおいて北東隅、5-3トレンチ及び4-6トレンチにおいて前面部分の、それぞれ墳丘端が検出されている。先に推定した墳丘主軸ラインとの位置関係で見ると、まず前方部前面の墳丘端ラインは概ね主軸に直交する方向に復元することができる。東側面の墳丘端ラインは、主軸に平行するものではなく、前面側ほど主軸からの距離が大きくなっており、このことから前方部は前面側に向かって幅が広がる形態であることがわかる。なお東側面の墳丘端ラインは、各トレンチで検出された墳丘端の位置関係から、直線的ではなく図112に示すように中ほどでやや屈曲している可能性が考えられる。

こうした墳丘形態の復元により、墳丘の全長は約86mと推定することができる(図112)。この全長約86mという規模に対する後円部径約71mという大きさは、通有の前方後円墳の形態と比較すると著しく大きいものであり、典型的な「帆立貝式古墳」の一例であるといえることができる。

なお墳丘端の標高は、古墳が傾斜地に立地していることもあり、概ね北東側が高く、南西側が低く

なる傾向が見られる。したがって前方部北東隅から東くびれ部付近が81.5～81.8mと最も高く、後円部東側や前方部北西隅付近は81.0m前後で、後円部南西側では79.5mとなっている。

墳丘の段構成と高さ 後円部では埴輪列を巡らせる3段の平坦面の存在が確認されている。後円部頂の墳丘残存面の標高は90.3～90.7m、これより1段下がった平坦面は85.4m前後、さらに1段下がった平坦面は82.2～82.8m、後円部東側の基底は81.0mであり、各トレンチの状況からこれらに別の平坦面の存在を推定することは難しく、後円部は3段築成であることが明らかである。各段の高さは、1段目が東側では1.8m前後、西側では2.5m以上と推定される。2段目は東側くびれ部付近で約2.6m、西側くびれ部付近で約3.2mを測る。3段目は約5.3mと推定され、後円部全体の高さは11m前後であったと考えることができる。

次に前方部を見ると、東西のくびれ部では2段目斜面の基底が検出されており、後円部の1段目平坦面が、前方部の1段目平坦面と一連のものであることがわかっている。4-5トレンチでは前方部1段目平坦面と上面の平坦面が確認されており、両者の間には平坦面が存在しないことから、前方部は2段築成であると判断される。1段目の高さは墳丘東側で1.2m前後、2段目の高さは1.2～1.8m程度と考えられる。

なお前方部の2段目は、後円部に近い部分での上面の標高が84.0m前後であり、後円部2段目平坦面よりも約1.4m低く、両者の間には葺石を伴う斜面が存在する。このことから前方部と後円部は、1段目は一連の形態として築造され、2段目は前者が後者よりも低くつくられていることがわかる。また墳丘主軸に近い3-3トレンチの状況から考えると、前方部上面と後円部の平坦面を繋ぐスロープ部は存在しないことがわかる。

平坦面 後円部頂には現状で径18～20mの円形の平坦面が存在しており、その周縁部を円形に巡る埴輪列の存在が確認されている。埴輪列の径はおよそ16.5mであり、後円部頂には現状に近い規模の円形の平坦面が存在したと考えられる。この後円部頂平坦面で実施した物理探査の成果では、その中央部分において墓壙掘方の可能性がある窪みの存在が推定されているが、墓壙の形態を明確にするには至らなかった。しかし後世に大きな攪乱を受けた痕跡は捉えられなかったことから、埋葬施設は比較的良好な状況で残存していると考えられた。また大型の石材が使用されているような状況が確認されなかったことから、埋葬施設の形態は竪穴式石室ではなかったと推定することができる。

後円部2段目の平坦面は、北側と南側の2箇所において埴輪列を伴った状態で確認されている。平坦面の標高は南北両側で85.4m前後に推定され、墳丘基底とは異なり、概ね水平であることがわかる。平坦面の幅は3-3トレンチの状況から2.5m前後と考えられ、埴輪列はそのほぼ中央か、若干後円部中心寄りに位置すると考えられる。なおこの3-3トレンチでは後円部2段目平坦面が良好に残存していたが、礫敷きなどは確認されていない。

後円部1段目平坦面は東西のくびれ部付近において確認されており、西側の5-2トレンチでは後円部側を巡る埴輪列や埴輪棺3が検出されている。平坦面の標高は、東側で82.8m前後、西側で82.2m前後であり、墳丘端と同様に東側がやや高くなっている。平坦面の幅は明らかではないが、埴輪列が

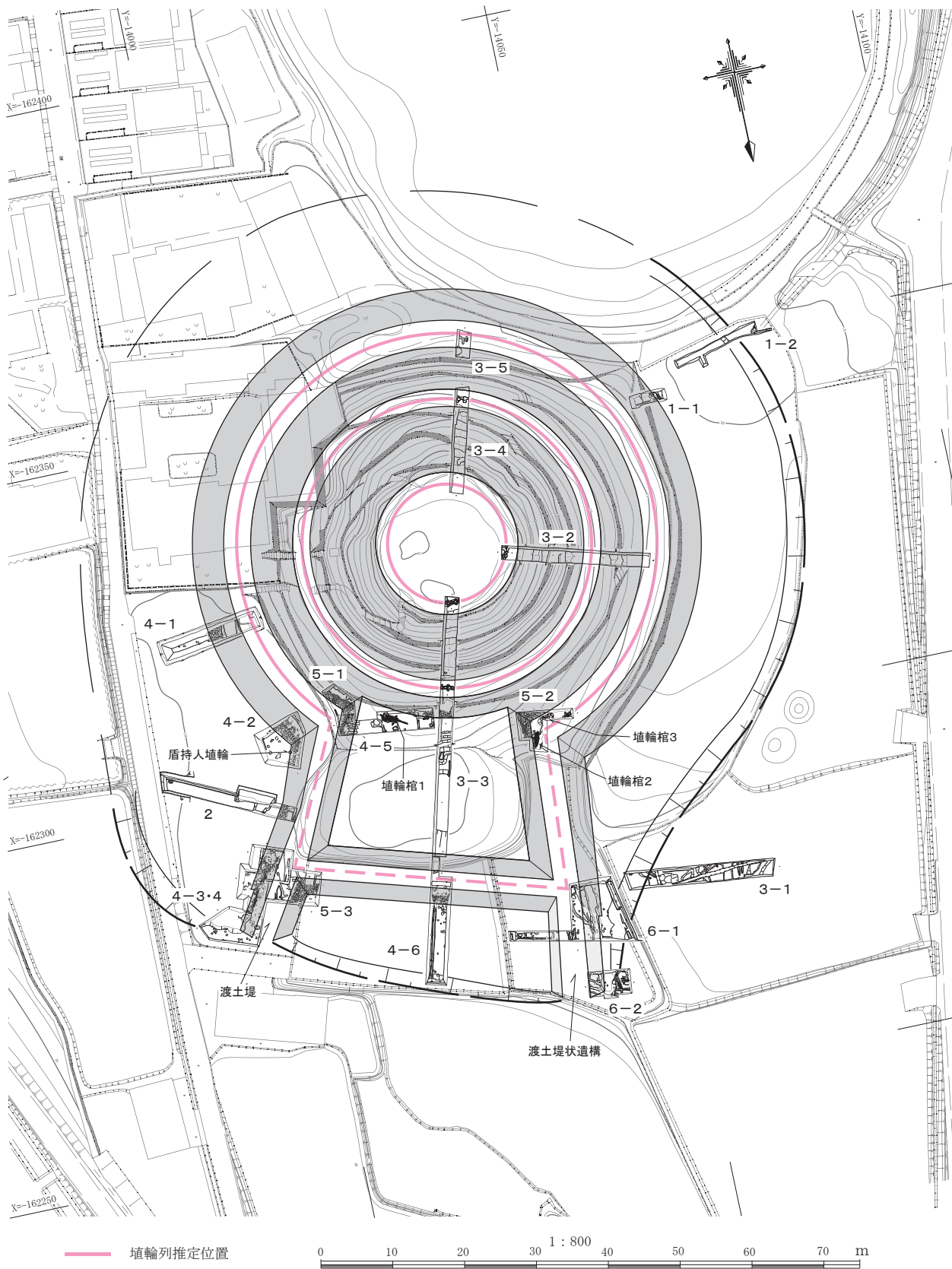


图112 茅原大墓古墳復元図 (S=1/800)

後円部基底から2 m以上離れた位置にあることを考えると、後円部2段目よりも広い4 m前後の規模であったと推定される。礫敷きなどは確認されていない。

前方部の平坦面の状況については不明な部分が多いが、1段目平坦面は後円部と一連のもので、前方部側面から前面にまで巡るものと推定される。この1段目平坦面の西側くびれ部に近い位置では埴輪棺2が検出されている。前方部上面では後円部に近い位置で埴輪棺1が検出されており、この部分は築造当時の平坦面が概ね残存していることがわかるが、前面側については後世に削平を受けているようであり、本来は前面側に向かって高くなる形態であった可能性が考えられる。

(2) 盛土と葺石

地山と墳丘盛土 墳丘が高まりとして残存する部分に設定した3-2トレンチ、3-3トレンチ、3-4トレンチでは、トレンチのほぼ全面において墳丘盛土が検出されている。これらのトレンチでは部分的に断ち割り調査を行ったが、地山は検出されておらず、旧地形の高まりを利用して墳丘が築造された可能性は低いと考えられる。

墳丘の周囲では、地山を掘り下げることにより周濠が形成されている。4-2トレンチや2トレンチでは墳丘の中心に近い側で地山残存面が高くなる状況が確認されており、少なくとも1 m以上の深さで地山が掘り込まれていることがわかっている。したがって墳丘の最下部は地山の削り出しにより構成されていると考えられる。

なお墳丘東側部分では、1段目斜面の葺石が地山を削り出した斜面に葺かれるのではなく、葺石と地山の間に黄褐色粘質土などで構成される盛土が存在する状況が確認されている。盛土の程度は箇所により異なっており、前方部東側の2トレンチでは基底石の下から斜面部の裏側にかけて厚さ50cm程度の盛土が存在する。後円部東側の4-1トレンチでは、トレンチ東半で検出された墳丘部分のすべてが盛土で構成されていると考えられ、地山を掘り込んだ後に、その凹みの西側から7 m以上の範囲が盛土で埋め戻され、墳丘が形づくられたと推定される。

墳丘東側の1段目付近に見られる盛土は黄褐色粘質土を中心とするもので、砂礫で構成される地山を掘削して得られるものではなく、また砂質である墳丘上部の盛土とも質が大きく異なっている。こうした粘質土がどこで得られたものかは不明であるが、湧水が多く軟弱な地山の上面に強固な墳丘基底部を築くため、特に調達されたものと推定される。

葺石 使用される石材の詳細については第6章を参照するが、茅原大墓古墳の近隣に位置する河川より採取された川原石が多く用いられているほか、地山を掘削した際に得られた石材が使用されたと考えられる。石材の大きさの傾向としては、1段目斜面では大型の石材が目立っており、基底石と斜面部分の石の大きさに顕著な差がみとめられない。いっぽう2段目斜面では基底部に大型の石材を用いるが、斜面部ではやや小さ目の石材が使用される状況が見られた。後円部3段目については葺石がほぼ全体にわたって失われているようであり、その多くが後世に石垣として転用されていると考えられる。

葺石は明確な裏込め土を有さず、栗石なども確認されていない。多くの箇所において盛土の斜面に葺かれているが、前方部前面の4-6トレンチでは一部地山斜面に直接葺かれる箇所が存在する。また6-1トレンチでは葺石は確認されなかったが、前方部西側面にあたる地山の斜面が検出されている。葺石が存在したとすれば地山の斜面に直接葺かれていた可能性が考えられる。

(3) 埴輪の配列と埴輪棺

埴輪列の状況 後円部頂では平坦面の西側と北側の2箇所で埴輪列が検出され、平坦面の周縁を円形に巡る埴輪列の存在が明らかとなっている。埴輪列の径はおおよそ16.5m程度と推定され、後円部頂には100個体以上の円筒埴輪が配列されたと考えられる。布掘状の掘方に据えられている部分と、掘方が確認できない部分が存在しており、箇所によって据え付け方法が異なっていることがわかる。また4個体に1個体程度の割合で、底部が高い位置に据えられる個体が存在している。使用される埴輪は大型の個体が多いが、小型の個体も一定量含まれている。

後円部2段目平坦面の埴輪列は南北2箇所で検出されている。その径は40.3mに復元され、250個体程度の円筒埴輪が配列されたと推定される。後円部頂と同様に据え付け方法が一樣ではなく、北側では布掘状の掘方が確認されているが、南側では掘方が確認されていない。使用される個体は大型に限定され、後円部頂と同様に、数個体に1個体の割合で底部が高い位置に据えられている可能性が考えられる。なお南側で検出された3個体は、いずれも底部を打ち欠いた状態で据えられていた。

後円部1段目平坦面では西側くびれ部に近い位置で埴輪列が検出されている。埴輪列の径は58m程度に推定され、300個体以上の円筒埴輪が配列されたと考えられる。検出された3個体はいずれも小型でⅢ類に分類される個体であり、全て小型で構成されている可能性が考えられる。

前方部では埴輪列を検出することはできなかったが、周辺のトレンチにおいて一定量の円筒埴輪が検出されていることから、埴輪列が存在した可能性が高いといえることができる。前方部1段目平坦面は後円部1段目平坦面と連続していることから、埴輪列についても後円部から連続しているものと推定される。前方部上面については削平を受けている箇所が多く、埴輪列の存否は明らかではない。

壺形埴輪の配置 比較的残存率の高い個体がくびれ部付近や前方部周辺で出土している。このうち後円部1段目埴輪列に近い位置で出土している個体は、法量等から考えると、埴輪列を構成する小型の円筒埴輪の上に載せられていた可能性が考えられる。(185)は後円部2段目より転落したものと推定されるが、後円部2段目の埴輪列は大型の円筒埴輪で構成され、その上に(185)を載せることはできない。したがってこの個体については単独で据えられていた可能性がある。このほか前方部前面の4-6トレンチでも一定量の壺形埴輪が出土しており、前方部にも配置されたと考えられる。

その他の埴輪の配置 東側くびれ部の基底に近い位置において盾持人埴輪の基部が原位置で検出されており、この位置に盾持人埴輪が樹立されていたことがわかっている。また同じ東側くびれ部の4-2トレンチでは、周濠埋土中より鳥形埴輪の破片が複数出土しており、くびれ部付近に鳥形埴輪が配置されたと推定される。このほか蓋形埴輪は墳丘上のトレンチより多く出土していることから、

後円部の上半部に配置されたものと推定される。

埴輪棺 計3基の埴輪棺が確認されているが、調査範囲が限られていることを考慮すると、本来はさらに多くの埴輪棺が存在した可能性が考えられる。埴輪棺1は前方部上面の、後円部との接続部分に近い位置で検出されている。西側くびれ部付近の1段目平坦面において検出された埴輪棺2・埴輪棺3は、埴輪列と2段目斜面の間という狭い空間に位置していた。これらの埴輪棺はともに墳丘斜面の基底に近接する位置にあり、かつその主軸を斜面基底ラインに平行させている点で共通点が見られ、墳丘を意識した配置であるということが出来る。このような埴輪棺に葬られた人物は、後円部頂の中心埋葬施設の被葬者の近親者であると考えられており、茅原大墓古墳の築造が完了したのち、数十年のうちに埋葬が行われたと推定される。¹⁾

(4) 渡土堤

前方部北東側の渡土堤 幅約7m、長さ約7mを測る渡土堤で、若干地山を削り残した上で盛土により築かれており、東西の両側面には葺石が施されている。墳丘との接続位置は前方部前面の東端部分であり、渡土堤の主軸方向は前方部前面に直交するものではなく、概ね前方部東側面ラインと一致している。また渡土堤の東側面は前方部の東側面とほぼ一連となるような関係にあることから、この渡土堤は前方部東側面を強く意識して築かれていると考えられる。

渡土堤の上面は削平を受けており、残存高は最大で0.8mを測るが、本来の高さは不明である。しかし前方部1段目の高さが1.2m程度と推定されることから、これを上回るものとは考えられない。渡土堤の上面は前方部1段目平坦面と一連であったか、高低差が存在したとしてもわずかな段差が存在した程度であったと推定される。

なおこの渡土堤は、長さ7m、高さ1m程度に対して幅7mの規模を有しているという点は注意される。他の古墳で確認されている渡土堤は幅2～5m程度のものが多く、7m以上の幅を有する例は稀少であり、渡土堤としては幅が広い事例であるということが出来る。²⁾

こうした状況を踏まえ、この渡土堤が持つ役割を考えておくこととしたい。まず渡土堤が持つ機能の一つとしては周濠の水位調節が挙げられる。傾斜地に立地する古墳では、水を湛えた周濠を巡らせるためには周濠を複数箇所区切り、水面を階段状にする必要がある。茅原大墓古墳もまた傾斜地に立地する古墳の一つであり、墳丘基底の標高は北東側と南西側では約2mの差が存在することから、その周囲に周濠を巡らせるためには渡土堤が必要となるであろう。しかし検出された渡土堤は周濠底が最も高くなる墳丘の北東側に位置しており、堤の東西の周濠底の高低差がわずか20cm程度であることから、水位を調節する機能を有する堤としては、適当な位置にあるとは考えられない。

渡土堤の機能としてもう一つ考えられるのは、墳丘と外側を繋ぐ通路としての役割である。茅原大墓古墳で確認された渡土堤は上記のように、前方部東側面の1段目平坦面との連結を意識しているような状況が窺われた。幅7mという規模についても、前方部1段目平坦面の規模と合わせるために築かれている可能性が考えられる。

このように見てくると、確認された渡土堤は水位調節機能が重視されているとは考えられず、前方部1段目平坦面との接続を意図した通路としての意識が、より強く表れているように思われる。

前方部北西側の渡土堤状遺構 上記の渡土堤とは墳丘主軸を挟んでほぼ対称的な位置にあり、西側面は前方部西側面と一連となっている。残存部のほぼ全てが地山の削り出しにより形成されている点は東側の渡土堤と異なるが、基本的に両者は同様の機能を有するものであったと推定される。

(5) 周濠の形態

周濠外側の立ち上がりが確認されている地点は、4-3・4トレンチや4-6トレンチ、6-1トレンチ、6-2トレンチなど前方部北側に集中しており、後円部側ではわずかに1-2トレンチで確認されているにすぎない。このため周濠の形態を復元することは難しいが、現況の地形状況などを考慮して以下のように推定しておく。

まず後円部側では、南西側において幅12m余りの周濠が確認されている。これに加えて後円部西側には以前より周濠の痕跡とされてきた小池が存在し、古墳の東側では南北に走る市道のすぐ東側で高くなる地形が観察される。これら現況の地形を参考とすると、後円部の周辺には10~15m幅の周濠が巡っていたと推定される。

前方部側では、墳丘主軸を挟んで東西で周濠の平面形態が異なっていることが明らかとなっている。まず西側では、周濠の北端部においてその幅が極端に狭くなっており、後円部側に向かって大きく広がる形態であることが確認されている。対して東側では、4-3・4トレンチの成果から北側に向かって幅が狭くなるような状況は確認されておらず、前方部側面でも幅20m前後の規模を有する周濠が存在したと考えられる。なお前方部前面側では、東側の渡土堤付近で約7m、墳丘主軸付近で10m余りの幅を有していると考えられ、西側ほど幅が広がる形態であったと推定される。

上記のような状況から茅原大墓古墳の周濠は、墳丘主軸を挟んで非対称な形態であり、全体としては馬蹄形に近い平面形状を有していたと推定される(図112)。

2. 茅原大墓古墳の評価

(1) 築造時期

茅原大墓古墳では後円部の中心埋葬施設の内容が明らかになっておらず、その築造時期を検討する上で根拠とすることができる資料は、出土した埴輪に限られている。

出土した円筒埴輪は先に見たように、一部古い様相を持つ個体が含まれていたが、川西編年のⅡ期、埴輪検討会編年ではⅢ-1段階に位置付けられるものであった。壺形埴輪や形象埴輪は円筒埴輪に比して出土量が少なく、また各個体の残存率が低かったため詳細な時期を検討することは難しいが、円筒埴輪の時期と矛盾のないものであるといえることができる。

以上のような埴輪の状況から茅原大墓古墳の築造時期は、古墳時代の時期区分においては中期初頭

頃に位置付けることができる。暦年代については、前期後半の年代を4世紀中頃とする考えに基づき³⁾、4世紀末頃と考えておきたい。

(2) 茅原大墓古墳の歴史的意義

大和・柳本・纏向古墳群 茅原大墓古墳が位置する奈良盆地東南部には、古墳時代前期の大王墓と考えられる6基の巨大前方後円墳を含む数多くの古墳が築造されており、付近が当該期における政権勢力の根拠地であったことを物語っている。この地域の中でも特に大型古墳が集中して築造されるのは、現在の桜井市北部から天理市南部にかけての東西約2km、南北約5kmの範囲であり、ここには古墳時代を通じて180基以上の古墳が築造されている(図113、表15)。これらの古墳は北から「大和古墳群」、「柳本古墳群」、「纏向古墳群」の3つのグループに分けられており、茅原大墓古墳はこのうち「纏向古墳群」に含まれ、上記の古墳集中範囲の南端部分に位置している。

大和・柳本・纏向古墳群における墳墓の築造の開始は庄内式期に遡ると考えられる。この時期には纏向古墳群で纏向石塚古墳(墳丘墓)や矢塚古墳(墳丘墓)など全長100m近く的大型前方後円形墳墓が複数築造されており、3つのグループのうちでも最も造墓活動が活発であったとすることができる。纏向古墳群では3世紀中頃に、これらの墳墓の築造に併行あるいは後続するかたちで、日本列島で最初の巨大前方後円墳である箸墓古墳(全長280m)が築造されている。

大和・柳本古墳群においても庄内式期に遡るとされる大型墳墓が存在するが、造墓活動が活発化するのには箸墓古墳築造後のことである。大和古墳群では箸墓古墳とほぼ時期を同じくして中山大塚古墳(120m)が築造されたのち3世紀後半から4世紀初頭にかけて、箸墓古墳に続く王墓とされる西殿塚古墳(220m)のほか、全長100~150mの前方後円墳・前方後方墳が相次いで築造されている。この時期には纏向古墳群では際立った古墳は築造されておらず、造墓の中心が大和古墳群に移っていると考えられる。

柳本古墳群では3世紀後半に黒塚古墳(130m)などの大型古墳が築造され、これ以降造墓が活発化する。特に4世紀前半から中頃には行燈山古墳(242m)、渋谷向山古墳(300m)という2基の巨大前方後円墳が築造され、この段階には造墓の中心が大和古墳群から柳本古墳群へと移っていると考えることができる。

4世紀後半以降になると、大和・柳本・纏向古墳群では全長100m以上の大型古墳は築造されなくなり、かわって奈良盆地北部の佐紀古墳群や西部の馬見古墳群、あるいは河内の古市古墳群において大型古墳が築かれるようになる。これは畿内の政権内部における勢力変動に起因するものと考えられる。再びこの地域において100m以上の古墳が築造されるのは古墳時代後期の西山塚古墳(120m)のみであり、大和・柳本・纏向古墳群における大型古墳の築造は概ね古墳時代前期の完了とともに終焉を迎えていることがわかる。

茅原大墓古墳の位置付け 茅原大墓古墳の歴史的意義を考える上で重要となる要素の一つとして、上記のような背景を持つ大和・柳本・纏向古墳群の一面に位置している点がまず挙げられる。茅原大



図113 大和・柳本・纏向古墳群の古墳分布 (S=1/25,000)

表15 大和・柳本・纏向古墳群の古墳一覧 (No.は図113に対応)

| No | 古墳名 | 墳形 | 墳丘規模 | 時期 | No | 古墳名 | 墳形 | 墳丘規模 | 時期 |
|----|--------------|---------|-------|--------|----------|----------|-------|--------|-----|
| 1 | 茅原狐塚古墳 | 方 | 40m | 後期後 | 89 | 高槻古墳 | 前方後円 | 110m | 後期? |
| 2 | 弁天社古墳 | 円? | 不明 | 後期 | 90 | 11B-0214 | 円 | 10m | 後期? |
| 3 | 堀ノ端古墳 | 方 | 不明 | 後期 | 91 | 11B-0213 | 円 | 10m | 後期? |
| 4 | 茅原大墓古墳 | 帆立貝式 | 86m | 中期前 | 92 | 11B-0346 | 円 | 20m | 後期? |
| 5 | 毘沙門塚古墳 | 前方後円 | 45m | 後期前 | 93 | 11B-0345 | 円 | 15m | 不明 |
| 6 | 三光古墳 | 不明 | 不明 | 不明 | 94 | 11B-0199 | 円? | 不明 | 不明 |
| 7 | 藤が森古墳 | 円? | 不明 | 不明 | 95 | 11B-0198 | 円 | 25m | 不明 |
| 8 | 狐塚古墳 | 円 | 6m | 後期? | 96 | 11B-0197 | 円 | 15m | 不明 |
| 9 | 南石神塚古墳 | 円 | 20m | 不明 | 97 | 11B-0196 | 円 | 15m | 不明 |
| 10 | 北石神塚古墳 | 円? | 不明 | 不明 | 98 | 11B-0197 | 円 | 20m | 不明 |
| 11 | 馬塚古墳 | 円? | 不明 | 後期後 | 99 | 11B-0371 | 円? | 不明 | 後期 |
| 12 | ツクロ塚古墳 | 円 | 30m | 不明 | 100 | 11B-0370 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 13 | ツクロ塚古墳 | 円 | 10m | 不明 | 101 | 11B-0339 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 14 | 八王子古墳 | 不明 | 不明 | 不明 | 102 | 11B-0340 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 15 | 神上塚古墳 | 円? | 不明 | 不明 | 103 | 東殿塚古墳 | 前方後円 | 150m | 前期中 |
| 16 | 宮ノ前古墳 | 円 | 15m | 後期 | 104 | 西殿塚古墳 | 前方後円 | 220m | 前期前 |
| 17 | 堂ノ後古墳 | 前方後円 | 60m以上 | 中期後 | 105 | 空路宮山古墳 | 前方後円 | 45m | 後期 |
| 18 | ホケノ山古墳 (墳丘墓) | 前方後円 | 80m | 庄内式期 | 106 | 西山塚古墳 | 前方後円 | 120m | 後期 |
| 19 | 慶運寺裏門墳 | 円 | 12m | 後期? | 107 | 西ノ塚古墳 | 円 | 35m | 中期後 |
| 20 | 慶運寺裏古墳 | 円? | 13m | 後期 | 108 | 下池山古墳 | 前方後方 | 120m | 前期前 |
| 21 | 茶ノ木塚古墳 | 円? | 28m | 不明 | 109 | ホックリ塚古墳 | 円 | 25m | 不明 |
| 22 | 北口塚古墳 | 円? | 25m | 不明 | 110 | 火矢塚古墳 | 前方後円 | 50m | 不明 |
| 23 | 石塚古墳 | 不明 | 不明 | 不明 | 111 | 燈籠山古墳 | 前方後円 | 110m | 前期前 |
| 24 | 小川塚古墳 | 不明 | 不明 | 不明 | 112 | 中山大塚古墳 | 前方後円 | 120m | 前期前 |
| 25 | 平塚古墳 | 円or前方後円 | 35m以上 | 後期 | 113 | 狐塚古墳 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 26 | 池田1号墳 | 円 | 18m | 後期中 | 114 | 11B-0343 | 円? | 不明 | 不明 |
| 27 | 池田2号墳 | 方 | 不明 | 不明 | 115 | 11B-0158 | 円 | 20m | 不明 |
| 28 | 小川塚東古墳 | 円 | 34m | 不明 | 116 | 小岳寺塚古墳 | 前方後円 | 50m | 不明 |
| 29 | 小川塚西古墳 | 方 | 41m | 不明 | 117 | 11B-0342 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 30 | サシコマ古墳 | 円 | 13m | 不明 | 118 | 11B-0268 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 31 | 石田古墳 | 円? | 15m | 不明 | 119 | 弁天塚古墳 | 前方後円 | 70m | 不明 |
| 32 | 巻野内石塚古墳 | 前方後円 | 60m | 不明 | 120 | 狐塚古墳 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 33 | 坂田地区の古墳 | 不明 | 不明 | 前期 | 121 | 石塚古墳 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 34 | 稲荷山古墳 | 円 | 10m | 不明 | 122 | マトバ古墳 | 円 | 不明 | 不明 |
| 35 | 原田古墳群 | 円? | 15m | 不明 | 123 | 矢ノ塚古墳 | 前方後円 | 102m | 不明 |
| 36 | 箸中イヅカ古墳 | 前方後円 | 80m以上 | 前期末 | 124 | 平塚古墳 | 円 | 54m | 不明 |
| 37 | 箸中ビハクビ古墳 | 円 | 20m | 中期前 | 125 | ワサギ塚古墳 | 前方後方 | 110m以上 | 不明 |
| 38 | 箸墓古墳 | 前方後円 | 280m | 前期前 | 126 | 栗塚古墳 | 前方後円 | 120m | 不明 |
| 39 | 堀川1号墳 | 円 | 不明 | 後期前 | 127 | 11B-0140 | 円? | 不明 | 不明 |
| 40 | 堀川2号墳 | 円 | 不明 | 後期前 | 128 | 星山森古墳 | 方 | 13m | 不明 |
| 41 | 南飛塚古墳 | 前方後円? | 不明 | 前期前 | 129 | 星塚古墳 | 前方後方 | 70m | 不明 |
| 42 | ヤナイタ1号墳 | 方 | 不明 | 中期末 | 130 | 馬口山古墳 | 前方後円 | 110m | 前期前 |
| 43 | ヤナイタ2号墳 | 方 | 13m | 中期末 | 131 | マバカ西古墳 | 前方後方? | 不明 | 前期 |
| 44 | メクリ1号墳 | 前方後方 | 28m | 庄内~前期初 | 132 | マバカ古墳 | 前方後円 | 75m | 前期前 |
| 45 | 東田大塚古墳 | 前方後円 | 120m | 前期前 | 133 | 波多子塚古墳 | 前方後円 | 145m | 前期前 |
| 46 | 矢塚古墳 (墳丘墓) | 前方後円 | 93m以上 | 庄内式期 | 11B-0324 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 47 | 勝山古墳 (墳丘墓) | 前方後円 | 115m | 庄内~前期初 | 11B-0329 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 48 | 纏向石塚古墳 (墳丘墓) | 前方後円 | 96m | 庄内式期 | 11B-0328 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 49 | 石塚東古墳 | 帆立貝式 | 20m | 中期後 | 11B-0331 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 50 | 勝山東古墳 | 方 | 25m | 後期前 | 11B-0332 | 円? | 不明 | 不明 | 不明 |
| 51 | トリイノ前古墳 | 円 | 不明 | 中期後 | 11B-0333 | 円? | 不明 | 不明 | 不明 |
| 52 | 北口古墳 | 円? | 15m | 不明 | 11B-0330 | 円 | 20m | 後期 | 不明 |
| 53 | 尾崎花古墳 | 円 | 25m | 不明 | 11B-0322 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 54 | 珠城山1号墳 | 前方後円 | 50m | 後期 | 11B-0323 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 55 | 珠城山2号墳 | 前方後円 | 85m | 後期 | 11B-0325 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 56 | 珠城山3号墳 | 前方後円 | 48m | 後期 | 11B-0326 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 57 | 立石古墳 | 前方後円? | 30m | 不明 | 11B-0327 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 58 | 立子塚古墳 | 円 | 20m | 後期後 | 11B-0494 | 不明 | 不明 | 不明 | 後期 |
| 59 | 立子古墳 | 前方後円 | 35m | 不明 | 11B-0334 | 円? | 不明 | 不明 | 不明 |
| 60 | クノボ古墳 | 円? | 不明 | 不明 | 11B-0335 | 円? | 不明 | 不明 | 後期? |
| 61 | 柳本大塚古墳 | 前方後円 | 92m | 前期前 | 11B-0336 | 円 | 10m | 不明 | 不明 |
| 62 | 茶臼山古墳 | 円 | 20m | 不明 | 135 | 古池塚古墳 | 前方後円? | 不明 | 後期 |
| 63 | 岩神古墳 | 不明 | 不明 | 不明 | 136 | 二ノ瀬池古墳 | 前方後円 | 42m | 後期 |
| 64 | 上の山古墳 | 前方後円 | 125m | 前期後 | 137 | 11B-0354 | 前方後円? | 不明 | 不明 |
| 65 | 渋谷山古墳 | 前方後円 | 300m | 前期後 | 11B-0355 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 66 | 丸山古墳 | 円 | 20m | 不明 | 138 | 11B-0356 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 67 | 赤坂古墳 | 方 | 25m | 不明 | 11B-0357 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 68 | シウロウ塚古墳 | 前方後円 | 120m | 不明 | 139 | 11B-0320 | 円? | 不明 | 後期? |
| 69 | 石名塚古墳 | 前方後円 | 110m | 前期 | 11B-0321 | 円? | 不明 | 不明 | 後期? |
| 70 | ノベラ古墳 | 前方後円? | 69m | 前期? | 140 | 西鎌子山古墳 | 前方後円? | 不明 | 不明 |
| 71 | エンド塚古墳 | 不明 | 不明 | 不明 | 141 | 11B-0318 | 円? | 30m? | 不明 |
| 72 | 立花道跡埋没古墳 | 不明 | 不明 | 前期後 | 11B-0170 | 円 | 15m | 不明 | 不明 |
| 73 | 椿井塚古墳 | 不明 | 不明 | 不明 | 11B-0171 | 円 | 16m | 不明 | 不明 |
| 74 | 百塚古墳 | 不明 | 20m | 不明 | 11B-0172 | 円 | 17m | 不明 | 不明 |
| 75 | 大和天神山古墳 | 前方後円 | 113m | 前期前 | 11B-0173 | 円 | 18m | 不明 | 不明 |
| 76 | 南アンド山古墳 | 前方後円 | 65m | 不明 | 143 | 11B-0316 | 円 | 10m | 不明 |
| 77 | アンド山古墳 | 前方後円 | 120m | 不明 | 11B-0315 | 円 | 15m | 不明 | 不明 |
| 78 | 黒塚古墳 | 前方後円 | 130m | 前期前 | 144 | 11B-0307 | 円? | 不明 | 不明 |
| 79 | 11D-0532 | 不明 | 不明 | 不明 | 11B-0308 | 円? | 不明 | 不明 | 不明 |
| 80 | 11D-0533 | 不明 | 不明 | 不明 | 145 | 11B-0117 | 円? | 不明 | 不明 |
| 81 | 11D-0537 | 不明 | 不明 | 不明 | 146 | 11B-0302 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 82 | 11D-0538 | 不明 | 不明 | 不明 | 147 | 11B-0303 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 83 | 八王寺古墳 | 不明 | 不明 | 不明 | 148 | 市塚古墳 | 円? | 不明 | 不明 |
| 84 | 行燈山古墳 | 前方後円 | 242m | 前期中 | 149 | 大蓮寺畑古墳 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 85 | 獅子山古墳 | 双方中円 | 150m | 前期中 | 150 | 五合瀬古墳 | 円 | 15m | 中期後 |
| 86 | ザクロ塚古墳 | 方 | 15m | 後期? | 151 | 11B-0314 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 87 | 薬師山1号墳 | 円 | 20m | 後期 | 152 | 11B-0315 | 不明 | 不明 | 不明 |
| | 薬師山2号墳 | 円 | 20m | 後期 | 153 | ノムギ古墳 | 前方後方 | 63m | 前期前 |
| | 薬師山3号墳 | 円 | 20m | 後期 | 154 | ヒエ塚古墳 | 前方後円 | 125m | 前期前 |
| | 薬師山4号墳 | 円 | 20m | 後期 | 155 | クラ塚古墳 | 円 | 40m | 不明 |
| | 薬師山5号墳 | 円 | 20m | 後期 | 156 | 11B-0315 | 不明 | 不明 | 不明 |
| | 薬師山6号墳 | 円 | 20m | 後期 | 157 | 福知堂大塚古墳 | 円? | 不明 | 不明 |
| 88 | ワカタ塚古墳 | 前方後円 | 55m | 後期 | 158 | 11B-0216 | 円? | 不明 | 不明 |

墓古墳はこの古墳群において大型古墳が築造されなくなった4世紀末頃に築造されたと考えられる。全長約86mという墳丘規模は、同時期のこの地域において最大のものであり、前方部が短い帆立貝形の墳丘形態であるため墳丘全長は100mに達しないが、後円部は径約71mの規模を有している。大和・柳本・纏向古墳群中の古墳の後円部径を見ると、大王墓とされる4基の巨大前方後円墳では150m前後かそれ以上の規模となるほか、双方中円墳である櫛山古墳（全長155m）が90m前後、上の山古墳（144m）が80m以上とこれに次いでおり、全長130m前後の黒塚古墳やアノ山古墳、中山大塚古墳などが茅原大墓古墳とほぼ同じ70m前後の後円部径を有している。すなわち71mという茅原大墓古墳の後円部の規模は、大王墓とされる巨大前方後円墳とは大きな格差があるものの、それに次ぐ全長130m前後の大型古墳とほぼ同等のものであるといえる。この点を評価するなら、茅原大墓古墳は古墳時代中期のこの地域における唯一の大型古墳であり、かつ大和・柳本・纏向古墳群における事実上最後の大型古墳であるといえるだろう。大和・柳本・纏向古墳群は、古墳時代前期当時に政権の中核にあった集団により営まれたと考えられる。茅原大墓古墳の被葬者は、そうした集団の成員の一人であり、政権の中核が畿内の他の地域へと移動した段階における、この地域の首長であったと考えることができる。

茅原大墓古墳が持つもう一つの重要な要素は、帆立貝形の墳丘形態を有している点である。茅原大墓古墳が築造された4世紀末頃に出現したこの形態の古墳は、「帆立貝式古墳」と呼ばれ、被葬者の身分を表示する新たな墳丘形態として創出されたと考えられる。かつて指摘されたように⁴⁾政権中核勢力により前方後円墳築造が「規制」された結果生み出されたとは考えにくい⁵⁾が、墳形の序列の中では通有の前方後円墳よりも下位に位置付けられるものと考えられる。茅原大墓古墳は大和・柳本・纏向古墳群が衰退していく時期に築かれた首長墳であり、政権内におけるこの地域の勢力の相対的な位置の低下が、帆立貝形という墳丘形態に象徴されているといえるだろう。

茅原大墓古墳の立地環境や墳丘規模から、その被葬者は古墳時代前期に複数の大王を輩出した集団に属し、古墳時代中期初頭段階の奈良盆地東南部を代表する首長であったと考えられた。いっぽうで帆立貝形という墳丘形態は、その集団の勢力が衰退傾向にあったことを反映するものと考えられ、当時の政権内における茅原大墓古墳の被葬者、あるいはその所属集団の位置が表出されているといえるだろう。茅原大墓古墳築造以降、大和・柳本・纏向古墳群では明確に首長墳と判断できるような古墳は築造されなくなり、古墳群を営んだ集団が衰退していく状況が見てとれる。茅原大墓古墳の墳丘形態は、古墳時代の政権勢力の変動を背景とする集団の衰退を、如実に表しているといえることができる。

3. 盾持人埴輪について

(1) はじめに

茅原大墓古墳で出土した盾持人埴輪は、盾面上半部から頭部にかけて良好に残存しており、従来検

討が難しかった初期の盾持人埴輪の特徴を知ることができ
る個体である。そのため、形態的な特徴と製作技法を
検討したうえで、当古墳出土の形象埴輪と合わせて本例
の製作時期を考えることとする。

(2) 盾持人埴輪の研究

盾持人埴輪は、顔を表現するものの手足はなく、盾を
構える独特な形態をしており、器財埴輪と人物埴輪の両
方の要素を併せ持つ。このため、研究史上でも器財埴輪
としてとらえるものと、人物埴輪の一部としてとらえる
二通りの流れがあるといえる。

器財埴輪との関わりの中で盾持人埴輪を取り扱って
いるのは、高橋工と若狭徹である。高橋は、大阪府高廻1・2号墳の整理をする中で盾形埴輪を比較
する際に、盾形埴輪に冑形埴輪を搭載する例があることをあげ、盾持人埴輪の源流が顔面を表現しな
い冑形埴輪と盾形埴輪の合わさったものにあるのではないかと推測している（高橋工1991）。

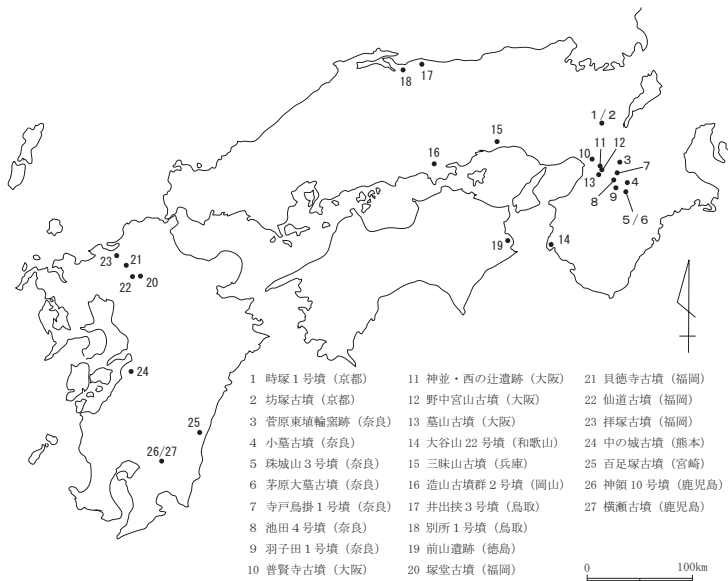


図115 盾持人埴輪 西日本分布図

置の要素で分類したうえで編年基準を示し、盾持人埴輪の祖形を中国の葬送儀礼に登場する方相氏と
関連させた（塩谷2001）。加えて近年では、岡崎晋明による検討（岡崎2013）がなされており、盾持人
埴輪の遡源が従来の方相氏に加えて、遊部をも含む可能性を指摘している。上記以外にも若狭徹による
群馬県保渡田八幡塚古墳出土の埴輪群のなかでの検討や（若狭2000）、塚田良道による武装人物埴輪
の関連での検討が行われており（塚田2007）、器財埴輪や人物埴輪と盾持人埴輪との関係はずいぶん整
理されてきたといえる。従来の検討は、出土数の豊富な関東地域を中心に行われてきた。

しかし関東地域の盾持人埴輪をみると、頭部表現や盾面の文様といった盾持人埴輪の構成要素にお

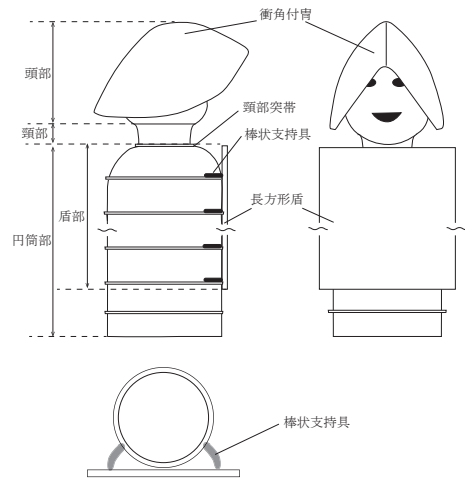


図114 茅原大墓古墳盾持人埴輪 模式図

一方、盾持人埴輪を人物埴輪の初期
段階のものにとらえる見方も多い。こ
の視点を早くに提示したのは間壁葎子
である。間壁は、福岡県拝塚古墳の盾
持人埴輪を人物埴輪の起源の一つであ
るとした（間壁1990）。その後、清水真
一が奈良県珠城山3号墳の盾持人埴輪
と拝塚古墳の盾持人埴輪を中心に全国
の盾持人埴輪を検討対象とし、その樹
立には横穴式石室の導入に伴う葬送儀
礼の変革があったとした（清水1995）。ま
た、塩谷修は、盾持人埴輪を形態や配

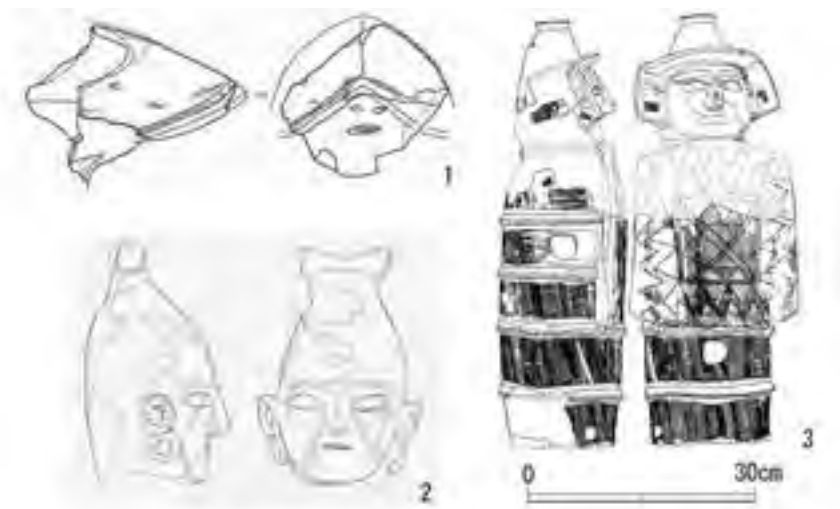
いて、近畿で出土している盾持人埴輪とは様相を異にしている。そのため、以下で、茅原大墓古墳出土例を中心に近畿および近畿以西の盾持人埴輪の形態的な特徴を比較する。

(3) 盾持人埴輪の形態的特徴

まず、頭部に着目すると、茅原大墓古墳例では無文の粘土板が斜めに貼付されている。後頭部が欠損しているため確実な全体像は不明であるが、伝奈良県御所市出土の冑形埴輪や藤井寺市野中宮山古墳出土の盾持人埴輪頭部に類似するものであり、衝角付冑の表現であると考えられる。茅原大墓古墳例のように冑の表現を有する盾持人埴輪は、奈良県池田4号墳、大阪府野中宮山古墳、大阪府墓山古墳、鹿児島県神領10号墳があげられる⁶⁾。このうち、神領10号墳例が眉庇付冑を表現している以外は全て衝角付冑を表現している。冑の表現に関しては、茅原大墓古墳と野中宮山古墳出土例は冑部分がほぼ無文であることから、革製の衝角付冑である可能性があり、池田4号墳については、三角形の線刻と径1cmほどの円形粘土の貼り付けがみられることから、三角板鋸留衝角付冑であると考えられる。

一方、関東や関東以東で出土している盾持人埴輪では、冑を着用している表現はほとんど存在しない。頭部表現の多くが笄帽と呼称される棒状表現の頭部であり、関東での盾持人埴輪の初期例が出土している群馬県保渡田八幡塚古墳で眉庇付冑と考えられる表現を有しているのみである(図116の3)。関東での盾持人埴輪の出現時期は近畿よりも若干遅れることから、盾持人埴輪が冑を着用する例は近畿の比較的早い段階を中心にみられることがわかる。

次に盾面の文様と形態を比較する。茅原大墓古墳の盾持人埴輪は盾面の上半分が残存しており、文様を推測することができる。盾面の形態は長方形であり、周囲に綾杉文を施す。内部は綾杉文でⅡ字形に区切り、平行線で充填された鋸歯文を描く。Ⅱ字の内側には三重の菱形文が描かれる。このような文様は、盾形埴輪にも多くみられるものであり、典型的な盾面の施文方法であるといえる。茅原大墓古墳例と同様に比較的盾形埴輪と類似した文様を描いているものには池田4号墳の盾持人埴輪があ



1 野中宮山古墳(大阪) 2 中二子古墳(群馬) 3 保渡田八幡塚古墳(群馬)

図116 盾持人埴輪頭部比較(S=1/10)

げられる。近畿や近畿以西の盾持人埴輪では時期が下るにつれ、文様の簡略化や無文化が進む。

一方、関東で出土している盾持人埴輪は近畿で出土するような盾形埴輪の文様を持つものは少なく、簡略化もしくは無文であるものがほとんどである。また、戈を持つものや盾面に赤色顔料で文様を描くものは近畿ではほとんど類例がなく、関東で特有のものといえる。

(4) 盾持人埴輪の製作技法

盾持人埴輪の検討は、その形態、配置、祖形に重点が置かれることが多く、製作時の特徴について述べているものは少ない。しかし、茅原大墓古墳例では製作時の技術に興味深い点がみられるため、いくつか検討してみたい。

支持具 円筒部と盾面を補強する部品として棒状の支持具が用いられている。通常、盾形埴輪や他の盾持人埴輪では、三角形板状の部品を突帯と盾面の間に挟むものが多い。しかし、茅原大墓古墳例では、突帯の上部に棒状の粘土の一方の端をのせ、盾面裏側にもう片方の端を押し付ける方法を採用している。突帯には特別な痕跡は見られないものの、盾面裏側には明確な円形の剥離痕が残る（写真13）。棒状支持具については、完形に近いもので4点、欠損しているものが1点確認されている。完形に近いものでは、8.5cm～9.5cmのものが3点、3.6cmのものが1点あり、長いものについては、盾面の側面につく（図117）。短いものについては、接合箇所が不明であるものの、側面では長さが足りないことから、盾面の下部につくことが考えられる。

三角形板状支持具と比べた耐久性は測りがたいが、全ての支持具が剥落しており、盾面にも割れが多いことから、あまり有効な手段ではなかった可能性が高い。

頸部 円筒部から朝顔形埴輪の肩部のように若干の丸みをもって閉塞していったのちに、径13cmほどの頸部が立ち上がる。肩部と頸部の境界には、突帯が貼り付けられている。この突帯は、盾面に隠れて正面からは見えない位置にあり、朝顔形埴輪の形態を真似たか、肩部と頸部の補強として貼り付けられたと考えられる。同様に肩部から頸部を作り出すものは奈良県池田4号墳にみられるが、池田4号墳では、肩部と頸部の境界に突帯を貼り付けない。また、頸部の後部が欠損しているために確定はできないものの、少し前かがみになるように成形されているか、上部に向かって頸部の径が大きくなるように成形されている可能性が高い。

顔面部 顔面部は下部が球形、上部が平面的に成形される。頸部の上端から再度3cmほど粘土紐を積みか巻き上げる。その上に、五角形に成形した粘土板を乗せる。その後、横から三角形の粘土板

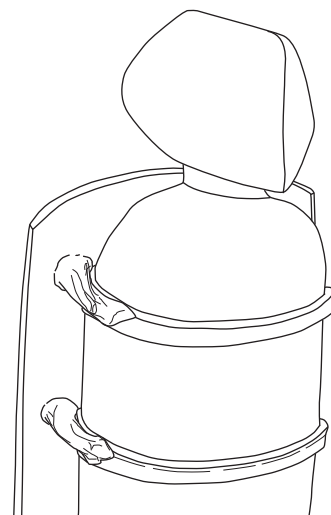


図117 支持具使用状況



写真13 盾面裏側の支持具剥離痕

を貼付けて胃表現するとともに、顔面部を固定する。最後に顎部分を貼付けて顔面部の形を完成させるという技法を用いる。盾持人埴輪の顔面部に関しては、板状の表現をするものが多いことは従来から知られているが、粘土紐積み上げ後に粘土板を貼り足して板状に見せるものが多く、実際に粘土板で作るものは、京都府時塚1号墳で見られるものの、かなり限られる。近畿内でも、頸部が類似する池田4号墳では、粘土紐巻き上げで成形しており、多くが人物埴輪と同様の製作技法を用いている。茅原大墓古墳の盾持人埴輪が顔面を胴部から直接作り出す人物埴輪の出現よりも遡ることから、頭部製作については定型化していない、試行段階と考えることも可能であるといえる。

(5) 盾持人埴輪の配置位置と樹立古墳の規模

茅原大墓古墳の盾持人埴輪は、クビレ部に樹立した円筒部が残っていたことから、クビレ部に立てられていた可能性が極めて高いと言える。しかしながら他古墳での盾持人埴輪の樹立場所をみると、必ずしも樹立場所がクビレ部とは限らない。また、関東を中心とする地域では、関西以西よりも一古墳における盾持人埴輪の樹立数が多く、外堤に立て並べる姿がみられる。茅原大墓古墳で出土している鳥形埴輪は盾持人埴輪と同じ東クビレ部ではあるが、転落石中から出土しており、墳丘上に樹立されていた可能性がある。盾持人埴輪は墳丘裾の樹立であるので、樹立場所が若干異なると考えられる。また蓋形埴輪は後円部南斜面から出土しており、盾持人埴輪とは分けて樹立されていたと考えられる。盾持人埴輪と他の形象埴輪が分けて樹立される例は他古墳でも多くみられ、盾持人埴輪が威儀を示す他の形象埴輪とは一線を画した役割を持っていたとも推定される。

また、盾持人埴輪を樹立している古墳の規模をみると、大古墳には少なく、中・小規模の前方後円墳に多く樹立されている。古市古墳群内の墓山古墳や野中宮山古墳では出土しているものの、他の大規模古墳では今のところ出土が確認されない。盾持人埴輪と同様の意味を持つ甲冑形埴輪や盾形埴輪が古墳規模に関わらず樹立されることを考えると、盾持人埴輪の樹立は限定的であったと考えられる。

(6) まとめ

以上のことより、茅原大墓古墳の盾持人埴輪は形態的には、胃を被り、盾面文様が崩れていないことから、初期段階の例であるといえる。また、製作技術が定型化していないという点もそれを傍証することとなるだろう。盾持人埴輪のみでは、ピンポイントで年代を押さえることは難しいものの、当古墳で出土している円筒埴輪に明瞭な静止痕が認められない点や、蓋形埴輪の笠部が線刻表現のなかでも比較的古い様相を呈することから考えると、野中宮山古墳や墓山古墳よりも古い段階と考えられ、大阪府津堂城山古墳に前後する時期に相当すると推定される。

今回は、茅原大墓古墳出土例を中心にその形態と製作技術を概観した。盾持人埴輪の研究において議論される祖形の問題や埴輪群内での意義についての検討については十分なしえなかったため、今後の課題としたい。

4. さいごに

昭和57年の史跡指定より30余年を経て、ようやく茅原大墓古墳の歴史的な意義を検討できる段階に至ることができた。その評価は単に一地域の首長墳であるということにとどまるものではなく、古墳時代の政権勢力の変動の様子を体現する貴重な資料として、国指定史跡に相応しい価値を有しているということができる。また茅原大墓古墳の周辺には、纏向遺跡をはじめとする著名な遺跡や古墳、社寺が数多く存在しており、これらを含めた地域全体が持つ歴史的価値もまた大きいということができるだろう。今後はそうした茅原大墓古墳の歴史的意義や地域的特性を活かし、かつ将来にわたって良好に遺構を保存していくことができるよう、史跡整備事業を進めていきたいと考える。

なお最後になりましたが、発掘調査に際しましては地元茅原区の住民の皆様には様々なかたちでご協力をいただきました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

【註記】

- 1) 清家章 1999「古墳時代周辺埋葬考－畿内の埴輪棺を中心に－」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室10周年記念論集
- 2) 高橋裕子 2009「前方後円墳周濠の渡土堤について」『京都橘大学文化財調査報告 2008』京都橘大学文学部
- 3) 森下章司 1998「古墳時代前期の年代試論」『古代』105号
- 4) 小野山節 1970「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』16-3 考古学研究会
- 5) 都出比呂志 1988「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』22号 大阪大学文学部
沼澤豊 2006『前方後円墳と帆立貝式古墳』雄山閣
- 6) 伝大分県野津例についても頭部が冑状であるとの指摘がある（高橋工1991）。

【参考文献】

- 岡崎晋明 2013「盾持ち人埴輪の諸相」『龍谷日本史研究』第36号、龍谷大学日本史学研究会
群馬町教育委員会 2000『保渡田八幡塚古墳 史跡保渡田古墳群八幡塚古墳保存整備事業報告書 調査編』群馬町埋蔵文化財調査報告書第57集
塩谷修 2001「盾持人物埴輪の特質とその意義」『日本考古学の基礎研究－茨城大学人文学部考古学研究報告第4冊－』、茨城大学人文学部考古学研究室
清水真一 1995「盾持人物埴輪考」『古代を考える会20周年記念 古代学評論』第4号、古代を考える会
高橋工 1991「盾形埴輪の検討」『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ、大阪市文化財協会
塚田良道 2007『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣
藤井寺市教育委員会 2011『石川流域遺跡群発掘調査報告26』藤井寺市文化財報告第31集
前橋市教育委員会 1995『中二子古墳』大室公園史跡整備事業に伴う範囲確認調査概報第3集
間壁霞子 1990「女性人物埴輪出現の背景」『神戸女子大学（文学部）紀要・二四L巻・史学編』神戸女子大学
若狭徹 1993「群馬県の人物埴輪受容期をめぐる2、3の考察」『月刊考古学ジャーナル』No.357、ニュー・サイエンス社
若狭徹 2000「人物埴輪の出現と受容—研究の回顧と上野の場合—」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』頌寿記念会
若松良一 日高慎 1992「形象埴輪の配置と復元される葬送儀礼（上）－埼玉瓦塚古墳の場合を中心に－」『調査研究報告』第5号、埼玉県さきたま資料館

【図出典】

図116：1. 藤井寺市教育委員会2011 2. 前橋市教育委員会1995 3. 群馬町教育委員会2000

写真図版



茅原大墓古墳と三輪山（第6次調査時、西より）



茅原大墓古墳と箸墓古墳（第5次調査時、南東より）

図版2 茅原大墓古墳の現況



茅原大墓古墳の現況①（第5次調査後、西より）



茅原大墓古墳の現況②（第5次調査後、北東より）

図版3 茅原大墓古墳全景（1）



茅原大墓古墳全景①（第1次調査後、左下が北）



茅原大墓古墳全景②（第2次調査時、下が北）

図版4 茅原大墓古墳全景（2）



茅原大墓古墳全景③（第3次調査時、下が北）



茅原大墓古墳全景④（第4次調査時、下が北）



茅原大墓古墳全景⑤（第5次調査時、下が北）



茅原大墓古墳全景⑥（第6次調査時、下が北）

図版6 3-2 トレンチ (1)



後円部のトレンチ① (第3次調査、下が北)



後円部のトレンチ② (第3次調査、西より)



トレンチ全景①(西より)



トレンチ全景②(東より)



後円部頂西側の埴輪列①(上面検出状況、北より)



後円部頂西側の埴輪列②(北西より)



円筒埴輪(1)出土状況(西より)



円筒埴輪(3)・(4)出土状況(西より)



円筒埴輪(2)出土状況(西より)



後円部頂西側埴輪列 断ち割り断面(北西より)

図版10 3-2 トレンチ (5)



トレンチ南壁の土層 (北西より)



トレンチ中央付近の埴輪片集積状況 (北西より)



後円部頂付近の墳丘盛土断面 (北西より)

図版11 3-3トレンチ (1)



3-3トレンチ設置状況 (北より)



トレンチ全景① (左が北)

図版12 3-3トレンチ (2)



トレンチ全景② (南より)



トレンチ全景③ (北より)



後円部頂北側の埴輪列①(上面検出状況、西より)



後円部頂北側の埴輪列②(北東より)



後円部頂北側埴輪列の掘方断面(西より)



円筒埴輪(6)出土状況(北より)



円筒埴輪(8)出土状況(北より)



円筒埴輪(9)出土状況(北より)



円筒埴輪(10)出土状況(北より)



円筒埴輪(7)出土状況(北より)



後円部頂北側埴輪列の土層断面(北東より)



円筒埴輪(8)内埋土の断面(北より)



円筒埴輪(9)内埋土の断面(北より)



円筒埴輪(10)内埋土の断面(北より)



掘方完掘状況(北東より)



後円部2段目北側の埴輪列①(上面検出時、西より)



後円部2段目北側の埴輪列②(北東より)



後円部2段目北側の埴輪列③(北西より)



円筒埴輪(14)出土状況(北より)



円筒埴輪(14)内埋土の断面(北より)



円筒埴輪(15)内埋土の断面(北より)



円筒埴輪(16)・(17)内埋土の断面(北より)

図版18 3-3トレンチ(8)



後円部2段目北側の埴輪列④
(埴輪内埋土完掘後、北より)



後円部2段目北側の埴輪列⑤
(埴輪内埋土完掘後、西より)



後円部2段目平坦面と埴輪列
(北西より)



掘方完掘状況(北東より)



後円部2段目北側 転落石検出状況
(北西より)



後円部2段目北側の葺石①
(北西より)



後円部2段目北側の葺石②
(北より)



後円部2段目北側の葺石③
(西より)



木棺墓 埋土断面 (西より)



木棺墓 鉄釘出土状況 (南より)



後円部北側斜面 (北西より)



後円部頂北側の墳丘盛土断面
(南西より)



後円部北側斜面の墳丘盛土断面
(北西より)

図版22 3-3トレンチ (12)



前方部上面の土層① (北西より)



葺石裏側の墳丘盛土断面
(北西より)



前方部上面の近世溝 (西より)



前方部上面の土層② (南西より)



トレンチ北端付近の墳丘盛土断面
(南西より)



トレンチ埋め戻し後の状況
(北より)

図版24 3-4トレンチ (1)



トレンチ全景① (南より)



トレンチ全景② (北より)



後円部2段目南側の埴輪列①(上面検出時、南より)



後円部2段目南側の埴輪列②(上面検出時、西より)



後円部2段目南側の埴輪列③ (西より)



後円部2段目南側の埴輪列④ (南より)



円筒埴輪 (12) 出土状況
(南西より)



円筒埴輪 (11) 出土状況
(北西より)



埴輪列断ち割り断面 (南より)



後円部頂南側の墳丘盛土断面
(南西より)



後円部南側斜面の墳丘盛土断面①
(南西より)



後円部南側斜面の墳丘盛土断面②
(南西より)



トレンチ全景(下が北)



トレンチ西側 埴輪・転落石出土状況①(北東より)



トレンチ西側 埴輪転落石出土状況② (北より)



壺形埴輪 (185) 出土状況 (北より)



後円部北側2段目の葺石①(北東より)



後円部北側2段目の葺石②(北より)



埴輪棺 1 墓壙上面検出状況①
(北西より)



埴輪棺 1 墓壙上面検出状況②
(南西より)



埴輪棺 1 墓壙上面検出状況③
(南東より)



埴輪棺 1 墓壙埋土断面①
(南西より)



埴輪棺 1 墓壙埋土断面②
(北西より)



埴輪棺 1 墓壙埋土断面③
(北西より)



埴輪棺1 棺上面検出状況①(北西より)



埴輪棺1 棺上面検出状況②(南東より)



埴輪棺1 棺上面検出状況③(南西より)



埴輪棺1 棺上面検出状況④(北東より)



鉄製品 (284~286) 出土状況
(北東より)



鉄製品 (287) 出土状況①
(北西より)



鉄製品 (287) 出土状況②
(北西より)



埴輪棺1 棺内検出状況①(北西より)



埴輪棺1 棺内検出状況②(南東より)



埴輪棺 1 棺内検出状況③ (南西より)



埴輪棺 1 棺内検出状況④ (北東より)



埴輪棺 1 棺側・棺下の埴輪片①
(南東より)



埴輪棺 1 棺側・棺下の埴輪片②
(西より)



埴輪棺 1 墓壙完掘状況 (西より)



前方部2段目東側 転落石検出状況① (北東より)



前方部2段目東側 転落石検出状況② (南東より)



前方部2段目東側の葺石①（北東より）



前方部2段目東側の葺石②（南東より）



東側くびれ部2段目 転落石検出状況(北より)



東側くびれ部2段目の葺石①(北より)



東側くびれ部2段目の葺石②(南より)



東側くびれ部2段目の葺石③(南西より)



トレンチ全景① (下が北)



トレンチ全景② (北側拡張前、東より)



西側くびれ部2段目 転落石検出状況(北西より)



西側くびれ部2段目の葺石①(北西より)



西側くびれ部2段目の葺石②(南より)



西側くびれ部2段目の葺石③(西より)



トレンチ北壁の土層
(拡張前、南西より)



後円部1段目埴輪列付近の
遺物出土状況(西より)



後円部1段目の埴輪列①(上面検出状況、南東より)



後円部1段目の埴輪列②(東より)



円筒埴輪(18~20)内埋土の断面(南東より)



掘方完掘状況(南東より)



後円部2段目基底と埴輪列(西より)



埴輪棺 2 検出状況
(北側拡張前、南より)



埴輪棺 2 墓壙上面検出状況
(西より)



埴輪棺 2 墓壙上層埋土断面
(西より)



墳丘2段目斜面の葺石と埴輪棺2(北西より)



埴輪棺2 棺上面検出状況①(西より)



埴輪棺 2 棺上面検出状況②
(南より)



埴輪棺 2 上面埴輪除去後
(左が北)



埴輪棺 2 墓壙完掘状況(西より)



埴輪棺 3 墓壙上面検出状況
(左下が北)



埴輪棺 3 内側の状況 (東より)



埴輪棺 3 南西小口部分
(北東より)

図版54 3-5 トレンチ



トレンチ全景①（南より）



トレンチ全景②（北より）



トレンチ東壁の土層断面
（南西より）



1-1トレンチ (西より)



後円部南西側の転落石
(西より、1-1トレンチ)



1-2トレンチ (東より)

図版56 4-1 トレンチ (1)



周濠埋土上面検出状況①
(東より)



周濠埋土上面検出状況②
(西より)



周濠中層埋土検出状況①
(北東より)



周濠中層埋土検出状況②(東より)



周濠中層埋土検出状況③(西より)



転落石・腐植層検出状況①
(北東より)

図版58 4-1トレンチ(3)



転落石・腐植層検出状況②
(東より)



転落石・腐植層検出状況③
(西より)



転落石検出状況(北東より)



周濠埋土完掘状況① (東より)



周濠埋土完掘状況② (西より)



後円部1段目東側の葺石①(北東より)



後円部1段目東側の葺石②(東より)



周濠内埋土断面(北西より)



茅原大墓古墳後円部と4-1トレンチ(東より)

図版62 4-1 トレンチ (7)



後円部東端付近の周濠内埋土
(北より)



墳丘残存部の上面 (北東より)



墳丘盛土の断面 (北より)



第4次調査時のトレンチ(下が北)



4-2トレンチ全景(下が北)

図版64 4-2 トレンチ (2)



周濠埋土上面検出状況①
(東より)



周濠埋土上面検出状況②
(南東より)



周濠埋土上面検出状況③
(北より)



周濠内の遺物・転落石検出状況①(東より)



周濠内の遺物・転落石検出状況②(北より)



周濠内の遺物・転落石検出状況③
(北西より)



円筒埴輪(92・93)出土状況
(東より)



盾持人埴輪(268)顔面部破片の出土状況(東より)



周濠内埋土完掘状況①(東より)



周濠内埋土完掘状況②(北より)



周濠内埋土完掘状況③ (南東より)



東側くびれ部1段目の葺石 (東より)



盾持人埴輪基部とくびれ部基底
(北東より)



盾持人埴輪盾面部の破片出土状況
(東より)



盾持人埴輪基部内上層遺物出土状況
(北より)



盾持人埴輪基部内下層遺物出土状況
(北より)



盾持人埴輪基部内遺物取り上げ後
(北より)



盾持人埴輪基部 掘方内埋土断面
(東より)

図版71 2トレンチ (1)



周濠埋土上面検出状況 (南側拡張前、南東より)



トレンチ全景 (南東より)



転落石検出状況 (東より)



前方部1段目東側面の葺石① (東より)



前方部1段目東側面の葺石② (南東より)



周濠埋土断面 (北東より)

図版74 2トレンチ (4)



前方部基底付近の盛土断面
(北より)



葺石裏側の盛土断面 (北より)



トレンチ東端の周濠埋土断面
(北より)



4-4トレンチ周濠上面検出状況
(トレンチ結合前、南西より)



4-4トレンチ転落石検出状況
(トレンチ結合前、南西より)



4-3トレンチ周濠上面検出状況
(トレンチ結合前、北より)



周濠中層埋土検出状況①(北東より)



周濠中層埋土検出状況②(南西より)



トレンチ北側 転落石検出状況 (北より)



トレンチ北側 周濠埋土完掘状況 (北より)

図版78 4-3・4トレンチ(4)



トレンチ南壁の土層断面
(東より)



渡土堤及び周濠底面の盛土断面(東より)



トレンチ全景(北東より)



トレンチ全景(下が北)



茅原大墓古墳墳丘と5-3トレンチ(北東より)



周濠埋土上面検出状況①
(北東より)



周濠埋土上面検出状況②
(南西より)



周濠埋土上面検出状況③
(南東より)



渡土堤周辺 転落石検出状況①(南西より)



渡土堤周辺 転落石検出状況②(北東より)



渡土堤東側の転落石検出状況(東より)



渡土堤西側の転落石検出状況(北より)



渡土堤検出状況①(南西より)



渡土堤検出状況②(北東より)



渡土堤検出状況③(南東より)



渡土堤検出状況④(北西より)



前方部北東隅と渡土堤東側の葺石①(東より)



前方部北東隅と渡土堤東側の葺石②(南より)



前方部前面と渡土堤西側の葺石①(北より)



前方部前面と渡土堤西側の葺石②(西より)



前方部東側の周濠埋土断面
(北より)



前方部前面の周濠埋土断面
(北東より)



渡土堤西側の周濠埋土断面
(南西より)



渡土堤断ち割り断面①
(南東より)



渡土堤断ち割り断面②
(南西より)



渡土堤断ち割り断面③
(南より)



周濠埋土上面検出状況(北より)



転落石検出状況(北より)



前方部前面の転落石 (北西より)



前方部前面1段目の葺石① (北西より)



前方部前面1段目の葺石②(北より)



茅原大墓古墳墳丘と4-6トレンチ(北より)



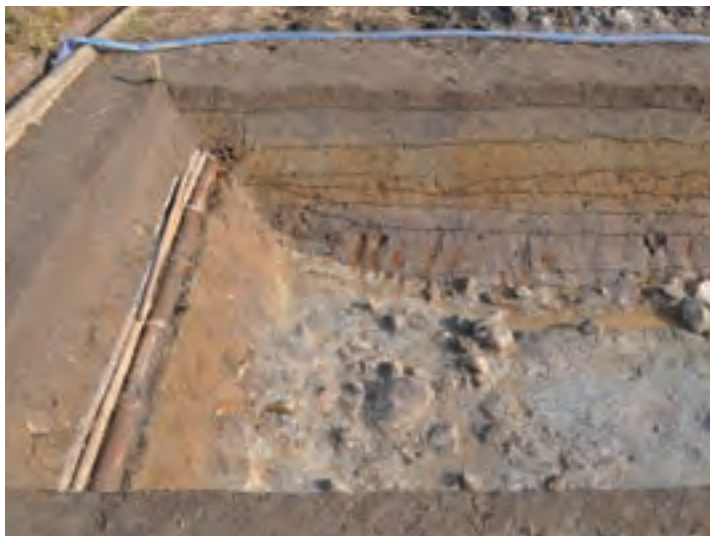
トレンチ全景① (北より)



トレンチ全景② (南より)



トレンチ南端付近の土層 (北西より)



周濠外側の立ち上がり (西より)



周濠埋土断面 (南西より)

図版94 6-1トレンチ、6-2トレンチ(1)



茅原大墓古墳墳丘と第6次調査地(北西より)



第6次調査地全景(下が北)



6-1トレンチ周濠埋土上面検出状況(拡張前、西より)



6-1トレンチ周濠埋土完掘状況(西より)



6-2トレンチ周濠埋土
上面検出状況(北より)



6-2トレンチ転落石・
埴輪検出状況(北より)



6-2トレンチ周濠埋土
完掘状況(北より)



東側周濠埋土検出状況
(6-1トレンチ、南東
より)



転落石検出状況(6-1
トレンチ東側、南東
より)



東側周濠埋土完掘状況
(6-1トレンチ、南東
より)

図版98 6-1トレンチ、6-2トレンチ(5)



6-1トレンチ北壁 周濠埋土断面
(南西より)



6-1トレンチ南壁 周濠埋土断面
(北西より)



渡土堤状遺構 (南西より)



遺構上面検出状況(西より)



落ち込み1(北西より)



落ち込み2(南西より)

図版100 3-1 トレンチ (2)



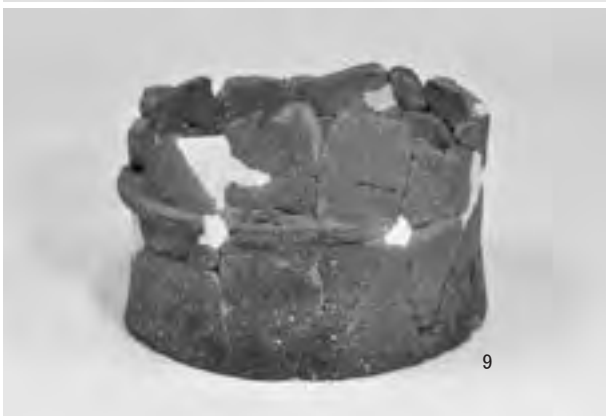
土坑1埋土断面 (南より)



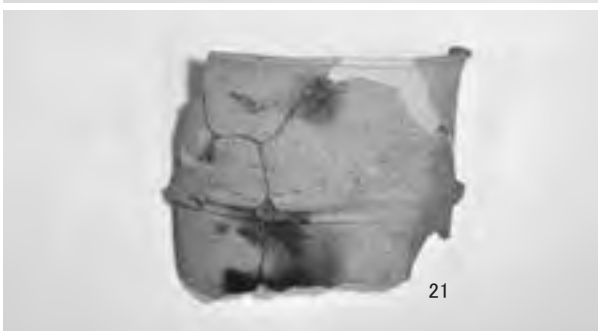
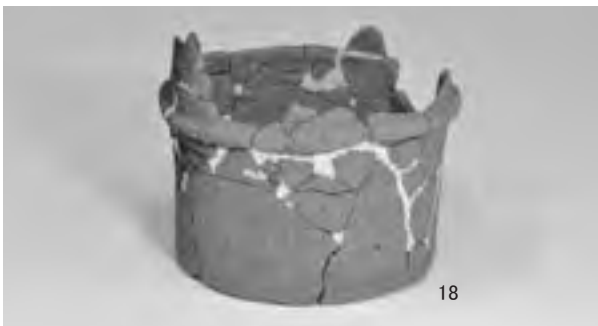
土坑1完掘状況 (南より)

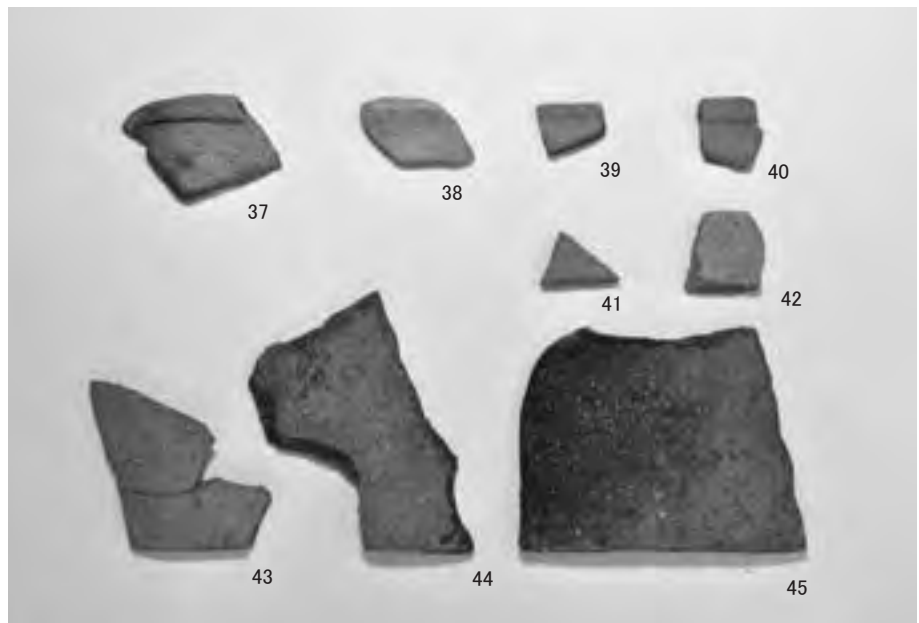
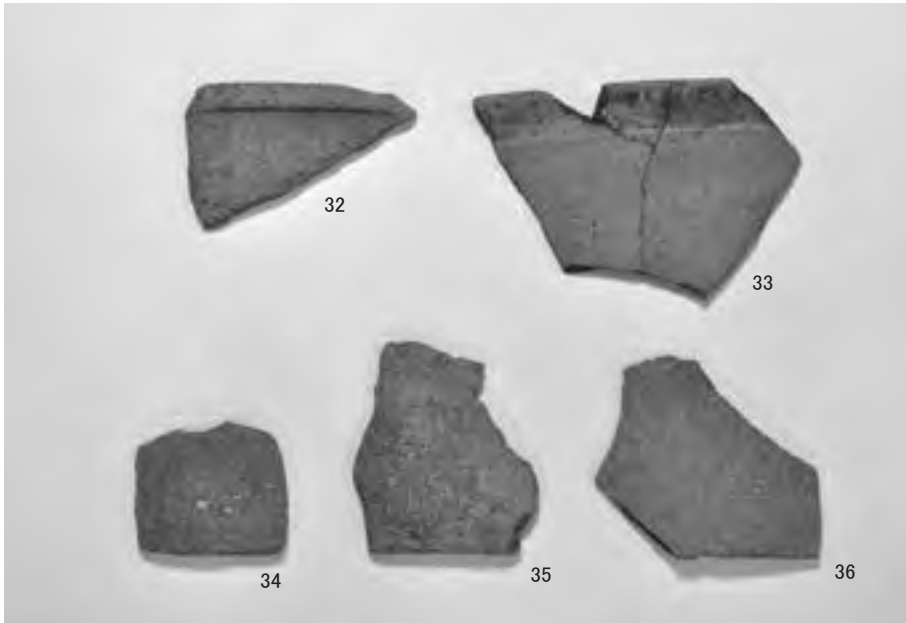
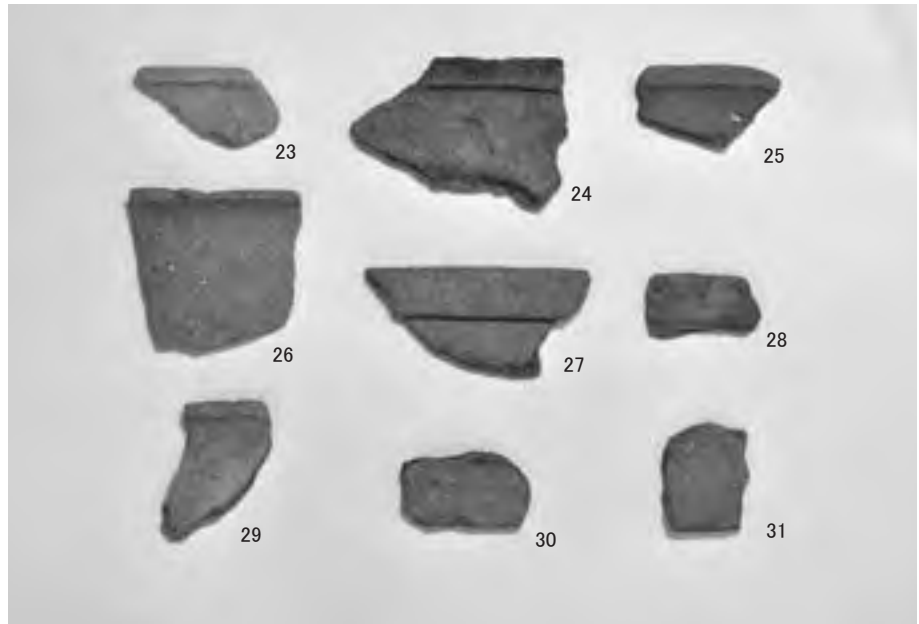


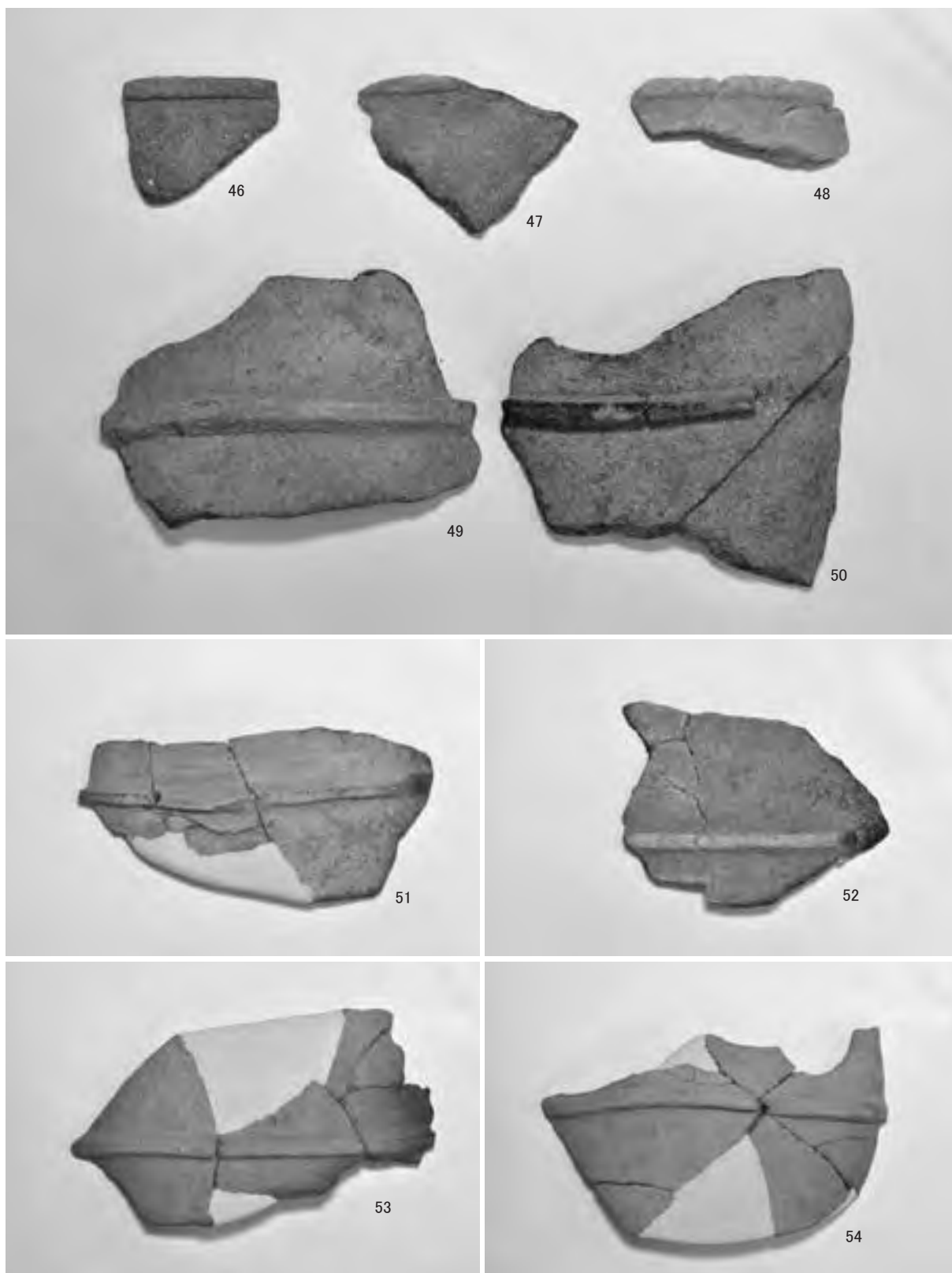
トレンチ全景 (西より)



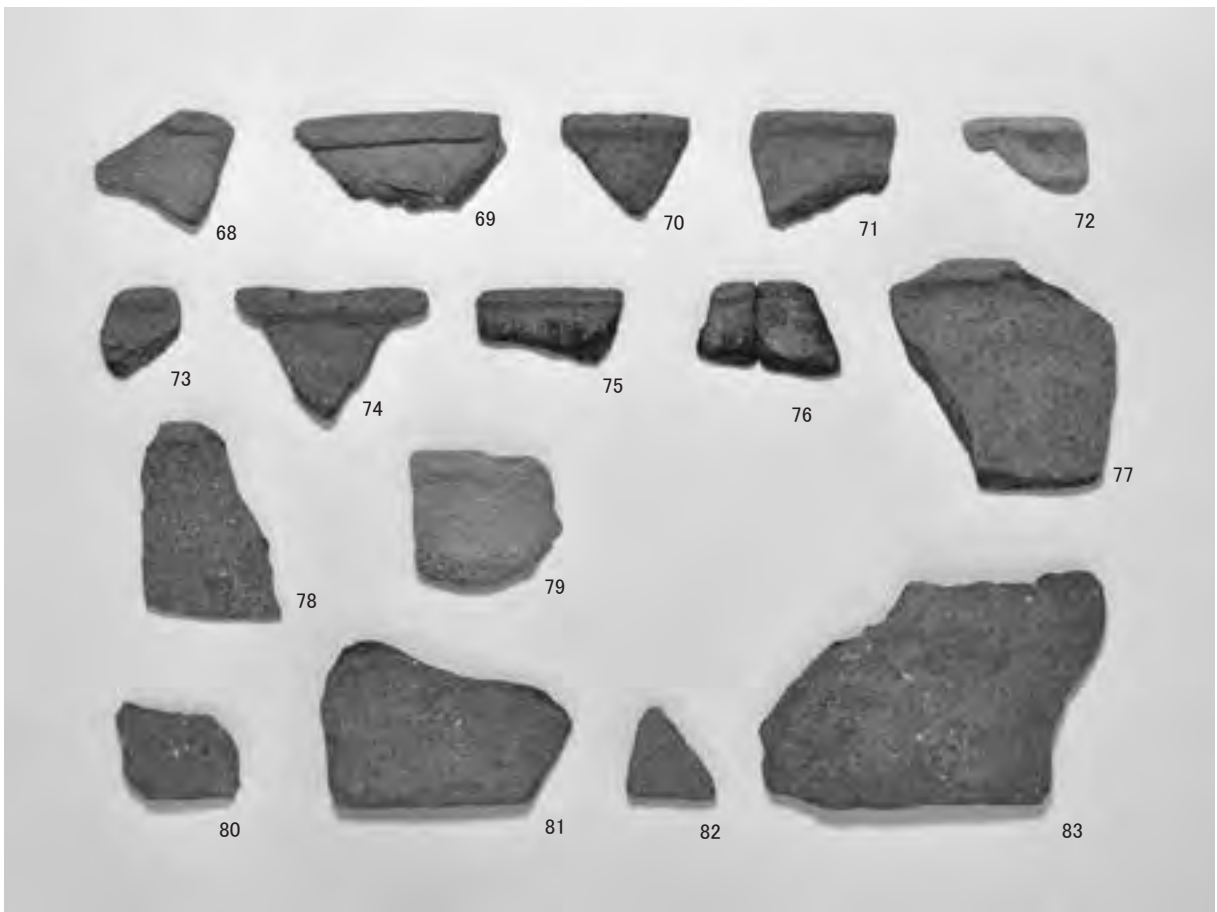
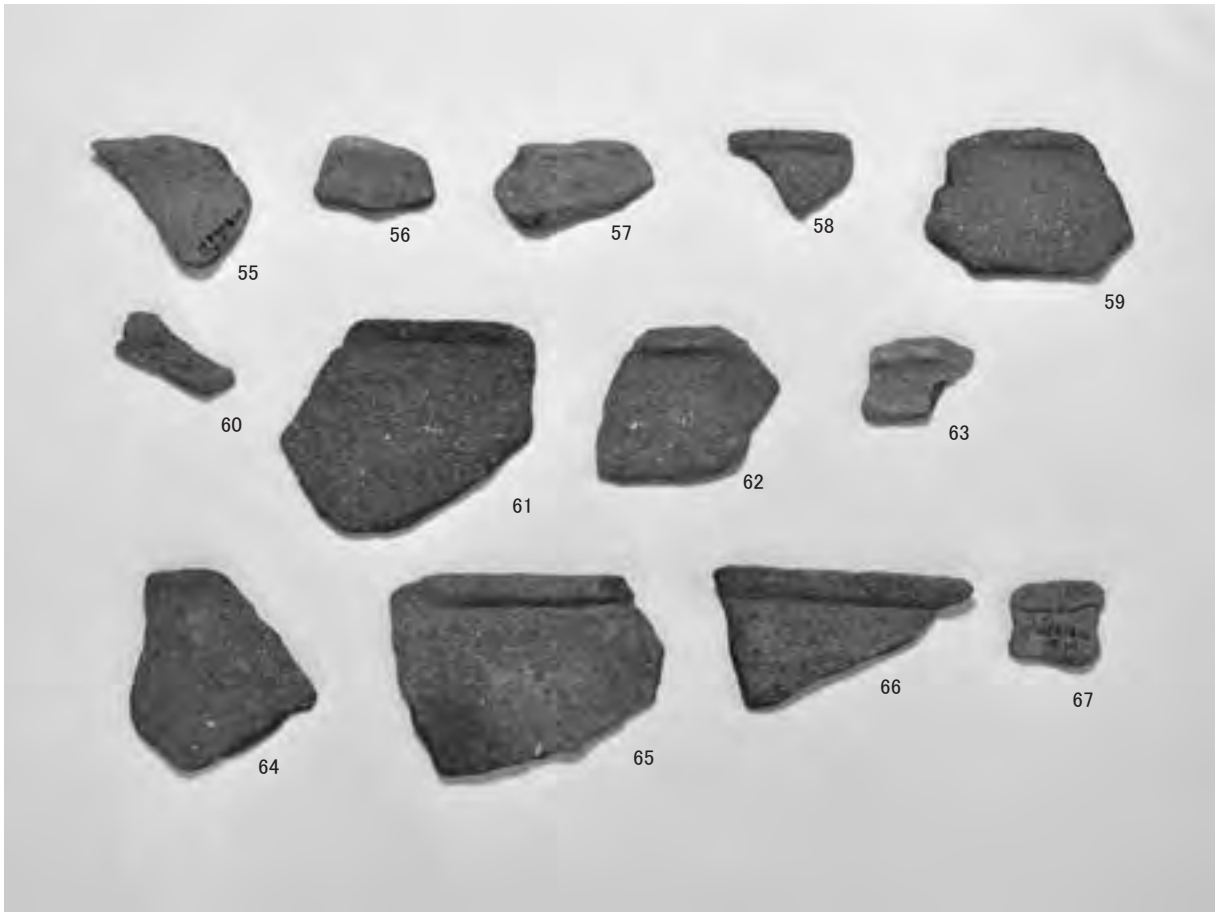
円筒埴輪①

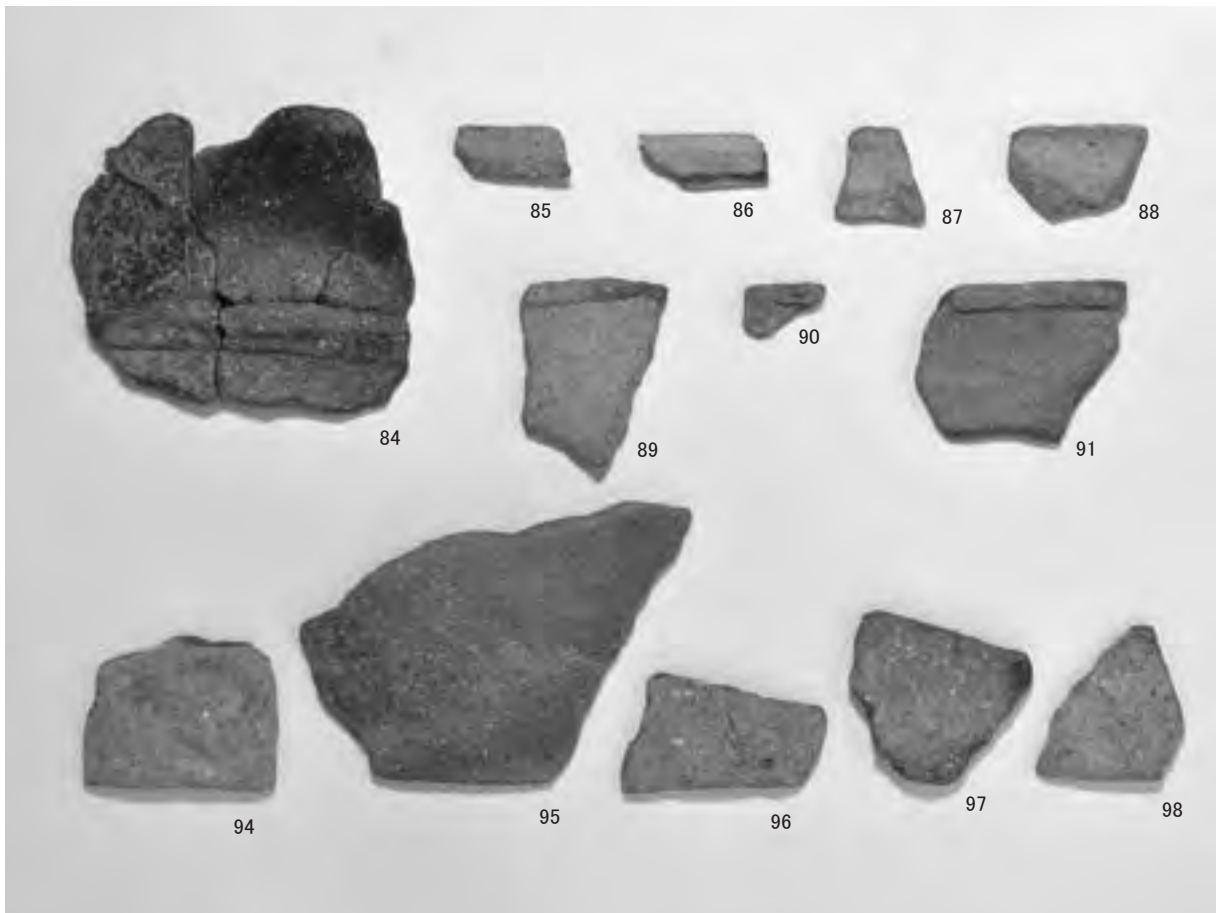




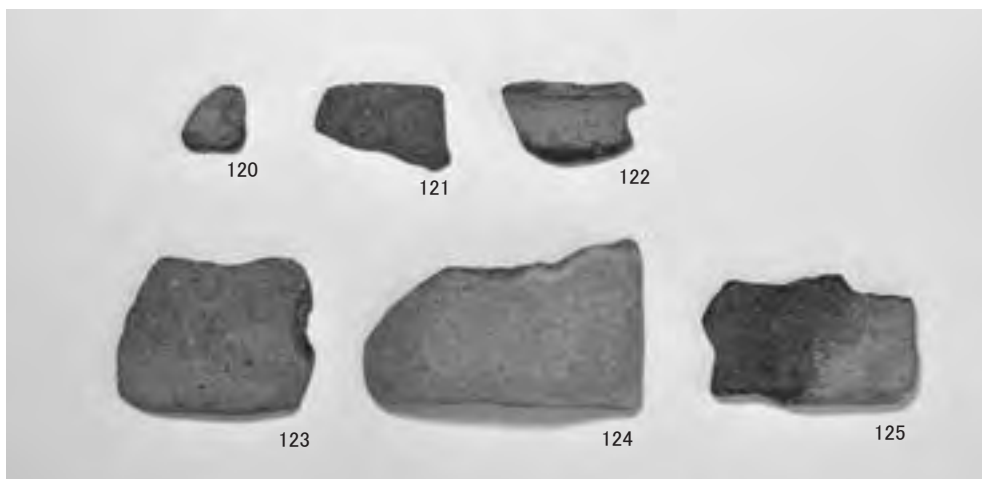
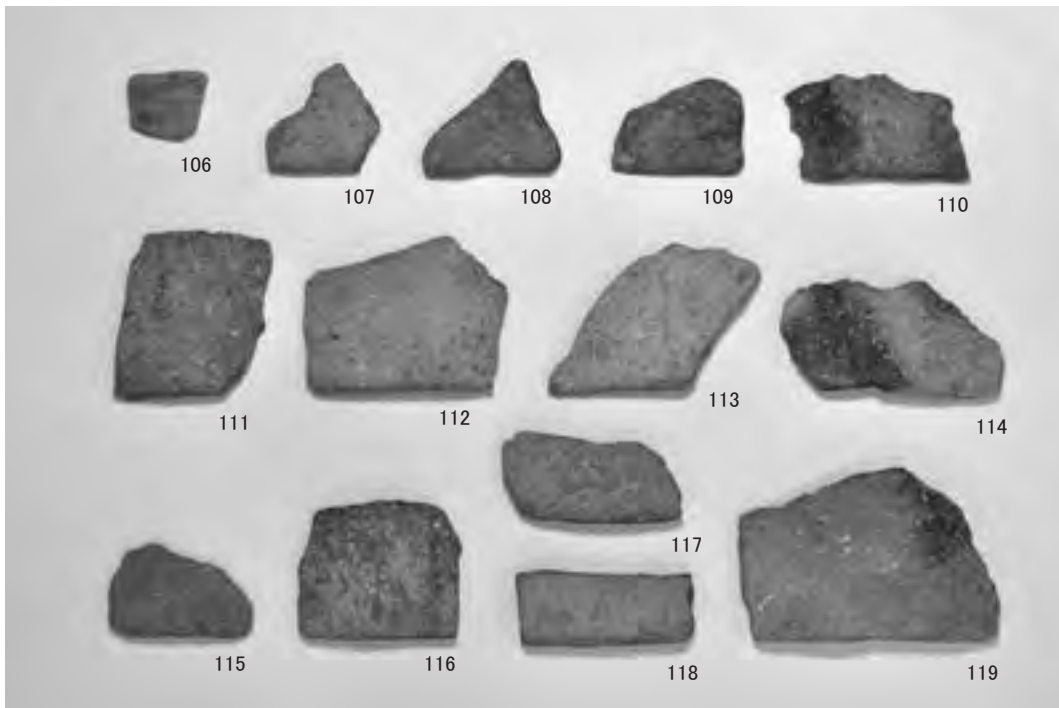
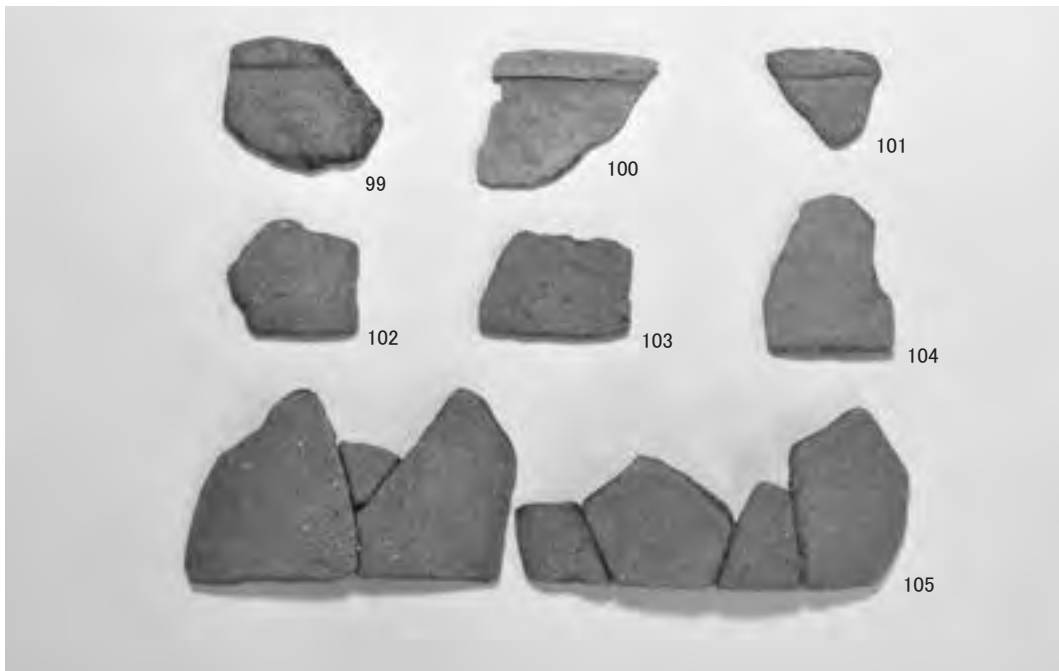


円筒埴輪④

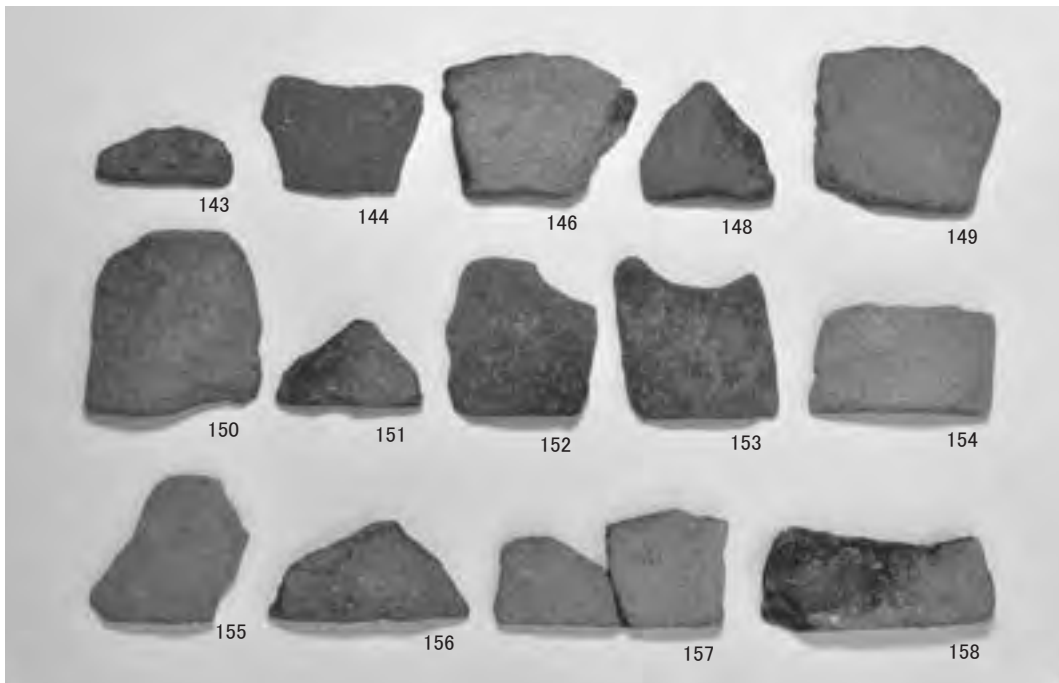
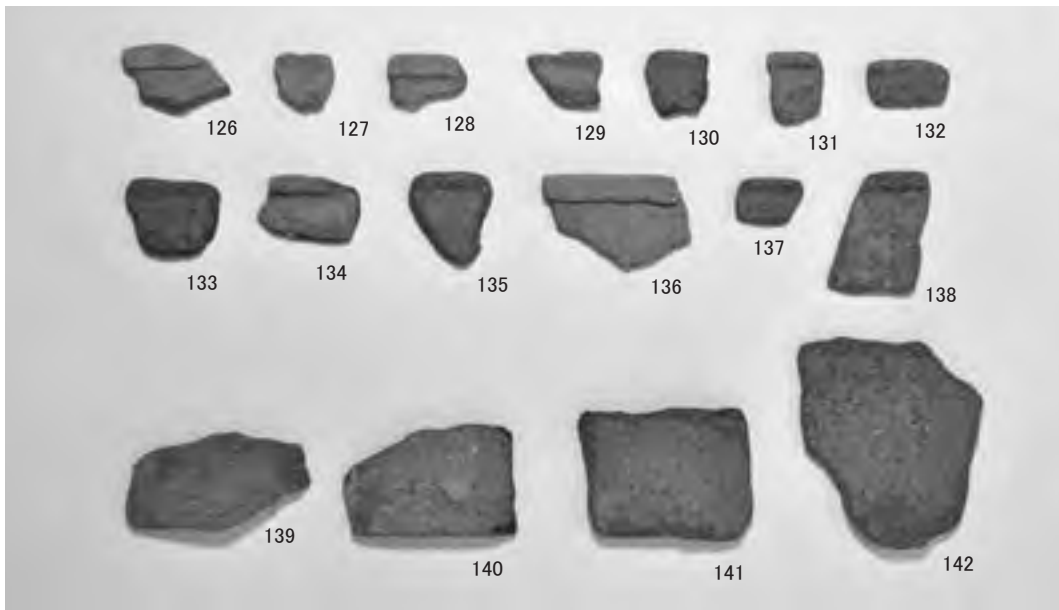


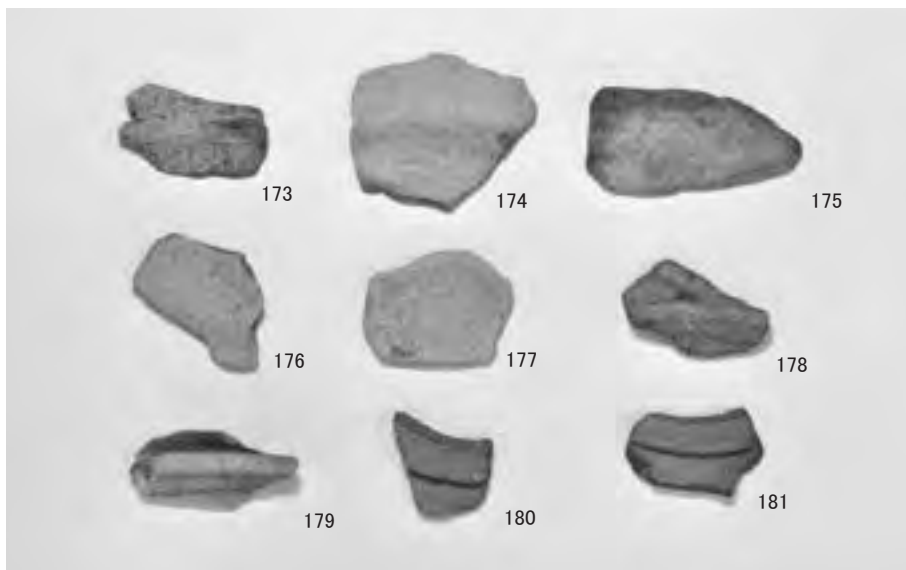
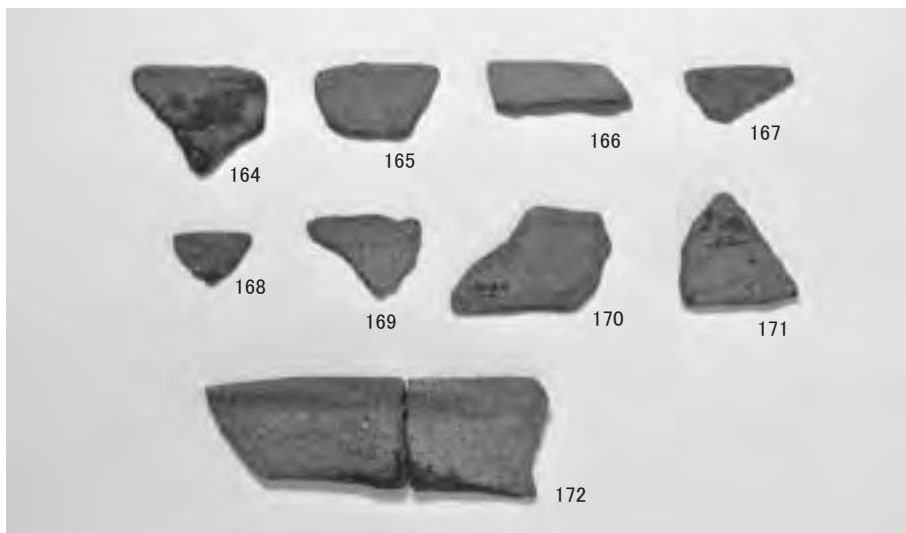


円筒埴輪⑥



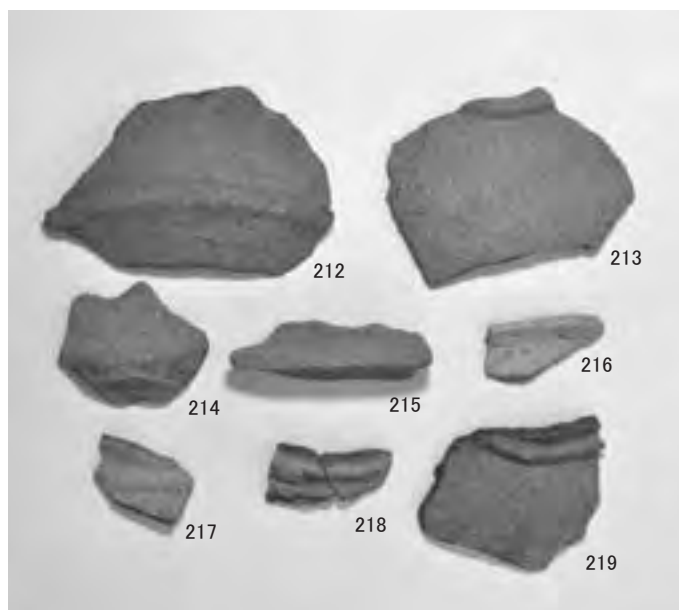
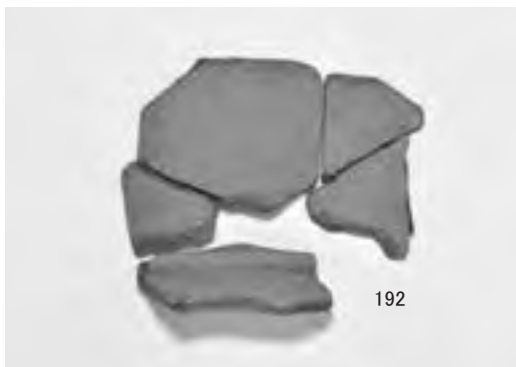
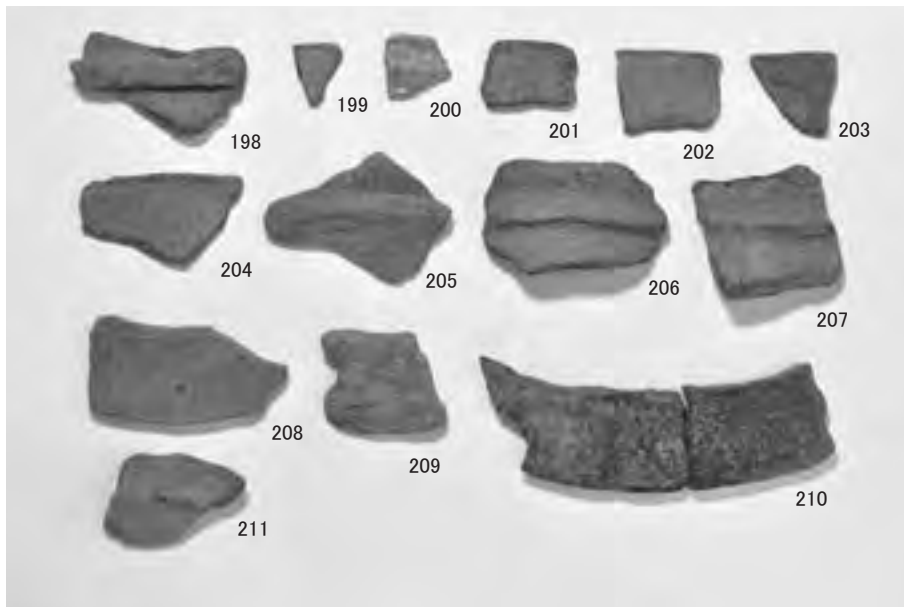
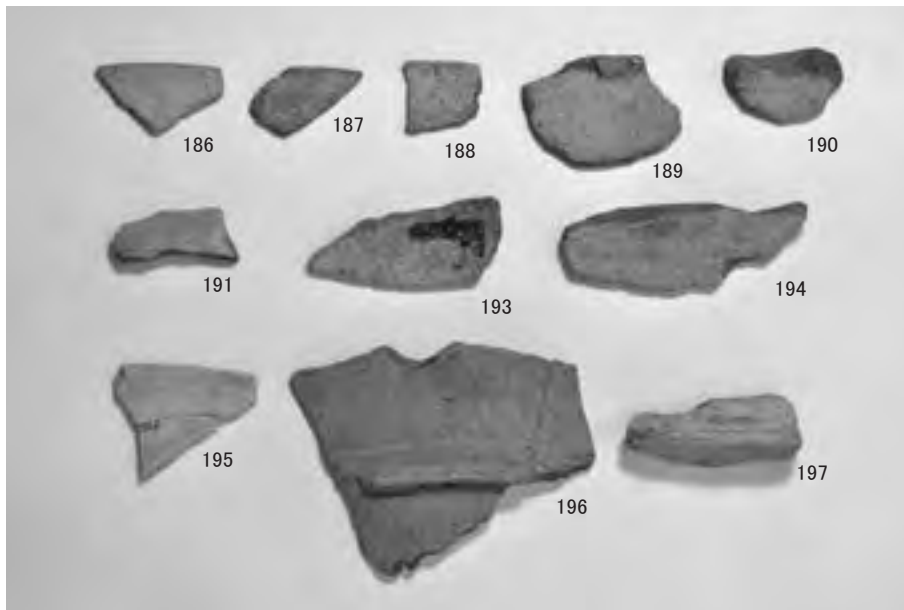
図版108 出土遺物 (8)



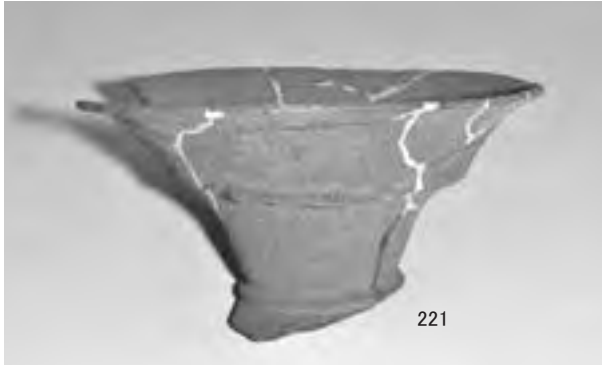
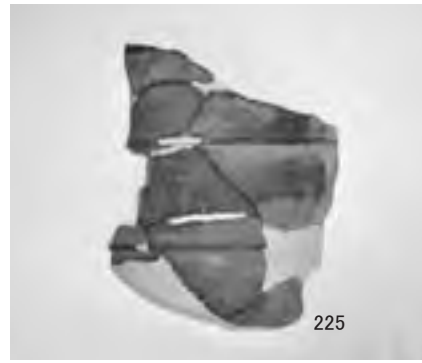
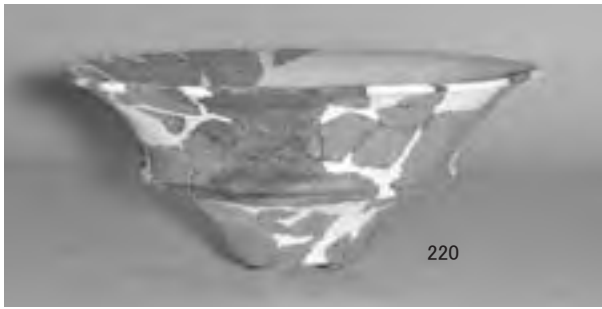


壺形埴輪①

図版110 出土遺物 (10)



壺形埴輪②



埴輪棺に使用された埴輪①

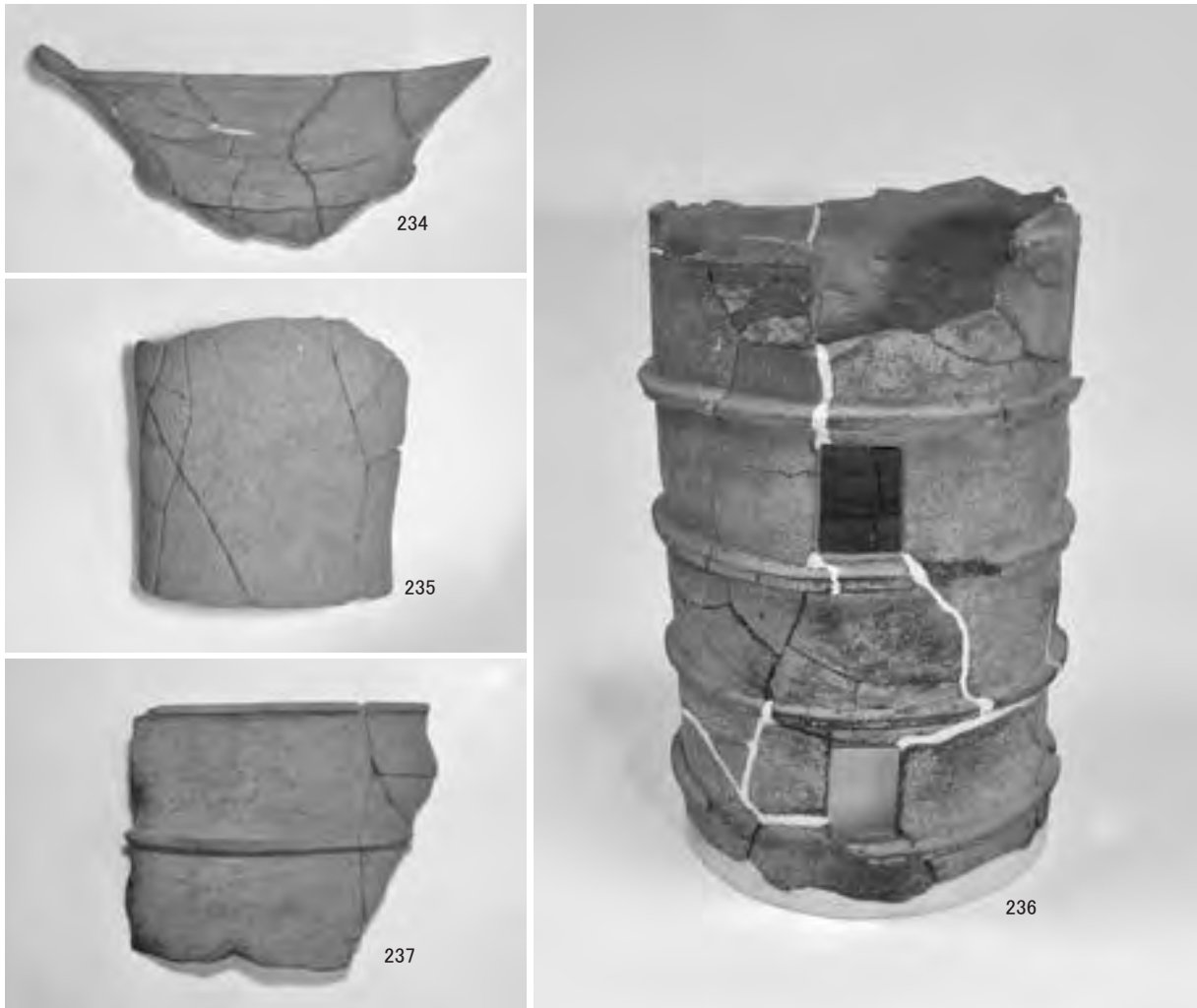


埴輪棺に使用された埴輪②

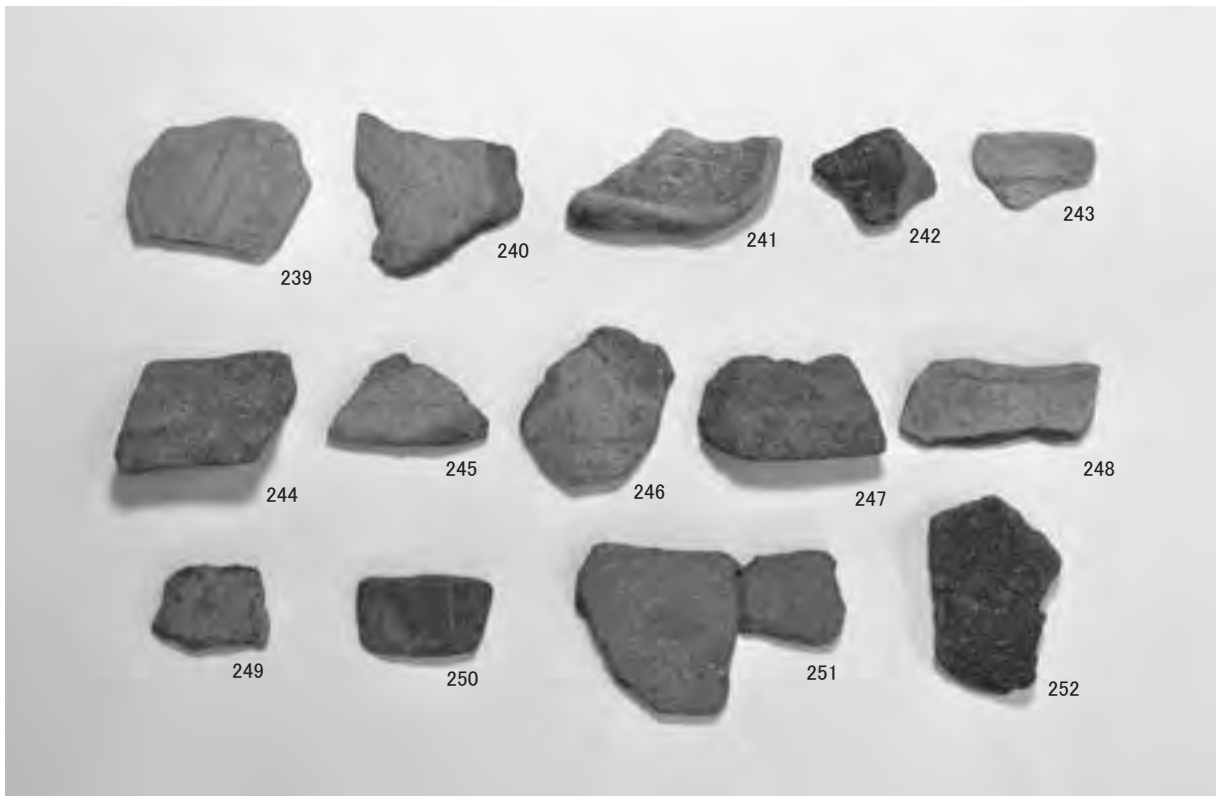


埴輪棺に使用された埴輪③

図版114 出土遺物 (14)



埴輪棺に使用された埴輪④



蓋形埴輪①



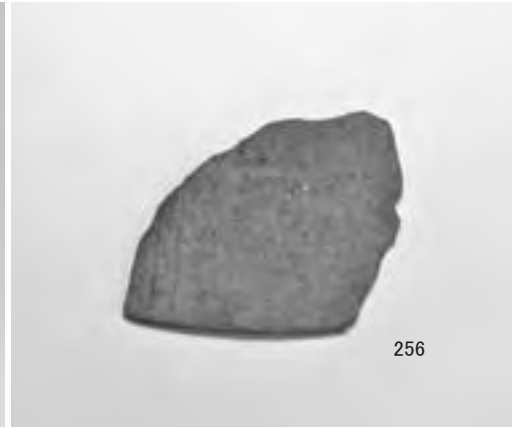
253



254



255

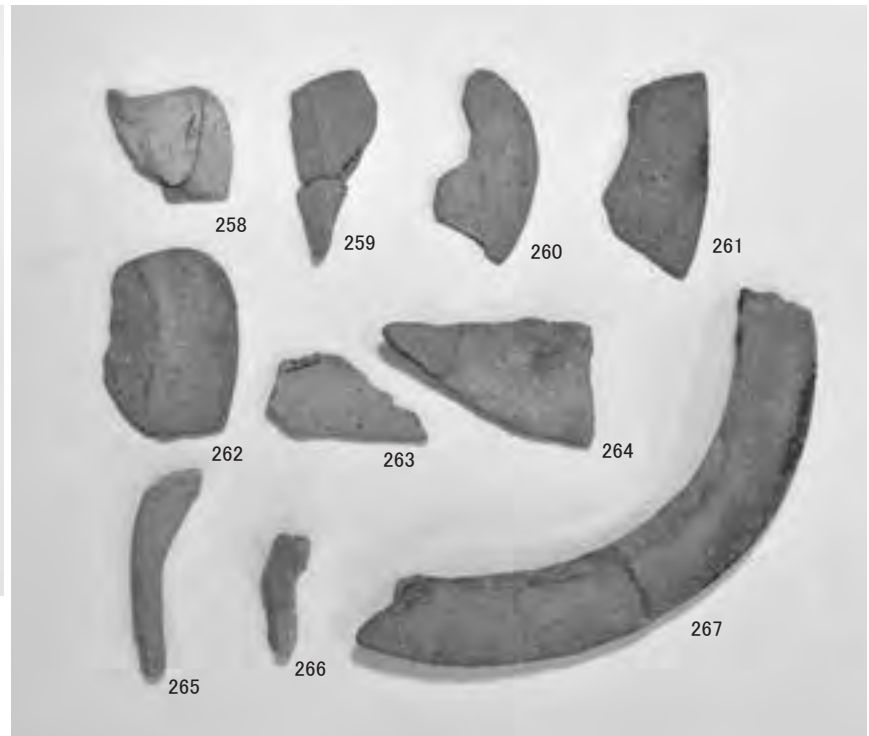


256

蓋形埴輪②



257



258

259

260

261

262

263

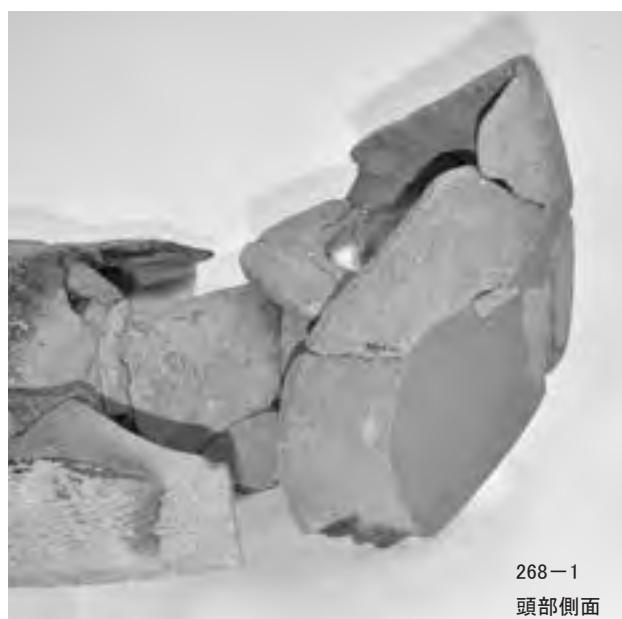
264

265

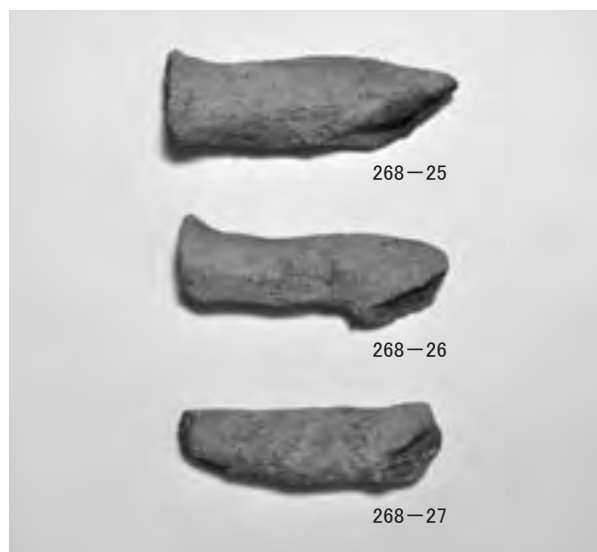
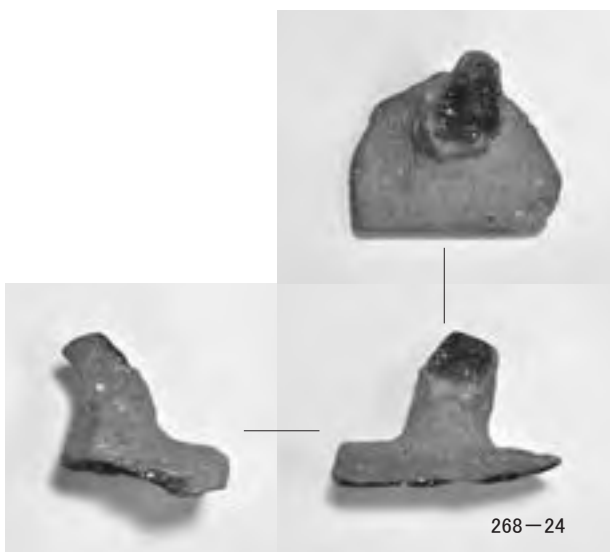
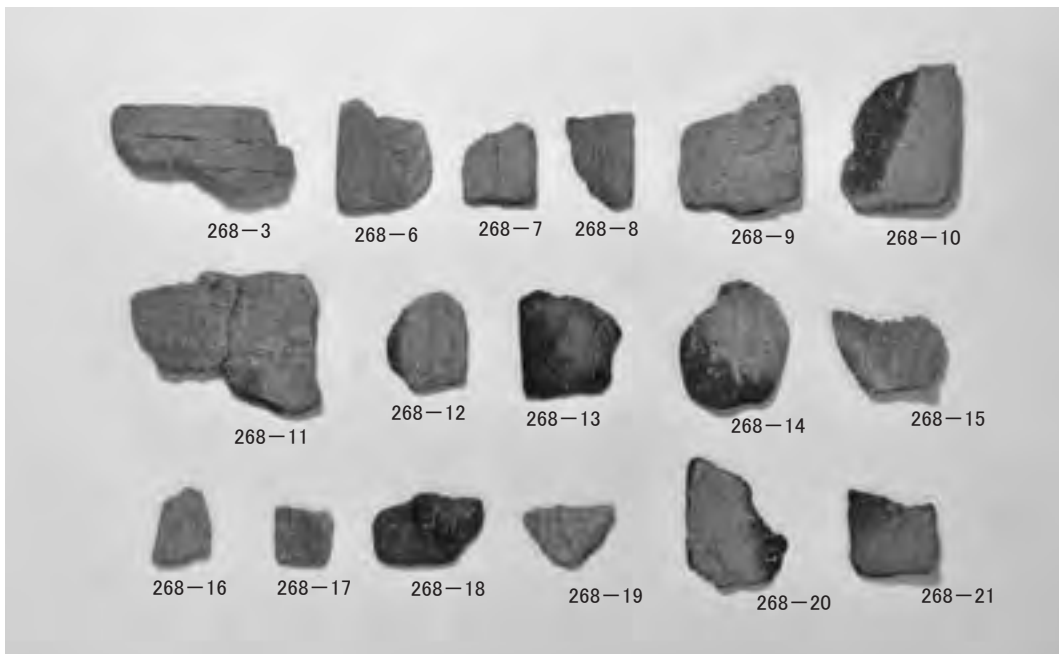
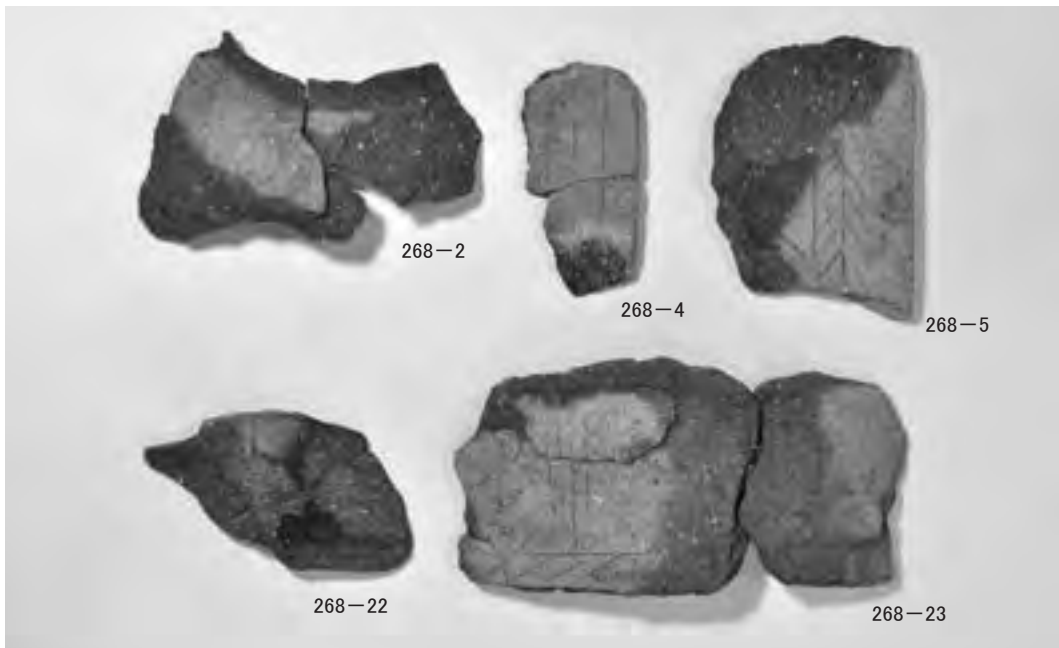
266

267

鳥形埴輪



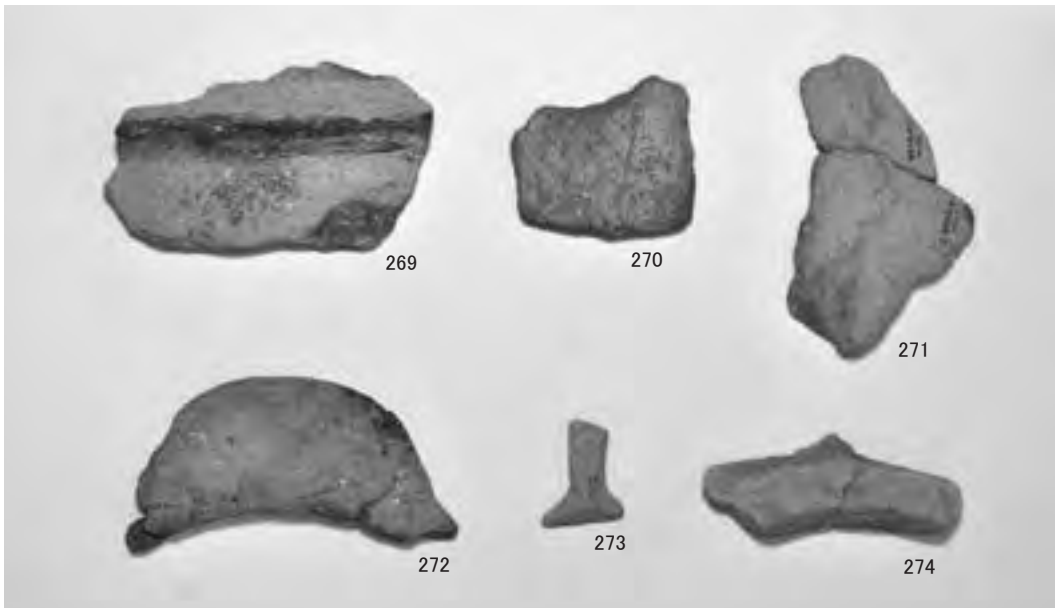
盾持人埴輪①





268-28

盾持人埴輪③



269

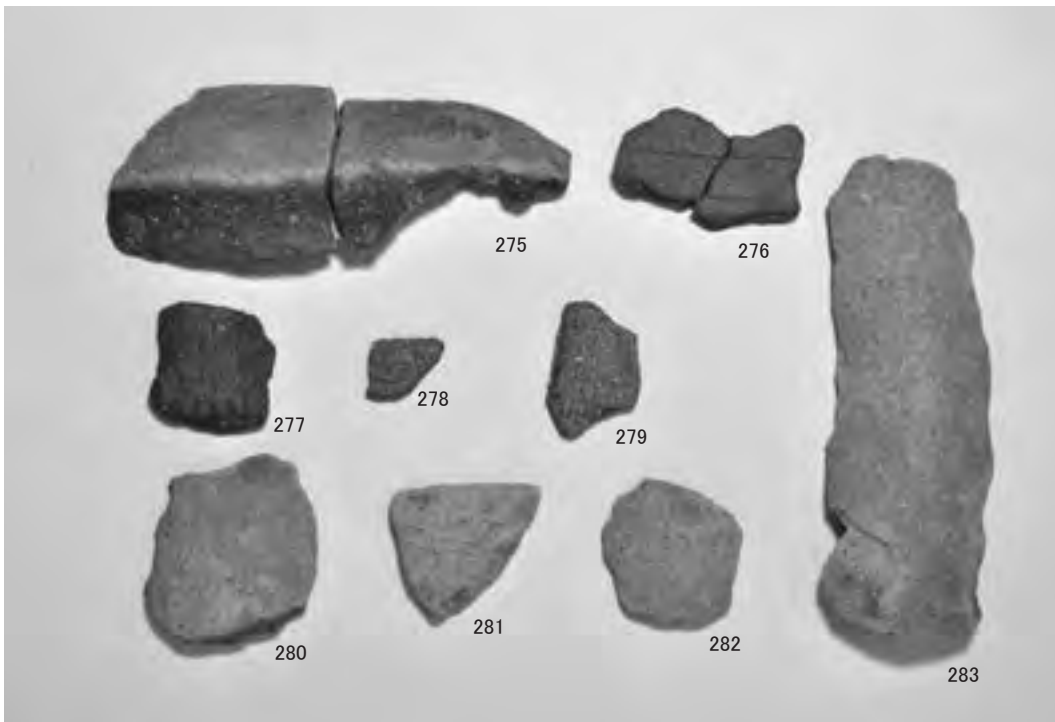
270

271

272

273

274



275

276

277

278

279

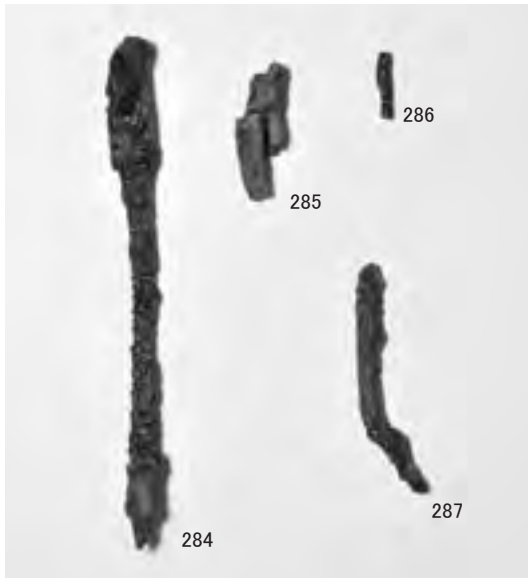
280

281

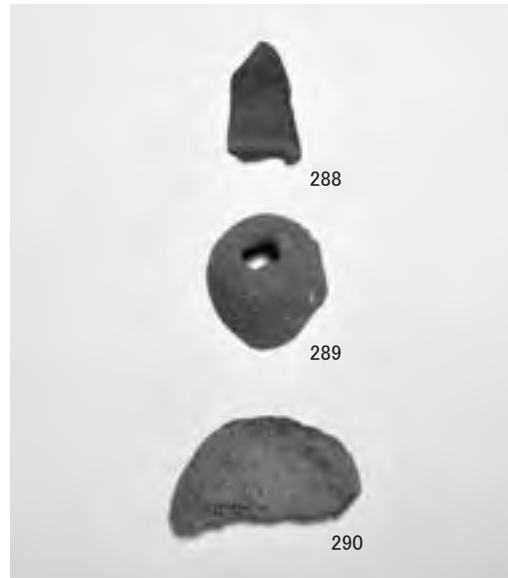
282

283

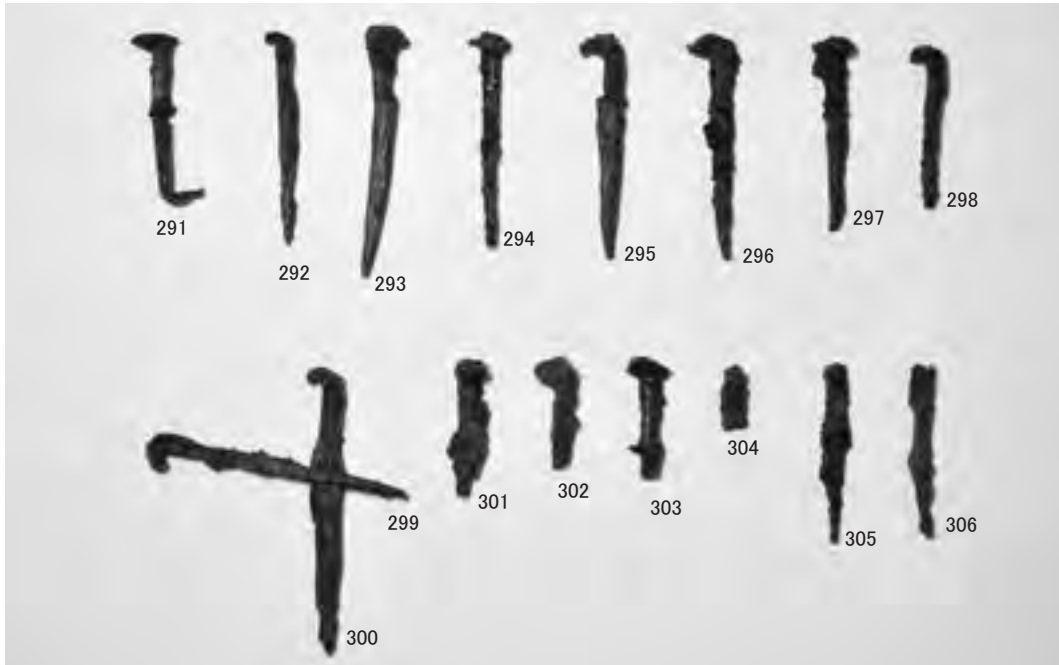
不明形象埴輪



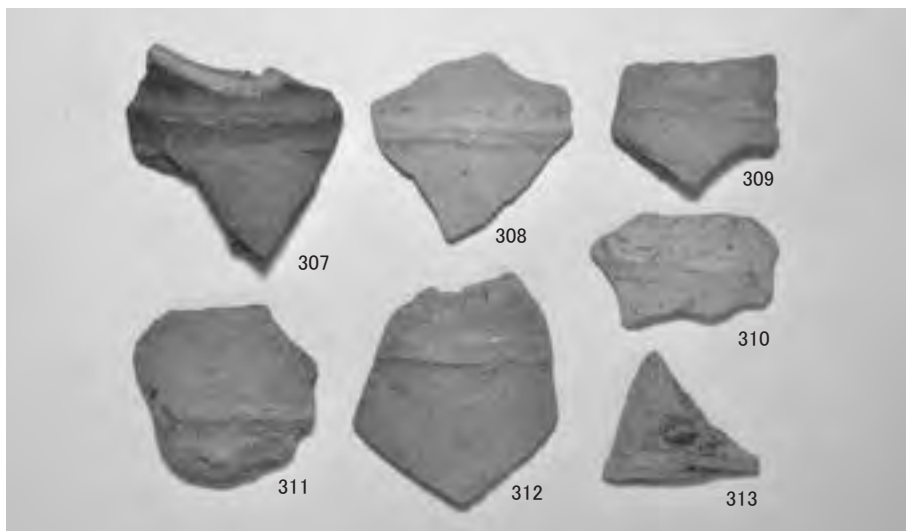
埴輪棺 1 出土遺物



墳丘盛土出土遺物



木棺墓出土遺物



古墳築造後の遺物①



報告書抄録

| | |
|--------|---|
| 書名 | ちほらおほかこふん 茅原大墓古墳 |
| 副書名 | 第1次～第6次発掘調査報告 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第43集 |
| 編著者名 | 福辻淳（編集） 奥田尚 西口和彦 橘泉 |
| 編集機関 | 桜井市教育委員会 |
| 所在地 | 〒633-0074 奈良県桜井市芝58-2 TEL0744-42-6005 FAX0744-42-1366 |
| 発行年月日 | 2015年3月31日 |

| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 ° ' " | 東経 ° ' " | 調査機関 | 調査面積 ㎡ | 調査原因 |
|----------------|------------------|--------|----------|----------------|-----------------|---------------------------|-----------|--------------|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 茅原大墓古墳 第1次 | 桜井市 茅原706 | 292061 | 11-D-519 | 34° 32' 12" | 135° 50' 50" | 1996.2.19～ 1996.3.6 | 23㎡ | 池改修に先立つ調査 |
| 茅原大墓古墳 第2次 | 桜井市 茅原723-1 | | | | | 2008.9.5～ 2008.10.22 | 44㎡ | 史跡整備に先立つ確認調査 |
| 茅原大墓古墳 第3次 | 桜井市 茅原722-1ほか | | | | | 2009.10.23～ 2010.2.5 | 203㎡ | 史跡整備に先立つ確認調査 |
| 茅原大墓古墳 第4次 | 桜井市 茅原723-1ほか | | | | | 2010.11.16～ 2011.3.24 | 238㎡ | 史跡整備に先立つ確認調査 |
| 茅原大墓古墳 第5次 | 桜井市 茅原723-2ほか | | | | | 2011.11.9～ 2012.3.27 | 102.5㎡ | 史跡整備に先立つ確認調査 |
| 茅原大墓古墳 第6次 | 桜井市 茅原719 | | | | | 2012.12.7～ 2013.2.23 | 98.5㎡ | 史跡整備に先立つ確認調査 |
| 茅原大墓古墳 物理探査 | 桜井市 茅原722-1 | | | | | 2013.12.13～ 2013.12.19 | | |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|-------------------|----|----------------------|---|------------|
| 茅原大墓古墳 第1次～第6次 | 古墳 | 墳丘、周濠、渡土堤、 葺石、埴輪列 | 円筒埴輪、壺形埴輪、 盾持人埴輪、蓋形埴 輪、鳥形埴輪、鉄製品、 須恵器など | 帆立貝形の前方後円墳 |

桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書 第43集

茅原大墓古墳

第1次～第6次発掘調査報告

発行 桜井市教育委員会

〒633-0074 奈良県桜井市芝58-2番地

FAX 0744-42-6005

TEL 0744-42-1366

年月日 平成27年3月31日

印刷 株式会社明新社

〒630-8141 奈良市南京終町3-464